

实用アビダンマ

Practical Abhidhamma

スシーラ・サヤレー

Susīlā Sayalay

パンニャーディカ・サヤレー訳

Translated by Paññādhika Sayalay





Appamāda Viharī Meditation Center
Venerable Susilā Sayalay

正勤楽住瞑想センター長
スシーラ・サヤレー師

目次

目次	1
スシーラ・サヤレー（著者）略歴：	8
パンニャーディカ・サヤレー（訳者）略歴：	8
はじめに	9
《アビダンマ論》概論	11
《アビダンマ論》を学習する目的	11
第1章	18
心の概要	18
究極法の4種類の鑑定法	19
心の定義	19
心の二分法	21
表A: 89心分類総覧表（P252の別表参照）	21
31界	22
表B: 31界（P253の別表参照）	23
界に基づく、心の4種類の分類	23
心の本性による4種類の分類	24
54欲界心	24
12種類の不善心	25
貪根心（8）	25
瞋恨心（2）	27
痴根心（2）	28
不善心によって生じる果報心（7）	31
24個の美心	32
欲界善心（8）	32
欲界果報心（8）	36
欲界唯作心（8）	36
18種類の無因心	36
不善果報心（7）	37
善果報心（8）	38
唯作無因心（3）	39
15色界心	41
5個の色界善心	41
5個の色界果報心	44

5個の色界唯作心	44
無色界心	45
4個の無色界善心	45
4個の無色界果報心	46
4個の無色界唯作心	48
8個の出世間心	48
ソータパナ道心.....	49
サカダーガーミ道心.....	52
アナーガーミ道心.....	52
アラハン道心	52
20（個の）唯作心	53
89種類の心に関する総括	53
121種類の心	54
第2章.....	56
心所の概要	56
心所の特徴	56
心所（52）	57
7遍一切心心所	57
6雑心所	62
14個の不善心所	64
（心と心所を統合）	69
25美心所	71
通一切美心心所（19）	71
離心所（3）	76
無量心所（2）	77
無痴心所（1）	79
11の不定付随法	80
表C: 52心所と89心の関係（P254の別表参照）	82
54個の欲界心と心所の関係	82
15個の色界心と心所の関係	87
12個の無色界心と心所の関係	87
40個の出世間心と心所の関係	88
心と心所の作用の実例	88
業のみ存在し、業造者（業を造る者）はいない	94

第3章	95
雑項の概要	95
受の概要	95
受の分析	95
刹那から刹那への修行	96
心による分類	99
結論	99
因の概要	99
因の分析	99
心の分類	100
作用の概要	100
作用の分析	100
表D: 摂の作用 (Kiccavagaha) 一覧表 (P260の別表参照)	102
表E: (P262の別表参照)	102
作用による心の分析	104
各種の心が執行する作用	106
門の概要	107
門の分析	108
心による分類	108
所縁の概要	109
所縁の分析	109
6種類の所縁	109
依処の概要	110
依処の分析	110
総論	112
第4章	113
心路過程の概要	113
表F: 眼門心路過程 (P262の別表参照)	113
門、浄色、所縁、依処	114
名色の寿命	115
心の顕現	115
心路過程：五門心路過程	116
心路過程：意門心路過程	119
表G: 意門心路過程 (P262の別表参照)	120

欲界心路過程	120
如理作意	122
欲界速行の善と不善業	123
時間によって熟する所の4個の業	124
表H: (P262の別表参照)	131
四正勤	131
安止心路過程	134
表I: (P263の別表参照)	135
表J: (P263の別表参照)	136
第5章	138
離心路過程の概要	138
死亡と結生の過程	139
四生存地：悪趣地	141
四生存地：欲善趣地	142
四生存地：色界地	143
四生存地：無色界地	145
四生存地：結論	145
四種の結生	145
四種の業	147
表K: 4個4種の業の総覧 (P263の別表参照)	158
表L: 業と果の総覧表 (P264の別表参照)	159
表Mと表N: 31界 (P266の別表参照)	160
表O: 臨終眼門心路過程 (P267の別表参照)	163
表P: 死亡と結生の過程 (人類) (P267別表)	167
生まれ変わりの法則	169
心の相続流	169
復習	170
欲界	170
色界	171
無色界	171
第6章	173
色の概要	173
色法の列挙	174
四大種の色 (四界)	174

四大の修習	176
28種の色法	177
表Q: 28種の色法 (P268の別表参照)	177
18種の真実色	177
10種の非真実色	182
色法が生じる4種の原因	184
業生色	185
心生色	186
表R: 禅修行の時の光は如何にして生ずるか? (P269の別表参照)	186
表S: 胃の中の未消化物 (P269の別表参照)	190
色法の転起 (転換)	191
欲界地	191
色界地	191
無色界地	191
涅槃	192
第7章	193
類別の概要	193
72種の個別の法	193
類別の列举	193
不善の概要	193
不善の概要総括	199
表T: 諸々の煩惱の所属する心所 (P270の別表参照)	199
混合的な類別の概要	200
菩提分の概要	204
一切の概要	211
表U: 4つの究竟法と蘊、処および界の対照 (P271の別表参照)	214
総括	218
第8章	219
縁の概要	219
縁起の法	219
十二縁起の法則	220
表V: 12支による因と縁の法則 (P272の別表参照)	220
縁於無明、行生起 (無明の縁によりて行が生起する)	221
行縁識 (行の縁によりて識あり)	223

縁於識、名色生起（識の縁によりて名色が生起する）	225
縁於名色、六処生起（名色の縁によりて六処が生起する）	226
縁於六処、触生起（六処の縁によりて触が生起する）	226
縁於触、受生起（触の縁によりて受が生起する）	226
受縁愛（受の縁によりて愛が生起する）	226
縁於愛、取生起（愛の縁によりて取が生起する）	228
縁於有、生生起（有の縁によりて、生が生起する）	229
縁於生、老死等生起（生の縁によりて老死等が生起する）	229
輪廻を断つ方法	230
縁於取、有生起（取の縁によりて有が生起する）	230
分析の類別	231
三時	231
十二支	231
二十法	231
四摂類	232
三連結	232
三輪転	232
表W:（P272の別表参照）	232
二根	233
第9章	234
業処の概要	234
業処	234
止と観	234
止の概要	235
十遍	235
10不浄	236
10随念	236
4無量	239
1想	241
1分別（四界分別観）	242
4無色	242
性格	242
表X: 40業処の総覧表（P273の別表参照）	244
禅相	244

神通	245
清浄の段階	247
別表	252

<法施本・非売品>

スシーラ・サヤレー（著者）略歴：

1963年、マレーシア生まれ。大学時代から観禪の研鑽を開始。

1991年、ペナン仏教禪修センターにて出家。

1994年、緬甸の阿闍梨、パオ大禪師（パオ・サヤドー）に師事して、止禪、観禪を学ぶ。

2022年よりアメリカなど世界各地に赴き、布教開始。

正勤楽住瞑想センター長。

パンニャーディカ・サヤレー（訳者）略歴：

1949年、神戸生まれ。在日台湾人三世。

3歳の時、自分が輪廻している事に気がつき「人生は積み木崩し」だと思う。

5歳の時「大人になったら仏法を極めたい」と初発心する。

25歳の時、富永仲基の「出定後語」を読み、大乘から離れる。

50歳の時にパオ・サヤドーに出会い、行く道定まる。

中学生の時、学校で使う英和辞典よりパーリ語辞典が欲しくて泣いた、無類のアビダンマ好き。

《菩提樹文庫》HPに、訳書多数公開。

仏暦 2567年9月吉日

Paññādhika Sayalay

<法施本・非売品>

はじめに

仏陀の教法は、三蔵（3つの蔵）に分類することができる。

1. 《律蔵》： 世尊が諸々の弟子の為に施設（paññatti。設定）した戒律教誡と生活関連の規則。
2. 《経蔵》： 世尊及び声聞聖弟子たち、例えば、サーリプッタ尊者、モッガラナーナ尊者、アーナンダ尊者等などの言行集。
3. 《論蔵》： 世尊の教法の要諦への精確化及び系統的な分類と解説。

1回目の結集の時には、律と法の2種類しかなかった。3回目の結集の結果、ようやく、律と法は、三蔵經典として、分類される事となった。我々のこの法話の題目である《アビダンマ論》は、論蔵に属する。論蔵のパーリ語は、Abhidhamma-Tipitakaと言う。この法話の最初、我々は先に、《アビダンマ論》の来源を説明する。

上座部仏教の正統的な伝統の中においては、《アビダンマ論》は、仏陀が教導したものであると認められている。世尊は、33天において、1万個の輪廻世界からやって来た諸々の天（神）に対して《アビダンマ論》を開示したものである（と考えられている）。《アビダンマ論》は、仏教聖典の中の至上の宝である、と見なされている。というのも、それが、生存に関する真実、本質を開示したものであるが故に。衆生の、生存の本質とは、まさしく生・滅法であり、それは、因・縁和合の生・滅法でしかないのである。《アビダンマ論》とはすなわち（生存の本質とは）ただただ、無常であり、無常の圧迫を受ける苦であり、主宰する我等ないのだという、因縁和合生滅法を開示したものである。これが《アビダンマ論》全体が開示する所の、主要な課題である。

《アビダンマ論》はまた、仏陀の一切知智（sabbaññutāñāṇa）を最も明確に開示するものである。この一切知智は、弟子の擁するものでなく、故に、《アビダンマ論》の大註疏の中において、以下の様に記載されている：

「《アビダンマ論》は弟子の範囲に属さない、純粹に仏陀の範囲に属するものである。」
なぜ、仏陀は、人間界ではなく、天界において、天神たちに《アビダンマ論》を開示する事にしたのか？その内の1つの理由は、仏陀は、1柱の座禪の内に、《アビダンマ論》を、すべて完全に話し終える必要があった為である。1柱の座禪の内に《アビダンマ論》を話し終えるには、3ヶ月かかる。我々は、一度に3ヶ月座り続ける事が出来るであろうか？できないのである。故に、仏陀にとって、人間社会において、人類に対して、《アビダンマ論》を法話する事はできない相談であった。それに反して、3ヶ月というのは、天界においては、非常に短いものである。これが、仏陀が天界において、《アビダンマ論》を開示した理由である。

仏陀が、33天において、連続して3ヶ月、《アビダンマ論》を開示した時、色身はなお、食べ物
の滋養を必要としていたので、化身は天上において《アビダンマ論》を開示し、本身は人間世界に
来て托鉢した。托鉢の後、サーリプッタ尊者が法を聞きに来たので、仏陀は天上で説いた法を、
再びサーリプッタ尊者に向かって概略説明した。この様にして、連続して3ヶ月説法された後、
その後、サーリプッタ尊者が、学んで得た法を再度500人の弟子に開示した。この様にして、
《アビダンマ論》の伝承は形成された。

もう1つ別の理由は、仏陀は、彼の母親（である）マーヤー夫人を度したかったのである。マーヤー夫人は彼を出産した後、1週間後に往生し兜率天に生まれ、兜率天の男性の天神になった。仏陀は1万個の輪廻世界の諸々の天神に《アビダンマ論》を開示した。その主要な目的は、彼の母親を度する事であったのである。

《アビダンマ論》概論

《アビダンマ論》を学習する目的

我々は、これより《アビダンマ論》の意義を説明する。《アビダンマ論》のパーリ語は「Abhidhamma」であり、2つの字から成っている。「abhi」は、上等の、殊勝な、卓越した、と言う意味であり、「dhamma」は法、究極的な真実に関する教法（という意味である）。故に、《アビダンマ論》は、上等の法、殊勝な法、または上等の究極法、と言う事になる。偉大なブッダゴース尊者は、以下の様に言う：

「《アビダンマ論》は、経蔵の法よりも、はるかに勝っている。」

ブッダゴース尊者の解釈を通して、《アビダンマ論》の法が、どれほど卓越しているのかを、知る事ができる。

《アビダンマ論》は、合計7部ある：

1. <法聚論> (Dhammasaṅgani)
2. <分別論> (Vibhaṅga)
3. <界論> (Dhātukathā)
4. <人施設論> (Puggalapannatti)
5. <事論> (Kathāvatth) :

この論は、仏陀の金口ではない。モッガリプッタティッサ・アラハン尊者が、第3次結集の時、開示したものである。仏陀般涅槃後200余年、種々の邪見が出現した。

6. 種々の邪見に反駁する為、モッガリプッタティッサ尊者が、この<事論>を口述したものである。
7. <双論> (Yamaka)
8. <発趣論> (Paṭṭhana)

仏陀は成道後の第4番目の週から《アビダンマ論》を考察し始めた。彼は、第1部の<法集論>から始めて、順序よく、第7部の<発趣論> (<事論>は含まず) までを考察した。彼がひとたび<発趣論>を考察し始めると、彼の全身において、6本の光芒が射出された。というのも、<発趣論> (のその理論) が、最も深く、最も広いものであったが故に。ちょうど、大きな魚、それを小さな金魚鉢に入れたならば、彼は自由に泳げない、空間が余りにも小さすぎて。しかし、彼を海洋に解き放ったならば、空間が広々としているが故に、自由に遊泳する事ができる (かの如くに)。同様に、仏陀の智慧は、唯一、<発趣論>に到達した時初めて、充分に発揮する事ができた。智慧が充分に発揮された為に、6本の光芒が、放たれる事となった。この種の光芒は、智慧の光と言ひ、それぞれ藍色、金色、赤、白、オレンジ及び銀色であって、それは、今日の仏旗の色と成った。仏陀は、この7本の論を開示するだけでも、連続して3ヶ月もの時間を要したのであるが、我々は《アビダンマ義論 = Abhidhammattha Saṅgaha = アビダンマッタ・サンガハ。以下同様》を通して、この7本の論の概要を、解説したいと思う。

《アビダンマ義論》の作者は、アヌルッダ尊者である。彼の1生がどの様であったのか、詳細は知られない。しかし、この《アビダンマ義論》という本は、上座部仏教国家が《アビダンマ論》を研究する時に、欠かす事の出来ない1冊であり、もし、《アビダンマ義論》を研究しないのであ

れば、論蔵に入る事は出来ないのである。すべての学習とは、必ずや、我々の生活、心霊（＝心）などを高める為の指標を持つものでなければならぬ。そうでないならば、この種の学習には、何の価値もない。我々が《アビダンマ論》を学習する目的は、以下の通りである：

1. 系統的（統合的）に仏陀の教法を理解する：

経蔵は仏陀による、契人契機的な教法である。仏陀は、衆生の根器（性格・器量）に基づいて、色々ある教法の内の、その1つを選んで指導し、それをもって、道を明らかにする方便とした。信根の強い者には、布施を教えた。慧根の強い者には、直接四聖諦を教えた。我々が、時折、仏陀の開示した経蔵の内容を理解する事が出来ないのは、（己自身の）根器が未だ、その境地に到達していないからである。例えば、仏陀が「色」と言う時、「色」とは何であろうか？四大と所造色を「色蘊」と呼ぶが、しかし、経蔵の中において、「所造色」の説明は、ない。ただ、《アビダンマ論》の中においては、非常に系統的統合的に、「所造色」とは何かという事が、分析されているし、かつ、「所造色」における、その生起の因と縁に関しても、解説してあるのである。これが、（我々が）なぜ、《アビダンマ論》を研究するのか、という理由である。《アビダンマ論》を研究すれば、系統的統合的に、仏陀の教法を理解する事が出来、経蔵の中において書かれてある、一切の知識のすべてを融合し、かつ貫通する事ができるのである。

2. 縁生縁滅法を透視する：

世間において最も先進的なものは科学である。科学は言う：

「一切の万物は、原子の微粒子より構成される。」

この事から、科学の研究対象は、ただ物質に関してのみ、である事がわかる。

最も新しい研究は、以下の様に指摘する：

「原子は、更に最も小さいクォークに分解する事ができる。」

アメリカの非常に多くの科学者が微粒子を研究しているが、それはすなわち、クォークを対象とした研究なのである。クォークとはすなわち、仏法で言う所の、色聚の事である。アメリカの科学者は、不断にこの色聚を研究するし、また、確かに、色聚の生・滅を見るのではあるが、しかし、色聚の中にある究極法を透視する事が無い。色聚は、1つの世俗諦にしか過ぎない。ただの1個の概念であり、1個の観念に過ぎず、未だ《アビダンマ論》で説明されている所の、究極法には至っていない。色聚が不断に生・滅するのを見て、科学者は疑惑を禁じ得ない：

「色聚は滅した後、一体どこへ行くのか？」

そして、引き続き、研究を行う。しかし、この問題は、仏法の中においては、根本的に成立しえない。仏法において：

「万法は、因と縁によって生起し、因と縁によって滅する」

と考える。もし、因と縁が未だ存在するならば、たとえ、色聚が滅したとしても、必ずや、再度生起する。科学者が保持する、「エネルギー不滅の法則」（Energy cannot be destroyed）の理念は、仏法とは甚だ遠い。仏法は言う：

「もし、因と縁が存在するならば、それは存在する。因と縁が滅すれば、それは滅する。」

科学者は、ただ、色聚の果を研究するだけであって、色聚が生起する事を惹起する、その原因を研究しない。故に、彼らは絶え間なく議論する：

「滅した。滅してどこに行った？」

しかし、仏法の中においては、滅しても再度生起するという。というのも、因と縁が未だ存在するが故に。こうした事から、《アビダンマ論》は、世間的な科学を超越しているのだ、と言える。ドライラマ（猯下）は、カリフォルニア州において、1群の科学者を組織して、心・心識とは何であるか？を研究した。科学者たちは、1個の測定器を禅修行者の頭部にかぶせ、禅修行者が深い禅の境地に入った時の、彼らの心識の働きを観察した。しかし、2500余年前、仏陀はすでに、1人の人間が、ジャーナ（jhāna）に入った時の、その時の1個の心識の生・滅刹那及び心路過程に関して、明確な説明をなしている。仏陀が、2500余年前にすでに、明確に説明してある事柄に関して、科学者は今になって研究を始めるとは、実に遅きに逸しているものである。ただ、我々世間（に生きる）者もまた過剰に科学を迷信し、科学が作り出したものはすべて正しい、と考えている。これは、我々東方の人々が、西洋を崇拝しているのが原因であって、それは、己自身を卑下、見下し、過度に西洋を崇拝するものである、と言える。

3. 善悪、是非、正邪を明確にする為に：

もしかすると、あなた方は、こう言うかも知れない：

「私は何が悪で、何が善であるかを知っている。」

しかし、一般の人々が知っている善悪は、実際には、非常に粗雑・粗略なものである。例えば、あなた方は、善とは、他人を傷つけない事だと思っているが、しかし、あなた方は、あなたが、グルメの大宴会を享受している時、同時に、多くの不善業をなしているのを、知らないでいる。《アビダンマ論》を学習すれば、あなたはさらに詳しく己自身の心路過程を分析する事ができ、どの心が善であるか？どの心が悪であるか？を、知る事ができる。この様であれば、あなたは、日常生活の中において、諸々の悪を取り除いて、善法を育成する事ができる。

4. 観智の育成：

《アビダンマ論》の最終的な意義、すなわち、我々が最終的に到達せんとする目標は、すなわち観智の育成、輪廻からの解脱、四聖諦の徹底的見（己自身で実見する事）である。我々が「ヴィパッサナー」（vipassanā）を修する時の目標または所縁は、五蘊（経蔵の中においては、五蘊と言い、論蔵の中においては名色と言うが、共に同じ意味である）、または身受心法四念処と言う。vipassanāの意味は：

「色々な角度から、名色の無常・苦・無我を観照する事。」

名色の無常・苦・無我を観照する為には、まず先に、名色とは何であるか、を理解しなければならない。そうでないならば、名色の無常・苦・無我を観照する事は出来ない。そして、

《アビダンマ論》において検討する内容は、とりもなおさず、この名色または五蘊法であり、それは、我々が到達せんとしている所の、目標の1つでもあるのである。

5. 我執、我見の除去：

《アビダンマ論》の中において、仏陀は名色法のすべての密集、例えば相続密集、構成密集、作用密集等々を、一々分解した。あなたが心路過程を研究する時、ひとつとして、「我（私）」「私のもの」と称する事のできるものを見つける事が出来ない（事が分かる）。故に、《アビダンマ論》を学習すれば、我々にとって、我見を取り除く助け、正見を育成する助けとなるが、この事は非常に重要な事柄である。一切の苦痛は、皆、自我への執着、すなわち、

一切は皆我であり、我のものであり、我の自我であると執着、執取する所から来ているが故に。

6. 2種類の諦（世俗諦と究極諦）：

《アビダンマ論》の中で、世間において、2種類の諦がある、と言及されている：世俗諦と究極諦である。世俗諦は、世俗的な概念または観念を言い、我々の世間において、未だ分析されていない所の、種々の現象、例えば有情、人、男性、女性、動物、山川、屋舎等々、及び恒常不変の様に見える所の事・物、それらが代表する所の事・物、更に究極法として分解できるもの（を言う）。例えば、人の構成（要素）とは何であるか？人、衆生、有情、これらはすべて世俗諦にすぎない。というのも、これらは、また五蘊、名色に分解する事ができるが故に。こうしたことから、五蘊及び名色こそが、究極諦である事が分かる。人、衆生、男性、女性というのは、ただ1個の世俗諦であり、方便的な法であるに過ぎない。世俗諦とは、未だ分析（分解）を受けていない所の、種々の現象の事である。（この事は）世間的（世俗的）な科学をもって、比喻として説明する事ができる。以前の科学では、世間の一切の事物は、原子によって構成されていると考え、原子が最も小さい微粒子である、とした。しかし、不断の研究によって、原子の内部には、核があり、核の内部は、陽子と中性子に分解できる事、電子がこの原子の周りを回っている事が分かった。その後、また、更に小さい素粒子が存在する事が判明した。現今、最先端の計測機器を利用して測量した後、最も小さい単位は、クオークであることが発見された。しかし、このクオークは世俗諦であり、未だ究極諦には到達していないのである。

《アビダンマ論》が言及・解説する所のものは、すべて究極諦である。究極諦とは、それぞれの自性（sabhava）によって存在する法の事で、これらの法は、最終的に存在していながら、更にこれ以上は、分解できない単位のことを言う。それら各自の自性によって存在する法とは、何であるか？例えば、大地の事を想う時、あなたはそれが硬いものである、と感じ取る。火界の事を想う時、熱さを感じ取る。「硬さ」は大地の自性であり、「熱さ」は火界の自性である。我々は、常々、地水火風という言葉を目にするが、その内の地は、大地自体を言うのではなく、それが擁している所の自性を言うのである。この事は、真っ先に知っておかねばならない。大地全体は、1個の世俗諦であり、それが擁している所の自性「硬さ」こそが、究極諦である。あなたの骨を揺らしてみたら、どの様な感じを得るであろうか？骨の地界は非常に鮮明である。故に骨は世俗諦であり、それが擁している所の「硬さ」こそが、その特相（特徴）であり、それが、とりもなおさず、究極諦なのである。

今、我々は、身体の色聚を見ようと思う。身体は、千々万々粒の色聚によって構成されている。色聚の中には、色々な色彩がある。例えば、尿は、黄色の色聚によって構成されており、歯は白色の色聚によって構成されており、これらの色聚は、不断に生・滅しているものである。我々は、科学の研究は、この段階に到達しているだけである、と述べた。しかし、仏法では、四界分別観に基づいて身体の色聚（色聚は世俗諦である。更に分解すれば究極諦となる）を見るものであって、それは科学的研究を超越したものである。

禅修行者が四界分別観を修行するという事、それは、身体の色、水、火、風等を観じるものであるが、定力が向上した時、身体は水の塊の様な状況を呈するようになる。次に、この透明な

氷の塊の中において、空間（ちょうど、我々の皮膚に毛孔があつたり、空間があつたりする様に）を見つけると、透明の氷の塊と見えていたもの全体が、粉碎されて、色聚（色聚は、肉眼では見る事ができない）になる。その後、1粒1粒の色聚の中において、いくつの色法があるかを分析する。禅修行者の定力と慧根が向上しさえすれば、1粒1粒の色聚の中には、少なくとも8個の色法を見る事ができる。それはそれぞれ地界、水界、火界、風界、色彩、香（匂い）、味と栄養素であり、この8個の色法こそが究極諦なのである。この究極諦は、最終の単位となり、更に進んで分解する事はできないし、その上、各自において己自身の自性（または特徴、ともいえる）を擁している。例えば、地界の自性は硬さ、柔らかさ、水界の特徴は、流動性、風界は推進性または支持性、火界は熱さまたは冷たさ等々。8個の究極諦は、同一の依処（例えば、色彩、香、味、食素は、四大に依存して生起する）と共に、同時に生起し、同時に滅し去るものである。

我々はまた、人、有情、男性、女性は見た所、恒常であつて不変の様であるけれども、それらは更に分解して、究極諦とする事ができる、という事はすでに述べた。1つの非常に有名な例は、なぜ、男性とか女性とかの、恒常不変の様に見えるものの、実際には、それらは真正なる存在としての究極的実質に欠けている事についての説明をするのに、非常に適合している。この例とはすなわち、ミリンダ国王（Milinda）とナーガセーナ比丘（Nāgasena）の対話である。インドのミリンダ国王は、弁才第一で、彼に仏法を説いてあげたとして、彼を言い負かすことの出来る人は、インド全土のどこを探し回ってもいなかった。その為、彼は豪語した：

「インドは空洞でできている！」

その時、ある比丘がそれを聞きつけて、言った：

「これはよくない！この人物はあまりに傲慢である。」

そして、ナーガセーナ比丘を派遣して、挑戦させた。ミリンダ国王は、ナーガセーナ比丘の名を聞いた時、過去の業の故に、心中に震えが生じた！しかし、それがどうあれ、彼は馬車に乗って、ナーガセーナ比丘に会いに行った。ナーガセーナ比丘に会うと、先に3度礼拝し、以下の様に訊ねた：

「尊者、あなたの同参、道友は、あなたをどの様に呼びますか？」

「陛下、私の同参、道友は、私の事をナーガセーナと呼びます。しかし、ナーガセーナ比丘は、究極的には、存在しないのです。」

ミリンダ国王は、弁才第一であるが故に、即刻、先方の落ち度を捕まえた。彼は言う：

「尊者、あなたは先ほど、ナーガセーナ比丘は、究極的には存在しないのだ、と言いました。それでは、私の目の前に座って、先ほど私の礼拝を受けたこの人は、一体誰であるのか？」

そして、もう一言付け加えた：

「尊い身であられる尊者よ。あなたは、明らかに私の面前に座っているのに、存在しない、と言う。あなたはなぜに、嘘をつくのであるか？」

ナーガセーナ比丘は、急ぎもせず、緩めもせず、言った：

「陛下、お訊ねしますが、あなたがこの寺院に来るとき、歩いて来ましたか？馬車に乗って来ましたか？」

ミリンダ国王は答える：

「私は馬車に乗って来たのである。」

「その馬車の箱（の部分）は馬車ですか？」

「違います！」

「馬車の車輪は馬車ですか？」

「違います！」

「馬は馬車ですか？」

「違います！」

「その馬の車身（馬具）、幌は馬車ですか？」

「違います！」

ナーガセーナ比丘は、以下の様に言う：

「陛下、私はあなたに、この寺院にはどの様にして来たのか、と問うた。あなたは、馬車に乗って来たかと答えた。私はまた問うた。馬は馬車であるか？あなたは違う！と答えた。馬の幌は馬車かと問うた。あなたは違う！と答えた。これも違う、あれも違う。しかし、あなたは私に、馬車に乗って来たのだ、と言う。あなたは、身分の高い一国の君主であるが、では、なぜ、私に嘘をつくのであるか？」

ミリンダ王は答える。

「違うのです！尊者。このいくつかの部品が組み合わさって初めて、馬車となるのです。」

「よい、よい。とてもよい！では、私、ナーガセーナ尊者もまた、五蘊によって構成されているをもって、初めてナーガセーナ尊者と呼ぶ事ができるのです。」

こうして、国王は引き続き反駁する、という事が出来なくなり、尊敬の念を込めて、五体投地をした。これより以後、彼はナーガセーナ比丘を宮殿に招いて仏法の研究を行い、2人の対話は、後に《ミリンダ王問経》として結実した。この経は、研鑽・研究に値する経典であり、通常（のレベルにおいて）、我々にとって、理解しがたい問題が、この経の中において解説されている。この例では、ナーガセーナ比丘尊者は、何をもって世俗諦と言ひ、何をもって究極諦と言ひのか、を説明したのである。世俗諦は、見かけ上は恒常不変の様に見えるけれども、しかし、真正なる究極の実質を擁せず、それは更に五蘊：色、受、想、行、識に分解する事ができるが、この五蘊は、純粹に、ただただ、生・滅法に過ぎない。

禪宗では以下の様に言う：

「看山是山、看山不是山、最後看山乃是山」（山は山に見えて、また、山は山に見えなく、しかし結局は山である）

もし、我々が、究極諦と世俗諦を理解するならば、上記の文言の意味が分かる。《金剛経》ではまた、非常に多くの世俗諦と究極諦の観念を説明している。

例えば：

「似相非相」

「不可以32身相得見如来」

（如来を、32に分けた身体の相、その様な身体の相があると思って見てはならない）」

身体の相は、根本的に存在しない。存在するのは、唯一、究極法の生・滅法だけなのである。

7. 4種類の究極法

《アビダンマ論》の中では、世俗諦と究極諦に言及されているが、その内、究極諦は、合計4種類ある：

(1)心 (citta) : 合計89種類の心がある。この数に吃驚しない様に。

(2)心所 (cetasika) : 合計52種類の心所がある。

(3)色法 (rūpa) : 合計28個ある。

(4)涅槃 (nibbāna) : 唯一、1個あるのみ。我々が追及している目標である。

心の特徴は、ただ1個。目標を識知する事である。心所は、心に随伴して生起し、心が目標を識知するのを、全面的に支援する。心は、1個の色（色彩）を見た時、それが青色なのか、藍色なのか、または白色なのか分からないでいる。その時、必ず心所の助けがあつて、初めて、藍色であるとか、白色であるとか、青色であるとかを識知する事ができる。ゆえに、心は心王と言われ、心所は陪臣だと言われる。1個の心識刹那には、ただ1個の心のみが生起するが、しかし、随伴して生起する心所は、7個であったり、8個であったり、10個または33個、あるいは35個であったりする。というのも、心は、これほど多くの心所に手伝ってもらって初めて、目標を識知することができ、目標に対して行動を取る事ができるのである。心と心所は、必ず、色法に依存してしか、生起する事が出来ない。心と心所の多くは、色法を目標としており、これが、心・心所と色法の関係性である（無色界は除く。というのも、無色界の衆生は、色法を持たないが故に）。心と心所は名法と呼称され、色法は色法と呼称される。人身及び1人1人の衆生は、みな、名法と色法で構成されている。故に、己自身を理解したいと思うのであれば、必ず、心、心所と色法を研究しなければならない。というのも、この3個の究極諦が、現在のあなた、私、彼及び衆生等々を構成しているが故に。涅槃は、一切の有為法を超越しており、貪・瞋・痴の息滅を意味する。

本書は、明確で分かりやすい文言と例を用いて、《アビダンマ論》の博学膨大、精密で甚だ深い重要な思想を説明するが、書中の一部の引用文は《アビダンマ義論精解》という1書から取っている。この書物は、世界的規模の中国語読者が《アビダンマ論》を研究する時の重要な書籍であり、合計9章あるが、その中において（心）、（心所）、（色法）、（涅槃）が6章をも占めている。このことから、これらの事柄の重要性が、一般のものと異なる事が分かる。故に、本書においても、多くの紙篇を用いて、これらの章を解説したいと思う。このことが、禅修行者が《アビダンマ義論精解》の意義を理解するのに、支えとなる事ができ、また、禅修行者が《アビダンマ論》の真髓を体得でき、日常生活の中においてこれを融通し貫通させ、智慧を証得し、修行の支えとなる事を期待するものである。

第1章

心の概要

第1章は、<心の概要>とし、《アビダンマ論》の1番目の究極法である「心」についての解説をする。先に心を研究するのは、仏教の究極法を分析する中心点は、己自身による体験にしているが故であり、また、心は、体験の主要な要素でもあり、それは、目標または所縁への識知でもあるが故に。心の特徴は、目標を識知することである。もし、心がないならば、我々は根本的に、目標を識知する事ができない。第1章は、各種の分類の手法をもって、心を89種類または121種類に分類する。《アビダンマ論》に基づけば、究極法は、4種類の類別に帰納する事ができる。

1. 心

2. 心所

3. 色法

三者共に有為法。

4. 涅槃

無為法。

因と縁が和合して生起した法を有為法と言う。故に、一切の有為法は、みな、無常・苦・無我である。苦のパーリ語は「dukkha」で、中国語訳では、苦と言ひ、英語訳では「suffering」となるが、そのどれもが、あまり正確とは言えない。実際は、パーリ語のdukkhaには、

「変化して無常である、実質のない、圧迫された」

という意味が含まれており、我々が日常的に言う所の、人生は非常に苦しい、という意味ではない。無常であるが故に苦であり、無常、生・滅の圧迫を受けて、苦相の出現を見るのである。我々は、この方面から、苦の真正なる意味を理解しなければならない。

心、心所、色法は、有為法、または因縁和合の法という。というのも、この3者は共に、因と縁に依存して生起するが故に。因と縁が減する時、それらもまた滅し去る。故に、無常である。無常の圧迫を受けるが故に、それらは苦である。（そこには）1個の主宰（者）も存在せず、人間もまた、心識を主宰する事は出来ない。眼識が、それを見たくないと思っても、不可能である。私の心が、物思いをしたくないと思っても、不可能である。眼識が1個の色彩を見る時、生起する所の反応等々は、皆因縁の法であり、あなたは、コントロールする事は出来ない。故に、一切の有為法は、みな無我であり、因縁生（因と縁に依って生じ）、因縁滅（因と縁に依って滅する）なのである。

4個目の究極法は「涅槃」である。涅槃は無為法であり、因縁和合とは無関係である。因縁和合と無関係であるならば、常であり、永恆であり、楽である。仏陀の時代には、非常に多くのアラハン比丘、アラハン比丘尼が存在したが、彼らは出定した後、必ず以下の様に言った：

「ああ！非常に楽しい！非常に楽しい！」

これは、この涅槃の楽を言うのである。

涅槃には我（私）はなく、涅槃は常、楽、無我である。

究極法の4種類の鑑定法

《アビダンマ義論精解》の中において、究極法に関するどの様な説明であっても、諸々のパーリ論師は、4種類の鑑定法で以てこれを区別するべきだと主張する。その分類に関しては、1つ1つの究極法の、各々の（以下のものを鑑定する事）：

1. 「相」（lakkhana）。その持つ「特徴」の事。
2. 「作用」（rasa）。それが執行する所の任務。
3. 「現起（現象）」（paccupatthāna）。禅修行者に顕現する所の体験の方式。禅修行者は、その心の中において、何を体験しているか？
4. 「近因」（padatthāna）。それが直接依存する所の近縁は何であるか？

1つ1つの究極法は、必ず以下のものを持つ：

相、作用、現起（現象）、近因。

心の定義

心とは、純粹に、目標を識知する過程（に過ぎないもの）である。心は、目標を識知する所の「我」では決して、ない。1個の自我または造作者（創造者）、というものは、ない。我々は、非常に多くのタイミングにおいて、心を我（私）、私の、という風に認定してしまう。というのも、我々は、心の生・滅を、如実に知見する事ができないが故に。心の生・滅は相当に迅速であつて、1回の瞬きの時間内であつても、数十億個の心が生・滅している。故に、我々は、心とは、本来、ただ、一連の、相続して不断な過程に過ぎない事を見、知る事ができないまま、それを1個の我（私）として、認定してしまうのである。

あなたがテレビを視る時、あなたは目で見て、同時に耳でも聞いている。時には、同時におやつを食べたりもするし、動くのが好きな人は、貧乏ゆすりなどもしていることがある。では、これらの動作を合計すると、どれほどの数になるものであるか？

目は視ている。耳は聞いている。舌は味わっている。足は揺らしている。合計4つの動作がある。

あなたは、動作する時、必ず

「私は視ている。私は聞いている。私は食べている。私は足を揺らしている。」と思うはずであるが、この「我見」というものは、非常に強烈に存在するものである。

しかし、実際には、視ているのは、眼識である。色塵（色彩）が眼根を衝撃する時、眼識が生起する。これは因縁法である。音声（音）が耳を衝撃する時、耳識が生起する。食べ物（味）が、舌根を衝撃する時、舌識は生起する。身体が揺れる時、身識は生起する。また、これら1つ1つは、皆、生・滅するものである。耳が（音声を）聞いたとして、（それが）滅した後、また（耳識が）生起する。音声（音）が、引き続き長く（あなたの耳を）衝撃するならば、耳識は、持続的に生起して、長く音を聞き続ける事になる。眼識、舌識もまた同様である。これらは、皆、因縁和合の法であり、決して「我（私）」が視ている、聞いている、食べている、揺らしている訳では、ない。

しかし、我々は、これらすべてを「我（私）」と見なしてしまう。その原因は、我々が、究極法を如実に知見する事ができないが故、である。心の生・滅の過程が、迅速に過ぎるが故に、我々

は、聞こえた、視えた、食べた、足を揺らした、それらすべてを、1個の「我（私）」と見なし、これらを帰納して、「私が」実践、体験しているのだと、思ってしまう。

この問題は、現代人だけが抱えているものではない。仏陀の時代、中部（Majjhima Nikāya）に（以下の様な話が記載されている、それは）、サティ（沙帝）という名の比丘がいて、彼は友人に以下の様に言った：

「ずっと長い間、輪廻の中で漂泊し続けているのは、この1個の心である。」

彼は、聞くもの、見るもの、食べるもの、それは皆、1個の我（私）、1個の心、同じ1個の心が、輪廻の中で漂泊しているのだ、と言う。

彼の同参道友は：

「おい！君は、この様に言ってはならない。仏陀はその様には話されてはいない。」

と言う。

しかし、サティ比丘は、なおも主張を変えようとせず、

「絶対にこの様なのだ！輪廻の中で漂泊し続けているのは、同じ1つの心なのだ。」

と言い張った。我々にも、この様な考え方は、ないだろうか？もし、そうであるならば、仏陀に叱責されるであろう。同参道友は、彼を説得できかねて、仏陀に報告した。

仏陀は言った：

「そうですね！ならば、あなたは、彼に、ここに来る様に言いなさい。」

サティ比丘は、仏陀の所へやってきた。仏陀は言う：

「あなたは、私が教える法を、同一の心が、輪廻の中において漂泊して輪転しているのだ、と主張しているそうであるが、本当であるか？」

仏陀の前では、誰も嘘をつくことはできない。というのも、仏陀には他心通があるが故に。

サティ比丘は答える：

「はい。そうです。」

仏陀：

「あなたは、同一の心が、輪廻の中において漂泊していると言うが、この心とは何であるか？」

サティ比丘は答える：

「これは、あの、表現できる所の、感覚することのできる所の、また、随処において、一切の善悪の果報を受け取ることのできる、そういうものです。」

仏陀は彼を叱責し、加えて、彼に縁起を教えた。仏陀は言う：

「心識には多くの種類がある。眼識、耳識、鼻識、身識、舌識等・・・私が言う種々の識は、みな、因と縁が和合して生じるものである。因と縁の和合がなければ、識は生起しない。識の名称は、それが依存して生起した所の、因と縁によって命名される。例えば眼識、色塵があなたの眼根を衝撃する時、眼識が生じる。これを耳識とは呼ばない。音が耳根を衝撃する時、耳識が生じる。匂いが鼻根を衝撃する時、鼻識が生じる。味が舌根を衝撃する時、舌識が生じる。故に、識は、それが生起する所の、因と縁によって命名される。色塵が消失するや否や、眼識は生起しなくなる。故に、因と縁が消失すると、眼識もまた、共に消失するのである。」

あなたがテレビを見る時、眼識は、耳識に飛んで、（耳識が眼識に）なる事はない。テレビを、耳識が見る、という事にはならない。耳識が鼻識に飛んで、鼻識が（音を）嗅ぐ、という事はない。鼻識が舌識に飛んで、舌識が（匂いを）味わう、という事はない。この様な法は、存在しない。一切は、みな、因・縁和合の法であり、因と縁のある時、果は存在する。因と縁が滅すれ

ば、果も滅するのであって、1つの処から、もう1つの処へ、飛ぶ事はない。仏陀は彼に、因縁の法の全体を解説し、また、眼識、鼻識、耳識の生起を促す所の、因の説明をした。故に、心識は、1個の自我などではなく、1個の我などなく、ただ、因と縁に従って生・滅しているだけであって、因縁に合わせて名を得ているのである（という事が分かる）。心の定義は、純粹な、ただ識知の過程であるだけであって、それは、ただ、純粹な活動に過ぎず、（この定義は）一般の凡夫が持っている所の「我見」（我有りという見解）を対治するものである。

心の二分法

今、心の二分法を説明する。この心識に対して、非常に徹底的に理解する必要がある。というのも、《アビダンマ論》全編は、心と関係があるが故に。我々が業をなす時、この心でもって業をなす。受け取る果報は、この業をなす心によって、もたらされる。故に、心を理解する事は、非常に多くの悪業を取り除く事ができる。心は、「界」によって、4種類に分類する事ができる：

1. 欲界心 (54)
2. 色界心 (15)
3. 無色界心 (12)
4. 出世間心 (8)

心はまた、「本性」によって、以下に分類する事ができる：

1. 善心 (21)
2. 不善心 (12)
3. 果報心 (36)
4. 唯作心 (20)

果報心と唯作心は、また、無記心とも言う。なぜ、無記心と呼ぶのか？というのも、それらは、非善、非悪であるが故に。果報心 (36) は、また、有因心 (21) に分類する事ができる。それは、

1. 欲界果報心 (8)
2. 色界廣大果報心 (5)
3. 無色界廣大果報心 (4)
4. 出世間果報心 (4)

で、合計21個。及び、無因心 (15) の果報心 (すなわち)：

1. 無因不善果報心 (7)
2. 無因善果報心 (8)

である。

表A: 89心分類総覧表 (P252の別表参照)

「界」とはすなわち、衆生の生存地の事である。合計31界あって、また、3個の部分に分ける事ができる。

1. 11個の欲界地：

4個の悪趣地「地獄、畜生、餓鬼、阿修羅」と

7個の善趣地「人、4大天王、33天、夜摩天、兜率天、化樂天、他化自在天」。

2. 16個の色界地：

初禪地、第二禪地、第三禪地、第四禪地。

(1)初禪地は、3層：梵衆天、梵補天、大梵天。

止禪 (samatha - vipassanā) を修行した者が臨終の時、ジャーナを保持する事が出来るならば、例えば初禪を維持する事ができるならば、往生の後、初禪地のその中の1つの層に生まれ変わる事ができる。

(2)第二禪地は3層：

少光天、無量光天、光音天。

もし、禪修行者が、第二禪を維持して往生するならば、この内の1つの層に生まれ出る。

(3)第三禪地は3層：

少淨天、無量淨天、遍淨天。

もし、禪修行者が、第三禪を維持して往生するならば、色界第三禪天の内の、1つの層に生まれ出る。

(4)第四禪地は合計7層：

広果天、無想有情天、無煩天、無熱天、善現天、善見天、色究極天。

その内、最も上部の5つの層、無煩天、無熱天、善現天、善見天、色究極天は、淨居天という。これは三果（ママ）アラハンだけが行ける場所である。三果を証したならば、往生の時、淨居天に生まれ出る。但し、すべての三果アラハンが、淨居天に生まれるとは限らない。ある種の人第二禪天を選ぶ場合もあり、または初禪天を選ぶ場合もある。この5つの層の淨居天は、菩薩が菩薩道を実践している時、行く事のない場所である。菩薩が菩薩道を実践する時、それはすなわち、仏陀になる前、2つの場所は行く事がない、という事を意味している。1個は地獄の中の阿鼻地獄で、もう1個は、淨居天である。

菩薩はなぜ、淨居天に生まれ得ないのか、考えてみよう。すべての菩薩は、必ず、菩提樹の下で仏陀になる。1柱の（線）香の内に、菩薩、凡夫から、直接、四果アラハンを証悟し、その後に仏果を成就する。淨居天は、三果アラハンの生まれ変わる地である。これが、菩薩が仏陀になる前、淨居天に行く事ができない理由である。菩薩が仏陀になる道は、今回の世で初果を得、次に、衆生を半分ほど救済した後、二果を証し、次にまた衆生を救済して、その後に三果を証するのだと、考えてはならない。彼は、この世で三果を成就し、次の世で四果を証するのではない。この様な、成仏の道は存在しない。菩薩は、菩薩道を行じている時に、徐々に、彼の10個のハラミツを成就するのである。

上座部では、菩薩は凡夫であると見なしている。菩薩の境地は、初果アラハンに及ばない。というのも、初果アラハンは、すでに、3種類の煩惱を断じているが故に。菩薩は未だ、いかなる煩惱も断じてはおらず、故に、菩薩は、今後非常に多くの世において、地獄に

生まれることもあり得るのである。煩惱を断じていないのであれば、必ず悪事をなすし、それが原因で、地獄に落ちる事がある。これが、上座部における、菩薩の定義・解釈である。

3. 4個の無色界地：

空無遍処、識無遍処、無所有処、非想非非想処。

表B: 31界（P253の別表参照）

界に基づく、心の4種類の分類

いわゆる界とは、パーリ語では「avacara」と言う。その意味は、常時、ある種の場所において活動する心を指す。界に基づいて、心は、4種類に分類する事ができる。

1. 欲界心：

欲、すなわち、五欲の楽を享受する事を渴望する事。欲界心とはすなわち、常時、11個の欲界地で活動する心の事である。この種の心は、眼、耳、鼻、舌、身等の五欲の楽を享受したいと渴望する。

2. 色界心：

常時、16個の色界地において活動する心。すなわちジャーナ心。ジャーナを証得していないならば、16個の色界地に到達する事は出来ない。欲界心は、常時、11個の欲界地において活動する心で、五欲の楽を享受したいと渴望するのであるが、梵天は、欲界心を起こすであろうか？そう、起こすのである！反対に、欲界心の衆生は、色界心を生起させる事が出来るであろうか？当然、できる！我々が、ジャーナを証する時、心の中に生起するのは、色界心である。色界心は、常時、16個の色界地において活動する心ではあるが、しかし、欲界地においても出現する事ができる。

3. 無色界心：

これは、常時、4個の無色界地において、活動する心の事である。この種の心もまた、欲界地に出現する事がある。我々が、四禅八定に到達した時、それはすなわち、空無辺処を証得した時であるが、この時、無色界心は生じる。いわゆる無色界とは、それが色禅を超越している為に、色法がない。故に、無色界心と呼ばれる。

4. 出世間心：

出世間心は、五取蘊への執着を超越しており、欲界、色界または無色界への執着はない。

出世間心は、涅槃を目標にする。欲界心は、五欲の楽を目標にする。色界心は、色禅を目標にする。無色界心は、無色禅を目標にする。

心の本性による4種類の分類

本性に基づいて、心を4種類に分類する：

善 (kusala)、不善 (akusala)、果報 (vipāka)、唯作 (kiriya)。

善と不善を分別するには、相応する因が、善であるか、または不善であるかによる。

《アビダンマ論》の中において、6個の因がある。

1番目のグループは、三善因といい、それはすなわち、無貪、無瞋、無痴。

2番目のグループは、三不善因で、それはすなわち、貪、瞋、痴。

1. 善心：

善なる因「無貪、無瞋または無貪、無瞋、無痴」と相応する心。善は、パーリ語では「kusala」と言う。精神的に健全なもの、道徳的には、叱責されないもの、かつ、愉悅の果報をもたらすもの。

2. 不善心：

不善なる因「痴、または貪と痴、または瞋と痴」と相応する心。合計3種類の心がある。すなわち、痴。貪+痴。瞋+痴。不善心は、必ず痴を含む。というのも、痴は潜在的な根であり、一切の不善の根本であるが故に。不善のパーリ語は、「akusala」であり、心が精神的に非常に不健全であり、道徳上では、叱責を受けるに相当する事、痛苦の果報をもたらす事を示す。

3. 果報心：

上記の、2種類の善と不善は、業となり、その業によって果報が生じる。これを果報心と言う。果報心には、善も不善もなく、業の熟するに従って、生起する心である。純粹に心に関連しているのみであって、身体とは無関係である。

4. 唯作心：

業でもなく、果報でもない、唯一、活動と関係があり、業をなす事はない。アラハンの心は、唯作心と言う。というのも、アラハンの心は、業をなさないが故に。凡夫の、ある種の心はまた、唯作心である場合があるが、それについては、今後説明する。果報心と唯作心の2者は、皆、非善であり、また非不善でもある。それらは無記 (abyākata) に列せられるが、すなわち、無記心である。

54欲界心

欲界心は、以下の様に分類する事ができる：

1. 不善心 (12)
2. 美心 (24)
3. 無因心 (18)

12種類の不善心

いわゆる不善心とは、3つの不善の因「貪、瞋、痴」に相応する心である、故に、不善心は、また以下の様に分類する事ができる：

1. 貪根心 (8)
2. 瞋根心 (2)
3. 痴根心 (2)

貪根心 (8)

貪根心は8種類ある：

1. 悦具邪見相応無行一心
2. 悦具邪見相応有行一心
3. 悦具邪見不相応無行一心
4. 悦具邪見不相応有行一心
5. 捨具邪見相応無行一心
6. 捨具邪見相応有行一心
7. 捨具邪見不相応無行一心
8. 捨具邪見不相応有行一心

3種類の方法でもって、8種類の貪根心を識別する事ができる：

(1)相応する受に基づくもの：

悦具であるか、捨具であるか。もし、悦具であるならば、それはすなわち、心の樂受であり、悪事を働くときに、楽しんでいるか、それとも、中捨的に悪業をなしているか、を観察する。

(2)邪見相応であるか、どうか：

いわゆる、邪見とは、不正確な信仰、または観念を言う。邪見の範囲は非常に広く、それは例えば、創造神が存在すると信じるとか、上帝（創造神）が一切を創造したのだと信じるとか、これらは邪見である。または、1個の永恒不変の魂（靈魂）がある、と信じるのも邪見である。または、人の死後、まったく何も残らない、と思うのは断見である。合計62種類の邪見が存在するが、範囲が非常に広い為に、ここではこれ以上触れない。我々は、（説明の）範囲を、因と果を信じない事、善には善報、悪には悪報がある事を信じない、という、この種の邪見に絞りたいと思う。この様であれば、比較的議論しやすいが故に。

(3)無行または有行の区別：

「行」とは、多層の意味を有する言葉であるが、ここにおいては、唆し、扇動、惹起、または何らかの方便または方法を採用する事を言う。無行とは、主動的であり、すなわち、「唆し」（*asāṅkhārika*）を受けていない事を言う。有行は、受動的である事を言う。有行と無行に分けるのは、主に、唆しを受けたかどうか、に基づく。唆しは、他人からであっても、己自身からであっても、また、身・口、または純粹に意識上の唆しであっても、よい。もし、他人が身体的な行動によって、我々にある種の心を生起せしめるか、または、当該の心に依って、

行動するならば、この種の扇動は、身業に属する。例えば、ある人間に殺人をさせる時、あなたが手を振り、それによって、彼が人を殺しに行ったとすると、これは、身体による唆し、と言う。もし、言葉であるならば、あなたが「彼を殺せ」と命令し、ある人が、あなたの命令に従って、人を殺す（という様な例がある）。故に、身体的、言語的、または意識上の、という風に区分する事ができる。

あなたが悪事をなすとき、実は、初めから自発的に能動的に実践する訳ではなく、先に「なすべきか、なさざるべきか」と考えてから実行する。これもまた有行である。これは己自身の心の激励を受けて実践しているものである。この事は、「己自身から出発するところの、有行」という。この事から、唆しは、他人からのものと、己自身からのものがある事が分かる。

貪と瞋は、同時に生起する事は出来ない。というのも、貪の本質は執取であり、それは捉えて離さない事を意味する。しかし、瞋の本質は反抗であり、それは、心による反撃、または破壊、排斥を意味する。故に、貪は執取、瞋は排斥で、（その性質は）ちょうど真反対となる。故に、《アビダンマ論》において、貪と瞋は、同時に生起する事は出来ない（と書かれている）。ただし、すべての不善心には、必ず痴が存在する。痴は、一切の不善の根本である。ただ、8個の貪根心の中においては、貪が比較的、顕著である。この事から、貪根心は、貪1個のみが原因である、という事ではない、事が分かる。

1. 悦具邪見相応無行一心：

偷盗は無罪であると思っている小さな男の子が、とても楽しそうに、主動的に、八百屋さんから、1個のリンゴを盗んだ。この小さな男の子は、偷盗は無罪であると思っているが、これを邪見相応と言う。彼は（偷盗を）楽しんでいる。これは悦具。主動的は、無行。故に、偷盗を無罪だと思っている男の子が、非常に楽しげに、主動的に、八百屋さんから1個のリンゴを盗んだ、これ（この心の状況）を、悦具邪見相応無行一心、と言う。

2. 悦具邪見相応有行一心：

偷盗は無罪であると思っている男の子が、友達の唆しによって、喜んで、八百屋さんで、リンゴを1個盗んだ。悦具、邪見相応は、<1.>と同じ。友達の唆しを受けて後、偷盗を働いた点を、有行、と言う。2つの例を比較すると、無行の果報は、有行の果報より重い。というのも、有行は、本人の自発的な行為ではなく、他人の唆しによるが故に、彼の「思」はあまり強烈ではない（と言える）。思とは、業を造る（読み「なる」以下同様）所の心であり、それが強烈でないならば、得る果報もまた、それほど重いものとはならない。

3. 悦具邪見不相応無行一心：

この心は、<1.>とよく似ている。彼は、非常に楽しげに、主動的に、八百屋さんから、1個のリンゴを偷盗した。違いは、邪見を含まない事である。彼には、（その時）邪見はなかった。

4. 悦具邪見不相応有行一心：

この心は、<3.>とよく似ているが、違いは、彼は、友人の唆しによって、または、己自身：「私は、偷盗するべきか、否か？」

の再三の考慮の後に、行動している点である。この種の心の動きもまた、有行、と言う。

5. 捨具邪見相応無行一心：

偷盜は無罪であると思う男の子は、中捨の心でもって、主動的に、八百屋さんから、1個のリンゴを偷盜した。この時の（心の）違いは、彼の受にある。この時の偷盜において、彼には、喜ばしい気持ちはなく、平捨（平らかな気持ち）の心でもって行動した。＜1.＞と＜5.＞の、この2種類の心を比較するに、果報が比較的重いものは、悦具であるのか、または捨具であるのかは、論師方も、未だ共通の結論を得ていない。

6. 捨具邪見相応有行一心：

これは＜5.＞と似ている。異なる所は、この心は、唆しを受けたか、または、己自身によって、再三考慮した後、なした業である事。

7. 捨具邪見不相応無行一心：

盗む時は、平捨の心を持ち、邪見は持たない。（これを）なぜ、不善心と言うのか？というのも、盗み自体が、不善業であるが故に。偷盜は、悪の業果をもたらす事は承知しているが（邪見不相応）、しかし、貪心による、駆使に耐えきれない。

8. 捨具邪見不相応有行一心：

これは＜7.＞と似ているが、異なる所は、有行である事。唆しを受けて、または己自身の再三の考慮によってなした悪業である、と言える。

以下に、2つの例を挙げる：

もし、あなが（レストランに行つて）、業報の事を考えず、主動的、自発的に、大いなるグルメを享受したとする。その時、あなたの心に生起するのは、どの様な心であろうか？

それは、「悦具邪見相応無行一心」である。

あなたは、友人に説得されて、一緒に映画を見に行く事になり、業報の事を考えないで、非常に喜んで（一緒に）出掛けたとする。その時、あなたの心に生起するのは、どの様な心であろうか？

それは、「悦具邪見相応有行一心」である。

もし、あなたが、中捨の心でもって、主動的、自発的に映画を見に行つたとする、（その時のあなたは）業報を考慮しないならば、それは「捨具邪見相応無行一心」である。

瞋恨心 (2)

瞋恨心は2種類ある：

1. 憂具瞋恚相応無行一心

2. 憂具瞋恚相応有行一心

上記に関する受は、憂しかない。それは喜でもなく、捨でもない。怒っている時、あなたは、楽しい、という事はありえない。故に、悦具ではありえない。そして、その心の中は、平捨でも

ないが故に、捨具とは言えない。この時、心中にあるのは憂愁であって、故に、憂が1種存在する、と言う。

憂具瞋恚相応の心には、邪見はない。というのも、邪見の因は、貪であり、故に、邪見は、貪とのみ、相応し、瞋恚とは相応しないが故に。ここで言う瞋恚とは、心の反撃、心の反抗、排斥及び破壊を言う。無行は、唆しを受けたか、または、扇動を受けたか、である。ある男性が、恋敵を見て、非常に憤慨し、彼と喧嘩になったとして、これはどの様な心であろうか？

「憂具瞋恚相応無行一心」である。

もし、この男性が、恋敵と己の恋人、2人が親密そうに、一緒にいるのを見た時、最初はそれほど憤慨しなかったものの、しかし、その他の友人が、以下の様に言うとしたら：

「あなたの恋敵は、あなたの恋人と非常に親しい。あなたは、何らかの行動を起こさなければならない！」

そして、あなたは早速、恋敵を攻撃したならば、これは、「憂具瞋恚相応有行一心」と言う。

また例えば、あなたが経を聞いている時、蚊が飛んできてあなたを咬んだ。あなたは何も考えずに、パチッと手を打った。これは、どの様な心であるか？

「憂具瞋恚相応無行一心」である。

蚊があなたを咬んだ。あなたは、蚊を追い払った。2度目、蚊があなたを咬んだが、あなたは蚊を、手で追い払った。3回目、あなたは辛抱できなくなって、パチンと蚊を叩いた。これはどの様な心であるか？

「憂具瞋恚相応有行一心」である。

あなたは、日常生活の中における、己自身の一挙手一投足が、それぞれ何の心であるかを、よく研究しなければならない。というのも、1つ1つの善心と不善心は、みな、業を造るが故に。

痴根心 (2)

痴根心には、1個の因しかない。それはすなわち、純粋な痴であり、貪もなければ、瞋もない。貪根心 (8) には、貪と痴がある。瞋根心 (2) には、瞋恚と痴がある。痴根心 (2) には、1個の痴しかない。

1. 捨具疑相応一心：

心が、痴の干渉を受けた時、目標に対して、ポジティブ (正) か、またはネガティブ (負) かの判断が出来ず、悦具と相応する事ができないし、また、憂具と相応する事も出来ない。故に、喜も憂もない。疑、とは、物事への疑惑であり、(物事を) 正しく判断できない事を、疑という。通常、三宝への疑いをもって、解釈する事が多い。もし、心中において、ゴータマ 仏陀の証悟に対して、疑惑がある時、「捨具疑相応一心」が生起する。

または、四聖諦八正道が、真実、人をして、煩惱から解脱せしめることができるのか、と疑うこともまた、「捨具疑相応一心」と呼ぶ。または、世間において、アラハンを証悟した人物がいる事を疑い、心中において疑心が生じる事も、同様に、「捨具疑相応一心」と呼ぶ。

2. 捨具掉挙相応一心：

掉挙とは、心の散乱の事を言う。例えば、私が講義している内容が理解できないで、その為に、心が散乱する等。この時に生起するのが、すなわち、「捨具掉挙相応一心」である。掉挙

の心は、日常生活において最も容易に生起する。というのも、心の（展開する）速度は非常に迅速であり、心は所縁に接触するや否や、即刻、散乱するが故に。アラハン（の心）だけが、掉挙しない。

12個の不善心の中で、12番目の、「捨具掉挙相応一心」を除き、その他の11個の不善心の中において、ひとたび果報が熟した時、それらはみな、次の1世（1生）において、四悪道に生まれる果報を生じせしめるが故に、（あなたは）四悪道の衆生となる。それらはみな、（将来、あなたが）四悪道に生まれ出る事の（因となる）不善業である。

「捨具掉挙相応一心」は、（そのエネルギーが）非常に弱いのが原因で、四悪道へ生まれ変わる要因には、成りえない。12個の不善心の中において、みな、掉挙を存しているが、しかし、「捨具掉挙相応一心」の中においてのみ、それがとりわけ顕著になる。12個の不善心は、89種の心の中において、その占める割合は、それほど多くはないものの、しかし、一般の人々の心の中において生起する回数は、非常に多い。故に、仏陀は《法句経》の中において、以下の様に述べたのである。「心は、悪法において楽しむ。心は、邪法において楽しむ。」

では、我々は、どの様に1日を過ごしているのかを、見てみよう。あなたが、早朝、目覚めた直後、目を開けた時の、最初の心は、どの様なものであるか？通常は、みな、「捨具掉挙相応一心」である。というのも、心は、非常に散乱しているものであるが故に。

もし、あなたが、あなたの心を、あなたの息に集中せしめないならば、または、身体の32個の身分（32個の身体部分、以下同様）または、四大等々に集中しないならば、心は必ず、散乱しているものである。心は、必ず、1個の所縁を取らねばならないが、しかし、我々が目覚めて目を開けるや否や、心が吸い寄せられるのは、不善の所縁である事が多く、その結果、「捨具掉挙相応一心」を生起せしめるのである。

次に、あなたは、お手洗いに行く。大便は臭いもので、その匂いがあなたの鼻根に届くと、あなたには、即刻「憂具瞋恚相応無行一心」が生じる。

もし、あなたが、禅修行者であるならば、大便がトイレに落ちる瞬間、あなたは不浄観を修して、不浄を観じる（に違いない）。古代において、ある比丘尼が、不浄観を修して、トイレで不浄を観じた所、即刻、初禅を証得した。しかし、一般の人々がトイレに座して、体験しているのは「憂具瞋恚相応無行一心」である。

お手洗いの後は、歯磨きである。口が臭いので、またまた「憂具瞋恚相応無行一心」が生起する。歯を磨く時、手が動いても、心ここにあらずで、また「捨具掉挙相応一心」が生じる。

次に、鏡を見ると、顔に大きなニキビがあつて、「憂具瞋恚相応無行一心」が生まれる。または、己自身の一重の目を見て、美しくないと思い、明日には、二重になる様に、整形美容に行こうと思う。この時は、瞋根心が、貪根心になり、かつ、これは不善心である事を知らないが故に、ここにおいて「悦具邪見相応無行一心」が生じる。

食事の時、気持ちが落ち着かないので、食事が進まない。その時、生起するのは「憂具瞋恚相応無行一心」。この時、家族が「ゆっくり食べなさい。ゆっくり食べれば、おいしいと思うよ。食事を楽しみなさい。」と励ますと、それを聞いたあなたは、なるほどと思い、ゆっくりと噛んでみると、なるほど、おいしく感じられる。この時、生起するのは「悦具邪見相応有行一心」である。

次は、出勤。お化粧品は必須。あなたは、鏡の前に行き、お顔に色々な色を塗る。緑色、赤色、

黒色等々、この時の心は「悦具邪見相応無行一心」。誰も命令しない中、あなたは、自発的に化粧をするが故に、無行、である。その後、車を運転して会社に向かうが、すでに遅刻しそうな上、ラッシュに巻き込まれ、心はイライラして、「憂具瞋恚相応無行一心」が生起する。

出勤してみると、同僚の誰れさんが、昇進した、という話が飛び込んできた。心は嫉妬で一杯、「憂具瞋恚相応無行一心」が生じる。この「憂具瞋恚相応無行一心」を、どの様にして、善心に転化させるか？功德に対して、随喜する事。あなたは、随喜しなければならない！同僚が昇進するとは、良きかな、良きかな！不善心は、一念の差において、即刻、善心に転化される。至極、簡単である。しかし、先にあなたは、己自身の心を研究しておかねばならない。もし、あなたが、何が善で、何が悪かを知らない時、ひとたび不善心が生起したなら、果報は引き続きやってくる。最後、退勤して家に戻る。とても疲れた。ソファーに座って、テレビをつけて、バラエティー番組を見る。「悦具邪見相応無行一心」が生じる。いや、悦具、とは限らない。もし、嫁姑物語なら、あなたも共に涙して、その時は「憂具瞋恚相応無行一心」が生じる。お訊ねします。あなたは、いつ、何時、善心を生起させますか？

上に述べた様に、我々の心は、非常に多くの時間、いつも、不善心相応（の状態にあるの）である。ゴータマ仏陀が「心は、悪法において楽しむ。」と言うのは、上記の事が原因である。仏陀はまた、以下の様に言う：

「1粒の、保護された心のみが、楽しみをもたらす事ができる。」

これが、何故、己自身の心を研究する事が大切であるのか、という理由である。というのも、不善心と善心は、共に、相応の果報をもたらすが故に。善心は、善の果報をもたらす、不善心は、不善の果報をもたらすのである。

12個の不善心は、みな受（具）を含む：

すなわち、悦具、捨具、憂具。その内、憂具は、純粹に、ただ、瞋恚とのみ相応する。私がアメリカにいた時、非常に多くの西洋人が、以下の様に問うた：

「恐怖（fear）は、どの心所に属しますか？」

恐怖は、瞋恚の心所に属する。というのも、それは、憂具であるが故に。受が、憂具である、という点から鑑みて、恐怖の心理状態は、瞋に属するということが分かる。

（恐怖しているその）時（のその心）は、瞋恚心である。また、ある人が、私に訊ねた

「読経する時、やたらに、涙がこぼれるのだが、これは瞋恚でしょうか？」

こういう時、あなたの心中に相応して生起した所の受が、喜であるか？または憂であるか？

それとも捨であるか？を観察し、その上、それが善であるか、悪であるかを、決定しなければならない。

3種類の受以外に、「因」もまた理解されなければならない。善心、不善心には、それぞれに因が存在する。善心には3個の因：無貪、無瞋、無痴。不善心にも3個の因：貪、瞋、痴。例えば、1つ目の不善心「悦具邪見相応無行一心」には、貪と、痴という、2つの因がある。

「痴は一切の不善心の根本」である。すべての不善心には、かならず、すべてに亘って、痴が存在する。ただ、「悦具邪見相応無行一心」においては、貪が、比較的顕著である。「憂具瞋恚相応無行一心」には、瞋と痴のふたつがある。「捨具疑相応一心」、「捨具掉挙相応一心」は、ただ1個の因、すなわち、純粹に、痴のみ、存在する。この様に、不善心は、ある時には、2個の不善因があり、ある時には、1個の不善因がある、ということになる。貪・瞋・痴の3個の不善因

は、同時に発生する事はない。というのも、瞋と貪は、相反する状態であって、瞋は排斥、貪は掴み取る事、を意味するが故に。ふたつの相反する状態の心が、同じ1つの心識刹那において生起する事は、不可能である。故に、3個の不善心は、同時に生起する事はない。

すべての善心（善業）、不善心（不善業）は、ひとたび為されると、生命の相続流の中において、一種の潜在的エネルギーとなるが、それを業力と呼ぶ。ひとたび因縁が熟すると、業力は、それ自身の果報を生じる。それはちょうど、地面の上にばらまいた種が、因と縁（十分な太陽、肥沃な土地、雨水）の熟すことにより、発芽し、成長するのと同じ様に、ひとたび時機が熟すると、業力は果報を生じ、それは果報心となる。

不善心によって生じる果報心（7）

7個の、無因不善果報心がある。果報心自体は、無記であり、善と悪の区別はない。善と悪の区別がないのに、なぜ、不善果報心と呼ぶのか？というのも、この不善とは、不善心（業）によって生じた所の、果報心であるが故に（不善果報心と呼ぶ）。7個の無因不善果報心とは：

1. 眼識捨具
2. 耳識捨具
3. 鼻識捨具
4. 舌識捨具
5. 身識苦具
6. 捨具領受心
7. 捨具推度心

眼、耳、鼻、舌はみな、捨具であり、身識は苦具である。色塵が、眼根の眼浄色を衝撃する時、眼識が生起する。色塵は所造色である。色法は、28種類に分類されるが、それはすなわち、四大「地、水、火、風」の上に、四大に依存して生じた所の、所造色24種類が存在し、それらを合計すると、28種類となる。

24種類の所造色の中において、色（色彩）が含まれる。色彩が眼浄色を衝撃する時、眼浄色もまた所造色である事から、2者共に、非常に柔らかく、衝撃力は強くない。それはちょうど、綿花でもって、もう1つ別の綿花を衝撃するかの如くであって、その衝撃力が強くない事をもって、その時生じる所の受を、楽具でもなく、苦具でもなく、捨具と呼ぶ。耳識もまた同様である。

音声は耳根の耳浄色を衝撃する時、耳識が生じる。音声は所造色であり、耳浄色もまた所造色であるため・・・所造色は比較的弱いものであって、四大は非常に強い・・・弱い所造色が、もう1つ別の弱い所造色を衝撃する時、そこにおいて生じる受は、苦受ではありえない。その上また、それは、不善果報心であり、不善であれば、楽受ではありえず、故に、捨受となる。香が鼻浄色を衝撃する時、鼻識が生じるが、香も、鼻浄色も、共に所造色であるが故に、衝撃によって生じた受もまた、捨受となる。舌識もまた同様である。

身識が生起する因は、触である。触は、地、火、風の、3個の色法を含むが、これは、四大の中の三大である。身識は、身浄色に依存して生起するが、身浄色は、全身に遍満していて、範囲は非常に広い。故に、触が、身浄色を衝撃する時、その範囲が広い上に、また、地、火、風の三大種の色が、直接衝撃するその（強い）力によって、生起する受は、捨受ではありえず、必ず苦受となる。

捨具領受心、捨具推度心を速行心と比較してみるに、（前2者は）比較的弱い。というのも、（それらは）果報心であるが故に。速行心は、業を造る心であり、比較的強い。この7個の無因不善果報心は、12個の不善心によって派生した所の果報心であるが、ではなぜ、無因心と言うのか？

因は、合計6種類あるが、それは、無貪・無瞋・無痴・貪・瞋・痴である。この6種類の因を、含有しないが故に、無因心、と呼ぶ。有因心は、樹木に根がある様に、非常に強く、非常に安定している。無因心は、（樹木の）根のない状態と同じであって、それは比較的弱いものとなる。

24個の美心

（その心が）美心と呼ばれる、その理由は、その内において、美の果報心及び唯作心が含まれるからである。もし、善心（に限る）話ならば、果報心と唯作心は含まれない。24個の美心は、3種類に分ける事ができる：

1. 欲界善心（8）
2. 欲界果報心（8）
3. 欲界唯作心（8）

欲界善心（8）

欲界善心は、8種類ある。すなわち：

1. 悦具智相応無行一心
2. 悦具智相応有行一心
3. 悦具智不相応無行一心
4. 悦具智不相応有行一心
5. 捨具智相応無行一心
6. 捨具智相応有行一心
7. 捨具智不相応無行一心
8. 捨具智不相応有行一心

8個の善心と、8個の貪根心との違いは、智相応であるかどうか、にある。貪根心は邪見相応であり、善心は、智相応である。智とは、智慧の事であり、智慧には、色々な等級がある。例えば、「真実法の無常・苦・無我を如実に知見する」は、比較的上等の智慧である。因果応報への認識もまた智慧である。ジャーナを証得し（その結果得た）智慧（or 証得する為の智慧）もまた、智慧である。経典を理解するのもまた、一種の智慧である。ここでは、智慧を、どの様に因果を理解するか、に規定しておく。

1. 悦具智相応無行一心：

あなたは、緬甸（ビルマ/ミャンマー）に災害が起こったとか、または、四川で地震があった等の情報を聞いて、自発的に、心の籠った寄付を申し出た。この時、この行為は、善業である

と、あなたは知っている。これはすなわち、悦具智相応無行一心である。

2. 悦具智相応有行一心：

緬甸に災害が起こったとか、または、四川で地震があった等の情報を聞いても、あなたは、全くもって、布施（寄付）をしようなどとは、思わなかった。しかし、友人が以下の様に言うのを聞いて、あなたは、ようやく布施をした。

「彼らが気の毒だ！我々は、みなで、布施（寄付）をしようではないか！」

この種の心は、悦具智相応有行一心である。

なぜか、ある種の人々は、自発的に善行を行う、これはすなわち、無行である。ある種の人々は、他人の励ましや、説得によって、初めて善行を行う。なぜであるか？これは、（上記の者が）過去世において、常に、その種の善業をなしていた為に、非常に良好な習性を（今世においても）保持しているからである。過去世において、布施をする事が非常に少ない場合、（今世において、その人は）布施の心を起こしにくい。私の友人は、過去世における家庭において、毎日1000人のアラハン比丘に供養をする習慣があった為、彼は今世において、比丘に出会うと、自然に供養をするのであった。これは、過去世において、その習慣によってなされた善業が、この1生に引き継がれたものである。他人に説得された訳でもなく、奨励された訳でもないのに、自発的に出家したいと願う者もまた、過去世の縁であったり、または、非常に多くの世において、出家して僧侶になっている可能性がある。これは、過去の習性（の積み重ね）によって（今世において）生じている現象である。

3. 悦具智不相応無行一心：

四川の地震、被災状況を聞いて、自動的自発的に当該の布施をしなければならないと思うが、しかし、業報の事を知らない。因縁果報の智慧のないままに布施するのは、この心を言う。

4. 悦具智不相応有行一心：

業報に関する智慧がない。しかし、友人に励まされて、非常に喜んで、被災者に対して、布施をし、支援をする。先に説明したが、1つ1つの善心と不善心は、みな、相応の果報を生じる。善業をなす時、もし、因縁果報の智慧がないならば、それが善心であっても、生じる果報は、智とは不相応、ということになる。智不相応の果報心は、因縁が具備され、効力を発揮する様になった時、その当該の時期に、（その様に）生まれ変わるべく、その様な結生識を生じる事になる。

天上の天神と人類を含む、一切の衆生は、もし、その生まれ変わる時点の、1番目の結生識が、智不相応である時、彼は止禅を修行しても、ジャーナを証得する事はできない上に、観禅を修行する事や、道果を証得する事など、不可能なのである。こうした事から、智慧とは、非常に重要である（ことが分かる）。どの様な善業をなす時も、常に智慧を伴う（べきである）。というのも、智慧は、後日の禅修行において、目標を達成する事ができるかどうかの、最も重要な条件になる、が故に。当然、その他に、精進等などの支えが必要ではあるけれども。

5. 捨具智相応無行一心：

布施は善業である事を知ってはいるものの、平捨の心でもって、自発的に善い事をする（心を言う）。人が、善い事をするのは楽しいし、善をおこなった時の、果報は、比較的円満なもの

である。仏陀は言う：

「善をおこなう時は、喜びに満ちて、その様にすべきである」

例えば、布施をする前、その事を考えただけでも、嬉しくなってしまう。品物を供養のため提出した時の、その一時、心の中は、同じく、喜びで一杯である。供養の後、今日の布施（の行為）を思い出して、またまた、非常に嬉しくなる。（布施を）する前、するその一時、布施をした後、それぞれの時間、心に歓喜が生まれる。これを上等布施と言う。上等布施のもたらす果報は、非常に円満なものである。

他に、もう1種類、別の布施がある。

(1)手元に多くの品物があつて、使いきれない。中には、比較的良いもの、比較的良くないものがある時、良くない方の品物を提供する。これを劣等布施と言う。

(2)当該の、供養する品物は、己自身が所有するものと同じでなければならない、と考える時、これを中等布施と言う。

(3)供養する品物は、己自身のものより良くなければならないと思ひ、自分の手元には劣つたものを残す。これを上等布施と言う。

上等布施は、上等の果報をもたらす事ができる。

中等布施は、中等の果報をもたらす事ができる。

下等布施は、下等の果報をもたらす。

故に善をおこなう時、必ず、歓喜を伴う様にする。たとえ、嬉しくはなくても、己自身に、少しでも喜ぶ様に教え励まさなければならない。平捨の心で布施をしてはならない。もし、平捨の心で布施をするならば、この業が熟して、生まれ変わりの時の、果報心（すなわち、結生識）が生じた時（その結生識もまた）、平捨となるが故に。1人の人間の結生心が捨具である時、その人は、あまり笑わない人となる。私は、パオ森林僧院で、1人の禅修行者に会ったが、彼の顔は、常に無表情であつた。この人は、前世で善をおこなう時（のその心は）、捨具相應の心であつたと思われる。

6. 捨具智相應有行一心：

友人の励ましを受けて、中捨の心でもって布施を行う。これは善業であることは知っており、因果の智慧は擁している。

7. 捨具智不相應無行一心：

因果を理解しないが、しかし、自発的に善をおこなう事ができる。因果の概念がないが故に、智とは不相應である。

8. 捨具智不相應有行一心：

有行とは、他人の励ましを受けて、または再三再四考慮した後に、善を行う（心の）事である。

本日、もし、あなた方が、経（説法）を聞きに来たものの、それがただ、一体《アビダンマ論》というものは、どの様なものであるのか、ただの見学、または、ただ聞いてみるだけであつて、経を聞くのは善業である事を知らない（その心）は、智と不相應である、と言う。しかし、もし、あなたが、経を聞くのは善業であつて、非常に喜ばしい事（である事を知っており）、

また、他人の励ましや、説得を必要とせずに、（己自ら）経を聞きに来るのであるならば、この心は「悦具智相応無行一心」である。この種の心が、最も善い。

同じ様に、あなたが僧院に来た時、庭に多くの落ち葉があるのを見て、箒を持って、中捨の心で、庭を掃き始めたとしたなら、これは「捨具智相応無行一心」である。もし、あなたが、この作業は、己自身、やるべき仕事であると思っはいるが、この種の作業は善業である事を知らないのであれば、これを智不相応（の心）、と言う。

我々は、1つ1つの善業を行う時、智慧をもって、その因果関係を知っておく必要がある。これはもっとも基本的な（仏教的な知識）である。また、掃除の最中に、無常・苦・無我を観ずるならば、これは智と相応する（心である）。己自身の心を研究してみるに、あなたの心は、善心の方が多く、不善心の方が少ないであろうか？それとも、善心の方が少なく、不善心の方が多いであろうか？不善心が善心より多い場合、注意が必要である！

善心の受には、2種類ある：

悦具と捨具である。8大善心の中の4個は、智と相応する（心で）、4個は、智とは不相応（の心）である。智と相応する心には、3種類の因が存在する。すなわち、無貪・無瞋・無痴である。

8大善心の1つ目は、「悦具智相応無行一心」である。智と相応する所の「智」とはすなわち、52個の心所の中の慧根の事である。智慧には、色々なレベルのものがあるが、8大善心の中の「智」は、

- ・因果を知っている
- ・善と悪を知っている
- ・無常・苦・無我を知っている

ということを主としている。

観智（観禪）を実践している時、例えば音声が聞こえたとして、あなたが音声の無常・苦・無我を観じれば、あなたには、「悦具智相応無行一心」が生じる。苦受が生起する時に、あなたが無常・苦・無我を観ずるならば、同様に、「悦具智相応無行一心」が生じる。故に、この智慧は、また、無常・苦・無我の了知を主とする。そして、これは、8大善心の中の智慧である、と言える。

8大善心の2番目は、「悦智相応有行一心」であるが、これもまた、3個の因がある。すなわち、無貪・無瞋・無痴である。

3番目は「悦具智不相応無行一心」である。智不相応は、智慧のない事（智慧とは無痴の事である）を意味しており、故に因は2個となる。すなわち、無貪と無瞋である。

8大善心の中において、因は3個であったり、2個であったりする。あるものは悦具で、あるものは捨具である。

欲界果報心（8）

8種類の欲界果報心：

1. 悦具智相応無行一心
2. 悦具智相応有行一心
3. 悦具智不相応無行一心
4. 悦具智不相応有行一心
5. 捨具智相応無行一心
6. 捨具智相応有行一心
7. 捨具智不相応無行一心
8. 捨具智不相応有行一心

8個の欲界果報心と、8個の欲界善心は、文字で書くと全く同じであるが、しかし、この8個は果報心であって、善心ではない。それは、8個の欲界善心がもたらした所の、果報なのである。

例えば：

1番目の「悦具智相応無行一心」が、1番目の「悦具相応無行一心果報心」を生じせしめるが、すなわち、1番目の善心が、1番目の果報心を生じせしめるのである。この果報心は、天神または人類に生まれ変わる為の結生識になるのであって、故に、それはすなわち、生まれ変わりの時の、1番目の心識である。論書の解説に基づくと、シッダッタ太子（すなわち、仏陀が仏になる前の菩薩）の結生識は、「悦具智相応無行一心果報心」であった。2番目の「悦具智相応有行一心」の善心は、「悦具智相応有行一心果報心」を生じせしめる。以下類推の事。

欲界唯作心（8）

欲界唯作心は8個ある。唯作心は、業をなす事と関係がない。純粹にただ、行為のみに限定される。故に、この種の心は、アラハンに属する所の、心であると言える。アラハンとは、正等正覚仏陀とパーチェカ仏を含む。この事から、アラハンによって生起される心は、唯作心と呼ぶ。アラハンに属する心であるが故に、我々（凡夫）が理解できる領域ではない為、ここでは解説しない。

18種類の無因心

我々はすでに、不善心（12）、美心（24）の研究をした。今、無因心（18）の解説を行う。

その因は、合計6種類ある：

1つは、3個の善因：無貪・無瞋・無痴

1つは、3個の不善因：貪・瞋・痴

いわゆる因とは、心をして安定させる要素の事を言う。因はまた、「根」とも言う。樹木に根があるならば、その木は比較的安定している。もし根がないならば、その木は簡単に倒れて、枯れてしまう。故に、因は、心を安定・強固にさせる要素である、と言える。不善心と善心は、共に、

有因心である。その為に、比較的安定している。無因心は、（上記の）6種類の因がないが故に、比較的脆弱であり、不安定である。18種類の無因心は、3種類に分類することができる：

1. 不善果報心（7）
2. 善果報心（8）
3. 無因唯作心（3）

不善果報心（7）

不善果報心は7個ある。それは、12個の不善心所から生じた果報である。

1. 眼識と捨具行
2. 耳識と捨具行
3. 鼻識と捨具行
4. 舌識と捨具行
5. 身識と苦具行
6. 領受と捨具行
7. 推度と捨具行

1. 眼識と捨具行：

すなわち、捨具眼識という意味である。故に、我々の眼識は、果報心であると言える。1歩、家を出て、喜ばしくない所縁を見た時、例えば、目の前に、糞便がころがっていたとして、その時、不善捨具眼識が生じる。これは、過去の悪業によって生じた所の果報である。

しかし、理解し、覚えておくべき事は、眼識の生起は、ただ1個の心識刹那であり、目が、喜ばしくない所縁を見るのは、あなたが過去においてなした所の、不善業（が原因）である。目の前になぜ、糞便があるのか、と不思議に思わない事。これは1個の例であるが、他に、目が常時、不善な所縁を見た事が原因で、生起する所の不善眼識は、非常に多い。これらは、みな、過去の業が熟したことと関係がある。

2. 耳識と捨具行：

1歩、家を出ると、耳障りな音声が聞こえ、心が不愉快になった。これも同様に、過去の業と関係がある。故に、天を恨んだり、人を憎んだりしてはならない！因があれば、必ず果が生じるが故に。

3. 鼻識と捨具行：

4. 舌識と捨具行：

5. 身識と苦具行：

眼、耳、鼻、舌という4個の識は、すべて捨具行であるが、なぜ、身識は、捨具行ではなく、苦具行なのであるか？というのも、眼識、耳識、鼻識、舌識は、それぞれ色塵、声（音）塵、香塵、味塵を所縁に取るが、身識は触塵を所縁に取るが故に。

触は、四大の中の、地、火、風を含む。なぜ、水が含まれないのか？鉢に入った水を、手で叩くと、圧力を感じる。この圧力は、風である。水の柔らかさを感じるのは、地である。水の冷たさを感じるのは、火である。こうしたことから、水の流動性と粘着性を身識で感じ取る事

ができないで、意識を通して（感じているのだという事が分かる）。故に、触塵は、地、火、風の3種類であり、身識が取る所縁は、四大の中の、地、火、風である（ことが分かる）。

四大に依存して、24種類の所造色が生じるが、眼根、耳根、鼻根、舌根、色（色彩）、音声、香、味は、みな、四大所造色である。眼識は、色塵（色は所造色）を所縁とし、色塵が眼根を衝撃する時（眼根もまた所造色である）、眼識が生じ、眼識が生じれば、（人はものを）見る事ができる。所造色が所造色を衝撃する時、力は非常に微弱な為、生起する所の受は、必ず、捨受となる。

身識の所縁は、地、火、風であるが、それはすなわち、地、火、風が直接身識を衝撃するものである事を意味する。そして、身識は、全身に分布している為、故に、衝撃力は非常に強力である。衝撃の力が強力である時、捨受が生起するのは不可能であり、それは必ず、苦受または楽受となる。（上に述べたものは）不善果報心であるが故に、苦具となる。あなたが、堅い木の床に座っている時、不快を感じるのは、身識による苦具行である。

6. 領受と捨具行：

色塵が眼根を衝撃する時、1個の識、その名を五門転向というものを生起させる。五門転向心は、色所縁に向けて転向するが、それはちょうど、これは何であるか、とみている状態であると言える。心は、生・滅、生・滅するものである故に、五門転向心もまた生起するや否や滅する。その後に、眼識が生起する。眼識は、（ものが）見えた状態であるが、しかし、それがどのような色彩であるかは、（まだ）分からない。眼識は生起して、また滅し去る。その後に、領受と捨具行の心が生起して、その色所縁を領受する。我々が心路過程の章節を読むとき、更に明確になるが、今の所は、大略、この様に説明する。

7. 推度と捨具行：

心は、生滅法である。領受心が生起して、滅し去った後、また、別の心が生起するが、それを推度という。推度は、真っ先に、推定と断定をする。これは色所縁である！と。7個の不善果報心は、みな、喜ばしくない所縁を取る。心は、必ず、所縁を取って、初めて生起する事ができる。所縁のない時、心は生起できない。

善果報心（8）

8大欲界善心は、8大有因果報心を引き起こす事ができるだけでなく、また、8大無因善果報心を引き起こす事ができる。それぞれ：

1. 眼識と捨具行
2. 耳識と捨具行
3. 鼻識と捨具行
4. 舌識と捨具行
5. 身識と楽具行
6. 領受と捨具行
7. 推度と悦具行
8. 推度と捨具行

ここにおいて、1個の「推度と悦具行」が増えている。この心と「推度と捨具行」の違いとは、以下の通りである。

推度と悦具行が取る所縁は、きわめて喜ばしい所縁である。

推度と捨具行が取る所縁は、喜ばしい所縁である。

「きわめて喜ばしい」とは、非常に喜ばしいという意味であって、例えば、仏陀に会う等、この所縁は非常に喜ばしいので、生起するのは、悦具推度心である。普通の友達に会った場合、生起するのは捨具推度心である。

8個の善果報無因心は、善果報心であるが故に、（対象として）取るのは、喜ばしい所縁である。（善果報心の場合）目が、（物を）一目見る時、それは、喜ばしい所縁であり、それは、過去の善業によって生じた善報である。鼻が、喜ばしい匂いを嗅ぐのは、同様に過去世の善業の善報である。しかし、良い匂い、良い香を嗅いだ時に、執着を起こすならば、それは過去世の善業によって生じた果報ではない。

あなたが、ひとたび、喜ばしい香を嗅ぐとき、即刻「悦具邪見不相応無行一心」（または、別の7個の貪根心の1つ）を生じせしめるならば、（心は）貪根心となり、不善業をなすことになる。故に、眼、耳、鼻、舌、身が、各々それぞれの色法によって衝撃されて、その結果、その瞬間に生じる所の五識が、善であるか不善であるかという事柄は、すべて、過去の業が熟する事によって、生じる果報である。しかし、あなたが、貪・瞋・痴等々の反応を生じせしめる時、過去世とは無関係になる。それは、今ここにおいて、あなたがなした所の、業であり、将来において、相應の果報が生じるのである。

唯作無因心 (3)

いわゆる唯作心とは、業とは関係がなく、純粹に1個の活動に過ぎない。合計3種類ある：

1. 捨具五門轉向心
2. 捨具意門轉向心
3. 悦具アラハン生笑心

1. 捨具五門轉向心：

色塵が眼根を衝撃する時、最初に生起する所の心は、「捨具五門轉向心」という。目標に轉向した後、心は、即刻滅し去る。衝撃したばかりの時は、未だ目標が何であるかを明確にできない為、悦具は生起する事ができないし、また、憂具も生起する事ができない。故に、捨具となる。唯作心は、アラハンだけが擁するものではなく、ただ8個の欲界唯作心のみが、アラハンの専有となる。

我々凡夫もまた、五門轉向心を生起させる。例えば、何か1個のものを見る時、あなたは即刻、それが何であろうか、と反応するが、これもまた唯作心である。凡夫であろうが、聖者であろうが、心の中において、みな、捨具五門轉向心と捨具意門轉向心を生起せしめるのである。

2. 捨具意門轉向心：

「意門心路過程」の章節において、更に1歩進んで、意門轉向心の説明をする。

3. 悦具アラハン生笑心：

この心こそ、アラハンに属する心である。凡夫にはない。ソータパナ、サカダーガミ、アナーガミなどの有学聖者の心中に生起する事はない。アラハンとは、正等正覚仏陀とパーチェカ仏を含む。

アラハン生笑心の作用とは、アラハンをして、欲界の事・物に対して、微笑を生じせしめる、という所にある。彼の笑いとは、ただ唇を少しばかり動かすだけ、である。我々の様に、大口を開いて笑ったりしない。ある時、神通第一のモッガラナー尊者がラッカナ比丘 (Lakkhana) と托鉢に出たが、非常に多くの餓鬼が、付近を漂っているのを見て、心中に悦具アラハン生笑心を生じ、口の端を少し緩めて笑った。ラッカナ尊者は不思議に思って訊ねた：

「尊者、あなたはなぜ、笑っているのですか？」

モッガラナー尊者：

「ゴータマ仏陀の前に出た時に、あなたは再度、この問題を私に訊ねてください。」

その後、2人は仏陀の所へ行ったので、ラッカナ尊者は、この問題を蒸し返して、モッガラナー尊者に訊ねた。モッガラナー尊者は言う：

「私は先ほど、非常に多くの餓鬼が、付近で浮遊しているのを見たのです。」

仏陀は言う：

「私が成道した時もまた、同じ様な餓鬼が、付近で漂っているのを見ました。ある者は、頭が人間で、身体が蛇で、ある者は、首が針の様に（細く）、なのに、お腹は妊婦の様に大きい。お腹がこの様に大きいのに、首は細い為に、食べられる物は非常に少なく、その為、いつもお腹を空かしている。」

この様に、仏陀は、各種各様の餓鬼を、描写して聞かせた。

仏陀は、あるとき、アーナンダ尊者と外出し、1組の乞食（こじき）が乞食（こつじき）しているのに出会い、仏陀はそっと微笑んだ。

アーナンダ尊者は訊ねた：

「世尊、あなたは何を微笑っているのですか？」

仏陀は答えて言う：

「アーナンダ。あなたは、あの、2人の乞食を見たか？この1対の夫婦は、すでに老いた。もし、彼らが33歳より以前に勇猛に精進したならば、男性は、アラハン道果を証悟できたし、女性は、アナーガミ道果を証悟する事ができた。もし、33歳を過ぎてしまっても、66歳の前までに、精進努力する事ができたならば、男性は、アナーガミ道果を、女性は、サターガミ道果を証悟する事ができた。今、彼らは私の目の前にいるが、しかし、今では年を取り過ぎていて、たとえ、私が彼らに説法してあげたとしても、彼らには、もはや、涅槃を体験するチャンスは、ないのである。勿体ないことだ！」

ただし、年老いた為に希望がない、という事はない。仏陀の時代には、120余歳の人が、道果を証悟している。パオ森林僧院では、70余歳、80余歳の人々が、ジャーナを証得している。（上記の）仏陀の説明は、あの乞食の夫婦に対してものである。

15色界心

89種類の心識に関して、我々は、すでに、欲界心（54）について（の説明を終えた）。今、色界心（15）に関する説明を開始する。いわゆる、色界心とは、ジャーナ心の事か、または、16個の色界地で活動する所の、心の事である。

合計、15個あり、それぞれ：

1. 色界善心（5）
2. 色界果報心（5）
3. 色界唯作心（5）

である。

5個の色界善心

我々は、先に、色界善心（5）について、解説する。色界善心は、3種類の善因を含む：無貪・無瞋・無痴。5個の色界善心とは：

1. 尋・伺・喜・楽・一境性具初禪善心
2. 伺・喜・楽・一境性具第二禪善心
3. 喜・楽・一境性具第三禪善心
4. 楽・一境性具第四禪善心
5. 捨・一境性具第五禪善心

なぜ、五禪が存在するのか？

経蔵によると、ジャーナは、4つの法に分ける事ができる。

論蔵によると、ジャーナは、5つの法に分ける事ができる。

通常、第一禪：尋・伺・喜・楽・一境性具初禪心は、共通である。ある種の禪修行者は、第二禪に入る時、尋と伺を同時に取り除く。故に、《アビダンマ論》の、第二禪、第三禪は、経蔵の第二禪に相当する。そして、《アビダンマ論》の第五禪は、経蔵の第四禪に相当する。

5個の色界善心は、みな、ジャーナ心である。初禪、第二禪、第三禪、第四禪、第五禪に到達する為には、必ず、止禪を修習しなければならない。禪の修習は、2種類しかない。1つは、止禪で、1つは、観禪である。止禪には、40種類の業処がある。ある種の業処は、ジャーナに到達する事が出来ない。例えば、四界分別観、死随念、仏随念などは、近行定に到達する事は出来ても、安止定に到達する事はできない。

ここでは、アーナーパーナ・サティを例にして、如何にして、修習を通して、初禪に到達するかを説明する。「アーナーパーナ・サティ」のパーリ語は「ānāpāna sati」である。所縁は呼吸で、satiは正念の事である。故に、（アーナーパーナ・サティは）正念を呼吸の上に置いて、自然に呼吸する。正念とは、純粹に（ただ）知っている、という事、すなわち、呼吸に対して、知っている、呼吸を吸い込んだ、吐き出した事を知っている事（を言い）、それが自然であればあるほど良い。止禪アーナーパーナ・サティの修行において、失敗する原因は、あまりに作意があり過ぎて、鼻（が詰まった様な）具合が悪くなる、または、精進（の方式）を間違えて、呼吸の観察を過度

にし過ぎた為に、頭が締め付けられる様に痛くなる、等である。矢を放つときに、力が強すぎると、矢は、的を外れて、他の所へ飛んで行ってしまふ。鼻が痛くなる以外に、人によっては、歯まで痛くなってしまふ事がある。我々人間は、何かをなそうとする時、目標を上方に設置して、絶え間なく精進して、目的に到達しようとするが、しかし、この方法は、禅の修行では、成功しない。必ず、自然に従い、法と相応する様にする事。この様にして初めて、成功する機会が得られる。

アーナーパーナ・サティを修行する時、呼吸を所縁として取る。自然に呼吸して、特別に作意してはならない。あなたは、経を聞くとき、呼吸をしていますか？呼吸している！その時、特別に力をこめて呼吸していますか？否！この方式で、呼吸の観察をするのが正しい。その様であれば、定力は必ず上昇して、鼻の下に灰色の相が出現するが、これを遍作相という。

身体の横または後ろ側に出現する光は、禅相ではない。禅相は、呼吸と共に生じ、呼吸と共にあるものである。もし、光が呼吸から非常に遠い時、それは禅相ではありえず、純粹に、ただの光である。禅相は、必ず呼吸と結合していなければならず、必ず鼻孔から出てくるものでなければならない。非常に寒い場所で法話をする時、口から煙が出るが、これは、ちょうど、あなたが見ている禅相と似ている。鼻孔の下部から、1塊の煙が出る様であつて、初めてそれは、100%正しいの禅相であると言える。煙は、鼻から出たばかりの時は灰色で、さらに専注し続けていると、白色に変化するが、これを取相と言う。更に定力を高めて、所縁に専注していると、心が専注すればするほど、白色は、透明を帯びてくる。それはダイヤモンドの様であり、明けの明星の様に光輝いており、これを似相と言う。これこそが、アーナーパーナ・サティにおいて必要としている所縁であり、ジャーナ心が必ず取るべき所縁でもある。

似相は、通常、非常に安定している。もしそれが、白色、赤色、黄色等々に変化するならば、それは、あなたの起心動念が、色彩の変化を引き起こしたのである。心の力は、非常に強力であり、心は、定力によって、禅相を生じる事ができるだけでなく、禅相を変化させる事もできる。禅相を長くしようとすれば、それは非常に長くなり、丸くしようとすれば丸くなり、四角にしたければ、四角くなる。遠くへ向かへと思えば、遠くにも行く。

ある種の人々は、この境地に到達すると、好奇心が生まれて、（禅相を）弄びつづけ、結果、禅相が消え失せてから、後悔する。禅相を弄ぶ時、心は専注ができなくなり、定力は消失し、禅相もまた、それにつれて、見えなくなってしまう。というのも、禅相は、定力によって生じるものであるが故に。定力が安定している時にのみ、禅相の消失を免れる事ができる。もし、禅相が消えて見えなくなったならば、引き続き、継続して呼吸に専注するならば、必ずや、禅相は、再度出現する。故に、平捨の心でもって、修行しなければならない。禅相の影響を、受け続けてはならない。ある種の人々は、他人と比較するのが好きだ。ひとたび、禅相が出現しないとすると、悲しく思い、故に、修行が疎かになる。平捨の心でもって、（呼吸を）観ずる必要がある。

（禅相が）あっても良く、なくても良い。（己の責任は）呼吸を観じつづける事、それだけである。

心が、似相に、少なくとも1時間、沈潜できる様になり、かつ、完全に妄念がなくなったならば、（あなたは）5個の禅支を生起せしめる事ができる。それはすなわち、尋・伺・喜・楽・一境性であり、（この時あなたは）初禅に到達したのである。もし、初禅を、1時間維持できるならば、

初禪の善心は、あなたの心の中において、1時間、生・滅、生・滅、生・滅し続ける事ができる。これは非常に強力な善業である。

第二禪に入るには、（初禪と同様に）アーナーパーナ・サティ似相を所縁に取る。定力が上昇した時、以下の様な心願を持つ様にする。すなわち、比較的粗くて劣る所の禪支、尋を取り除きたい、と。尋を取り除きたい、と願う心を維持しながら、引き続き観を実践し、定力を上昇させるならば、第二禪に到達する事ができる。

第二禪は、伺・喜・楽・一境性。多くの禪修行者は、同時に尋・伺という、2種類の禪支を取り除く事ができる為、（その時には）喜・楽・一境性の第三禪に到達する。

その後に、もし、第四禪に進入したいのであれば、喜を取り除かねばならない。喜自体が、情緒的な作用を有しているため、心を波動せしめ、その為、それは、喜の無い第四禪より劣る。喜を取り除くのだ、と決意して、その後に、定力を上昇せしめれば、第四禪、すなわち、楽・一境性具第四禪善心、に到達する事ができる。

では、喜と楽の区別とは何か？喜とは、この似相を好む事を言い、楽とは、似相を体験する時の楽受、または楽しさを言う。ちょうど、疲れていて、また、喉が渴いている旅人が、水の音を聞いて、喜ぶ時に生じるのが、喜である。そして、水を飲むときに体験する楽しさを、楽と言う。2者は、それぞれ、異なる事柄である。我々には五蘊がある：色、受、想、行、識。喜は行蘊であり、楽は受蘊である。この楽・一境性具第四禪善心について、ゴータマ仏陀は、世間的五欲の楽を超越するものであり、世間的に最も楽しい事柄でさえも、四禪の楽には敵わない、と言う。思惟の楽もまた、1種の情緒的作用である。故に、禪修行者は、楽を取り除こうと決意し、再度定力を向上させれば、捨・一境性具第五禪善心に到達する事ができる。

初禪、第二禪、第三禪、第四禪、第五禪は、みな、同一の目標を取る。もし、アーナーパーナ・サティを修行しているのであれば、初禪から第五禪まで、すべて似相を所縁として取るのである、すなわち、鼻孔の下方において、ダイヤモンドの様に光る、透明な似相（の事である）。その後、1歩更に1歩と、定力を上げて行き、粗くて劣っている禪支を捨棄して、初禪から、徐々に第五禪に到達する様にする。

五禪支が代表する所の意味は、以下の通り：

1. 尋： 心が、アーナーパーナ・サティ似相に安置しつづけるのを尋と言う。例えば、蜜蜂が、蜜を集める時、己自身全体を花の中に投入する様なもの。
2. 伺： 心をして、不断に、アーナーパーナ・サティ似相に注意を向け続ける事。蜜蜂が、花の周りをブンブンいいながら、飛び回る事を伺と言う。
3. 喜： 似相に対して喜ぶ事。
4. 楽： 似相の楽受または楽しさを体験する事。
5. 一境性： 似相に対する一心による專注。

（禪修行者は）禪定から出てきた後、この5個の禪支を検査しなければならない。先ほど、己自身が入っていたのは、初禪であるか、第二禪、第三禪、第四禪または第五禪であるか、と。

5個の色界果報心

色界果報心と色界善心は、文字の上では同じものである。5個の色界善心は、欲界でも生起する事ができる。しかし、5個の色界果報心は、その様にはできない。というのも、それらは梵天の結生識であり、梵天が色界に生まれる時の、1番目の心識であるが故に。凡夫は、欲界の衆生であり、梵天神ではない。故に、その結生識は、色界果報心ではありえない。我々がもし、現在、初禪を修証する事ができたとして、この初禪善心は、今生で果報を生じることはできない。

今生の臨終の時、もし、始終、初禪の定力を維持する事ができたならば、これに依拠して、梵天の色界初禪天に生まれ変わる時、梵天の結生識とする事ができる（色界初禪天は、梵衆天、梵輔天、大梵天の3つの界に分ける事ができる。）

5個の色界唯作心

唯作心はアラハンの心である。しかし、すべてのアラハンが、みな、5個の色界唯作心を擁しているとは限らない。というのも、アラハン全員が、みな、ジャーナを擁しているとは限らないが故に。ある者は、慧解脱のアラハンで、この心は、この様なアラハンの心において、生起する事はない。しかし、アラハンにとっては、ジャーナを修するのは非常に容易である。というのも、ジャーナを証する基本的条件は、五蓋を克服し、五蓋を鎮伏する事であるが故に。アラハンの心中には、すでに煩惱はなく、五蓋を克服するのは、些細な事柄であるが故に、彼らは簡単にジャーナに到達する事ができる。

色界唯作心(5)は、唯一、初禪、第二禪、第三禪、第四禪、第五禪を擁するアラハンの心にも、存在する。凡夫が生起させる所の初禪心は、善心と言ひ、アラハンが生起させる所の初禪心は、唯作心と言う。なぜ、唯作心と言うのか？というのも、唯作心は、もはや、二度と、業報を生じないが故に。アラハンはずでに、徹底的に無明と愛欲を断じ除いているが故に、その行為は、もはや果報を生じることがない。我々凡夫は、未だ無明と愛欲を断じ除いてはいない為に、すべての作為は、善心または不善心と呼ぶ。そして、これらの心の活動は、果報を生じせしめるものである。

本日、我々は、4時間の法話を聞いた。その上、1時間の討論と、1時間の総合的報告もあった。合計6時間である。（この間）瞬く間に、10余億個の心が生・滅した為、（我々は）数えきれないほどの善業を累積した。もし、あなたが、喜びの心をもって授業を受けたならば、更に多くの善業が生じる。もし、智相応の心を擁して（授業に参加したならば）、必ずや、更に多くの善業が生じる。我々は、善業を一切の衆生に分け与えたいと思う。同時に、この善業が、我々の、輪廻解脱の助縁となる事を願う。今、我々は、功德の回向を行う：

Idam me puññam asavakkhaya'vaham hotu.

Idam me puññam nibbānassa paccayo hotu.

Idam me puññam sabbasattanam dema.

Sādhu ! Sādhu ! Sādhu !

皆様に感謝します！「Sādhu」の意味は、「善哉！善哉！」である。神々が聞きつけると、我々と共に、「Sādhu ! Sādhu ! Sādhu !」と叫ぶのである。

4個の無色界善心

1. 空無辺処善心
2. 識無辺処善心
3. 無所有処善心
4. 非想非非想処善心

無色界善心を修するには、先に10遍 (kāsinas) を修しなければならない。それぞれ：地、水、火、風、赤色、黄色、白色、褐色、光明、空である。褐色は、頭髪の色で、ある種の本では、藍色と訳されることもある。空無辺処善心は、どの様にして、修するのか？ 禅修行者は、先に、地遍を、第四禅まで、修しておかねばならない。地遍の目標は大地であり、地を所縁として取らねばならない。始め、地面に、円を描き、これをもって、地の所縁とする。座席に戻った後、目を閉じれば、先ほど取った相が、浮かび上がる。その後に、地、地・・・心が、継続的に地に專注する時、ゆっくりと、徐々に、地を、1インチ、2インチ、3インチ、4インチ、5インチ・・・10方の虚空全体が、大地になる様に拡大していく。その後に、初禅、第二禅、第三禅、第四禅、第五禅と進む。

次に、続いて、地遍から、空無辺処に入る。第五禅から出定した後、この色禅の過患を考える。色禅には、色身があり、色身があれば、他人からの打撃、傷害、刺殺等々に遭遇・受難する事がある。色身の過患を思惟し、色身のないジャーナを証得する事を、無色禅と言う。故に、もう一度、ふたたび、大地全体を目標に取り、その後に、大地の1つの空間に、注意を向ける。ちょうど、皮膚に毛孔がある様に、大地の空隙に注意を払い、空、空、空と観ずる・・・この様になると、大地全体は見えなくなり、一片の虚空だけが残る。

次に、虚空を所縁に取り、空無辺処、または虚空、虚空、虚空と、黙念する・・・この様にすれば、空無辺処無色禅を証得する事ができる。空無辺処無色禅には、2個の禅支がある。すなわち、捨と一境性である。

空無辺処禅から、識無辺処禅に入る為には、空無辺処禅心を目標として取り、識無辺、識無辺・・・と黙念しなければならない。この様にすれば、識無辺処無色禅に証入する事ができる。識無辺処無色禅もまた、2個の禅支で、それは捨と一境性である。

識無辺処無色禅から、次に、無所有処無色禅に入る為には、空無辺処禅心の不存在を目標としなければならない。というのも、1個の心識刹那において、2個の心が同時に生起する事は不可能な為、故に、識無辺処善心が生起する時、空無辺処禅心は、存在しえないからである。この不存在を目標に取り、無所有、無所有、無所有・・・と観ずれば、無所有処無色禅を証得する事ができる。無所有処無色禅もまた、2個の禅支である。すなわち、捨と一境性。

無所有処無色禅から非想非非想処禅に入る為には、無所有処禅心を目標にする。というのも、「有」は良くないのであって、「有」があれば、痛苦が存在する。「無い」がもっとも良く、故に、無所有処の心を観ずるのを至上とし、この心をば、至上、至上・・・（と観ずれば）

非想非非想処無色禪を証得する事ができる。なぜ、非想非非想と呼ぶのであるか？非想は、想ではない。では、どの様な意味であるか？非想非非想処 (nevasaññānāsaññāyatana) は、ここに想があるとか、または無想であるとか、を言えないが故に、この様に呼ばれる。この種の心の中において、「想心所」はすでに、非常に微細になっており、その想の作用を執行する事ができない。故に、この心には、確実に想がある、とは言えない。しかし、当該の想は、まったくなくなった訳ではなく、その残渣の状は、保留されている。故に、無想とは言えず、非想非非想と言う。

無色界禪心は、それぞれ、異なる目標を取る。しかし、それぞれは、みな、同様に、2個の禪支が存在する。この事は、色界禪とは、異なる部分である。色界禪は、初禪、第二禪、第三禪、第四禪、第五禪であっても、みな、同一の目標を取る。例えば、アーナーパーナ・サティ (の目標) は似相であり、それは、鼻孔の下部 (に現れる)、ダイヤモンドの様に光る似相 (を目標にする) である。色界禪は、粗略な禪支を、1つ1つ超越して行き、それを取り除いた後、比較的微細な禪支に入って行くものである。

しかし、無色禪の目標は、それぞれで異なっている。例えば、
空無辺処善心は、虚空を目標に取り、
識無辺処善心は、空無辺処禪心を目標に取り、
無所有処善心は、空無辺処禪心の不存在を目標に取り、
非想非非想処は、無所有処善心を目標にするのである。しかし、これらの禪支はみな共通である。これが、色禪と無色禪の違いである。

4個の無色界果報心

1. 空無辺処果報心
2. 識無辺処果報心
3. 無所有処果報心
4. 非想非非想処果報心

空無辺処果報心は、空無辺処善心によって生じる果報であり、欲界では生起しない。無色界の中の空無辺処地において生起する。空無辺処地は、無色界の四個の地の1つであり、空無辺処果報心は、ここにおいて生起して、そこでの、梵天神の結生識となる。もし、修しているのが、空無辺処無色禪であり、かつ、臨終の時になお、その善心を維持する事ができるならば、その善心は、直接果報を生じる事ができ、それは、生まれ変わりの時の、1番目の心識になる。すなわち、空無辺処地に出生し、その結生識は、空無辺処果報心である。故に、この1個の果報心は、梵天神の結生識であり、欲界で生起する事は出来ない。

識無辺処果報心は、識無辺処地に出生して、梵天神の結生心となるものであって、それは、識無辺処善心から生じる。もし、1人の人間が、かつて、識無辺処禪心を証得したことがあっても、しかし、臨終のときにジャーナを失うのであれば、識無辺処地に生まれる事はできない。もし、無色界処に出生したいのであれば、臨終の時に、ジャーナを保ち続ける必要がある。

無所有処果報心と、非想非非想処果報心もまた、同様である。

無色界において生まれると、非常に長寿となる、また身体もない。身体がない、という事は、痛苦がない、という事であり、しかし、また、身体的な楽を享受する事ができない、という事でもある。もしあなたが、欲楽を追求する人間であるとするならば、居心地は悪く感じるであろう。しかし、この事は重要ではない。重要な欠点は、無色界には色身がない。色身がない、という事は、耳根が無い、という事でもある。しかし、耳根というものは、非常に重要なものなのである。耳根があつて初めて、仏法を聞く事ができる。ソータパナを証悟するためには、4つの条件がある。その内の1つは、仏法を聞く事、である。仏法を聞かずして、どの様にして、名色の無常・苦・無我を観ずることができるのか？故に、必ず、先に、仏法を聞かねばならず、聞いて後、初めて、どの様に修行すればよいか、が分かる。無色界には耳根がない為、たとえ仏陀が目の前に現れても、彼の説法を聞く事が出来ない。これが（無色界の）唯一の欠点である。

ゴータマ仏陀は以下の様に言う：

世間には、2種類の、めったに出会う事のできない人がいる。

1番目は、恩義を知る人。

2番目は、衆生の幸福の為に活動する人。

仏陀自身は、衆生の幸福の為に出現したものである。仏陀が成道した後、彼は、感謝しなければならない人々、恩義を感じる人々に、報いなければならない、と思索した。善者の感恩の心は、非常に強いものである。彼は、彼が未だ仏になる前、Uddakaから無所有処無色禪を学んだが、しかし後になって、それは究極的な解脱の法ではないと思い、それを放棄した。後に、また、Alaraから、非想非非想処無色禪を学んだが、同じく、これは煩惱から解脱する法ではないと気がつき、これもまた放棄したのである。その為、彼は、1人で菩提樹の木の下に座り、己自身の智慧を通して、正等正覚仏陀を証したのである。

正等正覚仏陀とチェーパカ仏（辟支仏）は同じではない。正等正覚仏陀は、必ず、己自身の智慧と精進でもって、仏果を証得しなければならないし、また、同時に、衆生に対して、己自身が証道した所の、四聖諦を説明できなければならない。チェーパカ仏もまた同じく、己自身の智慧と精進でもって、仏果を証するのではあるが、しかし、衆生に向かって、四聖諦を説明する能力に欠ける。一般的なアラハンについては、例えば、サーリプッタ尊者アラハンは、仏法を聞いて後に初めて、聖者になる事ができる。とは言え、アラハン弟子は、その他の人々に、四聖諦を開示・説法する事は出来る。

仏陀が道を証した後、彼の2人の教師UddakaとAlaraに報恩したいと思い、神通を利用して、彼らの所在地を探した。その結果、彼らはすでに往生して、前者は無所有処に、後者は非想非非想処に、生まれ変わっている事が分かった。仏陀は言う：

「非常に惜しい！もしも、この2人の智者が、私の1句、2句の法話を聞いたならば、すぐに、アラハンを証することができるのに！惜しい事に、彼らには耳根が無いため、（法を知る為の）因と縁がない。」

もし、（あなたが）すでに、聖果を証得して、ソータパナになっているのであれば、無色界に生まれても、良い。というのも、ソータパナ、サカダーガミ、アナーガミ及びアラハンの修行方法は、みな同じである。それはすなわち、名色の無常・苦・無我を観ずる事であるから、1人で修行する事ができるのである。

4個の無色界唯作心

4つの無色界唯作心は、無色禪を擁するアラハンにのみ、生起する事ができる。アラハンが、空無辺処無色禪に入ると、心流に、空無辺処唯作心が生じる。空無辺処善心ではない。アラハン（の心流において）、もし、生起するのが空無辺処善心であるならば、善心は、果報を再生する事となる。しかし、アラハンは、徹底的に煩惱を断じ滅してあるので、彼の一切の善なる活動は、果報を生じることがない。故に、心中に生起するのは、唯一、唯作心のみとなる。色界心、無色界心は、すべて、三因である：

それはすなわち、無貪・無瞋・無痴であり、この事は、智慧がなければ、ジャーナを証得できない事を意味している。アラハンが、無色界空無辺処禪心に入ると、ただ唯作心のみが生起する。というのも、空無辺処果報心は、空無辺処地梵天神に生まれる時の、結生識になる事しかできないが故に。

15個の色界心と12個の無色界心全体は、総称して「廣大心」(mahaggatacitta)と呼ぶ。すなわち、殊勝であり、優越しており、高尚なる心である事を意味する。というのも、それらは已に、諸々の蓋を離れているからであるが、それはすなわち、五蓋を離れている事であり、清浄で、昇華されたもので、廣大なる心境である。一次的に煩惱を征服しており、故に、清浄である、と言う。已に欲楽を離れている為、故に、昇華と言う。廣大なる心境とはすなわち、それが取る所縁、例えば慈心禪の場合、慈心は、10方の宇宙に拡散するものであるから、その心は、廣大なものである。また、例えば地遍の場合は、心は、地遍全体を10方の世界に拡大し、結果、全世界はみな地遍となる。こういう事から、心とは非常に廣大なものとなるのである。

8個の出世間心

次に8個の出世間心 (lokuttaracittāni) (の解説)に進む。パーリ語「lokuttara」は、2個の語句から構成されている。lokaとuttaraである。lokaの意味は世間、であるが、ここで言う所の世間とは、通常認識されている所の世間ではなく、経蔵の中において、世間という言葉を見たならば、その意味は、五取蘊の世間、を言うのである。uttaraとは、超越の事。故に、lokuttaracittāniの意味は、五取蘊によって構成された心を超越する、という意味になり、それを出世間心と呼ぶ。この心は、生死輪廻から解脱する事、すなわち、涅槃に証入する、苦の止息に導く。出世間心は、合計8種類ある。

4種類は、出世間善心で、それぞれ、ソータパナ道心、サカダーガーミ道心、アナーガーミ道心、アラハン道心である。

4種類は、出世間果心で、それぞれ、ソータパナ果心、サカダガーミ果心、アナーガーミ果心、アラハン果心である。

道心に密接して生じるのが、果心である。果心は善心から生じるが、出世間善心が生じるやいなや滅し去ると、次には、即刻、その果報が生じる。

法には、6種類の功德がある。その内の1個は、「akaliko」無間の、すなわち、時間的隔離のないもの、というのがあり、ソータパナ道心が生起するやいなや、それはすぐに滅し去る。

ソータパナ道心は、善心であるが故に、即刻、果報が生じる。それは、ソータパナ果心と言い、その間には、時間的断絶がない。この事は、世間的善業と全く異なる所である。

例えば、あなた方が、今日、布施をしたとする。それは、即刻果報をもたらす、ということはない。もしかしたら、今生においても果報を得られず、次の世まで待たねばならないかも知れない。次の世において行った布施の善業は、即刻、果報を生じることはなく、次の世、その次の世まで待たねばならないかも知れない、等々。故に、世間的な善業は、即刻、果報を生じることはないのであるが、もし、即刻に生じるとしても、少なくとも1時間とか、半時間とか等々の、時間が必要とされる。しかし、出世間の善業は、1個の心識刹那の次に、果報を生じる事ができる。例えば、ソータパナ道心が生じて、即刻滅し去るが、次に緊密に密接して、ソータパナ果心が生じる。(出世間の)善心は、即刻、果報を生じるのである。

修行の目的は、煩惱を断じ除く事である。煩惱は、一切の痛苦の源である。貪・瞋・痴は、煩惱をもたらすが、それには非常に大きな(悪い)果報が伴う。しかし、ひとたび、煩惱を取り除けば、(痛苦から)解脱する事ができる。故に、修行の最終的な目的は、ソータパナ道、サカダーガーミ道、アナーガーミ道、アラハン道等々を証得する事にある。道心の作用は、煩惱を断じ除く事への手助けであり、果心の作用は、相応する道心が原因でもたらされる所の、ある種の程度を有する所の、解脱を体験する事である。煩惱が断じ除かれた時、あなたは思う：「ようやく、今、解脱したぞ！」

これこそが、果心の作用である。例えば、ある人が、体に火が着いたとして、熱くてたまらない。この時、清涼な水をバケツ1杯、彼に向けて浴びせたならば、彼は、炎の中から解脱する事ができた、と思い、非常な清涼を感じるであろう。火とは、煩惱であり、清涼な水は、道心であり、解脱して清涼を味わう感受が、果心である。ソータパナ道心は、長い輪廻の内、唯一、1回のみ生起する事ができる。というのも、煩惱が断じ除かれた後、再び断じる必要がないが故に、ソータパナ道心を、再度生起せしめる必要がないのである。しかし、果心は、何度も生起する。例えば、ソータパナ聖者が、涅槃の寂靜を享受したい時、ソータパナ果定に入る必要がある。この時(ソータパナ聖者には)、非常に多くの果定が生起して、涅槃の寂靜を体験するのである。

ソータパナ道心

出世間善心には、4種類ある：

1. ソータパナ道心
2. サカダーガーミ道心
3. アナーガーミ道心
4. アラハン道心

である。

道心の作用は、煩惱を断じ除くことである。すなわち、ソータパナ道心の作用とは、前の三結：身見、疑と戒禁取を、断じ除くことである。

1. 身見：

五蘊を、自分自身だと思ってしまう事を、身見、と言う。ソータパナは、二度と、五蘊をば、

己自身だとは思わない。

2. 疑：

三宝への懷疑を断じ除く事。すなわち、仏、法、僧（サンガ）という三宝への信心（＝確信）が、堅固で、動揺しない、という事。

仏陀の時代、Suppabuddhaという、ハンセン病の人がいたが、仏陀が仏法を開示した時、彼も聞きに来ていた。過去のハラミツの関係で、彼は、仏陀の開示を聞き終る否や、即刻、ソータパナを証悟し、喜んで、そこを離れた。その時、33天の天王帝釈天が、Suppabuddhaの、三宝への信心（＝確信）を試すために、化身となって、彼の前に現れ、Suppabuddhaに言った。

「あなたはこの様に貧しい。あなたの全身は、ハンセン病に犯されている。あなたと友達になりたい人などいない。私は、あなたのハンセン病を治してあげる事ができる。無数の金銀財宝を贈ろう。それには、1つだけ条件がある・・・」

Suppabuddhaは問う：

「どの様な条件であるか？」

「あなたは、ただ、三宝というものは、存在しないと言えよ。そうすれば、即刻、金銀財宝を手に入れる事ができるし、ハンセン病も即刻、取り除くことができる。」

Suppabuddhaは、すでに、ソータパナを証悟していた為に、三宝への信心（＝確信）は動揺する事がない。

彼は言う：

「私は、あなたが考える程、貧困ではない。私には7種類の聖宝がある。どの様な7種類の聖宝であるか？1番目は、自信。2番目は、戒行。3番目は、慙。4番目は、愧。5番目は、多聞。6番目は、気概。7番目は、智慧。」

(1)自信：

すなわち、信心（＝確信）。三宝への信心（＝確信）が永遠に不動である事。

(2)戒行：

ソータパナ道果を証悟した者は、五戒を破る事はない。ある種の人々は、修行の最中、己自身を高く見積もり、または錯誤・誤解して、己自身が、ソータパナを証悟した、と思ってしまう。緬甸のレディ・サヤドーは、その名を天下に響かせていたが、彼は、以下の様に言った：

「あなたは3年以上の年月を掛けて、己自身を試すべきだ。3年以内に、五戒の内の1つでも破ったならば、自分はソータパナではない、と知れ。」

(3)慙：

悪い行いに対して、慙愧と恥を知る事。

(4)愧：

悪い行いに対して、恐れを感じる事。悪い行いがもたらす果報に対して、恐れを感じるが故に、悪業をなさない事。

(5)多聞：

多聞とは、ただ多くを聞く、という事ではない。（法を）多く聞く事と、修行する事を、同時に具備する事。修行には、観智の智慧が含まれる。

(6)気概：

ソータパナ道果を証得した人は、決して吝嗇にはならず気持ちよく布施する。仏陀の時代、布施者第一の女性は、名をヴィサーカ（Visākhā）と言ひ、ソータパナであった。彼女は、布施に対してはおおらかで、任意に布施した。アナータピンディカ（Anāthapiṇḍika）もまたソータパナであって、同じく、おおらかに布施した。彼は金でもって、祇園精舎の敷地全体を、敷き詰めたのである。彼女、彼らの、布施行為のおおらかさは、独特のものであって、これはソータパナの特徴である。

(7)智慧：

四聖諦を徹底的に知る智慧。ソータパナ聖者のみ、真正に、四聖諦を理解する事ができる。故に、Suppabuddhaは、この7種類の聖宝を持っている為、少しも貧しくはない、と回答した。彼の、三宝への信心（＝確信）は堅固であり、三宝は存在しない、などとは言わない。

3. 戒禁取：

儀式を通して、解脱が得られると信じて、執着する事。

インドにおいて、古より現代まで、非常に多くの人々が、ある種の儀式は、涅槃へ導く事ができる、と考えている。インドの伝説によると、煩惱は、身体から来ているものであると考えおり、故に、彼らは、各種各様の方式でもって、身体を虐待する。こうすれば、解脱できるのだと、考えているのである。現代のインドでも、多くの人々は、冬でも衣服を着用せず、全身裸で苦行をするか、または、氷の上に寝たり、または、1日中、片足で立っていたりする。

仏陀の時代、非常に多くの人々が、犬を修習の対象として、歩く様子も犬の真似、食べるのは犬の餌、声も犬に似せていた。もし、この様に、長年修行したならば、往生の時、本当に、犬になる可能性がある。仏陀も、最初、6年間は、苦行を修し、己自身の身体を、皮で骨を包んでいる極限状態まで、己自身の身体を苛め抜いた。6年後、彼は、これは解脱の道ではない、と思ひ、中道によって修行するべきである、と宣言した。放逸すぎてもだめであるが、己自身を虐待するのも不可なのである。

ソータパナ道心は、3個の結を断じているが故に、5個の不善心を、永遠に断じ除いたのだと言える。その内の4個は、邪見相應の貪根心、もう1つは、疑相應の心である。この疑とは、三宝への懷疑である。故に、残りの7個の不善心だけが、ソータパナの心流の中において生起する（のだと言える）。

ソータパナを証悟した結果の利益として、7種類の聖宝を擁する他、もう1つの事柄は、四悪道の門が永遠に閉ざされる、という事である。ソータパナ道果を証悟した後、（色々な事柄、体験を）享受する事ができるが、四悪道に堕ちる心配をする必要はない。しかし、未だ証悟していないのであれば、享受することは諦めた方がよい。そうでないならば、あなたは、次の世において、果報を返済しなければならなくなる。

ある種の人々は、ソータパナを証悟した後、再度、修行に精進して、サカダーガミまたはアナーガミまたはアラハンを証悟する。ある種の人々は、己自身はすでに、四悪道の門が永遠に閉ざされていて、安全である事を理由に、ゆっくり進めばよいと思う。天に生まれ変

わってから、ゆっくり進もうとするこれらの人々は、最も多くて、世間に7回生まれ変わる。

例えば、上に挙げた布施第一の女性ヴィサーカは、1段1段享受して後、最後に涅槃に入る（のを希望している）。ある種の人々は、なるべく早く解脱したいと考えて、勇猛に精進し、今の世においてアラハンを証悟するに至る。

サカダーガーミ道心

次に説明するのは、サカダーガーミ道心である。この心は、すべての結を、断じ除いている訳ではないが、しかし、粗い欲欲（欲界への愛樂的欲求、欲樂への欲求。以下同様）、またすなわち、欲樂への欲求と瞋恚は、断じ除いている。ソータパナ道果を証悟した後、サカダーガーミ道果を証悟するのは、特別難しい事ではない。しかし、アナーガーミ道果を証悟するのは、それほど簡単な事ではない。

アナーガーミ道心

アナーガーミ道心は、欲欲と瞋恚という、2つの結を断じ除いており、かつ、永遠に、2個の瞋根心を断じている。アナーガーミ聖者を怒らせ様としても、無駄である。彼は、永遠に怒る事がない。

三果アナーガーミを証得した聖者は、もはや、欲界に生まれる事はない。この類の聖者は、今生においてアラハンを証悟できなかつたら、来世は、色界天に生まれる。色界天である浄居天は、アナーガーミが住む所であるが、しかし、すべてのアナーガーミが、そこに生まれるとは限らない。例えば、大梵天神（Sahampati）はアナーガーミではあるが、第一禪天に住んでいる。仏陀が成道したばかりの頃、もともとは、衆生に、仏法を開示したいとは思わなかつた。それを、大梵天神が色界から降りてきて、仏陀に法輪を回す様にと、求めたのである。

アナーガーミが、色界に生まれたなら、そこにおいて、アラハン果を証悟する。アナーガーミ道果を証悟した人間は、二度と、金銀（金銭）を持つ事がない。仏陀の時代、Cittaと言う名の、居士がいた。彼は、居士ではあつたが、しかし、すでに、アナーガーミを証悟していた。彼は陶磁器商人で、売買の為に、金銭を触る事もあつたが、すでにアナーガーミを証悟した為に、欲欲への貪求を断じ除いた結果、金銀（金銭）を持ちたい、という気持ちが失せ、結果、物々交換の方式でもって、商売を継続したのであつた。

アラハン道心

アナーガーミは、2個の瞋根心を断じ除いた。ソータパナは、5個の不善心を断じ除いており、故に、5個の不善心が残っている。アラハンには、完全なる解脱者であるが故に、アラハン道心は、徹底的に5個の微細な、結が断じ除かれてある：

1. 色界生命への欲求。アナーガーミは、なお、色界に生まれたいと思うが、しかし、アラハンには、どこかの界に生まれたいという欲求が、断じ除かれている。
2. 無色界の生命に対する欲求。
3. 我慢（我ありという慢心）。
4. 掉挙。

5. 無明。

アラハンは、残りの不善心を断じ除くが、それはすなわち、4個の邪見不相応貪根心と1個の掉挙相応痴根心である。故に、12個すべての不善心は、すでに、徹底的に断じ除かれている訳である。アラハンの心中において、二度と再び、不善心が生起する事はない。

出世間心は、合計8個あるが、4個は道心で、4個は果心である。これらはみな、涅槃を所縁に取る。聖者が、涅槃の寂静を体験しようとする時、例えば、アナーガミが涅槃の寂静を体験する時、彼はアナーガミ果定に入るが、アラハン果定に入る事は出来ない。アラハン道果を証悟して初めて、アラハン果定に入る事ができる。また、すべての聖者は、前進するが、後退する事はない。これは法則である。

20（個の）唯作心

唯作心は、合計20個ある：

17個の有因心、3個の無因心である。

3個の無因心は：

1. 五門転向心
2. 意門転向心
3. 生笑心（これは、アラハンに属する心である。アラハンにのみ、生起する）

我々には、合計6種類の門がある：

五門と意門である。

眼門を例にとると、五門転向、眼識、領受（受領）、推度（推定）、確定、速行、彼所縁がある。89種類の心の中において、「確定」という心は見当たらない。それでは、確定とは何であるか？これは意門転向心であって、意門転向心が、五門（眼門、耳門、鼻門、舌門、身門）にある時、これを確定と呼ぶ。意門にある時は、意門転向心と呼ぶが、これは同じ1つの心であり、呼び方が異なるだけである。

17個の有因心もまた、アラハンに属するものである：

1. 8個の大唯作心
2. 5個の色界廣大唯作心
3. 4個の無色界廣大唯作心

アラハンの8大唯作心は、どの様な時に生起するのか？例えば、アラハンが経を説明し、説法する時。

5個の廣大唯作心は、彼らが初禪、第二禪に入り、その後、第五禪に入る時に生起する。

4個の廣大唯作心は、アラハンが無色界禪に入った時に、生起する。

89種類の心に関する総括

89種類の心は、4種類に分類する事ができる：

1. 54個の欲界心
2. 15個の色界心
3. 12個の無色界心
4. 8個の出世間心

心は、生・滅の法であり、因縁法であり、アラハンを含めて、その中に1個の「我（確固とした私）」というものはない。

ある時、サーリプッタ尊者が八定に入り、出定した時、その顔色が非常に荘厳であり、清らかであった。

アーナンダ尊者が、彼に言った：

「尊者。あなたの顔色は非常に荘厳であり、非常に清らかです。」

サーリプッタ尊者は言う：

「私は、四禪八定から出定したばかりです。しかし、私は、『我（私）』が入定し、『我（私）』が出定した、とは認めない。この過程の中において、1個の『我（私）』が存在する訳ではない。」

もし、彼が、空無辺処に入ったのであるならば、ただただ、空無辺処唯作心のみが、ずっと、生・滅し続ける。

「心は私ではない。」

もし、あなたが、「心は私である」と認めるならば、それは、有身見である。有身見を打ち破らないのであれば、我々は、永遠に、四悪道に向かう事になる。ひとたび、有身見が取り除かれたならば、以前（過去世を含む）においてなした所の、四悪道に堕ちる事になるであろう悪業は、力を失い、その為、（これより以降は）四悪道に生まれる事は、決してない。故に、我々は修行を通して、一番最初に、断じ除かねばならないのは、有身見である。

121種類の心

89種類の心は、121種類に、細分する事ができる。

五分法に基づけば、止観（samatha vipassanā）の修行者は、合計34種類の、名法の初禅に入る。修行者は、ジャーナから出定した後、観禅（vipassanā）に転換するが、この34個の名法の無常・苦・無我を観じて、ソータパナ道心を証得する。その心は、とりもなおさず、尋・伺・喜・楽・一境性具初禅ソータパナ道心と言う。

第二禅には、33種類の名法がある。第二禅から出定して、33種類の名法の、無常・苦・無我の内の1つを観ずる。例えば、無我を観じている時、道心を証悟したならば、それは、伺・喜・楽・一境性具第二禅ソータパナ道心と言う。

第三禅に入り、出定した後、三禅の32個の名法の無常・苦・無我を観ずる。例えば、無常を観じていた時、道心を証悟したならば、生起した所の心は、喜・楽・一境性具第三禅ソータパナ道心と言う。

第四禪に入り、出定の後、四禪の31個の名法の無常・苦・無我を観ずる。例えば、苦から道心を証得したのであるならば、心中に生起する心は、楽・一境性具第四禪ソータパナ道心である。

第五禪から出定した後、第五禪の名法を観ずる。合計31個である。それらの無常・苦・無我の内の1つを観ずる。もし、涅槃を体験したのであれば、心中に生起した（心）は、捨一境性具第五禪ソータパナ道心である。

以上の、5種類の〈名〉は、ソータパナ道心である。サカダーガミ、アナーガミ、アラハンにも、またそれぞれ、5種類ある。故に、合計20種類の道心がある。道心は、生起した後、必ず、果心を生起せしめる。道心が20種類あるのであれば、果心もまた、当然の事、20種類ある。合計すると40種類である。40種類の心に、もともとの89個の心を加え、8個の出世間心を減ずる。というのも、8個の出世間心は、すでに、40個の心において含まれるが故に。この様に加減した後、結果、121個の心となる。121種類の心の中において、比較的重要なものは、12個の不善心と、8個の善心である。というのも、我々は、みな、欲界に生きていて、この12個の不善心と、8個の善心は、業をつくる力を有しているが故に。

第2章

心所の概要

究極諦は、合計4個ある。

すなわち：

心、心所、色法、涅槃。

これから、2番目の究極諦である所の「心所」に関して概要を述べる。

心所の特徴

心所の4個の特徴とは

1. 心と共に生じる：

心は、単独では生起できない。心は、必ず心所と相応して（生起する）。舌門心路過程を例にとると、7個の心所が舌識と同時に生起する。まさに、（心所は）心と同時に生起するのである。

2. 心と同時に滅する：

舌識が滅する時、それに相応する7個の心所もまた、同時に滅し去る。

3. 心と同一の目標を縁に取る：

心路全体：五門転向、舌識、領受、推度、確定、速行心等々はみな、「味」を所縁として取るが、それと相応する心所もまた、必ず「味」を所縁として取る。

4. 心と同じ1個の依処を擁する：

舌識は「味」を所縁として取り、舌根または舌浄色に依って、生起する。それに相応する所の7個の心所もまた、舌根に依って生起する。心は国王の様であり、心所は臣下の様である。国王は唯一、1人であるが、臣下は多くいても可である。心はまた、車体として例える事ができる。車体の目的は、前に進むことであるが故に、その作用もまた、前に進む事である。

しかし、車体だけあって、ハンドル、給油装置、タイヤ等々の部品がないのであれば、車は前に進む事ができない。車の部品は、心所の様である。（車は）部品がないと、前に進めない。同様に、心もまた、心所の支えがないならば、全面的に目標を識知する事ができない。心は水とも、例えられる。水は透明であるが、赤い染料を投げ入れたならば、赤色に変わる。黒い染料を投げ入れたならば、黒色に変わる。白色、青色の染料であれば、白色、青色に変わる。色々な色彩の染料とは、すなわち、心所である。

実際、貪・瞋・痴、不貪・不瞋・不痴は、みな、心所である。心所が貪と相応すると、すなわち、貪心になる。智慧と相応すると、智慧相応一心となる。故に、心所は重要である。というのも、心王の作用は、ただ目標を識知するだけであるが、心所は、心をして、善または不善に、変化せしめる事が出来るが故に。それはちょうど、染料が水の色を変える事ができるのと、同じである。

心の重要性について（ここでは、意とは、心と心所を指す）、仏陀は《法句経》の第1章で、以下の様に言う：

諸法意先導、意主意造作。
若以汚染意、或語或行業、
是則苦隨彼、如輪隨獸足。
諸法意先導、意主意造作。
若以清淨意、或語或行業、
是則樂隨彼、如影不離形。

第1句と第2句は、心（心所を含む）の重要性を説明している。因果法則の下において、心は、非常に重要である。一切の口業と身業は、今ここの心によって主導される。もし、今ここの心が善であるならば、口業と身業もまた、善である。今ここの心が、もし、悪であるならば、口業と身業は、悪業を生み出す。故に、心を守護することは、非常に重要である。心が、ひとたび、守護されたならば、身、口はまた、同時に守護される。

故に、仏陀は言う：

「守護された心は、楽しさをもたらす」

心所 (52)

心所は合計52種類ある。

それぞれ：

1. 7遍一切心心所
2. 6雑心所
3. 14不善心所
4. 25美心所

7遍一切心心所

触、受、想、思、一境性、名法命根、作意等の7個の心所は、すべて、89種類の心と相応する。すなわち、89種類の、すべての心は、必ず、この7個の、心所を擁している。故に、遍一切心心所と呼ぶ。

1. 触 (phassa) :

触の特徴は、接触である。作用は、衝撃。すなわち、目標をして心に衝撃せしめる事。現起（現象）は、識。依処と目標が集合して、（識が）生起する。すなわち、六所縁が、6個の依処を衝撃する時、六識が生まれるのである。故に、いわゆる触とは、六所縁、六依処と六心識の集合である、と言える。触のパーリ語は「phassa」で、またすなわち、所縁、依処と心の、3つの集合、衝撃を表す。触は、身体的な接触の意味ではなく、心の触を指している。例えば、

ある人がレモンを食しているのを見て、（当方も）つい、唾が流れる、のが触である。レモン自体は、あなたの舌根を衝撃してはいない。この種の衝撃は、身体への衝撃であるが、ここで言う触は、心所の事である。また、小心者が、鬼（幽霊）が来た、と聞いて、足の震えが止まらない、などというの、これまた触である。故に、触の作用は、目標をして、心に衝撃せしめる事、とといえる。

2. 受 (vedanā) :

受の特徴は、感受される事、である。その作用は、感受及び、目標の味を体験する事。例えば、食べ物を食べた時、その美味を味わう事。コーヒーを飲んだ時、その美味を味わう事。これらは、みな、「受」が感じ取っているものであって、「あなた」が感受している（感じ取っている）のではない。あなたの心流の中において、受という心所があつて、一切を感受しているのである。

受には、3種類ある。

- (1) 1番目は、楽受 (sukha-vedana) で、喜ばしい所縁を体験する。所縁は、あるものは喜ばしく、あるものは喜ばしくない。例えば、あなたが甘いものを食べる時、甘い味が、舌根を衝撃するが、その時、あなたは喜ばしさを感じる。
- (2) 反対に、あなたが苦味が嫌いであれば、苦味が舌根を衝撃する時、あなたは喜ばしくない所縁を体験する事になるが、これが苦受である。すなわち、苦受とは、喜ばしくない事柄への体験を言う。
- (3) ある場面において、ある種の所縁は、特別強烈な特徴を持ち合わせておらず、これを中捨の所縁と言うが、あなたの舌が、この種の味を味わう時、「捨受」が生じて、中捨の所縁を体験する事になる。

3. 想 (saññā) :

想の特徴は、目標の質を体験する事である。作用は、次に同じ目標に出会った時に、これはそれと同じものであると知る為に、目標に対して、標をつける事。または、以前体験したことのある目標を、認識して、認める事。例えば、初めて小鳥を見た時、「想」が生起して、小鳥の特徴を体験する。小鳥の特徴とは、翼が2つあり、かつ翼を震わせて飛ぶ事、である。そして想は、以下の様に標を施すのである。

「あつ、小鳥とはこの様なものか！翼があり、空で飛ぶことができる。」

次に鳥を体験した時、すなわち、同じ目標を、再度、体験する時、想が、再び生起する。

「あつ、（前に見たのと）同じ様だな！これは、小鳥だ！」

まさに想が原因で、赤子は、パパとママを認識する事ができ、姉をパパとは呼ばないし、妹をママと呼ぶこともない。というの、想が、（目標を見た、その）1回目の時に、すでに、パパの特徴を標したが故に。次にパパを見た時、想がまた生起して、（自分が）見ている相手は、パパである事を、認識する事ができるのである。故に、想の現起（現象）は、（目標を見た、その）1回目の時において、すでに会得しておいた、相手の表面上の特徴を通して、目標を分析する事にある、といえる。

正定、正念及び智慧の訓練を受けた事のない心は、通常、六塵である所の、「色、音（声）、香、味、触、法」が、六根である所の、「眼、耳、鼻、舌、身と意」に衝撃して、生じる所の、

一切の感受をば、常、楽、我、淨として、標してしまふ。すなわち、それらを、永恆であり、楽しいものであり、1個の、確固とした我が存在し、また、それらが、清淨であると、標記してしまふのである。これらの事柄は、「あなた、私、彼・彼女」が、標記を行っているのではなく、想心所が、行っているのである。

衆生の、この種（の考え方）は、「顛倒想」という。そして、この事は、衆生に不斷の苦をもたらす。仏陀は、一切の有為法は、みな、無常であると、言っている。ひとたび、樂受が変化して、消えて見えなくなったならば、（衆生は）必ず痛苦を感じる。というのも、あなたは、間違つた物事の受け取り方をしており、かつそれに、執着しているからである。痛苦を避ける為に、かならずや、顛倒想を修正しなければならない。一切の感受は、無常・苦・無我であると、如実に視て、初めて、これらの樂受に、執着する事がなくなるのである。

ひとたび、目標に標しをした後、（意識を）変えるのは大変に困難である。鹿が、以前、人が他の動物を虐めるのを見たことがあると、その後、人を見るたびに、即刻逃げる様になる。農民は、鹿が田んぼに入って、稲を食べるのを防ぐために、案山子を作って田んぼに立てる。鹿は、案山子を見るや否や、想がまた生起して、それを人間であると見なして、瞬く間に逃げてしまふ。彼の、以前の想は、すでに人をば、1個の頭、2本の手、2本の足として、標記している。案山子は、人間ではないけれども、鹿は人間であると思ひなす。これが顛倒想である。

同様に、一切の六塵が、六根を衝撃する事によって生じる受を、常、楽、我、淨として、標記するならば、次の段階において、無常・苦・無我を觀ずるのは、非常に難しい事となつてしまふ。故に、行法の無常・苦・無我を觀ずる（為の修行という）のは、顛倒想を正すために、実践するのである。

長い長い生死輪廻の中において、もしも、顛倒想によって標記する事を、絶え間なく続けていたならば、ひとたび無常を、真正に体験する事になつた時、それを真実だとして受け入れるのは、非常に難しい。親しい人が亡くなつた時、我々は、死ぬほど泣いてしまふ。この様な粗い無常でさえも、受け入れる事ができないのだから、五蘊の生・滅の様な、非常に微細な無常には、更に人を震撼させるものがある。

ある1人の、台湾の女性の禪修行者が、生滅隨觀智まで修行した時、ずっと泣いていた。というのも、彼女は、五蘊が不斷に生滅、生滅、生滅を繰り返しているのを、受け入れる事ができないが故に・・・この事は、彼女の、（所縁への）以前の標記は間違いであり、彼女は（所縁をば）、常、楽、我、淨であると思ひ込んでおり、今、如実に、（所縁の）無常・苦・無我が觀えた時、俄かに、それを受け入れる事ができないでいるのである。

4. 思（cetanā）：

思の特徴は、願望する、という状況を意味する。作用は、業の累積。欲界速行の心は、善業または不善業をなす。故に、業を累積する。業を累積するのは、まさに「思」による。思は、ただ善心と不善心の中において業を累積し、果報心または唯作心の中においては、業を累積しない。思の現起（現象）は、相應の名法を、目標に向けて行動する様、指導し、組織し、促す事である。いわゆる相應の名法とは、すなわち、心と心所の事である。名法にはそれぞれに、特別な作用があつて、「思」はまさに軍の様で、これらの名法を、組織して、その後、それらをして、目標に向かわせ、かつ、目標に対して行動する様にせしめるのである。

例えば、色所縁が、舌根を衝撃するやいなや、思は、「触」に対して、「触」に衝撃（を受けとる）ための作用を促し、また指導したりするし、また、「受」に対しては、早く味を味わ

う様にと促す。思は、部下を指揮して、敵と戦う様にするだけでなく、己自身もまた参戦する。思の実践する戦いは、業を累積する性質を持つ。故に、思は、2種類の任務がある、と言える。すなわち、1つは、己自身が、己自身の業をなすという作用を完成させる事（善心か、または不善心と共に生起した時にのみ、業をなす作用が発揮される）。2つ目は、相応する名法をして、それぞれが、各自の任務を遂行する様に促す事である。思は、また、1人の大弟子の様に、己自身が、経を覚えて、誦じなければならないと同時に、その他の弟子に対して、彼らが経を誦じるのを、指導しなければならないのである。

思は、（人々が）業を造す際の、最も主要な要素である。というのも、実践（された行動）が、善であるか、悪であるかは、思によって、決定されるが故に。故に、仏陀は言う：

「比丘たちよ。私は、思は業である、と言う。その意欲によって、人々は、身・口・意を通して、業を造す。」

欲界においては、思が、最も顕著である。出世間においては、慧が、最も顕著である。それは心所であり、心ではない。すなわち、道心の中において、1個の、智慧という心所があり、四聖諦を徹底的に、知る事ができるのである。欲界心の中において、思は、業を累積する。というのも、願望があるが故に、（人々は）業を造すからである。願望がない時、業を造すことは、ない。

Samavatiは、1個の、非常によい例である。彼女は、ある1世において、皇后であった。ある日、彼女は、侍女と一緒に、川べりに遊びに行った。その時、天候がとても寒くて、彼女は侍女に命じて、枯草を探してきて、火をつける様に言った。侍女が枯草に火をつけた時、枯草の背後に、1人の、パーチェカ仏（辟支仏、以下同様）が座っているのに、気が付いた。彼は、ちょうど、滅尽定に入ったばかりであった。以前に述べたが、パーチェカ仏は、ひとたび、滅尽定に入ったならば、焼け死にさせられる事はない。

しかし、Samavatiは、その人が、パーチェカ仏である事を知らず、また、彼が、滅尽定に入っている事も知らなかったが、しかし、そこにおいて、1人の人間が火に焼かれているのを見て、非常に恐くなり、また、国王が彼女の不注意を不快に思うのではないか、と心配して、心の中で思った：

「すでに、焼け死んでいるのだから、死体を更に、焼き尽くしてしまった方がよい。」と。こうして、彼女は侍女に命じて、更に多くの枯草を積む様に命令し、その上に油を注いで、炎を更に大きくした。最初に火がついた時、彼女には、殺人をしよとする願望はなかった・・・この種の思はなかったのであるが、しかし、2回目には、（彼女の心には）殺人を実践しようという思心所が、存在したのである。

仏陀の時代になって、彼女は王妃として転生した。仏陀の大勢いる優婆夷（女性在家信徒）の中において、彼女は、慈心禅第一であって、常に、一切の衆生に、慈心を散布していた。当時、もう1人別の王妃がいて、彼女は、仏陀に対して、恨みの心を抱いていた。そして、彼女は、敬虔な仏教徒であるSamavatiをも、共に、痛烈に恨んでいた。彼女は、放火をして、かつ、それを、意外な事故であると偽装して、Samavatiと、彼女の、500人の侍女全員を、焼け殺そうと、考えた。500人の侍女とは、すなわち、過去世において、彼女と一緒に、パーチェカ仏を、放火によって焼き殺した人々である。

この1世において、Samavatiは、常に慈心を散布する人間ではあったが、しかし、過去において造した、故意に他人を焼き殺すという悪業によって、最後には、（もう1人の王妃によって）焼き殺されたのである。彼女は、焼き殺される前、すでにサターガミ道果を証悟していた。思を伴う願望は、業を造す。もし、不注意で、2匹の蟻を踏み殺したならば、それは業を造したことに、ならない。というのも、その時あなたには、それらを殺そう、という願望がなかったが故に。しかし、あなたが、故意に、蟻をば、力を込めて踏み殺したならば、業を造した事になる。業を造したかどうかの判断は、ただ、あなたが、善い事または悪事をなす時、その（心の）内に、願望があるか、または、己自ら進んで実践したかどうか、にかかっている。

5. 一境性 (ekaggatā) :

特徴は、不散乱。作用は、相応法を統一する事。すなわち、すべての相応法を、目標に集中させる事。現起（現象）は、平静。一境性が高められた時、それはすなわち、正定になるし、また、禅支の中の一境性にもなる。一境性は、善であるとは限らない。不善心と相応するとき、それは邪定になる。善心と相応する時、正定になる。

6. 名法命根 (jivitindriya) :

一切の、相応する名法は、みな、名法命根によって、初めて、生命を維持する事ができる。その特徴は、相応する名法の生命を維持するものであって、ちょうど、水が、蓮の花の生命を維持するのと同じである。いわゆる相応する名法とは、すなわち、心と心所である。名法命根の作用は、それらを、生、住、滅において、発生せしめる事。現起（現象）は、それらの存在を維持する事。もし、相応する名法を維持する所の、命根の存在がなければ、名法は、仕事を全うする事ができない。

例えば、触は、衝撃を全うできず、受は、味を経験できず、思は、相応する名法を指導して、目標に対して行動を取らせる事が、できない。故に、名法はみな、命根によって寿命を維持するものである（事が分かる）。もし、寿命が絶たれたならば、（名法は）仕事を全うする事はできない。こうした事から、命根は、名法を生存せしめ、かつ作用せしめる所の、その1刻を維持し、それらが、各々の任務を全うできる様にするものである（事が分かる）。

7. 作意 (manasikāra) :

特徴は、相応法をして、目標に向かわせる事。作用は、相応する名法を、目標に連結させる事。作意は、心をして、目標に転向せしめる（作用である）。作意を通して初めて、目標は、心中に顕現する事ができる。授業を受ける時、あなたが、授業を聞こうと作意しないならば、授業（の内容）は、耳に入らない。作意とは、あなたの心を、授業の音声（先生の声）に向けさせる作用である。もし、あなたに作意がないならば、私の音声は、あなたの耳根において、明確に顕現する事がない。

例えば、私が、今、「パン！」という音を出したならば、あなたには、必ず聞こえる。というのも、あなたの心流の中において、作意と呼ばれる心所があつて、あなたの心をは、「パン！」という、この目標に、向かわせるからである。これが、作意である。

作意の現起（現象）は、目標と対面する事。作意は、船をコントロールして、目的地に向かわせる、舵の様である。または、訓練を終えた馬を、目標に向かわせる御者の様である。「作意」と「尋」の、2者の区別は、明確にしておく必要がある。作意は、相応法を目標に

転向させる作用。すなわち、注意力を目標に向かわせる事。尋は、相応法を目標に投入する作用。

例えば、ペーロン競漕の時、船には、前、中央、後ろに各々1人づつが乗るが、方向を指示するのは、後部の人で、彼こそが「作意」である。前の席に乗る人は、船を漕ぐだけでなく、目的地に到着した時には、勝ちを名乗る旗を奪わねばならないが、これは「思」である。真中の席にいるのが、「尋」である。

7個の遍一切心心所は、識知過程における、最も基本的な、かつ重要な作用を執行する。もしこれらが欠ければ、心王は、目標を識知する事ができない。89種類の心の中において、7個の遍一切心心所は、必ず生起する。

例えば、味が舌根を衝撃する時、「触」が生じるが、「触」の作用は、味、舌根、舌識を連結する事である。「受」は、味の喜ばしいか、または、喜ばしくないかの処を体験し、喜ばしさを体験した場合、楽受が生起する。喜ばしくないさまを体験した場合、苦受が生起する。故に、「受」の作用とは、すなわち、所縁の味を体験する事にある。「想」は、標識する事であり、すなわち、味は、非常によいか、普通であるか、永恒であるか、楽であるか、または酸っぱいか、苦いかについて、標識するのである。「一境性」は、触、受、想、思、一境性、名法命根、作意などの、7個の相応名法を、統合して、味に集中せしめるの言う。「名法命根」はすなわち、7個の相応する名法の生命を維持するものである。それらの生・住・滅を維持して、それらが、各々の任務を演じることができるようにする。「作意」は、すなわち、心を導いて、すべての相応の名法を味に向かわせるものである。「思」は、2つの役割があり、1つは、己自身が、(己自身の)業を造す事。2つ目は、その他の相応名法に対して、それぞれの作用を果たす様に指揮する事。

例えば、「触」を指揮して、味、舌根と識を連結せしめる。「受」をして、速く味の喜ばしい処を体験する様に指揮する。また、「想」心所を指揮して、速く、(所縁が)楽か苦であるかを標識する様にせしめる。「一境性」を指揮して、速く、相応名法を、目標上に統合せしめる。また、「名法命根」を指揮して、速くその作用を實踐せしめて、それらの生命を維持する。また「作意」を指揮して、すべての相応名法をして、目標に導く様にする。

6雑心所

尋・伺・勝解・精進・喜・欲という、6個の雑心所は、すべての心と共に生起するとは、限らない。89種類の心は、必ずしも、6個の雑心所を擁している、とは言えない。雑心所は、本質的に、善であったり、不善であったりする。まさに、7個の遍一切心所と同じ様に、本質的には、変化する事ができる。善心の中においては善となり、不善心の中においては、不善となる。

1. 尋 (vitakka) :

特徴は、心をして目標に投入せしめる事。例えば、アーナーパーナ・サティを観じている時、尋は、すべての、相応する心所をまとめて、目標に投入する。作用は、全面的に目標に衝撃する事。現起(現象)は、心をして目標に向かわせる事。八正道の中の「正思惟」は、すなわち、尋心所である。

2. 伺 (vicāra) :

特徴は、何度も目標を審査する事。作用は、相応する名法を、何度も目標に置く事。現起

(現象)は、それらを目標にとどめる事。尋が、心をして、目標に投入せしめて後、伺は、心をして、ひたすら、目標に上にとどめる様にする。尋は、蜜蜂が花の蜜を集める時に、頭ごと(花に)突っ込む様なもので、伺は、蜜蜂が、花の蜜に群がって、ブンブン鳴っている様である。重複して、何度も、目標の周りを取り囲むのを、伺と言う。尋、伺という2つの心所は、向上すれば、禪支になる。

3. 勝解 (adhimokkha) :

特徴は、確信または確定。作用は、疑わない事。現起(現象)は、確定または決定。その心は、動揺しない。

4. 精進 (viriya)

特徴は、支持、奮闘または力の励起。作用は、支持または相応の名法を安定させる事。

例えば、古い家に新しい柱を加えて、倒壊を防ぐ様なもの。揺れて今にも崩壊しそうな家屋に柱を加えると、家屋は即刻、直立して安定する。座禅・瞑想の時に、身体が昏沈するならば、それは精進に欠けている事を示している。ひとたび、精進が欠けると、身体全体がゆらゆらと、前に、または左に、右に、後ろにと、揺らぐ。

しかし、老師(指導者)があなたの面前に来たならば、あなたは、即刻、姿勢を正し、まっすぐになる。これが精進である。戦場に出て戦う時、戦闘によって疲労困憊した場合、勝てそうにないと思いつつ、この時、援軍が来たと聞いたならば、全身が励起して、即刻、精進力がみなぎる。「精進」はまさに後ろに控える援軍の様で、対治するのは昏沈である。現起(現象)は、放棄しない事。近因は、悚懼感(恐怖感)と圧迫感である。

8種類の事柄が、悚懼感を引き起こす事ができる:

1番目は、生(生まれる事)の苦しみを思惟する事。生にはどの様に苦しみがあるのか?母親の胎内にいて、太陽の光が見えない事。不浄が充満している事。母親の胎内にいる内から、痛苦は始まっている。出生の、あの瞬間もまた、非常に痛苦である。そして、生があれば、老いがあり、故に、老いの苦、病の苦、死の苦が続く。その後は、悪趣に堕ちる苦しみが待っている。我々は、1生の内において、非常に多くの善をなすが、同時に、非常に多くの悪もなすが故に、誰も、己自身が四悪趣に堕ちないという保証をする事ができない。ソータパナ道果を証悟したのならば、除く事ができるが。

6番目は、過去の輪廻が、もたらす根本的苦。また、未だ、無明と愛欲が取り除かれていないならば、未来において輪廻する苦も存在する。

8番目は、食物を探し求める苦である。在家居士は、生活していくためには、お金を稼がねばならず、時には、生活の為に嘘をつく事があるが、それは、非常に大きな苦である。この8種類の事柄は、あなたをして、精進して、勇猛に修行する心を励起せしめる為、(この8種類を)常に思惟する事。

5. 喜 (pīti) :

特徴は、所縁に対して歡喜(喜ばしい気持ち)が生じる事。作用は、身・心の清らかさ、または、全身に、心生色を遍布せしめること。ジャーナの時点で、特に、明確になる。ジャーナの

心は、非常に多くの心生色を生じせしめ、それを全身に遍布せしめるが、（この時）全身に、鳥肌が立った様に感じが起こる。その現起（現象）は、身・心をして喜悅せしめること。身体は、軽くなって、空中に浮かんだ如くなる。

6. 欲（chanda）：

特徴は、行動をしたいと欲する事。すなわち、ある事柄を実行したい、または、ある種の成就を獲得したい（という意志）。この欲は、貪であるとは限らない。貪は、決定的によくないのであるが、しかし、欲は、良い場合もあれば、悪い場合もある。作用は、目標を探し求める事。現起（現象）は、目標を必要としている事。欲とは、心を目標に向けて伸ばして、目標に対して、行動を起こす様である、と形容する事ができる。

前のページで説明したが、味が舌根を衝撃した結果生じた所の、7個の遍一切心心所に、今説明した所の、6個の雑心所が加わる。

「尋」は、心、（すなわち）相応名法のすべてを、その味に向ける事を言う。

「伺」は、（心、相応名法を）味の上に置き続ける事を言う。

「勝解」は、確定を意味する。もし、それが、（それを）美味であると認めたならば、それは美味であると、確定する事。

「精進」は、善の場合もあり、不善の場合もある。ここで言う「精進」は、貪を引き起こそうと頑張る事を言う。

「喜」心所は、この味を喜ぶこと。

「欲」は、味を味わいたいと思う事。

合計13個の心所がある。この13個の心所は、善にも通じ、不善にも通じる事が、可能であるが故に、通一切心所、とも呼ぶ。善心の中においては、その全部が、善的な心所となり、不善心の中において、その全部が、不善の心所となる。13個の心所は、各自の役割を演じ分けるが、（その中においては）1個の我、というものは存在しない。心所は、その役割を演じ終わるや否や、即刻、滅し去るのである。

14個の不善心所

痴（無知）、無慙、無愧、掉挙、貪、邪見、慢、瞋、嫉妬、吝嗇、悪作、昏沈、睡眠、疑、の14個は、不善心所である。その中の、痴、無慙、無愧、掉挙、の4個は、「通一切不善心心所」と呼ぶ。1つ1つの不善心には、必ず、痴、無慙、無愧、掉挙の4個の不善心所が、存在する。1つ1つの不善心には、悪行によって生じる所の、果報への盲目性を擁しているが、悪行への盲目性を、痴と呼ぶ。無慙は、悪行に対して、慙愧も羞恥も感じない事。無愧は、悪行がもたらす所の、果報に対して、畏怖を感じない事。掉挙は、心が不安定になる事。

1. 痴（moha）：

特徴は、心の盲目または無知。作用は、目標の真実性に対して、覆い隠すまたは、徹底的に知る事ができない事。目的の真実性とは、無常・苦・無我である。痴とは、無常・苦・無我の本質を覆い隠し、蓋をして、あなたの目をふさぐものである。痴と無明は、同じ意味である。現起（現象）は、正見のない事、または心が、混沌として暗い事。痴が生じる時、光明は消え

る。近因は、不如理作意である。痴は、一切の不善法の根源である。

2. 無慙 (ahirika) :

無明または、痴が生起する時、(心は)必ず、無慙に至る。羞恥心のないことを無慙といい、特徴は、身体による悪行を厭わない事、または言語による悪行を厭わない事。例えば、豚は、糞便、泥濘の中で、のた打ち回るのが好きであるが、というのも、彼らは、これらの臭いものを厭わないが故、である。同様に、無慙は、身体、言語における悪行を厭わない事を言う。作用は、恥じなく、悪をなす。現起(現象)は、悪を造す事を避けない事。

3. 無愧 (anotappa) :

特徴は、悪行を恐れぬ事。無慙は、悪行に対して、嫌悪または恥を感じない事。無愧は、悪行がもたらす果報を恐れぬ事。作用は、畏怖の心なく、悪を行う事。現起(現象)は、悪を造すことにおいて、不退転であること。火の中に飛び込む蛾の様に、自ら滅亡・自滅し、悪行が障害をもたらす事を恐れない。近因は、他人を尊重しない事。

4. 掉挙 (uddhacca) :

特徴は、平静でない事。例えば、風が吹いて、水にさざ波が起きる様なもの。作用は、心をして平静にせしめない事。例えば、風が吹いて、帆船の帆が動く様。現起(現象)は混乱。例えば、灰に石を投げ込んだ時の、灰が四散する様。近因は、散乱した心に対して、不如理作意を起こす事。故に、痴、無慙、無愧、掉挙は、通一切不善心心所、と呼ぶ。不善心は、一定程度において、悪行の加害性に盲目となり、悪行に対して、羞恥を感じなくなり、悪行によってもたらされる果報、及び、潜在的な掉挙を、恐れなくなる。次に、3種類の貪の因がある：貪、邪見、我慢(我ありという傲慢心)である。

5. 貪 (lobha) :

特徴は、目標に執着する事。作用は、目標に粘着する事。ちょうど、肉が熱い鍋に張り付く様に。現起(現象)は、捨てる事が出来ない。緊密に粘着する。近因は、束縛が引き起こされる、当該の法に、楽味を認める事。(執着の法を)非常に楽しいと感じて、貪を何度も生起させて放棄しない。

6. 邪見 (ditṭhi) :

邪見とは、物事を分析するのに、明智がないこと。または間違った事を信じる事。作用は、永恆の靈魂がある、と間違っって信じる事。この行法は、常、楽、我、浄であると信じる事。行法とは、一切の有為法の事である。五取蘊(もまた)行法と呼ぶ。名色もまた、行法である。現起(現象)は、間違った理解、または信じ込み。我見(我ありという邪見)は、2種類ある：

1つは、世間で通称されている所の「我(私)」という概念。有情をば、男性(がいる)、女性(がいる)と誤解する事。非有情とは、金、銀、物質、樹木の事(で、それが存在する、と誤解する事)。もう1つは、外道の言う「我見」。これは、また2種類に分ける事ができる。1つは、「至上我の見」。創造主がいて、この全世界と一切の有情を創造したのだという、見解。キリスト教は、この種の見解を保持するが、インド教(ヒンズー教)もまた同様である。インド教は、大梵天がこの世界全体と一切の有情を創造したのだと考え、その為に、

大梵天を非常に崇拜する。

サーリプッタ尊者が、まさに涅槃しようという時、心の中において、自分の母親を度す必要がある、と考えた。彼の母親は、7人の子供を産んだが、全員アラハンになった。しかし、彼女自身は、仏教徒ではなく、バラモン教の教徒で、大梵天を崇拜していた。サーリプッタ尊者は、毎回、実家に来て托鉢する時、母親に、聞くに堪えない言葉で、罵倒されたのであった。サーリプッタの実家は、裕福であった為、彼女は以下の様に言った。

「我が家には、この様にお金がたくさんあるのに、あなたはなぜ、外に出て托鉢するのか？何の宗派か？何様か？」

サーリプッタ尊者は、母親に、1度も抗弁することはなかった。というのも、彼には、すでに、瞋恚の気持ちが無いが故に。ただ、彼女がこれ以上の業を造らない様にするため、彼が、自分の実家に行って、乞食托鉢することはなかった。

しかし、彼は臨終の時、母親の恩情に報いなければならないと考えて、仏陀に向かって、実家のある故郷に戻って後、般涅槃を証したいと願い出、暇乞いをした。実家に到着する直前、彼は突然、非常に重い病気になり、実家に戻った後、ひっきりなしに下痢をした。彼の母親は、熱い鍋の上の蟻の様に慌てふためき、何をすればよいのかも分からないまま、混乱した。夜、サーリプッタ尊者が、まさに般涅槃に入ろうとする時、四大天王がサーリプッタ尊者に礼拝する為に、やって来た。天神の身体は明るく光る為、天王が来た時、部屋全体が、燦爛として輝いた。四大天王が礼拝した後、33天帝釈天天王もまた、サーリプッタ尊者に礼拝に来た為、部屋は更に明るさを増した。彼の母親は心内で不思議に思った、今夜はどうして、いつもと様子が違うのか？というのも、彼女には、天神は見えないが故に。3番目に光明が生じたのは、サーリプッタ尊者の母親が礼拝してやまない大梵天が、礼拝の為にやってきたからである。彼女は、この様な光明によって部屋全体が明るく輝くのを見て、こらえきれずにサーリプッタ尊者の部屋に入って行った。サーリプッタ尊者は、彼女の為に、1つ1つ説明してあげた。

「最初の光は、四大天王が、私に礼拝する為に来た為に生じたもの。」

この話を聞いて、母親は大変に喜んだ。己の息子がこれほど偉大な人物で、天神が彼に礼拝に来るなんて！

「2番目の光は、帝釈天のもの。」

彼女は更に喜んだ。

「3番目の光は、あなたが毎日、礼拝する所の、大梵天です。彼が、私に礼拝するために来たのです。」

彼女は心内で思った：

「大したものだ！私は長年礼拝して来たけれど、1度も大梵天に会ったことがない。私の息子は今、般涅槃しようとしている。彼が私の息子に礼拝するという事は、私の息子は、大梵天より偉いのではないか！」

暫くして、彼女は、己の息子に対して、大いなる信頼を得た。しかし、サーリプッタ尊者は以下の様に言った：

「私はゴータマ仏陀の弟子です。ゴータマ仏陀こそが、誠に偉大なのです！」

彼は、(己自身の成果を) 仏陀の徳に換えた。彼女は、仏陀が己の息子よりなお偉大であると聞き、瞬時に、仏陀への、非常に強力な信頼の心が生まれた。この時、サーリプッタ尊者は、

この機会を利用して彼女に説法をすると、彼女はソータパナ道果を証悟した。

もう1つの我見は、「靈魂我見」といい、1人1人の有情には、（創造主に）創造された所の、靈魂がある、と見なす（考え方）を言う。

7. 慢 (māna) :

特徴は、傲慢。作用は、自賛。現起（現象）は、虚栄。この慢は、発狂した人の様で、根源は、貪から来ている。己が、他人より優越していると思うか、または同等であるかと思うか、または他人より劣っていると思う。これらは、皆、慢（我あり、という感覚から生じる傲慢心、慢心）という心を生む。己が他人より劣っていると思う時、如何にして慢は生まれるのか？

例えば、ある貧乏人が、お金持ちを見て、

「私は彼に依存なんか、していないぞ！彼など、別に大したことはない！私は自分の力でお金を稼ぐのだ！」と思う。

これを慢（慢心、傲慢心）という。

8. 瞋 (dosa) :

特徴は、嫌悪、怨恨、憤怒、イライラ及び怒り。作用は、己自身の依処を燃焼させる事。

あなた（の気持ち）が雷のごとくに飛び跳ねる時、身体全体は、顔が紅潮し、耳が赤くなり、心臓はドキドキする。これこそが、己自身の依処を燃焼させているのである。現起（現象）は、己自身と他人の幸福を破壊する事。

9. 嫉 (issā) :

特徴は、他人の成功を嫉妬する事。作用は、他人の成功を喜ばない事。他人が成功したのを見ると、心中に嫌悪を生起させる。現起（現象）は、他人の成功を嫌悪する事。近因は、他人の成功。故に、他人の成功は、我々に、嫉妬を生じさせる原因となる（事がわかる）。

10. 慳 (macchariya) :

特徴は、己自身の得た利益または得るべき利益に関して、隠匿する事。例えば、家の中で、山海珍味を堪能している時に、友人が突然来訪した場合、急いでそのご馳走を隠すなどする事。これを慳と言う。その意味は、他人に対して、己自身の利益を分けてあげて、共に享受する事ができない。現起（現象）は、利己的、吝嗇。近因は、己自身の成功、成果。慳、嫉とは共に、瞋恚のグループに属し、瞋の因である。

11. 悪作 (kukkucca) :

悪作の因も、また瞋である。特徴は、事件の後、後悔する事。作用は、己自身の造した悪を後悔するか、または実行しなかった善に関して後悔する事。例えば、仏法を聞く以前、あなたはよく蚊やゴキブリを殺していたが、仏法を聞いた後、あなたはこれが不善業であると知って、あなたは己自身の造した悪を後悔し始める。または子供時代に、正月などの目出度い節句の時、母親が鶏を絞めるのを、あなたはその足を掴んで、母親の作業がしやすい様に、協力したかも知れない。今、仏法を聞くと、あなたはこの行為は間違っただけだと思い、後悔する。己自身のすでに造した悪を後悔するのを、悪作、という。実践しなかった善行を後悔するのも、また悪作である。例えば、母親が亡くなって初めて、親孝行をしてこなかったと、後悔する等。こうした事から、後悔は2種類ある：

すなわち、1番目は、すでになした悪、もう1つは、未だなしていない善。後悔はよくない心所であり、往生する時に、過去に造した悪を後悔するならば、四悪道に墮ちるかもしれない。

Mallika皇后は、Kosala国王の王妃であった。聡明で敬虔で、よく仏陀とアラハン尊者たちを供養した。仏陀を供養した功德は非常に大きなものである。彼女は、非常に多くの善業を造したのではあるが、しかし、国王に対して1つ申し訳ない事をしてしまい、常にそれを後悔した。その為、それが1種の習慣、習気になってしまったのである。往生する時、彼女は、己自身が行った善業について思いを致すことなく、過去に造した悪業の事を思い、後悔した結果、地獄に墮ちた。国王は王妃を失って大変悲しく思った。Mallikaは智慧があり、賢夫人であった為、国王は、彼女が必ずや善界に生まれ変わっているであろうと確信していた。しかし、この事を確定する為に、彼は、寺院に行き、仏陀に確かめてもらう事にした。仏陀は、嘘をつく事はできない。また、事実を知らせるのも憚られた。というのも、それを知れば、国王は、布施に対する信頼心を失うかも知れないが故に。しかし、仏陀は畢竟、善くて巧みな教師であった。彼は神通を使って、国王が彼の面前に来た時、突然、この問題を忘れてしまう様にした。国王は（宮殿に）戻った後、祇園精舎に行った目的を思い出して、再度、次の日もまた、仏陀に会いに行った。仏陀は再び神通でもって、彼に来訪の要件を忘れさせる様にした。この様にして、7日間が過ぎた。

7日の後、国王はまた思い出した：

「ダメだ！今度こそ、私は必ず（用件を）忘れない様にしなければ！」

彼は内心困惑しながら、仏陀に会いに行った。

「世尊にお伺いします。Mallikaはどこに往生しましたか？」

仏陀は言う：

「彼女は天界に往生しました。」

Mallikaが地獄にいたのは、わずか7日間だけで、7日後には、天界に生まれ変わった。

国王は言う：

「よい！非常によい！非常によい！」

心から喜んで（宮殿に）戻っていった。

（こうした物語から）過去において造した悪事は、忘れるのがよい（事が分かる）。後悔してはならない。すでに悪を造してしまったならば、もう二度と同じ過ちを犯さないと決意し、その後は、執着しない事。というのも、毎回思い出す度に、不善心が生起して、非常に多くの不善な業力を（心に）残すが故に。臨終の時、よくない思い出が、また浮上するならば、四悪趣に往生する事になってしまう。瞋の因は合計4個あり、1個は瞋自体、その他は、嫉、慳と悪作である。

12. 昏沈 (thīna) :

昏沈は、心が沈滞している状態。それらの特徴は、精進の欠乏。作用は、精進の除去。現起（現象）は、心の消沈。近因は、不如理作意、暇または怠惰。

13. 睡眠 (middha) :

睡眠は、心所が沈滞している状態。それらの特徴は、精進の欠乏。作用は、精進の除去。現起（現象）は、心の消沈。近因は、不如理作意、暇または怠惰。

14.疑 (vicikicchā) :

特徴は、懷疑。作用は、動揺。現起 (現象) は、優柔不断及び多く種類の立場 (の堅持)。

近因は、不如理作意。疑は、1個の痴が因となる。疑には、8種類ある：

(1) 仏陀への疑

(2) 仏法への疑

(3) 僧 (サンガ) への疑

(4) 戒定慧三学への疑

(5) 過去の五蘊への疑

(6) 未来の五蘊への疑

(7) 過去と未来の五蘊への疑：これは過去と未来の2つの世に関するもの

(8) 縁起の法則または因果の法則への疑

もし、この8種類の内の1個にも懷疑が生じるならば、心中には「捨具疑相応無行一心」が生じたことになる。

(心と心所を統合)

次に、心と心所を統合してみるに、(例えば) 味が舌根を衝撃する時、もし、味に執着するならば、貪根心の中の「悦具邪見相応無行一心」を生じるが、これは1個の心王及び19個の相応心所 (によって構成されている)。この貪根心は、意門心路過程の7個の速行心において生起する。故に、1つ1つの速行心には、皆、1個の心王と19個の心所がある、と言える。合計20個の相応名法である (と言える)。

1. 心王：

悦具邪見相応無行一心。

2. 触：

味と舌根及び舌識とを衝撃せしめるか、または連結せしめる。

3. 受：

味の喜ばしい処を体験する。

4. 想：

当該の味が、喜ばしいものであろうと、標識する。

5. 思：

思は己れ自ら業を造す。その後、相応の名法を促して、味に対して行動を起こす。

6. 一境性：

味に対して、相応の名法を統合・統一する。

7. 名法命根：

相応の名法の生命を維持する。20個の名法の生、住、滅を維持する。

我々は、すでに、7個の遍一切心心所、6個の雑心所、14個の不善心所：「痴、無慙、無愧、掉挙、貪、邪見、慢、瞋、嫉妬、慳、悪作、昏沈、睡眠、疑」についての説明をした。

邪見と慢は、貪を因とする。嫉妬、慳、悪作は、瞋を因とする。昏沈、睡眠は、有行の心に属する。疑は、疑を因とする。

以下において、食べ物、味に対して起こす貪をもって、貪根心と不善心所の結合（相互関係）を説明する。もし、（心が）貪を生起せしめても、悪報をもたらすことはないと考えて、能動的、自動的に、食べ物を味わうならば、その時に生起する心王は「悦具邪見相応無行一心」といい、次に、7個の遍一切心心所：

「触、受、想、思、一境性、名命根、作意」と

6個の雑心所：

「尋・伺・勝解・精進・喜・欲」に、

その上に4個の遍一切不善心心所が加わる：

「痴、無慙、無愧、掉挙」。

「貪根心」であるが故に、必ず「貪」と「邪見相応」が存在し、故に、必ずや「邪見」が存在する。故に、合計19個の心所がある事（が分かり）、その上に、心王を1個加える。

もし、「悦具邪見相応有行一心」であるとする、その上に「昏沈、睡眠」加える。

また「捨具邪見相応無行一心」であるならば、1個の「喜」を取り去る。

もし、「捨具邪見不相応有行一心」であって、「喜」を取り去り、また「邪見」も取り去るならば、2個の「昏沈と睡眠」が加わる。

2番目の貪見グループ「悦具邪見相応有行一心」に関しては、すでに説明を終えたので、ここでは重複して、解説ない。

もう1つ例を挙げる。あなたは、今、まさにお経を聞いている、とする。その時、疑が生じる。その時の名法は、いくつあるか？我々は、それを研究してみようと思う。

「心王」は、「捨具疑相応」で、疑根心である。

「触、受、想、思、一境性、名命根、作意」の7個の遍一切心心所は、必ず生起する。

それに6個の雑の内の「尋・伺・精進」の3個の心所を加える「勝解」を減らす。というのも、それは確定することができないが故に。

「喜」も減らす、というのも「捨具」であるが故に、喜に欠ける為（である）。

「欲」を減らす。というのも、心は散乱していて、目標を獲得する事ができないが故に。

最後に、4個の遍一切不善心心所である「痴、無慙、無愧、掉挙」を加える。

また、疑相応であるが故に、「疑」は必ず存在する。

ただ、その1刻の時点では、「慳心」は生じておらず、「慳」は存在しない。

故に、合計16個の名法、ということになる。

これより以前に、「憂具瞋恚相応無行一心」を説明した。我々は、今、「慳心所」を見てみようと思う。己自身が所有する物品を、他人と共に分け与え、楽しむことのできない人は「憂具瞋恚相応無行一心」を生じせしめる。というのも、瞋恚は、慳の因であるが故に。

それが相応する所の心所は、7個の遍一切心心所、6個の雑心所から喜を取り除いたもの、である。というのも、憂具であるが故に、喜はあり得ない為（である）。

その上に、4個の遍一切不善心心所を加え、また、瞋、慳を加える。というのも、この時点で、彼は、慳という心を起こしたが故に。

こうしたことから、合計19個の名法がある事が分かる。

その上に、勤め人であれば、同期が昇進したのを見て、心中に嫉妬心が湧く。この時、どれほどの相応名法が生じるか？

「瞋因」には3種類ある：「嫉妬」、「慳」と「悪作」である。

人が、同期が昇進したのを嫉妬して、それが原因で、瞋恚心が生じた場合、その時の心は、「憂具瞋恚相応無行一心」で、それは心王である。

(その上に) 7個の遍一切心心所、6個の雑心所があり、雑心所からは喜を引く。というのも、憂具であるが故に。

こういうことから、この人の心中は、不愉快な感情で一杯になる。

その上に、4個の遍一切不善心心所を加える。最後は「瞋」と「嫉妬」である。

合計19個の名法になる。

もし、友達がその人にこう言ったとする：

「同期の人より、あなたの方が成績がよいのに、なぜ、同期の人が昇進したのかしら？」

その後、この人は、同期の人に、嫉妬の心を起こすとするならば、この時生起するのは「憂具瞋恚相応有行一心」、合計21個の名法がある事になる。上記は、有行一心であるが故に、昏沈と睡眠を加える、すなわち、19に2を加えるので、合計21になる。

生活の中において、12個の不善心があり、また、種々の不善心所もある。ゆっくりと、己自身の心を、研究してみたいものである。不善心が生起する時、「思」心は、人をして、業を累積せしめるが、しかし、必ず、貪、瞋、痴と相応して、初めて不善業の累積となる。「思」は、遍一切心心所であり、不善心と相応すれば、それは不善であり、善心と相応すれば、それは善である。(「思」が) 果報心、唯作心と相応する時、業を累積する事はない。

25美心所

25個の美心所の内に、19個の通一切美心がある。美心は、善心、果報心、唯作心が含まれる。ただ善心のみ存在するのではない。19個の通一切美心所は、必ず善心と善なる果報心と共に生起する。通一切美心所には「信、念、慙、愧、無貪、無瞋、中捨性、身軽安(心所が軽安である事。ここで言う身は、心所の事。以下同様)、心軽安(心が軽安である事)、身軽快性、心軽快性、身柔軟性、心柔軟性、身適業性、心適業性、身練達性、心練達性、身正直性、心正直性」が含まれる。

通一切美心心所 (19)

1. 信 (saddhā) :

特徴は、信じるに値する事柄に対して信心 (= 確信) がある事。すなわち、仏・法・僧

(サンガ)、戒定慧の三学、過去の五蘊、未来の五蘊、過去と未来の五蘊、縁起または

因果法則等、8種類の事柄に対して信心 (= 確信) がある事。「信」の作用とは、澄清であって、ちょうど清水宝石が、混濁した水を、清らかなものに変える事が出来る様に、同様に、五蓋

または煩惱が生起した時、「信心 (= 確信)」が生起するや否や、心中は、瞬く間に、非常に

清らかになる事ができる。こうして初めて、布施、持戒、禅修行が出来る。若し、信心

(= 確信)がないならば、布施を实践する事ができない。因果法則に対して信心 (= 確信)がないならば、布施をするべきかどうか、疑いの心が生まれる。人は、持戒に関して懷疑するならば、布施はしない。故に(上記の事から)、信心 (= 確信)が生起するや否や、各種の懷疑は、浄化される(事が分かる)。「信心 (= 確信)」の現起(現象)は、迷妄(迷蒙)ではない事であり、それはすなわち、心の不浄、例えば懷疑等等を取り除く(作用を果たす事ができる。)近因は、信じるべき事柄を信じる事であるが、それはすなわち、上に述べた8項目の事柄か、また、正法を聴聞する等々である。正法を聴聞する事は、非常に、信心 (= 確信)を生起しや易い。上に述べたサーリプッタ尊者の母親は、正法を聴聞した後、即刻、ソータパナを証悟したのである。こうしたことから、正法を聴聞する事は、ソータパナ(になる為の基本的)素質(素養)である、と言える。信心 (= 確信)はまた、両の手と例える事ができる。あなたが宝の山に入山した時、両の手を使って初めて、その宝を持ち帰る事ができる。手がないならば、宝の山に入っても、空手で戻らなければならない。同様に、仏門に入りながら、信心 (= 確信)がないのであれば、あなたは、空手で戻らなければならない。

2. 念 (sati) :

特徴は目標に対して、しっかりと識別し(うっかり)忘れない事。例えば、アーナーパーナ・サティ(出入息念)の修行の時、(己自身の)息に対して、一時も失念する事無く、息に対して明瞭であり、心の念(思い、意識)が、呼吸から離れないのであれば、あなたには正念がある、という。例えば、瓢箪を川に投げ込んだ時を例に挙げる。瓢箪は非常に軽いが故に、川の流れに沿って、流れ去ってしまうであろう。しかし、石を水の中に投げ込んだならば、それは水の中に沈み込んでしまうであろう。正念は、瓢箪の様には、水の表面を流れて行ったりしない。正念は、まさに石を水の中に放りこんだ時の様に、心の中に入り込む。この様であって、初めて、非常に強い正念がある、と言える。それ故に、正念とは、目標を見失わない事、とも言える。作用は、迷わない事、または目標を見失わない事。この事は、アーナーパーナ・サティを修行している時、非常に明確、明瞭になる。というのも、ひとたび、目標を見失うと、その時、正念を失うが故に。現起(現象)は、心を守護(保護)する事、または目標に対応している状態である事。アーナーパーナ・サティの修行を实践する時、正念がある為に、心は守護(保護)されて、五欲の目標に向かって漂い出る事、色、声(音)香、味塵に向かって漂い出る事がない。正念は、ちょうど、悪人または色々な人間が、入ってこない様に見張っている門の守衛の様であって、それは悪法が入ってこない様に(見張っている様なものである)。故に、根門を守るという事は、すなわち、正念でもって、業処を守る事を言うのである。1個の心は、1個の用を足す事しかできず、(1個の心で)色々な事柄を処理する事が出来ないが故に、心が業処を守り、業処に止まっている時、眼、耳、鼻、舌、身は、一時的に閉鎖されている為、煩惱が、眼、耳、鼻、舌、身から入ってくる事がない。こうした事から、正念でもって心を守護する事は、五根から煩惱が入ってこない様にする事ができる。正念の近因は、強くて力のある想または四念処である。それはすなわち、身念処、受念処、心念処、法念処である。アーナーパーナ・サティは「身念処」である(身=呼吸)。楽受、苦受、不苦不楽受を観ずるのを「受念処」という。心の貪欲、瞋恚、痴を観ずるのは「心念処」である。五塵が五根を衝撃する事によって、生起する煩惱を観ずるか、または五蓋を観ずるのは、「法念処」である。これらは皆、強くて力のある正念を育成する為の、最も近い原因であり、故に近因と言う。

仏陀は以下の様に言う、どの様な業処においても、正念は必要である、と。五根をバランスしようとする時、正念は、あなたに、あなたの慧根（の強さ）が、信根を超えている事を知らせる・・・慧根は必ず、信根とバランスしなければならない。または、定根が精進根を超えて、定力が強すぎる時、精進が不足して、「昏沈」が生じる。

反対に、もし精進が過剰で、定力が不足である時、「掉挙」が生起する。正念は、精進力が多すぎる時、リラックスしなければならないという事を知っている。こうして初めて、定根と精進根をバランスする事ができる。正念は（バランスの可否を）知っている為、調整する事ができる。もし、正念がないのであれば、信心（＝確信）が強すぎるとか、または、智慧が、ある時点で過剰に強い事が分からない。「偏りがひどい」場合、修行は進歩しない。修行においては、五根がバランスしていなければならない。正念は、ちょうど塩の様であって、調理する時に、塩がないならば、その料理は味気ないものになる。故に、仏陀はどの様に場合においても正念は必要である、と言うのである。

3. 慙 (hiri) :

特徴は、悪行に対して、嫌悪を感じる事。悪行は、身、口、意の3つの方面を含む。

身の悪業には、3種類ある。殺、盗、淫である。

口の悪業は、4種類ある。悪口、両舌、綺語（おべんちゃら）、妄語である。

意の悪業は、3種類ある。貪、瞋、邪見である。

身口意の悪行に対して、嫌悪を感じる事は、慙の特徴である。慙の作用は、悪をなさない事。嫌悪するが故に、悪をなさない。現起（現象）は、諸々の悪を避ける事。ちょうど、雄鶏の尾が、火の前ではちぢこまってしまう様に、（慙の心は）悪の前ではちぢこまってしまう。近因は、己自身への尊重。例えば、己自身の出生を考慮する：

「私の生まれは高貴である。故に、町で悪態をつく女性の様に、あの様には、人を侮ったりしない。」と。

己自身を大切にすることが故に、口から悪語を吐かない。

または、己自身の教育（のレベル）に思いを致す：

「私は高等教育を受けた人間である。他人を騙してはいけない」

または、己自身の年齢を考えてみる。年齢を経た者は、幼稚な行動をとってはならない。

己自身の崇高な地位を思い、大通りや人の集まる場所で、大酒を飲んで、酩酊してはならない。己自身を大切にするのであるならば、決して悪をなしてはならない。

4. 愧 (ottappa) :

特徴は、悪行によってもたらされる果報に対して、恐れを感じる事。例えば、自分で自分を責める、他人による譴責、社会的譴責、法律上の罰則、残された後に（後々に影響する所の）業：今生の業、来世の業、無尽業。これらの、悪行がもたらす果報を、恐れる事。故に、愧の作用は、悪をなす事を恐れる事。二度と悪行をなさない事。現起（現象）は諸々の悪を避ける事。近因は、他人を尊重する事。以下のたとえ話は慙と愧の本質を同時に説明する事ができる。1本の鉄の棒の端には、糞便が塗りつけてある。そのもう1つの端は、火の中で燃やして、真っ赤になっている。ある人は、糞便の部分を掴みたくない。彼は糞便が嫌いであるし、己自身が汚染されるのは嫌であるが故に。これは慙である。しかし、彼はまた、真っ赤に燃えた、もう1つの端を掴みたくもない。火傷するのを恐れるが故に。これは愧であり、悪行によってもたらされ

る果報を恐れるものである。

仏陀は、慙と愧は、世間的な（一般的な世の中の）護法である、という。仏陀は《増支経・行為経》の中において以下の様に言う：

「比丘たちよ。2種類の法があって、それが世間を保護している。どの様な2種類であるか？慙と愧である。比丘たちよ。もし、この2種類の法が無く、それでもって、世間を保護することができないのであれば、それはすなわち、これは母親、母親の姉妹、叔父の妻子、師長及び師長の妻であることが分からないという事であり、その為に、世間は混乱する。それはちょうど、羊、鶏、豚、犬、狼と同じ様である。慙と愧がないのであるならば、父と娘の逆倫、兄と妹の逆倫などの類の事柄が生じる。

故に、仏陀は「慙と愧」は世間的な護法である、と言う。この2者がなければ、世間は混乱の向かってしまう。人類は、慙愧があるが故に、狼や犬の様に、性的な関係性の紊乱をもたらす事がない。ただ、今日の世情下、時代が変化している中において、我々出家者が、仏法を宣揚する任務を携えて（活動するのは）、世間を護るためである。みな因果を理解して、悪行に対して恐れを感じるならば、それは回避される事になる。結果、我々は無形の内に、世界の平和を維持、保護し、人々に幸福をもたらしている。持戒者は他人を傷つけないだけでなく、他者に安全をも提供する。故に、持戒（の実践は）非常に重要である。人として、父母とそと、あなたの子供に、戒律を護る様に諭しなさい。己自身の幸福に思いを致す事は、すなわち、他人に安全を提供する事でもあり、それは最終的には、国家の為、社会の為、世界の為、平和な環境を作り出す事ができるのである。

5. 無貪 (alobha) :

特徴は、心が貪欲に欲求しない事、または目標に執着しない事。ちょうど、水滴が、蓮の葉に粘着しないが如くに。水滴は、一瞬、蓮の葉の上に乗っても、即刻、葉から、すべり落ちる。まったく執着、執取する事が無い。これが、不貪の特徴である。作用は、執着しない事。それは解脱した比丘の様である。現起（現象）は、無著（無執着）。近因は如理作意。無貪は、無貪であるだけでなく、ポジティブな人徳を含む。例えば、布施をすることもまた無貪である。己の財物を差し出すことができるという事は、あなたの心中に、財物への執着がない事を著している。捨離、出家して五欲への追求を放棄することもまた、無貪である。己自身の家族に執着しない事、これもまた無貪である。

6. 無瞋 (adosa) :

無瞋には、慈愛が含まれる。特徴は粗野でない事、または対抗しない事。まさに、友好的な善き友の様に、目標に対して、粗野でない事。作用は、怨恨の排除または怒りの火の除去。例えば、誰かに対して怒った時、あなたは念（思い）を一転して、彼に慈愛を送る。この慈愛は、あなたの怨恨を取り除く事ができる。現起（現象）は、喜ぶべき、愛すべき（感情）、ちょうど一輪の満月の如くに。

7. 中捨性 (tatramajjhata) :

心の平衡、バランスを言う。受蘊の中の「捨受」ではない。中捨性の特徴は、心と心所を、バランスする事。作用は、（心・心所の）過多または不足（の状態）を防止する、または偏向を除去する事。現起（現象）は、心と心所を中捨的に傍観する事。例えば、御者が、安定して

前進する2頭の馬を、中捨的に傍観するが如くである。もし、2頭の馬の速度が同じである時、御者はただ、中捨的に、彼らが前進するのを、見ているだけでよい。こっちの馬を制御してみたり、あっちの馬の手綱を緩めてみたりする必要はない。四梵住に慈・悲・喜・捨があるが、その中の「捨」はこの「中捨性」を指すものである。

8. 身軽安 (kāyapassaddhi) :

9. 心軽安 (citta-passaddhi) :

身軽安は、相応する心所の事を指す。色法ではない。それは、相応する所の心所の軽安を言うのである。心軽安は、心王の軽安を言う。禅修行の時、もし、掉挙、悪作、後悔が出現したならば、(心・心所に) 不安が生じる。故に、身軽安、心軽安のそれぞれの特徴は、心と心所の不安を静める事。作用は、心と心所の不安を除去(破り除く)事。現起(現象)は、心と心所の安静、安寧、冷静。近因は、心所と心。それらは、イライラやストレスをもたらす掉挙と悪作を、対治する事ができる。

10. 身軽快性 (kāya-lahutā) :

11. 心軽快性 (citta-lahutā) :

この2種類の軽快性のそれぞれの特徴は、心と心所の沈重(暗く沈む事)を除去する事。禅修行を實踐する時、もし、心が沈重であると感じるならば、それは必ず昏沈(が原因)である。昏沈の時、心は特別に沈重になる。故に、この2つは、昏沈と睡眠を対治するものである。特徴は、心と心所の沈重を取り除く事。作用は、心と心所の沈重の排除。現起(現象)は、心と心所の不沈重。近因は心と心所。

12. 身柔軟性 (kāya-mudutā) :

13. 心柔軟性 (citta-mudutā) :

この2種類の柔軟(性)のそれぞれの特徴は、心と心所の硬直性を取り除く事。ひとたび、邪見または慢(我有りという傲慢心・以下同様)が生起すると、心全体は硬直してしまう。私の叔母が以下の様に言った事がある:

「背中が天に向いている動物は、すべて殺してもよいし、食べてもよい。」

彼女がこの様な邪見を生起せしめる時、心全体は、硬直しており、彼女に殺生をしてはならないと話しても、聞く耳を持たない。この時、彼女の心は、柔軟性を欠いている、と言える。

作用は、心と心所の硬直性の打破。現起(現象)は、心と心所において、目標への抵抗がない事。近因は、心所と心。それらは、(心と心所の)硬直をもたらす邪見または慢を対治する(事ができる。)

14. 身適業性 (kāya-kammaññatā) :

15. 心適業性 (citta-kammaññatā) :

この2種類の適業性の、それぞれの特徴は、心所と心の不適業性、すなわち、心が操作しにくいという(問題)を取り除くものである。作用は、心と心所の不適業性の打破。現起(現象)は、心所と心が、ある種の目標を取る事に成功する事。初心者、呼吸を観察する時、何をどうしてよいか分からない、得心がいかない時があるが、それはすなわち、身適業性と、心適業性を欠いたためである。もし、あなたが、適業性をもって、アーナーパーナ・サティを

目標に取る時、心は容易に専注し、非常に容易に操作できる事に気がつくであろう。呼吸を観察する事に得心が行く時、身適業性と、心適業性が、存在する、というのである。故に、それらは、心所と心の、作業に適さないという所の、その他の蓋、諸々の蓋は、五蓋等々をいうのがあるが、それらを対治するものである、と言える。

16.身練達性 (kāya-paguññatā) :

17.心練達性 (citta-paguññatā) :

この2種類の練達性のそれぞれの特徴は、心所と心が、健全である事。作用は、心所と心の病疾を取り除く事。信心 (= 仏法への確信・信頼) がない時、心は病気になりやすく、仏法を聞きたいとは思わない。現起 (現象) は、心所と心の欠陥のない事。近因は心所と心。それらは、心所と心を不健全に至らしめる所の、無信などを対治する事ができる。

18.身正直性 (kāyujjukatā) :

19.心正直性 (cittujjukatā) :

この2種類の正直性の、各々の特徴は、心所と心の正直性である。作用は、心所と心の欺瞞性の打破。現起 (現象) は心所と心が、狡猾でない事。近因は、心所と心。それらは、心所と心の不正直によって、引き起こされる所の、虚偽、欺瞞等々を対治する。虚偽、欺瞞は、禅修行において、非常に大きな障害になるものである。

離心所 (3)

25個の美心所の中の、3個の離心所は、正語、正業、正命と言い、それはすなわち、意識的に、言語、行動と事業 (仕事) の上における悪行から、遠く離れる (遠離する) 事を言う。世間心においては、悪をなす機会のある時に、意識的に己自身をコントロールして、それを犯さない様にする時に初めて、離心所は生じる事ができる。悪をなす機会のない時に、悪をなさないのは、遠離とは言わない。それは純粋な徳行か、または純粋な戒に属する。例えば、嘘をつきそうになる状況の下において、あなたは、嘘をつかない (様に努力する) 時、これを「正語離心所」と言う。正語とは、意識的に、悪口、妄語 (嘘)、二枚舌、おべんちゃらから遠く離れる事を言う。正業は、意識的に悪行から、遠離する事。悪行には、殺生、偷盗、邪淫が含まれる。正命は、邪命から遠離する事。邪命は、合計5種類ある：毒薬、麻薬、武器、奴隷及び供養の為に殺された動物の売買。故に、この3種類の離のそれぞれの特徴は、言葉による悪行、身体による悪行、邪命を犯すことのない様にする事である。作用は、言語による悪行、身体による悪行、邪命から遠く離れる事。現起 (現象) は言語による悪行、身体による悪行、邪命をなさない事。近因は、信、慙、愧。信とは真理に対して、確信を持つこと。

合計3種類：

1. 自然離：

己の社会的身分、地位を考えて、業をなさないようにする。

2. 受戒離：

受戒の後、悪行から遠く離れること。スリランカに、ある農夫がいて、比丘とともに五戒を受

けた後、畑に戻って仕事をしていました。彼の牛がどこかへ行ってしまったために、彼は牛を探しに出かけ、不注意が原因で、谷に落ちてしまい、その時、身体を大きな蛇に絡まれてしまった。彼は身に一振りの刀を持っていたので、それを使って大蛇を殺そうと思った。しかし、彼は突然：

「私は今日五戒を受けたばかりではないか。大蛇を殺してはならない」

と思い至った。これを受戒離という。しかし、彼は大蛇に強く絡まれたために、徐々に呼吸が困難になってきた。そのため、彼はやはり大蛇を殺そうと思う。そのため、何とかしなければならぬ、と思った。しかし、『私は、今日、不殺生戒を持するが故に、蛇を殺してはならない』という考えが、再び出現した。最後、彼は大蛇を殺してしまつてはならないと考えて、刀を脇に放り投げた。持戒の功德は不思議である。刀を放棄した後、大蛇もまた、彼を解放したのである。もし、大蛇に絡みつかれたならば、大部分の人々は、自分の命を守る為に、間違いなく、大蛇を殺そうとするであろう。何故であるか？というのも、衆生は、(己の)命に執着しており、己の命を貪愛しており、このような困難に見舞われた時、己が五戒を誓ったことなど、忘れてしまい、己の命を守ることにしか考えられなくなるからである。

このような人は、生命がただ1回(1世)限りではない事を、知らないでいる。今、あなたが大蛇を殺して、結果、あなたは生き延びたとして、今生に受ける業、来世に受ける業として、無尽業を残す事になる。あなたは、大蛇を殺した結果、30年ほど長生き出来るかも知れない。しかし、あなたの死後、今生受業が熟していないならば、この業は、無効業になる。もし、次の生で業が熟したならば、次の生において、あなたは大蛇になるかも知れない。殺される動物の体積が大きければ大きい程、業は重くなる。というのも、(殺す時の)時間が長いし、使用した気力も大きいからである。蚊を殺すのと、象を殺すのを比較するに、使われる力も、時間も異なるのである。

3. 正断離：

出世間道心と相応する遠離。この種の離は、完全に悪をなす(心の)傾向を根絶やしにする。というのも、道心は、已に煩惱を断じており、故に、もはや悪語、悪業、悪命などの煩惱を再起させる事はないが故に。

無量心所 (2)

次に、25美心所の(中の)2個の無量心所について(説明する)。それは、一切の有情を対象に取り、心をして10の方向の(全)世界へ向けて発散させる。(この心は)無量の潜在エネルギーを有しているため、故に無量、と呼ぶ。通常、無量心は、慈悲喜捨の4個を言う。ここでは悲と、喜のみ言う。というのも、慈は、無瞋心所に属し、捨は中捨性心所に属するため、慈と捨は、ここには属さないためである。

悲の特徴は、他人の苦痛を取り払ってやりたい、という欲望である。例えば、友人の子供が、事故に遭って死亡したとする。彼は非常に辛くて、あなたの所へ来て、悲しみを訴える。あなたは、悲心が生じて、彼の苦痛を取り払ってやりたい、と思い、彼に対して、仏法を解説した。〈これは子供自身の業なのです。彼は呼ばれなくてもやって来て、お願いせずとも、去って行った。彼の破壊業が熟したのが原因なのですから、あなたは悲しまなくてもよいのです〉。

この様に慰めても、彼はどうしても辛い心が、拭えない。あなたも一緒になって心が辛くなり、涙が溢れる。このとき、始まりは悲の心であったものが、涙をあふれさすころには瞋の心に変わる。すべての、憂具はみな瞋であり、故に、悲の心と、瞋の心は、区別されなければならない。我々は、他人の苦痛を取り除きたいと望み、手を差し伸べるとき、それができないのであれば、捨が、必要になってくる。他人と共に、瞋の心を起こして、共に苦痛を背負うことは、あってはならない。悲の作用は、他人の苦痛を見ることに耐えられないこと、現起（現象）は、残忍でないこと。近因は、如理作意。

スメダ（Sumedha）は、ゴータマの前世である。彼は、あらゆる苦難に苦しむ有情の、抛り所がないのみを、悲心を起こし、アラハン道を証悟出来る（所のチャンスを）放棄して、菩薩道へと進んだ。彼は4大阿僧祇劫と10万大劫の以前、ヒマラヤに住んでいて、大部分の時間、禅定の喜悦に浸っていた。ある日、彼が五神通を使って空を飛んでいたとき、下界のある村が何やら騒がしいのに気がついて、下に降りてみた。村人が言う：

「燃灯仏が世に出たのです。もうすぐ我々の村に来ます。彼を歓迎するために、我々は、村のどこかしこも、奇麗にしなければなりません。」

スメダ隠士は、『燃灯仏』と聞くやいなや、全身に鳥肌が立った何と嬉しいことよ！そして、自分も、燃灯仏を歓迎する所の、善業に参加したいと思った。村人は、彼に泥の道を掃除する様にと、言いつけた。彼には神通力があつたので、村全体を綺麗にするのは、簡単ではあつたものの、しかし、彼は、喜んで、自分自身の手を使って道の清掃を行った。というのも、5分間の労力は、5分間の善業を積む事ができるが故に。神通力を使って、パッと変えてしまうなら、それは速すぎて、善業を積む時間がないのである。とうとう、燃灯仏と、大勢のアラハン比丘たちがやって来た。しかし、スメダは未だ、道路の掃除が、終わっていなかった。かくて、彼は、己の命を燃灯仏に差し出すことにした。彼は、まだ清掃の終わっていない泥道の上に覆い被さり、500人のアラハン比丘が彼の背中に乗って、泥道を渡れる様にした。この時、Sumittaという名の女性がいて、スメダに対して恋慕の情を生じた。彼女は手に10輪の蓮の花を持っていたが、その中の8輪をスメダに贈り、自分の手元に2輪残した。仏陀が近づいて来たので、スメダは非常に興奮した。彼は、仏陀の全身が発光しており、また、32の荘嚴な相が具足されているのを見て、即座に花を差し出して、弘願を發した。

「将来、私が四聖諦を理解出来た時、私はその他の人々もまた、四聖諦が理解出来る様にする。」

「私が、生命の束縛から解脱出来る時、他の人々もまた、生命の束縛から離脱出来る様にする。」

「私が、輪廻の大波、大渦を渡る事が出来た時、その他の人々もまた、輪廻の大渦を渡れる様にする。」

燃灯仏はスメダ隠士が発願するのを見て、彼にその様な、仏になる事の出来る潜在的な能力があるかどうかを、神通力でもって観察してみた。その結果、仏陀は彼が4大阿僧祇劫と10万大劫の後、ゴータマ仏陀すなわち釈迦牟尼仏になる様を観ずる事が、出来た。Sumittaは、彼が発願したのを聞くと、

「願わくば、この隠士が、彼の菩薩道を完成させて仏果を証するまで、生々世々、私が彼を支えられます様に」と發願した。

彼女の發した願もまた偉大なものであつた。Sumittaは後のアショーダラで、菩薩が菩薩行を実践するとき、彼女は大変な苦勞をしたが、その原因はこの願と関係があつた訳である。ある時は、菩薩が彼女を捨てた時もあったが、彼女は何ほども恨むことはなかつた。長い輪廻の中にお

いて、菩薩が菩薩道を完成させるまで、アショーダラは、菩薩を大いに助けたのである。スメダはなぜ、菩薩道へ進まんとする心を起こしたのであるか？スメダはその時、すでに五神通を具備していたし、観智については、行捨智まで到達していた。もし、仏陀が彼に説法したならば、1句の法語でもって、彼はアラハンを証することができたのである。

しかし、彼は、苦難の中の有情の、その抛り所のない様をみて、非常に強い悲心を起こした。そのため、アラハンになることを拒絶したのである。この種の悲心は、通常の悲心ではなく、これはMahakarunā（大悲心）なのである！未だアラハンを証する前であるならば、（人は）菩薩道を修することかできる。しかし、ひとたび、アラハンを証してしまえば、大きいものから、小さいものへ回帰する事はできない。というのも、輪廻の根本：無明と愛欲が、アラハン道によって徹底的に断じ除かれるが故に。例えば、木と根を共に抜き去った時の様に、その木に再生を願っても、実現出来ないのと同じである。これは論理学の1種であって、大から小へ戻れないのは、人々への励ましであり、方便でもある。もし、菩薩道を修したいのであるならば、（その願を掛けた修行者は）行捨智に到達したなら、あなたの願は、自然当然に、ソータパナやアラハン道を証することはさせないものである。スメダは、己の大悲心に促されて、衆生を済度するために、アラハン道を成就出来る可能性を放棄し、菩薩道へと進んだのである。これを、大悲心と言う。

「喜」の特徴は、他人の成功に随喜すること、である。作用は、他人の成功に対して嫉妬しないこと。現起（現象）は、嫌悪の除去。近因は、他人の成功を目の当たりにすること。各種の善業の中において、随喜が一番実践しやすい。他人が善業を実践するのを見て、「Sādhu！ Sādhu！ Sādhu！（善哉！善哉！善哉！）」と随喜するだけで、あなたは、一分の功德を得る事が出来る。その時、一銭のお金も使わないで、ただ真心から随喜できれば、それでよい。ただし、多くの人々にとって随喜は簡単ではない様だ。というのも、心流の中における嫉妬心が、未だ取り除かれていないが故に、他人が善を行うのを見て、歡喜する事が出来ないで、却って嫉妬してしまうのである。

無痴心所 (1)

無痴の特徴は、究極法の自性の相をまるで熟練した弓矢の名手が、的を命中させるが如くに、徹底的に、如実知見する事である。では、究極法の、自性の相とは何であるか？無常、苦、無我である。故に、無痴は、智慧と同じく、究極法の無常、苦、無我を、徹底的に、如実に、知見する事ができる（と言える）。

出世間心の中において、慧心所は最も顕著であり、また、最も重要なものである。智慧の作用は、（心に）智慧の光を付与する事であり、結果、心をして、目標がより鮮明になる。その光の光る様は、まるで（心の認識の対象である所の）目標を照らすランプの様である。例えば、身体は、千々万々の色聚で出来ているが、しかし、我々の心は無明によって覆い隠されており、（その結果、心に）智慧の光がないが故に、それが見えないでいる。

ひとたび、智慧の光が生起したならば、（修行者には）はっきりと色聚を見る事ができる。ゆえに、智慧の作用とは光を付与する事、その結果、目標を明晰・明瞭にせしめるものである、と言える。例えば、夜空に明るい満月が出ているとして、その後黒い雲が出てきて、月を覆い隠して、結果、あなたは、月が見えなくなったとする。あなたには、月は見えなくなったが、月が存在しなくなった訳ではない。ただ、覆い隠されただけである。黒い雲とは無明のことであり、

月とは四聖諦の事である。四聖諦は存在するが、ただ、無明によって覆い隠されていて、我々には見えないのである。ひとたび、黒い雲が流れ去ったならば、月はまた輝く。同様に、ひとたび智慧が生起して、無明が取り払われたならば、四聖諦は十分に展開される。智慧の現起に、迷いはない（＝智慧が生起するとき、生起したかどうか、戸惑うことはない）。近因は、定。故に仏陀は言う：

「定ある者は、究極法を如実に見る事ができる。」

無痴はまた慧根または智慧と言う。この智慧と言うものは、いくつかの、異なるレベルのものがある。例えば、因果応報を信じる智慧。経典を理解する智慧。善悪を分別する智慧。無常、苦、無我を徹底的に知る智慧。四聖諦を徹底的に知る智慧。一切の有為法は、みな、生滅しているものである。我々の五蘊もまた生滅して無常である。我々がそのことを知らないでいるのは、無明が、究極の真実の法の本質、すなわち、五蘊の生滅の本質を覆い隠しているからである。（このことから）無明が生起するとき、智慧は生起出来なくなる事（が分かる）。無明が取り払われ、智慧が顕現した後であれば、五蘊の生滅の法：無常、苦、無我を、徹底的に知る事ができる。光明が生起するとき、暗黒は消失する。

25種類の美心所の内、19種類は通一切美心であり、3個の離心所「正語、正業、正命」、2個の無量心所「悲、喜」、1個の無痴心所、これはまた慧根、無痴、智慧とも呼ぶが、合計25個の美心所がある。

11の不定付随法

52個の心所の中において、11個の「不定付随法」と呼ばれるものがある。そう呼ばれる原因は、それが、それらと相応する所の心が、必ずや生起するとは限らないからである。残りの41種類に心所は、「定付随法」と呼ばれる。というのも、それらと相応する心が、必ずや生起するが故に。11の不定付随法とは、以下の通り（である）。

1. 嫉・慳・悪作（後悔）：

この3種類の心所の因は、瞋である。個別にまた、たまたまに生起する。個別に生起すると述べたその意味は、他人を嫉妬するとき、悪作（の心）が同時に生起することはない。他人を嫉妬するときの所縁は、他人の成就・成功であり、後悔ではないが、故に。他人の成功が、あなたの嫉妬心の生起の因と縁になる、ということである。

慳の生起は、他人と財物を分け合う事に、我慢が出来ない時、生じるものである。嫉・慳の所縁は、同じものではない。前者は他人の成功で、後者は己の成功である。故に、両者が同時に生起する事はなく、それぞれ個別に生起する。過去になした悪業と、未だ成さない善業に対して後悔するとき、悪作（の心）が生起する。ただ、時々、たまたまに生起するという事は、それらは、因と縁があって初めて生起する、ということである。因と縁のない時、それらは生起しない。我々は、24時間ずっと他人を嫉妬し続けているわけではないが故に、それらはたまたまに生起するのだ、と言う。

2. 正語・正業・正命：

この3個の離心所もまた、それぞれたまたまに生起するものである。強い意志を持って、嘘をつ

いたり、悪口、おべんちゃらを言ったり、二枚舌を使ったりしない様にすれば、正語が生起する。強い意志でもって身体による殺生、偷盗、邪淫というこの3種類の悪行を遠離して、正業を生起せしめること。強い意志でもって毒薬、麻薬、武器、奴隷の売買、及び屠殺された動物を他者に提供するなどの好ましくない職業から遠離すれば正命が生起する。

鶏を売って、それを持ち帰った人に屠殺させるのは、良い職業ではない。この様な職業に携わる事を邪命と言う。3つの離心所の、それぞれの心が生起する原因は、(例えば) 硬い決心でもって嘘をつく事から離れた時、それは、わざわざ、心して、正業から遠離した訳ではないものの、その時、心は1個の所縁しか取れない(が故に効力を発揮する事が出来る)ことから、理解出来る。

それがたまたまにしか生起しないのは、因と縁がない為である。悪語を敢えて遠離しようとしないのであれば、正語は生起しない。毒薬等の売買を意識的に遠離しないのであれば正命は生起しない。また、3個の離心所は、色界心と無色界心などの広大心において生起する事が出来ない。というのも、ジャーナの心は、アーナーパーナ・サティ似相を所縁に取るが故に、(ジャーナに入っているまさにその時) 意識的に嘘をついたり、殺生をしたり、毒薬などの売買をしたりする事は出来ないのである。こうした事から、広大心の中においては正語、正業、正命は生起することはない。離心所はまた、道心、果心などの出世間心において出現することもない。

(ここで言う) 正語、正業、正命は八正道の中の正語、正業、正命と同じであり、これらは出世間の心において出現するが、その時それらは同時に共に生起する。その時点での作用は遠離ではなく、断じ除く所の作用となる。24個の美心の中に、アラハンの8個の唯作心が含まれる。そして、アラハンの唯作心の中には正語、正業、正命は含まれないのである! と言うのも、道心において、すでに邪語、邪業、邪命を断じ除いてあるが故に。こうしたことから、アラハンの唯作心は、3個の離心所と相応することはないのである。

3. 悲、喜：

2つの無量心もまた、それぞれ個別に生起する。衆生が苦しんでいるのを見て、彼らの苦痛を取り除いてあげたいと思った時、悲の心が生起する。他人が何事かに成功・成就したのを見て、彼の成功を随喜するとき、喜心は生起する。悲心が生起するとき、喜心は生起しない。というのも、1つは衆生を憐憫する心で、もう1つは成功した衆生が対象であり、それぞれの所縁が異なるが故に。無量心もまた、たまたまに生起する。というのも、憐憫するべき衆生が存在しないとき、悲心は生起しないが故に。もし、成功・成就した衆生がいなければ、喜心は生起しない。

4. 邪見、慢：

この2つの心所は、貪根心において出現する。この2者は、五蘊への執着と関係がある。ただし、2者は、相反する本質において出現するため、同じ1つの心において、共存する事は出来ない。邪見は、間違った認識・認知において生じる。すなわち、真実の相に基づいて諸法を分析し得ていない、という事である。真実の相とは何であるか? 一切の有為法は皆無常、苦、無我である。邪見とは、それを常、楽、我、浄であると間違って認識・認知する事である。慢

(我ありという高慢心) は、自我(五蘊)への自己評価から生じる。すなわち、己は他人より優れていると思う事。または、己は他人より劣っていると思う事。または、己は他人と同等で

あると思う事。邪見は必ずや、4種類の、邪見と相応する所の貪根心の中において存在する。しかし、邪見と相応しない場合で、慢が生起しない場合もある。というのも、因と縁において、上に述べた3種類の状況の内の1つが具足して初めて慢に心が生起するが故に。こうした事から、慢の心は、たまたまに生起するのである、と言うのである。

5. 昏沈・睡眠：

この2種類の心所は、心をして沈ませ軟弱にして無力にする。結果、自動的、自発的な心、または無行なる心を生起させることが、できなくなる。というのも、無行の心は、鋭利で活発で、全くもって遅鈍ではないからである。こうした事から、昏沈と睡眠は、有行の不善心においてのみ出現する。4個ある有行の善心には生起しない。この2者は、不善心所であり、善心とは相応しないが故に。

表C: 52心所と89心の関係（P254の別表参照）

54個の欲界心と心所の関係

欲界には12個の不善心、18個の無因心、24個の美心（8大善心、8大果報心、8大唯作心）がある。今ここにおいて、その1つ1つの、心と心所の関係性を見ていくことにする。

1. 12不善心

(1) 貪根心（8）

① 悦具邪見相応無行一心：

(a) 7個の遍一切心心所：

触、受、想、思、一境性、命根、作意。

(b) 6個の雑心所：

尋、伺、勝解、精進、喜と欲。

(c) 4個の不善心所：

痴、無慚、無愧、掉挙（uddhacca）。この4個の心所は、必ず、全ての不善心と共に生起するものであつて、分離することはない。

(d) 貪：

貪心所が、生起する。これは、貪根心であるが故に。

(e) 邪見：

邪見相応であるが故に、必ずや、邪見心所が、生起する。慢はありえない。慢心と邪見は、相對する本質を有するが故に。邪見の生起する時、慢心は生起しない。慢心の生起する時、邪見は生起しない。

上のものを合計すると、19個の心所ということになる。嫉、慳、悪作は、瞋根心に属する。故に、貪根心の中において生起することはない。昏沈、睡眠は、ただ有行心において

のみ生起する。疑は、捨具疑相応心においてのみ生起する。その他の25個の美心所は、善心に属するため（ここでは）生起しない。

②悦具邪見相応有行一心：

〔悦具邪見相応無行〕と同等の、19個の心所を除けば、それは有行であるが故に、それに〔昏沈、睡眠〕を加えると、21個の心所になる。

③悦具邪見不相応無行一心：

邪見不相応であるが故に、邪見を取り除くと、残りは18個の心所となる。しかし、慢すなわち我ありという慢心は時折生起するが故に、慢が生起した時には、19個となる。これが生起しない時は18個である。

④悦具邪見不相応有行一心：

有行であるため、「昏沈、睡眠」を加えると20個または21個の心所になる。

⑤捨具邪見相応無行一心：

捨具であるため、喜はなく、故に喜を取り除けば、残りは18個の心所となる。

⑥捨具邪見相応有行一心：

有行であるため、「昏沈、睡眠」を加えて、心所は、20個となる。

⑦捨具邪見不相応無行一心：

邪見とは相応しないため、邪見を取り除くと、残りは17個となる。しかし、時に慢が生起するため、慢が生起したときは、18個になり、生起しないときの心所は、17個になる。

⑧捨具邪見不相応有行一心：

有行の為、「昏沈、睡眠」を加える。故に心所は、19個または20個になる。

(2)瞋根心 (2)

①憂具瞋恚相応無行一心：

(a) 7個の遍一切心心所。

(b) 5個の雑心所：

尋、伺、勝解、精進、欲。憂具である為、喜はない。

(c) 4個の不善心所：

痴、無慚、無愧、掉挙 (uddhacca) ・興奮 (Kukkucca) (この4個は、必ず全ての不善心と共に生起する。分離する事は出来ない)。

(d) 瞋：

瞋根心であるが故に必ず、瞋が含まれる。

(e) 嫉、慳、悪作 (Kukkucca)：

この3者は、同時に生起することはない。というのも、所縁が異なるが故に。例えば、嫉は、他人の成功、成就を嫉妬するもので、慳は、己の成功成就を吝嗇して、他人に分け与え事ができないのであるから、この2者の所縁は異なる為、同じ1つの心識刹那において生起する事は出来ない。悪作は、己の過去になした悪事を後悔するもので、

同じく所縁は異なる。この3個は、全て瞋根グループに属する。そのうち1個が生起すると、残りの2個は生起しない。ただし、3個とも生起しない時もある。というのも、それらは因と縁があつて初めて生起するが故に。因と縁のない時それらは生起しないのである。（ここにおいては）貪、見、慢はない。というのも、それらは貪根グループに属するが故に。結果、合計17個の心所があることになる。時には、嫉、慳、悪作の中の1個が生起することがあるが、その時は、18個の心所ということになる。

② 憂具瞋恚相応有行：

有行であるから、これに「昏沈、睡眠」を加えるときは、19個または20個の心所になる。

(3) 痴根心 (2)

① 捨具疑相応一心：

(a) 7個の遍一切心心所。

(b) 3個の雑心所：

尋、伺、精進。勝解は、（心が）決定する、ということ。しかし、この段階では、（心は）疑惑、躊躇の段階にあるため、勝解は生起しない。また、捨具であるため、喜はない。心が疑惑を持つ時、欲望は非常に弱いため、（ここでは）欲はない（こととなる）。

(c) 4個の不善心所：

痴、無慚、無愧、掉挙（興奮）、この4個は、必ず全ての不善心所と共に生起する。

(d) 疑：

捨具疑相応には、かならず「疑」が含まれる。合計15個の心所となる。貪、見、慢は貪根グループに属するため、（疑は）生起しない。瞋、嫉、慳、悪作は瞋根グループに属するため、（疑は）生起しない。有行ではないため、昏沈と睡眠は含まれない。

② 捨具掉挙（興奮）相応一心：

合計15個ある。

(a) 7個の遍一切心心所：

必ず生起する。

(b) 4個の雑心所：

尋、伺、勝解、精進。捨具であるため、喜はない。心が、非常に散乱しているため、欲はない。

(c) 4個の不善心所：

痴、無慚、無愧、掉挙。

2. 18個の無因心。

(1) 不善果報心 (7)

- ① 捨具眼識
- ② 捨具耳識
- ③ 捨具鼻識
- ④ 捨具舌識
- ⑤ 捨具身識

この5個の不善果報心は、ただ、7個の「遍一切心心所」のみ存在するため、これらの心は、非常に弱い。そのため、その他の心所は、生起する事が出来ない。

⑥ 捨具領受心：

7個の「遍一切心心所」に3個の雑心所「尋、伺、勝解」を加えて、合計10個の心所となる。

⑦ 捨具推度心：

7個の「遍一切心心所」に3個の雑心所「尋、伺、勝解」を加えて、合計10個の心所となる。

領受心は、合計2個：

不善果報心の捨具領受心と、善果報心の捨具領受心に、唯作心の五門轉向心を加えて、この3個を「眼界心」と言う。89種の心の中において、3個の眼界心を除くと、残りの86種は、「意識界」と呼ぶ。

(2) 善果報心 (8)

① 捨具眼識

② 捨具耳識

③ 捨具鼻識

④ 捨具舌識

⑤ 捨具身識

この5個の善果報心には、みな、ただ7個の「遍一切心心所」があるのみなので、これらの心は非常に弱い。故に他の心は生起する事は出来ない。

⑥ 捨具領受心（意識・心）：7

個の「遍一切心心所」に3個の雑心所「尋、伺、勝解」を加える。悦具であるため「喜」を加えて、合計11個の心所となる。

⑦ 悦具推度心（意識界）：

7個の「遍一切心心所」に3個の雑心所「尋、伺、勝解」を足して、悦具であるため「喜」を足して合計11個の心所。

⑧ 捨具推度心（意識界）：

7個の「遍一切心心所」に3個の雑心所「尋、伺、勝解」を加えて、合計10個の心所となる。

(3) 唯作心 (3)

① 五門轉向心（眼界心）：

7個の「遍一切心心所」に3個の雑心所「尋、伺、勝解」を加えて、合計10個の心所。

② 意門轉向心（意識界）：

7個の「遍一切心心所」に4個の心所「尋、伺、勝解、精進」を加えて、合計11個の心所。

③ アラハン笑心（意識界）：

7個の「遍一切心心所」に5個の雑心所「尋、伺、勝解、精進、喜」を加えて、合計12個の心所。

3. 24個の美心所

(1) 欲界善心 (8)

① 悦具智相応無行：

(a) 7個の遍一切心心所。

(b) 6個の雑心所：

尋、伺、勝解、精進、喜、欲。

(c) 19個の遍一切美心心所：

この19個の心所は、全ての善心と共に生起する。

(d) 慧心所：

智と相応するため、慧心所は、必ず生起する。

(e) 3個の離心所：

正語、正業、正命は同時には生起しない。また、因と縁が揃って後、初めて生起する。例えば、意識的に悪語、邪命、良くない職業などから離れる（必要がある）。意識的に遠離するのでなければ、3個の離心所は生起しない。このことから、一切、すべて、因縁生の法であり、1個として我はない、ということがわかる。因と縁が具足するとき、ある種の心所が生起し、因と縁が不足するとき、その心所は生起しない（のである）。

(f) 悲、喜無量心所：

無量心所は、4個ある。慈、悲、喜、捨。慈は、無瞋に含まれることと、捨は中捨性心所のため、ここでは、ただ、悲、喜の2個のみを列挙する。悲と喜は、同時に生起することはないし、また、必ず生起するとは限らない。もしあなたが、他者の成功・成就を喜ぶ人間であるならば、喜無量心所が生起する。もしあなたが、他者の苦痛を憐憫するならば、悲無量心所が生起する。 $7+6+19+1=33$ 、合計33個または34個となる。

② 悦具智相応有行：

生起する心所は、「悦具智相応無行」と同じであり、数も同じ33個、または34個である。

③ 悦具智不相応無行：

智不相応であるため、1個の慧心所が不足している。合計32個または33個になる。

④ 悦具智不相応有行：

生起する心所は、「悦具智不相応無行」と同じである。合計32個または33個である。

⑤ 捨具智相応無行：

捨具であるため、喜がなく、智と相応するため、慧はある。合計32個または33個である。

⑥ 捨具智相応有行：

生起する心所は、「捨具智相応無行」と同じ。数量も、同じく合計32個または33個。

⑦ 捨具智不相応無行：

捨具であるため、喜がない。智不相応であるため、慧がない。故に、合計31個または32個となる。

⑧ 捨具智不相応有行：

生起する心所は、「捨具智不相応無行」と同じ。数量は、31個または32個。

(2) 欲界果報心 (8) 果報心には、「正語、正業、正命」という離心所はない。また、無量心所である「悲、喜」もない。智慧と相応すれば、慧がある。智と不相応であれば、慧はない。悦具の場合は喜があり、捨具の場合は喜はない。

(3) 欲界唯作心 (8) 唯作心には、「正語、正業、正命」という離心所はない。無量心である「悲、喜」は同時には生起しない、必ず生起するとは限らない。その他の原則は前と同じ。

15個の色界心と心所の関係

1. 5個の色界善心。

(1) 初禪：ある人が初禪に入るとき、合計33または34個の心所が生起するか、それはそれぞれ、以下の通り。

① 7個の遍一切心所

② 6個の雑心所

③ 19個の遍一切美心心所

④ 悲、喜無量心所：

必ずしも生起するとは限らない。ただし、かわいそうな衆生を所縁に取って、悲無量の初禪に入るならば、悲無量心所が生起する。

⑤ 1個の慧心所。

合計33個または34個。

(2) 第二禪：

尋がないだけで、他は皆同じ。合計32個または33個。

(3) 第三禪：伺がない。他は皆同じ。合計31個または32個。

(4) 第四禪：喜がない。他は皆同じ。合計30個または31個。

(5) 第五禪：楽受が、捨受に替わる。その他は同じ。合計30個。

2. 5個の色界果報心

3. 5個の色界唯作心

この2者の、生起するところの心所は、5個の色界善心と同じであるため、ここではいちいち説明しない。

12個の無色界心と心所の関係

1. 4個の無色界善心

2. 4個の無色界果報心

3. 4個の無色界唯作心

無色界の善心、果報心、唯作心は、色界善心の第五禪と同じものである。生起する心所は、30個である。

40個の出世間心と心所の関係

1. 出世間道心

我々は、初禪ソータパナ道心を例にして説明する。ある人が、初禪の禪定に入り、その後に
出定して、初禪に相応する所の名法を、無常、苦、無我と観照し、その結果、その時、
ソータパナ道心を証するならば、そのときの彼の心路には、36個の心所が生じているが、
その内容は、以下の通り。

(1)7個の遍一切心心所。

(2)6個の雑心所。

(3)19個の遍一切美心心所。

(4)3個の離心所：

正語、正業、正命。この3者は、出世間心の中においては、同時に生起するものである。
すなわち、八正道の中の正語、正業、正命である。（離心所は、世間心の中においては、
個別に生起するものである）。

(5)1個の慧心所：

(6)慧心所の出世間心における作用は、四聖諦を徹底的に知ること以外に、また同時に、鋭利な
剣がそうである様に、3種の結を、徹底的に断じ除くことができる。

第二禪ソータパナ道心は、「尋」がないため、合計35個の心所となる。第三禪ソータパナ道心は、
「伺」がなく、故に34個の心所、第四禪ソータパナは「喜」がなく、合計33個の心所となる。

禪の修行者は、第五禪まで等達したなら、その後に、出定して、第五禪に相応する心所、心流、
心路過程を観察し、その後に、ソータパナを証する。尋、伺、喜を捨棄しているものの、捨具で
あるため、彼の第五禪のソータパナ道心は、33個の心所となる。初禪から第五禪までの
サカダーガミ道心、アナガミ道心、アラカン道心において生起する所の心所は、ソータパナ道心
と同じであるが、しかし、その中に存在する慧心所が断じ除く結果が異なるのである。

2. 出世間果心

初禪から第五禪までの、出世間果心において生起する所の心所は、出世間道心と同じものであ
る。

心と心所の作用の実例

ここに幾つかの実例を上げる。心と心所の作用への理解を深めて頂きたい。

1. 欲界善心

あなた方は今、私のダンマトークを、喜んで聞いている。ダンマへ敬意を払い、ダンマトーク
を聞くことは、一種の善業である。もし、自発的にこのダンマトークを聞きに来たのならば、

この状況下において生じる心は何であろうか？「悦具智相応無行一心」である。これは心王で、相応する心所は33個である。それは、それぞれ

7個の遍一切心心所： 「触、受、想、思、一境性、名法命根、作意」

6個の雑心所： 「尋、伺、勝解、精進、喜、欲」

19個の遍一切美心： 「信、念、慚、愧、無貪、無瞋、中捨性、身軽安、心軽安、身軽快性、心軽快性、身柔軟性、心柔軟性、身適業性、心適業性、身練達性、心練達性、身正直性、心正直性」

及び最後の1個「無痴」：すなわち慧根である。

合計34個の相応名法。無痴は、この時、因果を知るという役割を演ずる。すなわち、ダンマトークを聞くことは、善業であることを、知る、のである。もしあなたが中捨の心で、自発的にダンマトークを聞きに来て、かつそれが善業であると知るならば、「捨具智相応無行一心」が生起する。「捨具」である故、「喜」を取り除き、残りは33個の相応名法となる。

また別の例として、あなたは中捨の心でダンマトークを聞きに来たのではあるが、ダンマトークを聞くことが、善業であることを知らない。しかしながら、自発的に来たということは、「捨具智不相応無行一心」ということになる。

合計35個の名法。「喜」と「智慧」は取り除く。というのも、「智不相応」であるが故に、「智慧」は取り除くのである。中捨の心でダンマトークを聞きに来ているため、喜はない。この種の状況は、布施の場合にも応用できる。あなたが布施するときの心を研究してみなさい。もし、智不相応であるならば、どのような果報がもたらされるか？結生識が生じるときもまた、智不相応の場合がある。結生識に慧根を欠くとき、ジャーナを証することが出来ないし、道果を証することも出来ない。故に、智相応は、非常に大事な事柄であることがわかる。

2. 色界善心

もし禅修者が、アーナーパーナ・サティの修行をする時に、初禅に入る事が出来たならば、その時、34個の名法がある事になる。34個の名法の全ては、1個の目標に向かう。心の特徴は目標を識知する事であり、相応する心所もまた、心が目標を識知するのを助けるのである。故に、34個の相応名法全ては、その目標へと向かう。心王は「尋、伺、喜、楽、一境性具初禅善心」であり、相応心所は33個である。

(1) 触：

アーナーパーナ・サティの似相とジャーナ心を繋ぐ。

(2) 受：

初禅がもたらす楽しさを体験する。

(3) 想：

これは安般の似相であると標識する。

(4) 思：

全ての相応名法を目標に向かう様奨める。アーナーパーナ・サティ似相に対して、行動を起こす。その後それ自身は、色界善業をなす。

- (5) 一境性：
全ての相応名法を、アーナーパーナ・サティ似相に、統一的に集中せしめる。一境性を正定にまで高める。
- (6) 名法命根：
相応名法の生命を維持して、相応名法がそれぞれの所縁に対して、仕事の遂行ができる様にする。
- (7) 作意：
相応する名法をアーナーパーナ・サティ似相まで、導く。
- (8) 尋：
相応する名法をアーナーパーナ・サティ似相に向かわせる。
- (9) 伺：
相応する名法を何度もアーナーパーナ・サティ似相に安置する。
- (10) 勝解：
これはアーナーパーナ・サティ似相であると、確定する。
- (11) 精進：
全ての相応名法を、アーナーパーナ・サティ似相において安定させる。
- (12) 喜：
全ての相応名法をして、アーナーパーナ・サティ似相に対して喜ばしめる。
- (13) 欲：
アーナーパーナ・サティ似相を得たいと思う。
- (14) 信：
アーナーパーナ・サティ似相によって初禪が得られるという確信。
- (15) 念：
アーナーパーナ・サティ似相に対して、常に念じて忘れないこと。アーナーパーナ・サティ似相が、心流の中において、途切れない様にする。
- (16) 慚：
(17) 愧：
ジャーナを証した時、すでに慚愧は存在する。それらは、悪をなさないという、1種の心の状態である。
- (18) 無貪：
アーナーパーナ・サティ似相をば、己のものであると執着しないこと。サーリプッタ尊者は、初禪、第二禪、第三禪、第四禪に入り、その後出定すると、顔が輝いていて、それを見て、アーナンダが「尊者、あなたは出定すると、顔が輝いている」と言った所、サーリプッタ尊者は以下の様に答えた。「私が初禪、第二禪、第三禪、第四禪に入っているとき、【私】という意識はない。」彼の心は、ジャーナに対して、私のものである、との思いは持たないのである。
- (19) 無瞋：
アーナーパーナ・サティ似相に対して、粗野な態度を取らないこと。
- (20) 中捨性：
心と心所のバランスを取ること。その中の1つでも、何らかの方面へ偏向しないこと。

- (21) 身軽安：
- (22) 心軽安：
心所と心を軽やかに、安らぐ様にする。
- (23) 身軽快性：
- (24) 心軽快性：
心所と心を軽快にする。
- (25) 身柔軟性：
- (26) 心柔軟性：
心所と心を柔軟にする。
- (27) 身適業性：
- (28) 心適業性：
心所と心が柔和になって、操作が容易になること。アーナーパーナ・サティ似相を所縁に取るのが容易になる。
- (29) 身練達性：
- (30) 心練達性：
心と心所の練達と熟練。
- (31) 身正直性：
- (32) 心正直性：
心と心所の正直、狡猾でないこと。
- (33) 無痴または智慧：
全ての色界心と無色界心には、必ずこの智慧が存在する。智慧とは、アーナーパーナ・サティ似相を、了知することである。

合計で33個の心所がある。1個の心王をたすと、合計34個の名法となる。

禅修行者が、初禅から第二禅に定力を上昇させる時、幾つの名法が生起するか？心王とは何か？我々は、論蔵五分法に基づいて分析してみよう。第二禅は、尋を除くので、「伺、喜、楽、一境性具第二禅善心」で、33個の相応名法がある。

もし、禅修行者が第三禅を証することに成功したならば、第三禅は「喜、楽、一境性具第三禅善心」であり、伺を取り去った後、32個の名法が残る。もし、彼が第三禅を捨てて、第四禅に入るならば、31個の名法ということになる。心王は「楽、一境性具四禅善心」である。第五禅の心王は「捨、一境性」で、捨が、楽にとって代わる。同じく31個の名法である。

2. 出世間善心

出世間善心には、合計37個の名法がある。禅修行者が、名色法の無常、苦、無我の三相の内の1つを観じて、ソータパナ道心を証するとき、合計37個の相応名法がある。心王は、ソータパナ道心。ソータパナ道心は善心、ソータパナ果心は果報心である。ソータパナ道心は、涅槃を所縁に取る。37個の名法は、以外の通り：

- (1) 触：
触の作用は涅槃とソータパナ道心を、繋げる事。

- (2) 受：
涅槃の静寂を体験する事。
- (3) 想：
これは涅槃であると、標識する事。
- (4) 思：
相応する名法が、涅槃に向かう様に、促す。思は、この時点では、業を累積しない。
というのも、ソータパナ道心は、煩惱を断じ除き、輪廻を短縮するものであるが故に。
- (5) 一境性：
全ての相応する心法を涅槃に集中させる。
- (6) 名法命根：
相応する名法の生、住、滅を維持して、それらが、滅し去る前に任務を完成させられる
様にする。
- (7) 作意：
相応の名法を涅槃へと向かわせる。
- (8) 尋：
相応の名法を涅槃に投入する。
- (9) 伺：
相応の名法を何度も重ねて涅槃に安置する。
- (10) 勝解：
これは涅槃であると、確定する。
- (11) 精進：
相応の名法を、涅槃に向ける。
- (12) 喜：
涅槃を好む。この喜は、貪ではない。
- (13) 欲：
涅槃を獲得したいと思う。
- (14) 信：
涅槃に対して確信がある。
- (15) 念：
相応名法をして、涅槃を忘れないこと。
- (16) 慚：
(17) 愧：
両者は、（人が）涅槃を証悟したならば、もはや、悪を成そうという欲望がなくなると
いう、その様な1種の心の状態。
- (18) 無貪：
涅槃を己のものであるとして、執着しないこと。
- (19) 無瞋：
涅槃に対する1種の慈愛の態度。涅槃に対して反抗的な態度でないこと。
- (20) 中捨性：
心と心所のバランス（を取ること）。

- (21) 身軽安：
- (22) 心軽安：
- (23) 身軽性：
- (24) 心軽快性：
- (25) 身柔軟性：
- (26) 心柔軟性：
- (27) 身適業性：
- (28) 心適業性：
- (29) 身練達性：
- (30) 心練達性：
- (31) 身正直性：
- (32) 心正直性：

この19個の遍一切美心は、必ず善心と共に生起し、全て涅槃を所縁に取る。

- (33) 無痴：

無痴とはすなわち智慧のことである。この1刻において四聖諦を徹底的に知ること、1番目は、苦諦を知り、2番目に集諦を除き、3番目に滅諦を体験し、4番目に道諦を展開する。こうしたことから、無痴というこの智慧は、ソータパナ道心を証悟した時に四聖諦を徹底的に知るのである、と言える。

- (34) 正語：

- (35) 正業：

- (36) 正命：

八正道の中の3個である正語、正業、正命は、それぞれ言葉による悪行、身体による悪行、および邪命へ傾かんとするとき、それを断じ除くことを執行する。3者は、出世間心においては、同時に生起する。

八正道の中の正見は慧心所、正思惟は尋心所、正精進は精進心所、正念は念心所、正定は一境性心所である。故にソータパナ道心は、八正道を同時に展開すると、言われる。上の事から、36個の心所がある（ことがわかる）。その上で、ソータパナ道心には、37個の名法があるが、全て安止出世間心において同時に生起する。

次に、初めて道果（ソータパナ）を証したときを例にして、説明する。ソータパナ道心の心路過程は以下の通り：波・断・意・遍・近・随・種・道・果・果・有分心

- (1) 有分波動
- (2) 有分断
- (3) 意門転向
- (4) 遍作
- (5) 近行
- (6) 随順
- (7) 種姓
- (8) 道心
- (9) 果心

(10) 果心

意門轉向、遍作、近行、随順はすべて、行法の無常、苦、無我の三相の内の1つを所縁にとるもので、欲界心である。種姓は、出世間心ではなく、欲界心である。それは、涅槃を所縁に取るものの、煩惱を断ち切ることは出来ない。道、果は出世間心である。故に、上に述べた37個の名法は、道心と果心において生起することが分かる。

業のみ存在し、業造者（業を造る者）はいない

漫長な輪廻の中において、我々は、絶え間なく善悪の業を成し、業を成した後に、果報を残すことになる。この漫長な輪廻の中において、誰が業を成しているのか？誰が果報を受け取っているのか？一箇の、永遠で恒なる靈魂が存在するのか？

ブッダゴーサ尊者は、上座部の偉大な論師であるが、彼は《清浄道論》の中において、以下の様に言う：

「業の作者はいない。異熟の受者もない。ただ、諸々の法の転起に過ぎない。これは正しい見解である。」

ある人が私に問うた。今日のダンマトークは、以前に学んだものと完全に異なる。以前は、永遠で恒なる如来蔵があると言っていた。ただ、私は52個の心所の中において、どれが永遠で恒なる如来蔵であるか、探してみたが、見つけることができなかった！全ては因縁の法である。

思心所自体が業を成す者で、受心所が果報を受け取っているのである。故に「思」自体が業造者、「受」は報いを受ける者、ということになる。この2種類の心所以外に、別途、人が業を成しているということはなく、報いを受ける人、というのもしない。

第3章

雑項の概要

心の自性に基づいて、我々は、53個の相応の法を分析した。1個の心に、52個の心所を加え（て説明してきたが、ここでは）89種の心に対して、受、因、作用、門、所縁および6種類の依処に関する分析をする。

89種の心は、全体でもって1法または1種の究極法として、見なされる。というのも、それらは、同じ特徴：すなわち目標（所縁）を識知するという特徴を持っているからである。そして52個の心所法は個別の法として見なされる。というのもそれらは異なる特徴を有しているが故に。例えば、念の特徴は目標を忘れない事であり、受の特徴は感受されることであり、想心所の特徴は標識することであり、思心所の特徴は業を造ることである等々、1つ1つの心所は皆それ自身の特徴を有している。こうしたことから、1個の心王に52個の心所を加えて、合計53個の相応名法があると言うのである。

受の概要

受の分析

受は、遍一切心心所の内の1つである。その作用は味を体験すること。目標の内の1つである所の、「味」を受用する作用を擁している。

味を味わうのは、私、ではないのであるが、多くの人々は、受を1個の我（が存在している）と思ひなして、己自身が、それを体験しているのだと思ってしまう。

何か（食べ物）を食べてそれがとても甘いとして、それは、受が、甘さを体験しているのであって、私が、体験しているのではない。この1個の心は、必ず、ある種の受と相応するため、心进行分类するとき、受は重要なファクターとなる。この章においては、全ての心を、その相応する受に基づいて分類することにする。三分法と五分法の、2種類がある。

1. 三分法：

「感受」をただ単純に分析するならば、受は、3種類に分類することが出来る。それは、苦、楽、不苦不楽受である。三分法の中において、楽は「身体の楽受」と「心の楽受または悦受」の2者が含まれる。苦受は「身体の苦受」と「心の苦受または憂受」の2者が含まれる。

2. 五分法：

受を「根」に基づいて分析するならば、5種類に分ける事が出来る。楽、苦、悦、憂、不苦不楽受（捨受）である。楽受は、身体の楽受を言う。苦受は、身体の苦受である。

(1) 楽受：

特徴は、喜ばしい触所縁を体験すること。作用は、相応の法を増長させること。現起（現象）は、身体の楽しさ。近因は、身根（すなわち身浄色）。1個の喜ばしい所縁が、身根に衝撃するとき、楽受が生じるが、この種の楽受は、相応の法全体を帶動して、他の相応の法をも、楽しくなる様にせしすることができる。

(2) 苦受：

特徴は、喜ばしく無い触所縁の体験。作用は、相応の法の減衰。現起は、身体が痛苦に遭うこと。近因は身根。例えば、人が病気になると、心の中において苦受が生じる、など。苦受は相応の名法を減衰させる。相応の名法は、そのために、エネルギーが無くなる。人はこのことから、元気がなくなる。これが、苦受の作用である。

(3) 悦受：

純粹に、精神的な方面、心の悦受を指す。その特徴は、喜ばし所縁の体験。現起（現象）は、内心の愉悦の状態。近因は、輕安。

(4) 憂受：

特徴は、喜ばしくない所縁の体験。作用は、所縁の不愉快な体験。現起は心内において痛苦に遭遇すること。近因は、心所依処。

(5) 捨受：

特徴は、体験されたもの・ごとに関して、その中（立）性を重視すること。作用は相応の法を増長させることも減衰させることもない。現起は平静な状態。近因は喜心の無いこと。

刹那から刹那への修行

ゴータマ仏陀は言う：

「全ての受は苦である。」

というのも、全ての受は皆無常の圧迫を受けているが故に。多くの人々は、受を「私（私のもの）」と見なすのが好きである。そのために、受の無常を感受すること（感じ取ること）ができない。例えば、他人に侮られた時、その侮りの音声がひとたび耳根を衝撃するとき（触）、12因縁法に基づいて「触により受生じる」のであるが、その時、苦受も生起する（侮りであるが故に）。

例えば、ある人があなたを3分間罵ったとしよう。その3分の後には、罵りの言葉は消失する。しかし、我々の苦受は引き継ぎ存在する。因と縁が消失したのに、なぜ苦受は、なお存在するのか？というのも、我々はこの受を我だと（訳者注 = 私が感じているのだと）執着するが為に、それは消え去ることがないのである。

このことは、修行するにおいて、非常に重要な事柄である。もし、あなたがこの点をしっかりと覚えておく事が出来たならば、修行において何か得る所が必ずあるに違いない。修行するのは、我執を断つためであるが、では、それは如何にして断つのであるか？罵りの音声が耳根を衝撃するとき（触）、苦受が生じるが、この時、2つの方面から着手することができる。正念と智慧である。

1. 「正念」とは苦の生起を知る事である。「正念」とは覚知の事であり、生起した所の身、受、心、法を覚知するのである。もし、苦受の生起を知らないのであるならば、当然、苦受の消失も知る事が出来ない。というのも受とは、刹那に生じ、刹那に滅するのであるが故に。

《アビダンマ論》を学ぶのは、日常生活または禅の修行に活用する為である。仏教を学ぶ事は、書物を暗記する事ではなく、日常生活の中において溶け込ませ、応用するためである。

そうして初めて、法の喜びを感じる事ができる。

2. 「智慧」は、苦が何故生起したのかを、探求・追求する。「智慧」は七覚支の中の「択法覚支」に他ならない。苦受の生起は、耳に喜ばしくない所の音声は衝撃した時、触によって受が生じた為である。凡夫には苦受があり、アラハンにも苦受があるが、両者の違いは「智慧」があるかないか、である。

苦受の生起を正念でもって知る。そして、智慧でもって苦受は触によって生起する事、触と受は共に無常であり、心所にすぎない事を、了知する。音声は無常であり、生起した受もまた無常である。故に、触の無常、音声の無常、受の無常を観じなければならない。この様に観ずる事ができれば、執着を生むことはなく、また、受を我（＝私のもの）であると、誤認することも無い。というのも、我々は、因縁の法を見るが故に（＝因によって生じた法である事を見る）。

受は因縁の法である。それは「触」を因として生起する。故に、受は、根本的に元々から、我、我のものではないのである。この様に知るならば、我執を放下することができる。受を我、我のものと思う時、我執は生じる。

ひとたび苦受に執着しなくなったならば、瞋恨は、受と共に生起することはない。というのも、瞋恨は苦受の中において潜伏するが故に。なお、貪愛は楽受の中において潜伏する。

苦受が生起する時、もしあなたが、苦受を無常として、因縁の法として、無我として観ずる事が出来ないのであれば、瞋恨は必ず生起する。これは心の慣性的反応である。我々は仏法を知っているから、仏法を良く活用して、心の慣性的反応を断じなければならない。瞋恨が生起しない時、我々は悪業をなさない（意念による悪業を含む）。

煩惱は、3種類の分類する事が出来る。

1. 1番目は「潜在的煩惱」。例えば、瞋恨。侮りの言葉を聞かない時、潜在的煩惱は生起しない。
2. 2番目は「上昇的煩惱」。ひとたび、侮りの言葉を聞くや否や、潜在していた煩惱は意念上に顕れる。上昇的煩惱を取り除かないならば、身体と口の業をなす事になる。
3. これが3番目の煩惱で「違反性煩惱」という。これは粗い煩惱である。「上昇性煩惱」が意念まで上昇して意業が生じた時、それはその時点では、それほど重大なことではない。ただし、その時点で、それを取り除かないのであれば、相手に怒鳴り散らして、語の業（口による業）を造るか、または、手を上げて他人を殴るなどして身体の業を成してしまい、その結果「違反性煩惱」になってしまう。

故に、上昇性煩惱が生じたその刹那に、どうにかしてそれを制止しなければならない。その内の方法の1つとして、それをば、無常、因縁の法、無我であると観ずる事である。善の心所が生起する時、不善心は生起しない。例えば瞋恨は不善心所であるが、智慧でもって無常を了知するのは善心所である。このことから、我々が無常を観ずる時、瞋恨は生起する事がない（ことが分かる）。（煩惱が生起した）その時点で、即刻煩惱を滅し去る、これが修行である。

上に述べた観法は、サーリプッタ尊者の用いた方法である。サーリプッタ尊者は《象跡喩経》の中において、以下の様に言う：

「音声の衝撃が耳に届いた時、1種の受が生起するが、我々は、この受がどの様にして生起したのかを追求しなければならない。ひとたび、この様に追求するならば、受は触によって生起したことが分かる。この時、すかさず触の無常、受の無常を観じなければならない。

サーリプッタ尊者は、仏陀の2人の上席弟子の中の、智慧第一者（右側の上席弟子）であり、非常に忍耐力があり、忍辱の出来る尊者であって、その名声は千里先にも轟いていた。ある1人のバラモンが、サーリプッタの名声を聞いた後、「それは彼が未だ試練に会った事がないからだ。1人の人間の内心は、真に忍辱であるかどうかは、試煉を受けて後に初めて分かる。どれどれ、私が1つ試してみよう」と言った。この人物はトラブルメーカーである。アラハンを試そうなどと、すでに出発点から間違っている！

ある日、彼は、サーリプッタが托鉢の為に歩いているのをみて、サーリプッタの背後を、手で思い切り叩いた。通常、人がこのような状況に出合った時、一体誰が私を殴るのか？なぜ私を殴るのか？と疑問に思い、身を翻して後ろを確認し、今ここに生起する所の苦受を観ずるのを忘れてしまうものであるが、しかし、サーリプッタ尊者は、思い切り強く殴られたにも関わらず、後ろを振り返ることなく、引き続き前へと歩いて行った。

彼には苦受がないのか？有る。彼にも苦受はある。しかし、彼は（状況に応じて）間一発、（己の心を）観ずる作業を始める事が出来た。（己に衝撃してきた）触によって生起した受は無常であると観ずる事ができた。彼は前に向かって歩きながら、無常、無常と観じていたのである。聖者の反応は、我々凡夫とは異なっている。凡夫は「我相」（私はどうであるか）「他人相」（他人はどうであるか）に執着するのである。

修行者は、どの様な感情が沸き起こったとしても、すぐに（心を）観ずることを実践しなければならない。誰が私を打ったのか？誰が私を罵ったのか？誰が私を馬鹿にしたのか？を探求する必要はない。その様にすれば、心中には必ず煩惱が生起する上に、煩惱は業を造る故（探求は避けるべきである）。修行者は、己自身の煩惱を解決しなければならないのであって、他人のそれを解決するのではない。

もう大分前のことであるが、私が未だこの種の観を上手く実践出来ていなかった頃、ある時、大広間に大勢の聴衆が集まっている時に、1人の居士が私に対して、大きな声でもって、大変失礼な言動をしたことがある。私は自分の自尊心（自尊心は我有りという傲慢、慢心の1種である）が傷つけられた様に感じて、鬱々と不愉快になり、心中に多くの苦受を感じた。

その当時、私は苦受の無常を観ずる事が出来ないだけでなく、この苦をば、我のものとみなし、私は苦しい、私は虐められたと考えて、苦の上に更に苦しみを重ねていた。そんな中、私は突然、サーリプッタ尊者の言葉を思い出した：

「苦受は何故生起するのであるか？」

私は更に深く研究して、元々は彼が私に向かって吠え叫んだ音声に耳に苦かったものであって、それが私の耳根にぶつかり、苦受が生じたものである。私は即刻、触の無常・受の無常を観じるや否や、次の1刹那の内に、全ての苦痛は消え去ったのである。

日常生活の中、十中八九、不如意な事柄に占められている。皆様には上に述べた方法を是非とも、覚えておいて活用して頂きたい。苦受を観ずるだけでなく、楽受も観じなければならない。楽受が生起した時、我々は嬉しくなり、得意になって、楽受もまた無常である事、観ずる事を忘れてしまう。そうなると、楽受が無常であることを忘れてしまい、楽受を常であると考えて、それは私、私のものであると、執着してしまうのである。

ひとたび楽受が消失すると、苦受がそれにとって代わり、再び苦受が始まる。修行とは、今・ここにおいて、痛苦から解脱する、抜け出すものであって、禅の修行を修めるその最中に（限つてのみ）、痛苦から抜け出す様にするものではない。今・この感情から抜け出すこと、その中から解脱することは、日常生活の中において即刻実践できるのである。

心による分類

善果報身識は唯一の楽具である。不善果報身識は唯一の苦具である。「89心分類総覧表」参照の事。

無記心の奥、15個の無因心の内面の内のその1個は、8個の無因善果報心で構成されているのであり、その第5番目は身識楽具である。89種の心の中において、唯一善果報身識のみが楽具で、身識と相応する受は、楽具と呼ぶ。これが唯一の、楽具である。

不善果報身識は唯一の苦具である。7個の無因不善果報心の、その5番目は身識苦具で、これはまた唯一の苦受でもある。受は5種類ある：楽受、苦受、悦受、憂受、捨受。苦受と楽受は身体の方面を言う。89種の心の中において、1個しかないのは苦であるか、または楽である。

62種の心は悦具である。すなわち：

1. 18種類の欲界心：4個の貪根心（貪根心は8種類ある。4個は悦具で、4個は捨具である。）
12の欲界美心と2個の無因心。すなわち悦具推度心と生笑心。
2. 44種は、初禪、第二禪、第三禪、第四禪の廣大及び出世間心に属する。88種の心の中において、62種は悦具の属する、とすれば良く、それらを1つ1つ暗記する必要はない。89種の心の内、ただ2種類の心、すなわち瞋恚に相応する心のみは、憂具である。すなわち、12個の不善心の中の、9番目と10番目：憂具瞋恚相応無行一心、憂具瞋恚相応有一心である。

その他残り55種の心は捨具である。それらは：

1. 6種の不善心：4個の貪根及び2個の痴根
2. 14種の無因心
3. 12種の欲界美心
4. 3種の第五禪心
5. 12種の無色禪心
6. 8種の出世間心：すなわち、第五禪に属する道心と果心

結論

1. 合計5種の受：
楽受、苦受、悦受、憂受、捨受。
2. 89 / 121種の心：
1個の楽具、1個の苦具、62個の悦具、2個の憂具、55個の捨具。

因の概要

因の分析

<因の概要>において、因（または根）は6個ある。すなわち：貪、瞋、痴、無貪、無瞋、無痴である。以前にすでに説明したが、「因とは、それと相応するところの心と心所を堅固と成した心所」のことである。有因の心は、樹木のように安定してかつ堅固である。無因の心は、苔のように弱々しく不安定である。

心の分類

18種類の心は無因である。すなわち：五門転向、双五識、領受、推度、確定及び生笑心。その他残りの全て、71個の心は皆、因を有する。我々は「89心分類総覧表」を参考にして以下の事が分かる。18個の無因心：すなわち7個の無因不善果報心、8個の無因善果報心、3個の無因唯作心。残りの71個は、皆有因心である。あるものは二因、あるものは三因で、あるものは一因である、等々。

71個の有因心の内の12個は不善心であり、2個は純粹に痴と相応する。1因しかないものは、それぞれ：「捨具疑相応一心」と「捨具掉挙相応一心」である。残りは、10個の不善心と12個の智不相応の欲界美心となるが、それぞれ2個の因がある。すなわち、合計22個の心は、2個の因がある。残りの47個には、3個の因がある。すなわち、12個の、智に相応する欲界美心、35個の廣大と出世間心。すべての四禪八定と出世間善心、果心は、皆、必ず3個の因を有する。

作用の概要

我々は89種の心を有する。この89種の心は、14種的作用、働きをする。

作用の分析

<作用の概要>（の章）では以下の様にいう。作用は14種ある。すなわち：

1. 結生
2. 有分
3. 転向
4. 見る
5. 聞く
6. 臭う
7. 味わう
8. 触
9. 領受
10. 推度
11. 確定
12. 速行
13. 彼所縁
14. 死亡

ここでは、89心を、作用に基づいて分類する。《アビダンマ論》では、各種の異なる心は、合計で14種の作用を執行する、と言う。これらの作用は、心路過程の中において、及び心路過程の外、すなわち離心路過程の中において、発生するものである。

1. 結生 (paṭisandhi) :

心は、結生の作用を受け持つ。受胎（または生まれ変わる）そのタイミングにおいて、執行する所の作用を結生、と呼ぶ。すなわち、新しいこの生と前世を連結させる。この作用を執行する結生心 (paṭisandhicitta) は、1世毎に、1度だけ出現するのみである。すなわち、生まれ変わるその1刹那において、である。果報心（八大欲界果報心）は、人または天神に生まれ変わる時に結生の役割を果たす事が出来る。

2. 有分 (bhavaṅga) :

パーリ語「bhavaṅga」の意味は、「生命」(bhava、有)の「成分」または「要素」(aṅga)である。すなわち生命にとって、欠けることが出来ない条件のこと。故に「bhavaṅga」とは、生命が存在する為の要素を言う。心の作用は、1世の中において、受胎（または生まれ変わり）から死亡までの間の生命の流れが中断する事のない様にする事である。結生心が生・滅した後、次に引き続いて生起するのは、有分心である。この有分心と結生心は、同じ種類の果報心である。しかし、異なる作用を執行する。有分心は、生命の流れ（生命流）が中断しないよう保持するのである。心路過程が発生していない時、有分心は、1刹那毎に生・滅する。（その作用が）最も鮮明なのは夢を見ないで熟睡している時である。しかし、目が覚める過程において、有分心はまた諸々の心路過程の中において、無数回出現する。1つの心路過程が収束する毎、もう1つ別の心路過程が発生する前、必ず有分心は発生して、生命流が中断しないようにする。ある種の目標が、根門（眼、耳、鼻、舌、身の5個の根門）を衝撃するとき、有分心は、（発生することが）中断となり、活発な心路過程が生起して、当該の目標を識知する。ひとたび、心路過程が収束（終息）すると、有分心は即刻、再度生起する。それは次の心路過程が発生するまで継続する。この様に、不活発の段階においては、有分心は、1つ毎の心識刹那の中において生・滅する。それはまるで河の流れの様に、2個の心識刹那の中において連続して静止しつづけるすることはない。有分心もまた生・滅するのである。

3. 転向 (āvajjana) :

目標が、何か1つの根門または意門に衝撃する時、即刻、「有分波動」(bhavaṅga-calana)という名の、心識刹那が発生する。有分心は、この事によって、1個の心識刹那を波動させた訳であるが、次に発生する心識刹那は、名を「有分断」(bhavaṅga-upaccheda)といい、有分心の流れはここにおいて中断される。次に引き続いて生起する所の心は、すなわち、五門の目標に向けて転向するかまたは、意門を目標として、意門に向けて転向するものであるが、この種の作用は、「転向」と呼ばれる。五門心路過程の中において発生する転向は「五門転向」と言う。意門心路過程においてのものは「意門転向」と言う。我々はまず、五門心路過程とは何か？を理解しよう。「極めて大きな所縁である眼門心路過程」を例にとると：

表D: 撰の作用 (Kiccasavgho) 一覧表 (P260の別表参照)

表E: (P262の別表参照)

(1) 過去有分：

(心の作用の始まりの) 第1個目は、過去有分である。

(2) 有分波動：

1個の所縁が眼根を衝撃すると、有分は波動し始める。なぜ波動するのか？例えば、結婚している男性が、妻と道を歩いていて、突然、美しい女性のイメージが彼の眼根を衝撃したならば、そばに妻がいたとしても、彼の心はやはり波動するものである。同様に、有分心にも元々の、それ自身の所縁がある：過去世における臨終速行心の所縁である（ちょうどこの今の妻の様に）。今、色所縁が眼根を衝撃したので、有分は波動した（波動を発生させた）のである（この例で言えば、美女が眼根を衝撃し、彼の心が波動したのである）。

(3) 有分断：

有分が波動（を起こした）後それはすぐに止まる。というのも、これから後、心路過程が始まるが故に。色塵が眼根を衝撃すると眼門心路過程が生起する。故に、有分心は中断される。もし有分心が中断しないのであれば、眼門心路過程は生起する事が出来ない。有分心は離心路過程であるが故に。

(4) 五門転向：

有分の断が生じた後、心は、己の目標に向かって転向することを開始する、それが何の目標であるかを知るために。例えば、色彩、音声、味.....等々の5個の塵境である。

(5) 眼識：

もし、目標が色塵であるとき、即刻、眼識が生起する。音声である場合は耳識が生起する。香りである場合は鼻識が生起する。味である場合は舌識が生起する。触である場合は身識が生起する。所縁が何であるか、それによって相関する識が生起するのである。

(6) 領受、推度、確定：

次はその目標を領受し、その目標を推度（推定）し、その目標は色所縁であろう、などと確定する。

(7) 速行心：

その後は7個の速行心。

(8) 彼所縁：

最後は2個の彼所縁。ここにおいて、心路過程全体は完結する。

心は、異なる作用を実行することが出来る。例えば、結生、有分、転向の作用である。89種の心の五門転向心は、五門において転向の作用を実行する。

4. 見る：

5. 聞く：

6. 嗅ぐ：

7. 味わう：

8. 触る：

五門の心路過程の中において、転向の刹那の後に生起する心は、当該の根門を衝撃した所の、目標を直接識知する。

9. 領受：

10. 推度：

11. 確定：

五門の心路過程において、眼識などの後、順序に従って生起する心。確定心は、五門心路過程の中において確定の作用を演じるが、それは、意門における意門転向心とは同じ心である。

12. 速行 (javana)：

パーリ語「javana」の直訳の意味は「快速に走る」である。心路過程の中において、これは確定の後の心識作用に位置づけられる。それは、一列の心（通常は7個の同様の心）によって執行される。目標に向かって「快速に走って」、それを識知するのである。道徳の角度からみると、この速行の段階は最も重要だといえる。というのも、善又は不善の心は、この段階で生起するからである。我々は以下の例をもって、「一列の心（一般的には7個の同様の心）による執行」について説明する。12個の不善心の、1番目「悦具邪見相応無行一心」は速行の役割を果たす事ができる。連続して7回生滅する。もし、八大善心の1番目「悦具智相応無行一心」の生起ならば、7回生起して、速行の役割を果たす。7回生滅した後、速行は終結する。

13. 彼所縁 (tadārammaṇa)：

パーリ語「tadārammaṇa」の意味は、「自分自身を所縁とする」である。すなわち、（彼所縁の心が）縁に取る前の、速行がすでに識知した所の目標を、己自身の目標とする事、である。欲界心路過程の中において、五門の目標が、「極めて大きな目標」、又は意門の目標が「明晰な所縁」である時、この種の作用は、速行の段階の後、2個の心識刹那を執行する。しかし、目標が不鮮明であったり、ぼやけていたりする場合、及び心路過程が欲界に属するものでない時、この種の作用は生じる事がない。彼所縁の後（又は彼所縁が発生しない時すなわち速行の後）、心の流れは再び有分に沈み込む。「それを所縁として取る」の「それ」は、速行心を指す。もし、速行が取るのが音所縁であるならば、彼所縁が取るのも又音所縁である。彼所縁は、五門の、極めて大きな所縁心路過程の中において2個の心識刹那を生起させるが、又、意門の明晰・明瞭な所縁心路過程の中においても、2個の心識刹那を生起させる。全ての五門心路過程のなかで、必ず彼所縁が発生する訳ではない。その目標が極めて大きな時以外は（発生しない）。同じく、1つ毎の意門心路過程が皆彼所縁が発生させるとは限らない。その所縁が極めて明晰明瞭な所縁である時（以外は発生しない）。禅定（四禅八定）、出世間心路過程

は、彼所縁を生じない。彼所縁は、欲界においてのみ発生する。

14. 死亡 (cuti) :

死亡心は今世における最後の、1個の心である。今世の終結である。この心と結生心と有分心は同じ種類の心である、すなわち皆同じく離心路過程心であり、心路過程心の外に属する心である。死亡心と、後の2つ (の心) との違いは、作用が異なるだけである。すなわち、(死亡心は) 死亡を執行するのである。人の一生の、最後の1個の心識は死亡心である。死亡心と結生心、有分心は、同じ1つの心ではあるが、ただ「1個の心は、異なる作用を演じる事が出来る」。それは丁度、同じ1人の人間が、例えば私は今、教師を演じているが、実家に帰ったならば、父母の前では娘を演じる様なものである。(修行上の) 指導者の前では私は学生になるし、同様に1個の心、その生まれ変わろうとする時、その心識刹那は結生という役割を演ずる事となる(この心は結生心という)。生命の流れを継続させるに当たり、生命流が中断しない様にする為、(心は) 有分という役割を演ずるが、これすなわち有分心という。最後の1個の心識刹那は(人が) 死なんとする時、すなわち死亡の作用を担うが、これを死亡心という。故に心は、その役割によって14種類に分ける事ができる。それらの中において、19種類の心が結生、有分及び死亡の役割を果たす。それらは2種類の捨具推度心、8大果報心、及び9個の色及び無色界果報心である。この19種の心は非常に重要である。2個の捨具推度心とは、1個は善で、1個は不善である。

作用による心の分析

もし、心の種類と作用を分析するならば(前者と後者は同じものである場合もある)、その違いはこの章を読む限りでは、それほど困惑する事はないと思われる。勿論ある種の心は、その作用の内容にそって命名されているのではあるが、それはただ方便、その方が便利な為であり、それはその心が、唯一その作用のみを担当しているのだ、という意味ではない。そうではなく、1種の心は、その命名された所の名称とは異なる作用、何種類もの役割を果たすことも可能である。例えば、推度心の作用は推度、推定であり、その作用によって命名されているのであるが、それはまた、彼所縁の作用も演じる事ができるし、また、結生心、有分心、および死亡心の作用を受け持つ事もできる。

1. 結生、有分、死亡の作用 :

前にも説明した通り、1つの世(生)においては、同じ種類の心が、結生、有分と死亡の役割を演じている。(有情が) 生まれ変わる時、この種の心は新しい世と前の世を連結する作用を果たす。生命の流れの過程の中において、無数の回数の有分心の流れが出現するのも又、この心(の作用故)であり、それは生命流が断絶しない様に、維持する役割を果たしているのである。死亡の時、死亡心として生起するのも又この心であり、1世の終結を示すものである。19種類の心が、上述の3種類の作用を執行することができる。

「89種の心の分類総覧表」の中で、15個の無因心の下に、7個の無因不善果報心の標記があるが、その内の7番目の「捨具推度心」は、推定の役割を果たすだけでなく、結生、有分及び死亡心の役割も果たす。すべての、地獄、畜生、餓鬼、阿修羅の四悪道に生まれた衆生の

結生識は、皆、捨具推度心であり、12個の不善心（又は不善業）によって引き寄せられて生じた所の、不善果報心である。生まれつきの視力障害、聴力障害、言語障害のある衆生と、ある種の低級の天神は「捨具善果報推度心」が関係する。障害者として生まれるのは不善業の果報ではあるが、人間社会に生まれたのは、善の業の故である。多少、善の程度が弱かったのだ、と言える。

欲界善趣に生まれ変わって人間又は天神になること、その上に、何らの障害者ではない場合、この3種類の作用を執行するのは、八大善果報心（の内の1つ）である。八大善果報心の、あるものは智と相応し、あるものは智と相応しない。あるものは悦具であり、あるものは捨具である。あるものは二因であり、あるものは三因である。故にこの10種とはすなわち、不善捨具推度心、善捨具推度心及び八大善果報心であり、欲界輪廻に属するものである。

色界天に転生した梵天の、その結生、有分と死亡において出現するのは、5種類の色界果報心（の内の1つ）である。四無色界天に転生した梵天の、その結生、有分と死亡において出現するのは、それぞれ個別な、相応の四無色界果報心である。

5種類の色界果報心とは、初禪果報心、第二禪果報心、三禪果報心、四禪果報心と五禪果報心である。「の1つ」の意味は、その人がどの一界に生まれるかに依る為である。もし、初禪によって生まれたならば、初禪果報心、という事になる。

四無色界果報心は、空無辺処果報心、識無辺処果報心、無所有処果報心、非想非非想処心。空無辺処善心によって往生したならば、無色界の空無辺処に生まれることになる。その結生識、有分識と死亡識は空無辺処果報心である。この様に、合計19種の心が、結生、有分と死亡の作用を執行しているのである。

2. 転向の作用：

2種類の心が、転向の作用を執行する。それらは、五門転向心と、意門転向心である。

3. 見る、聞く、嗅ぐ、味わう、触の作用：

見る、聞く、嗅ぐ、味わう、触の作用を執行するのは、同じく2種類ある。不善果報心には、眼識、耳識、鼻識、舌識、身識がある。善果報心も又眼識、耳識、鼻識、舌識、身識がある。

4. 領受の作用：

領受の作用を受け持つのも又2種類ある：善果報と不善果報領受心。

5. 推度の作用：

推度を執行する3種類の作用とは、不善捨具推度心と、2種類の善なる、捨具推度心と悦具推度心。

6. 速行の作用：

2種類の転向心の他、全ての、55個の不善、善、（聖）果及び唯作心は皆、速行の作用を執行する。速行は業を造る。故に、この55個の、速行を執行する心は、非常に重要である。それぞれ、12不善心、21善心、4果報心（出世間果心）、18唯作心（2個の転向心は除く）。21個の善心とは：8個の欲界大善心、5個の色界廣大善心、4個の無色界廣大善心、4個の出世間善心である。これらは皆、速行の役割を果たす。例えば、廣大善心初禪には、初禪意門心路過程がある

が、これらの生起は、速行心である。八定も又速行心が生起する。ソータパナ道心も速行心として生起する、1回生起するのみではあるが。欲界において、速行心は7回生起する。色界においては、速行心は何度も生起する事が出来る。出世間善心（ソータパナ道心、サカダーガーミ道心、アーナガーミ道心、アラカン道心）において、速行心は、ただ1回のみ生起する。四果報心（すなわち出世間果心）は、ソータパナ果心、サカダーガーミ果心、アナガーミ果心、アラハン果心。これらもまた、速行果心になる事が出来る。それは、果定に入る時に生起する。例えば、ソータパナが果定に入ろうとする時、ソータパナ果心は速行心として生起する。そしてそれは、彼が出定するまで続く。18個の唯作心も又速行の作用を果たす。それらは8大唯作心、5個の廣大唯作心、4個の廣大唯作心及びアラハン生笑心である。アラハンが、世間の何かの物・事を見て微笑する時に生起するのは速行心であり、これをアラハン生笑心と言う。

7. 彼所縁の作用：

彼所縁を執行する11種の心は、果報心である、8大果報心、3個の推度心。3種の推度心が彼所縁の作用を執行する時、同時に推度の作用を執行することはない。

各種の心が執行する作用

1. 2種類の捨具推度心は、5種類の作用を執行する。結生、有分、死亡、彼所縁と推度（推定）である。
2. 8大果報心は、4種類の作用を執行する。結生、有分、死亡と彼所縁である。
3. 9広大果報心は、3種類の作用を執行する。結生、有分と死亡。
4. 悦具推度心は、2種類の作用を執行する。推度と彼所縁。
5. 確定心（意門転向心）も又2種類の作用を執行する。確定と転向である。それは、五門心路過程においては確定と呼び、意門心路過程においては意門転向心と呼ぶ。
6. その他の心は、速行、3眼界（五門転向心と2個の領受心）、2つの五識（眼識、耳識、鼻識、舌識、身識。5個は善なるもの、5個は不善なるもの）：（心が）生起するときは、ただ1種類の作用のみ執行する。例えば、眼識は見るという作用のみ執行し、耳識は聞くという作用のみ執行する、等。この事から、ある種の心は、5種類の作用を執行し、あるものは4種類の作用を執行し、あるものは3種類の作用を執行し、あるものは2種類、あるものは1種類を執行する（事が分かる）。

1. 54個の欲界心

(1) 12個の不善心の中の8個の貪根心、2つの瞋根心、2つの痴根心：

ただ1つの作用を執行する。すなわち速行。

(2) 18個の無因心：

- ・ 捨具五門転向：転向の作用を執行する。ただ1個の作用のみを執行する。

- ・捨具眼識：2個の眼識がある。不善又は善。ただ1種の作用のみを執行する。
- ・捨具耳識：2個の耳識。善のものと不善のもの。ただ聞くという作用のみ執行する。
- ・捨具鼻識：2個の耳識。善のものと不善のもの。ただ嗅ぐという作用のみ執行する。
- ・捨具舌識：2個の舌識。善のものと不善のもの。ただ味わうという作用のみ執行する。
- ・苦身識：不善の果報、ただ1個の触の作用のみ執行する。
- ・楽身識：善の果報、ただ1個の触の作用のみ執行する。
- ・捨具領受：2個。善のもの及び不善のもの。ただ1個の、領受の作用のみ執行する。
- ・捨具推度：2個。善のもの及び不善のもの。結生、有分、死亡、推度（推定）、彼所縁等の5個の作用を執行する。不善捨具推度心は、四悪道における衆生の結生、有分、死亡の作用を執行する。善の捨具推度心は、先天的な障害を持つ衆生の結生、有分、死亡の作用を執行する。
- ・悦具推度：推度（推定）と彼所縁の、2つの役割を執行する。
- ・捨具意門転向：ただ1個の心。転向と確定の、2種類の作用を執行する。
- ・悦具アラハン笑心：ただ1個の、速行の作用を執行する。

(3)8個の善心：ただ1個、速行の作用を執行する。

(4)8個の果報心：結生、有分、死亡及び彼所縁等、4個の作用を執行する。これは、人類と天神における作用である。

(5)8個の唯作心：ただ1個、速行の作用を執行する。

2. 15色界心

(1)初禪から五禪までの、善心と唯作心：ただ速行の役目をのみ執行する。

(2)初禪から五禪までの果報心：結生、有分、死亡の、3種類の作用を執行する。

3. 12無色界心

(1)空無辺処から非想非非想処までの、善心と唯作心。ただ速行の作用のみ執行する

(2)空無辺処から非想非非想処までの、果報心。結生、有分、死亡の3種類の作用を執行する。

3. 8大出世間心、四道心と四果報心：どれも、ただ、速行の役割のみ執行する。総括するに、55個の心は、速行の役割を執行する。19個の心は、結生、有分、死亡の役割を執行する。それぞれの、2個の心は、転向、見る、聞く、嗅ぐ、味わう、触、領受の作用を執行する。3個の心は、推度の作用を執行する。1個の心は、確定の作用を執行する。11個の心は、彼所縁の作用を執行する。

門の概要

6種類の門がある。眼門、耳門、鼻門、舌門、身門及び意門である。目自体は眼門、耳自体は耳門、鼻、舌、身体も又同じ。ただし、有分心は、意門と呼ぶ。

門の分析

1. 目本体が門である：初めの五門（眼、耳、鼻、舌、身）は色法である。すなわち、5種類の感官の中にある浄色の事である。1種類毎の浄色は、それぞれ皆、1つの門である（眼浄色は眼門であり、耳浄色は耳門である等など）。浄色を通して、心路過程において生じた心と心所は、その目標を縁として取ることになる。また、浄色を通して、目標は初めて、心と心所に縁として取られる事になる。もし、眼浄色がないならば、眼門心路過程は生起する事が出来ない。故に、眼浄色は、眼門心路過程における諸々の心の門であり、それを通して、目は、色彩を識知する事が出来るのである。その他の根門の浄色とそれぞれの目標は、推して知るべし、である。例えば、耳浄色は、音声を縁に取る事によって、初めて、耳門心路過程を生起させる事ができるのである。
2. 有分は意門と（も）呼ぶ：有分は、前の五門とは異なる。意門（manodvāra）は色法ではなく、名法（nāma）である。すなわち、有分心で（も）ある。意門心路過程における目標に関しては、当該の心路過程の中の諸々の心は、意門を通してのみ、それを縁として取る。それは、他の何らかの浄色に依存することは、全くもってあり得ない。

心による分類

46種の心が、条件にもとづいて、眼門において生起する事が出来る。眼門の心路過程とは、過去有分、有分波動、有分断、五門転向、眼識、領受、推度、確定、速行（7）、彼所縁（2）。眼門において生起する事の出来る46種の心は、五門転向心（1）、眼識（2）、領受心（2）、推度心（3）、確定心（1）（以上の5種類の心は、意門心路過程においては、生起する事は出来ない。））、欲界速行心（29、12個の不善心、8個の善心、8個の唯作心、1個の生笑唯作心を含む）及び彼所縁（8）。

五門心路過程と意門心路過程は、同じではない。五門の所縁は、現在の所縁（例えば、今聞こえた、今見たなど）。意門の所縁は、過去のものでもよく、現在のもの、また、未来のものでもよい。

55種類全ての速行心は、みな、意門において生起する事が出来る。ただ22種類の心のみは、意門において生起する事が出来ない。それはすなわち五門転向、双五識、2種類の領受心、5個の色果報心及び4個の無色界果報心である。五門転向、双五識、2種類の受領心は、五門において生起する。

19種類の心（2個の捨具推度心、8個の大果報心、9個の色界と無色界果報心）は、「離門」と呼ぶ。それはすなわち、それらが執行する所の、結生、有分、死亡の作用は、5個の根門の中において発生する事がないし、また、新しい目標を受け入れる事もなく、1世の最後の1個の、心路過程の目標（すなわち臨終速行心の目標）をのみ、縁に取るが故に（この様に呼ばれる）。如何なる新しい目標も受け入れないが故に、五門において生起する事はなく、意門において生起する事もなく、ただ、離門においてのみ生起する。

所縁の概要

6種類の所縁がある。色所縁、音所縁、香所縁、味所縁、触所縁及び法所縁である。その内、色彩自体が色所縁で（も）ある。同じ様に、音自体が音所縁であり、香自体が香所縁であり、味自体が味所縁であり、地火風の3者は触所縁であり、法所縁とはすなわち浄色、微細色、心、心所、涅槃及び概念、の6種類である。

所縁の分析

パーリ語の中では、2個の語彙が、所縁を表す。その1つは「ārammana」で、意味は「楽、楽しみを対象にして縁に取る」である。もう1つは「ālamhana」で、意味は「引っ掛ける・引っ掛かる」。この事から所縁とは、心とそれに相応する心所が楽しむ、喜ぶ。または引っかかる、引っ掛けた所の目標、と言える。例えば、眼識は色（色彩、物質）を楽しむのである。故に、色は眼識の所縁である、と言う。

6種類の所縁

前5（色、音、香、味、触）所縁の、その1種毎は、以下の3種類の方式で識知（認識）する事が出来る。

1. 各々の根門心路過程、例えば、色は眼門を通して、音は耳門を通して、香りは鼻門を通して、味は舌門を通して、触は身門を通して、識知する。
2. 意門心路過程を通して（とは、どういう事であるかと言うと）、例えば、音声が耳根を衝撃する時、耳門心路過程が生起する。この時、耳門はただ、それが音声であるということのみ知り、この音声が何を意味しているのか、という事までは分からない。それは、意門を通してのみ知る事が出来る。故に意門は、音声をも知る事が出来る（と言える）。同じく、色塵が眼浄色を衝撃する時、眼門心路過程が生起して結果、これは色塵である、と識知するものの、しかし、これが何の色（色彩）であるかは分からない。意門を通って後、初めて、色（色彩）を知る事ができるのである。
3. 離心路過程を通して、と言うのは、すなわち、結生、有分と死亡（心の事）である。人が臨終の時に見る赤い色は、胎児が母胎にいる事による色所縁である。臨終速行心が赤い色を縁に取った後、人はすぐに往生する。次の世においての、最初の結生識は、前の1世の臨終速行心の所縁（赤い色）を所縁として取るものであって、死亡心の所縁を所縁として取るのではない。結生識が終了した後の有分識もまた赤い色を縁に取る。同じ1世の、死亡心もまた同様である。

6番目の所縁、すなわち法所縁であるが、これは、完全に、五根門によって識知されることがない。唯一、意門心路過程又は離心路過程心によってのみ、識知されるものである。

1. 浄色：

5種の感官の中の根門色法である。すなわち眼、耳、鼻、舌、身等の5種の浄色。

2. 微細色：

28種の色法から5種の浄色を除き、さらに7種の境色（色、音、香、味、地、火、風）を除いて、残った16種色法が、微細色である。水界はその中の1つである。

3. 心：

これも又法所縁の1種である。心は、目標を識知することができるが、しかし、心はまた、識知される目標、になることもある。例えば、先程、善心が生起したとして、そしてその善心はすでに過去のものとなったとしても、我々はそれを覚えておく事はできる。故に、心は法所縁である、と言える。

4. 52心所：

例えば、先程（体験した所の）楽を思い出す事が出来る。これらは全て、意門の心路過程を通して（体験して）いる。五門の心路過程ではない。

5. 涅槃：

有学聖者と、アラハンの意門心路の目標である。凡夫の目標にはなりえない。

6. 概念：

例えば、安那般那（アーナパーナ / 呼吸）は概念であり、十遍（地遍、火遍……）も又は概念である。これらもまた、意門の心路過程を通して、縁に取っているものである。この6個の法所縁は、意門心路過程と離心路過程によって初めて識知することが出来る。

依処の概要

欲界には、6種の依処がある：眼、耳、鼻、舌、身と心所依処である。色界には、鼻と舌と身体の3依処がない。無色界には、全く依処がない。というのも、依処というのは、全て色法であるが故に。無色界には色法はないのである。

依処の分析

色法の生存地（というのは、例えば）心と心所は依処に依存して生起する（等のことである）。依処とは、心の生起を支える所の、色法のことである。前5の依処と前5門（すなわち五浄色）は合致するものの、しかし、依処と門が、完全に一致するわけでもない。というのは、それは、心の生起に関して、異なる作用を有するが故に。心路過程における心と心所は、門を通して目標に接触する。依処とはすなわち、心と心所の生起を支える所の色法である、ということが出来る。

この作用上の差異は、非常に重要である。眼門心路過程の中において、眼識以外に、多くの種類の心が、眼門浄色を門として生起するが、しかし、眼浄色は、眼識の依処にしか過ぎず、その他の（諸々の意識の作用）もまた眼門の心的依処を利用している訳ではない。

例えば、眼門の心路過程は：五門転向、眼識、領受、推度、確定である。眼識は、眼浄色に依存して生起する。五門転向、領受、推度と確定は、心所に依存して生起するが、しかし、眼門

心路過程の中においては、眼識以外にも、なお多くのその他の心（が生起するがその心）は眼浄色に依存するのではない。依処と門は、同じではない。

門に関して、結生、有分と死亡としての、それぞれの心は「離門」である。すなわちどの門においても発生する事がない。しかしながら、名法と色法の2者の生存地において、如何なる心も、依処に依存しないで生起出来るものはない。無色界を除いて、色界と欲界の名法は、必ず依処に依存して生起するものである。

1. 心所依処 (hadayavatthu) :

多くのパーリ論師によると、それぞれの浄色を依拠としている双五識以外の、心所の依処は、一切の心の依処色（と同じ）である、と言う。実際には、《アビダンマ論》には、心所の依処に関しての、明確な説明はない。《アビダンマ論》の中の最後の一論である〈発趣論〉もまた、ただ「当該の色に依存して、意界及び意識界は生起する事を得る」と書かれているだけである。しかしながら、諸々の註釈書では、その「当該の色」をば、心所の依処であり、それは心臓の中の心室（の中の血液）である、と言う。それは、（心と同じく）生起しては滅し、生起しては滅しており、同じく生滅の法である。

2. 欲界等において :

欲の生存地（四悪道の衆生、人類と天神を含む）には、一切六依処（眼、耳、鼻、舌、身と心所依処）がある、生まれつきの視力障害者と聴力障害者を除いて。生まれつきの視力障害者は、眼識がなく、聴力障害者には耳識がない。色界天では、鼻、舌、身体の3つの依処が無い。この3つの門の体験は、その他の2門（目と耳）よりも比較的粗い為、高レベルの生存地の中に含まれない。

諸々の論師は（以下の様に言う）。当該の地（色界を指す）の有情もまた、これらの感官の外形を擁してはいるものの、しかし、浄色が無い為、嗅ぐ、味わう、触る為の、依処とする事は出来ない。故に、これらの感受もまた、色界天では発生しない、と言うことになる。梵天の色法は、非常に微細であり、鼻、舌、身体は非常に粗いものである。故に、彼らには、身体はあるものの、しかし身根はなく、身根が無い為に、痛みと言うものも無い。舌が無い為、食べ物を摂取したいと言う思いは無く、禅の悦を食としている。無色界天は、完全に依処が存在しない。と言うのも一切の依処は、色法によって構成されているが故に。

7識界 《アビダンマ論》の中において、すべての、89の心は、7種の識界に分けられている :

1. 眼識界：眼識。2個の心。
2. 耳識界：耳識。2個の心。
3. 鼻識界：鼻識。2個の心。
4. 舌識界：舌識。2個の心。
5. 身識界：身識。2個の心。
6. 意界：五門転向心、領受心2個。合計3個の心。
7. 意識界：その他の全ての心。すなわち、76個の心。

1. 欲界の7（識）界（眼識界、耳識界、鼻識界、舌識界、身識界、眼界、意識界）は、6依処（目、耳、鼻、舌、身体と心所依処）に依存して生起する。依処は全て色法である。
2. 色地の（梵天）4（識）界（眼識界、耳識界、眼界と意識界）は3依処（目、耳と心所依処）に依存する。
3. 無色地の1（識）界（意識界）は、如何なる依処にも依存しない。と言うのも、無色地は、どのような色法も存在しないが故に、どのような依処にも依存しないのである。

かを、確定するのである。その後、7個の速行心が生起し、その後に、2個の彼所縁が生起する。この一連の過程を、眼門心路過程と呼ぶ。

門、浄色、所縁、依処

心路過程への理解を深めるその前に、先にいくつかの語彙（専門用語）を知っておかねばならない。そうして初めて、心路過程が何であるかを、徹底的に理解する事が出来る。これらの語彙とは：

1. 門：

パーリ語では「Dvāra」と言う。心と所縁の境が交流する様の比喻として用いられる。所縁が門を通る事によって初めて、心は眼門心路過程を生起させる事が出来る。例えば、人が部屋に入ろうとしている時、必ず門を通る必要があるのと同じである。門を通過して、心と心所は目標に接触する事が出来、目標も又、心と心所に顕現することができる。例えば、先程述べた眼門であるが、色所縁が眼浄色に衝撃して初めて、眼門心路過程は生起する事ができる。眼門を通して心と心所は、ようやく色所縁に接触する事ができるのである。門は合計6種ある：眼門、耳門、鼻門、舌門、身門、意門である。

2. 浄色：

眼門は、眼浄色に依存して生起する。もし眼浄色がないならば、眼門は生起する事が出来ない。眼浄色は目（眼球）にあり、それは眼根と同意である。その他例えば、耳門は耳浄色を通さねばならず、鼻門は鼻浄色を、舌門は舌浄色を、身門は身浄門を、意門は、有分を通さねばならない。

3. 所縁：

もし所縁がないのであるならば、心路過程は生起しない。例えば、色彩が、眼根を衝撃しないならば、眼門心路過程は生起する事が出来ない。故に、所縁は非常に重要である、と言える。所縁と目標は、同じ意味である。心と、それに相応する所の心所は、同じ1個の所縁を縁に取って初めて、感覚、分別と認識の作用を生起せしめる事が出来るのである（というのも、心自体が目標を識知する活動そのものであるが故に）。所縁がなければ、心は生起する事が出来ないのである。

所縁に関する解釈は、以下の2種がある：

(1)心の為に楽を取るもの：

あなたがコーヒーを味わっている時、楽しさを感じているとしたならば、心が、コーヒーの味を楽しんでいるのだ、と言える。この時、所縁は、心の楽しみの対象である、と言う。

(2)心をして、目標に釘付けにさせるか又は心を目標にしっかりと張り付かせる：

コーヒーの美味を味わっている時、心はずっと美味から離れる事が出来ない。故に、心は、簡単に目標に釘付けになってしまうのだと言える。目標がなければ、心は生起する事が出来ない。所縁は6種ある。色所縁、音所縁、香所縁、味所縁、触所縁、法所縁である。触所縁は3種ある。前に述べた様に、地、火、風である。法所縁は、5浄色、16微細色、心、心所、

涅槃と概念（10遍、アーナーパーナ・サティ等）である。

4. 依処：

色法の生存地があって初めて、心と心所は、依処に依存して生起する事ができる。依処は、心が生起するのを支える（役割を担う）色法である。6種の依処がある：眼浄色、耳浄色、鼻浄色、舌浄色、身浄色、心所依処である。例えば、眼識は心であるため、眼識は必ず眼浄色という、この種の依処に依存して初めて生起する事ができる。我々には、89種の心があるが、目、鼻、舌、身体の5個の識を除いて、残りの心は全て心所依処に依存して生起する。心所依処は心臓本体ではなく、心臓の中の血液の中にある。そこでは非常に多くの心所依処が生・滅、生・滅している。1個の心は、ただ1個の心所依処に依存するもので、（役割を終えた後）直ぐに滅し去って、また別の心所依処が生起する。心所依処は、過去の業から生じる色法であり、業生色に属するものである。

名色の寿命

心の寿命は、心識刹那（cittakkhana）であり、1またたきの内に、数10億個の心識刹那が過ぎ去って行く。この事は、しっかり心に覚えておいて頂きたい。心の生・滅は、この様に非常に迅速なものである。心の生・滅はこの様に迅速ではあるものの、1つ1つの心識刹那は又3個の段階に分ける事ができる。それは生・住・滅であり、又生・老・死とも言える。滅とは死のことである。究極諦において、もし心を1個の「我（私）」とするならば、「我」の寿命は、たった1個の心識刹那であって、我々は1個の心識刹那においてのみ、生きているのである、と言える。心は生の段階において最も強く、最もエネルギーを有している！故に、心が生の段階にある時、色法を生じる事ができる。我々は、1個の心識刹那を対象に、心とは何であるかを、探求したい。

色法の寿命：色法も又、生・住・滅の3時を経る。しかし、この3時の占める時間は、17個の心の生・滅の時間に相当する。1個の色法の寿命は、17個の心識刹那である。すなわち、過去有分識から、有分波動、有分断.....から彼所縁まで、合計17個の心識がある。17個の心識が収束するや否や、色法の寿命も又、終了する。この事から、心の（生滅の）方が比較的速く、色法の（生滅の）方が比較的遅い事が分かる。故に仏陀は言う：

「もし心を「『我』」と見なしたいとしても（それは非常な速さで生・滅しているため）、色法を「『我』」と見なした方がまだましである」。

とは言え、勿論、2者の中において双方共に、「我（私）」というものは、ないのではあるが。心は生の時点が最も（エネルギーが）強く、色法は、住の段階が、最も強い。

心の顕現

次に、心路過程の説明に入る。心の顕現方式は2種ある。

1. 心路過程：

五門心路過程、意門心路過程。

2. 離心路過程：

結生識、有分識、死亡識。

有分識：

前にも述べたが、有分のパーリ語は、「bhavaṅga」で、この言葉は、「bhava」と「aṅga」とで構成されている。「bhava」は、有または存在する、の意味である。「aṅga」は、要素、の意味である。故に、「bhavaṅga」は、有または存在の要素、という意味となる。1生の内において、1番目の心識は、結生識であり、最後の心識は、死亡識である。結生識と死亡識の間において、非常に多くの心路過程が生起する。例えば、色、音、香、味、触、法の6種の塵があり、それらが目、耳、鼻、舌、身体、意の6根を衝撃する時、六門心路過程が生起する。六門心路過程が終結した後、もう1つ別の心路過程が未だ生起する前、その中間には空白が生じるが、心流を不断に維持する為、有分心が登場する。心流は、以下の2つの場面において、暫定的に中断する。

1. 阿那含（アナガーミ）又はアラハンが滅尽定に入った時、その心流は、暫定的に中断する。
2. アラハンが般涅槃に入った時、彼の心流は完全に断絶する。六門心路過程が終結して、もう1つ別の心路過程が未だ生起しないその前に、心流が断絶しない様、心流が不断に流れる様、有分心が生起する。故に、有分心の作用とは、結生識から死亡識までの間の心流を止めないことにある、と言える。有分心は果報心である。果報心と善心及び不善心を相対的に比較して見るに、果報心は業を造らない為、当然、比較的静かである。心路過程は、不善心か又は善心であるため、その波動は非常に強烈である。熟睡して夢を見ない時、有分心は生起する。夢を見る時、意門心路過程が生起する。この他、1つ1つの心路過程と、もう1つ別の心路過程の間には、必ず非常に多くの有分心が生起する。有分心の生起する回数が少ない程、その人の智慧は、鋭い事を表している。禪の修行で、アーナーパーナ・サティを観じている時、心が有分に落ち込む事があるが、それは、アーナーパーナ・サティの目標を忘れてしまったのである。有分心の生起が増々多い時、その人は、長時間、心の失念が続いているのだ、と言える。

心路過程：五門心路過程

五門心路過程は以下の通り：

眼門心路過程。耳門心路過程。鼻門心路過程。舌門心路過程。身門心路過程。

眼門心路過程を例にとると：

1つ1つの五門心路過程には、必ず17個の心識が存在する。というのも、色法の寿命が、17個の心識分にしか過ぎないが故に。眼門は、色を所縁に取る。故に、17個の心識が減すると、色法も又終息し、眼門心路過程も又、終息する。

眼門の17個の心識はそれぞれ：

過去有分、有分波動、有分断、5門転向、眼識、領受、推度（推定）、確定、速行、速行、速行、速行、速行、速行、速行、速行、彼所縁、彼所縁。

眼門心路過程は、色所縁を目標に取る。色所縁が、同時に、眼根（又は眼浄色とも言う）と有分を衝撃する時、1個の心識は消費される。これを過去有分識と言う。この心識は、生じるや否や滅し去ってすぐに存在しなくなる。心は途絶える事が出来ないが故に、1個の心が滅し去った後、もう1つ別の1個の心が必ず生起する。

2番目の心は、有分波動と言う。例えば、有る男性が妻を伴って外出した、とする。突然目の前にかわいい風情の女性が現れて、綺麗な色塵が彼の心を衝撃したならば、心は即刻波動し始める。この例の如く、有分心は、もともと己自身の所縁（妻）があったのであるが、別の色所縁（かわいい風情の女性）が現れてそれに衝撃すれば、それもまた、先の男性と同じく、波動し始めるのである。これを有分波動と言う。

有分波動が過ぎ去ると、この心は即刻滅する。滅し去ると、次の、もう1つ別の心が生起する。有分断である。新しい所縁が有分心を衝撃する為に、眼門心路過程が生起するのである。過去有分、有分波動、有分断の3個の有分心は、離心路過程に属する。有分が断しないならば、心路過程は生起しない。であるが故に、有分心は断されなければならない。心路過程に道を譲るのである。

有分断が滅し去った後、五門転向心が生起して、色所縁に向かう。その様は、まるで：「これは何だろう？」と問いかけている様だ。五門転向心は唯作心である。（89種の心識の中の無因心には、3個の唯作心がある。それぞれ五門転向心、意門転向、アラハン笑心である。）五門が所縁に転向した後、もしも（対象が）色所縁であるならば、眼識が即刻生起する。もしも、音声であるならば、耳識が即刻生起する。もしも味であるならば、舌識が即刻生起する。もしも匂いであるならば、鼻識が即刻生起する。

今（説明しているの）は色である。この場合、眼識が生起する。眼識の作用は見る（見える）である。この後、この心は滅し去る。眼識はただ見る（見える）だけで、対象が何の色彩であるか、どの様な形状であるか、までは全く知り得ない。我々は、こう問うかも知れない：眼識がただ見るだけで、それが何であるかを知らないならば、何故、私を見てすぐ（貴方方は）私が△△サヤレーであることが分かるのか？と。それは、心の生・滅が非常に早い故に、（心の）相続密集を看破することが出来ない為である。その為、貴方々は、一瞬にして、見た対象が何であるかを、判断してしまう。本当は、貴方が私を一目見て、私が△△サヤレーであると知った時には、すでに千々万々の意門心路過程が流れ去っているのである。

眼識が滅した後、領受心が生起して、色所縁を領受（受領）する。次に、また1つ心が生起するが、これを推度と言ひ、色所縁について推定する。領受と推度は、皆、果報心である。推度心が滅し去った後、次には確定の心が生起する。意門心路過程の中において、確定の心と言うものはないのであるが、それは、確定と意門転向は同じ1つの心であるが故に。呼び名方が異なるだけである。意門心路過程の中においては、その名は意門転向と呼ばれ、五門転向においては、確定心と呼ばれる。故に、確定心は唯作心である。この後に、7個の速行心が生起する。ここで、非常に重要な段階に入る。

いわゆる速行とは、迅速に目標に向かう（ものである）。眼門心路過程を例にとると、その目標は、色所縁である。故に、速行心は、それを識知する為に、迅速に色所縁へと向かう。心路過程の中において、眼識、領受等などの心は、1度だけ生じて作用するが、しかし、速行心は連続して7回生起する。善または不善の心は、ここにおいて生起する。例えば、12個の不善心の中の「悦具邪見相応無行一心」は、速行の段階において、7回生・滅する。速行が7回生起する、すなわち7回生・滅した後、次に生起する心は彼所縁と言う。この心は、合計2回生起する。

彼所縁、パーリ語は「tadārammaṇa」である。「ta」は、それ、の意。「ārammaṇa」は所縁の意。彼所縁とは、その所縁、と言う意味である。その所縁とは、すなわち速行心の所縁のことである。速行心の所縁を所縁として取る為、彼所縁、と呼ぶのである。欲界心路過程の中において、五門の目標が極めて大きな所縁である時、彼所縁は速行の段階の後に、2個の心識刹那を生起させる。いわゆる極めて大きな所縁とは、極めて体積が大きいのではなく、その、心への衝撃力が非常に大きい事を言うのである。この種の状況の下で、彼所縁は生起する（事ができる）。もし（目標の）心への衝撃力が弱い時、彼所縁は生起しない。

例えば、出かけようとして外に出た時、自分の子供が自動車に撥ねられたのを見たとして、この状況は、心への衝撃力は、非常に大きい。その為、彼所縁が生起する。例えば、赤の他人が貴方の目の前を通り過ぎた場合なら、その状況は、心への衝撃力は小さい為に、彼所縁は生起しない可能性がある。全ての色界心と無色界心の中において、彼所縁は生起しない。これが彼所縁の法則である。

全速力で走っている時に、止まろうとするならば、まず先に、少し速度を落としてゆっくり歩かなければならない。この彼所縁の作用とは、心が未だ有分に落ち込まない前に、先に（心を）落ち着かせる事にある。2個の彼所縁が生・滅した後、すなわち、17個の心識全てが生・滅した後、眼門心路過程は終息する。そして次に心は、有分に落ち込むのである。

1個の心路過程が終結した後、もう1つ（の心路過程）が生起する前、心流を中断させない為に、有分心が必ず生起する。。故に、1個の心路過程が終結すると、心は有分に落ち込む。また、心路過程全体の発生（の中に）は、私というものは（存在し）ない（私というものはかわりがない）。永恆の体験者というものの、または内部にいてコントロールする者は、存在しない。刹那に生・滅する諸々の心自身は、識知に関する全ての、なすべき作用をすでに完成させている。そして、識知の過程における相互の役割分担は、因果・縁起の法則に基づいているのである。

心路過程の中において、1つ1つの心は、全て「心の定法」によって生起する。それは、各種の異なる縁に依存して生起するもので、前生心、所縁、門及び依処色を含むものである。（心は）生起した後、心路過程の中において、それ特有の作用を執行した後、即刻滅し尽くして、次の心の縁となるのである。

心路過程全体の中において、1個の我（私・エゴ）というものは存在しない。全て因・縁和合の法によるのである。必要とされる縁、例えば第一に、眼門心路過程が生起するには、必ず所縁が必要である。所縁がなければ、心は生起する事が出来ない。視力障害者は、眼浄色がない為、眼門心路過程が生起する事がない。故に、眼浄色も又、1個の必要条件である事が分かる。

3番目は、前生心である。

4番目は門である。眼門心路過程が生起する為には、必ず眼門に依存しなければならない。故に、門も又、その内の1個の縁である、と言える。

5番目は無有縁である。例えば、1個の心が生起した後、もしも、（その心そのまま）滅しないのであれば、もう1つ別の心が生起する事ができない。前生心が滅し尽くさなければ、後生心は生起しない。これを無有縁と言う。

6番目は、光が必要である。光がないならば、眼浄色や色所縁があつたとしても、（周囲が）真っ暗では、ものは見えないのであり、この時は、眼門心路過程は生起出来ない。

7番目は、作為（manasikara）である。もし貴方が私をみたいと思わないで、目を閉じてしまえば、私を見る事が出来ない。私を見たいという作為がないならば、貴方は私を見る事が出来ない。この様に、種々の縁が相互に噛み合つて組み合わされて初めて、眼門心路過程の全体が生起されるのである。17個の心の中において、どの1つを取つても、我（私・エゴ）というものは含まれない。それぞれの心は、それぞれ特有の役割を演じた後、消失してしまう！これは非常に重要な正見である。この様に無我を理解する為には必ず、因・縁の法を理解しなければならないのである。

心路過程：意門心路過程

意門心路過程は、2種類に分ける事ができる：欲界心路過程、安止心路過程。

1. 欲界心路過程

(1) 随起的意門心路過程：

五門心路過程の後に、随起して生起する。

(2) 独立的意門心路過程：

五門を通過せずに、思惟を通して生起する所の心路は、独立的意門心路と言う。例えば、目を閉じて、過去の思い出を思い出したりする時、目、耳、鼻、舌、身体とは関係なく、思惟を通して回想しているのである。この心路の作用は以下の通り：有分波動、有分断、意門転向、速行、速行、速行、速行、速行、速行、速行、彼所縁、彼所縁。彼所縁は生起しない時もある。もし所縁があまり明瞭でない時、生起しない。これより他に、以前直接経験した事の有る感受又は物事を、再び感受したり、又は今現在、以前のあれこれの出来事を考える時、五門を通る必要がない。これらは全て独立的意門心路である。

2. 安止心路過程

(1) 世間安止心路過程：

色界安止心路過程。無色界安止心路過程。

(2) 出世間安止心路過程：

道心心路過程。果定心路過程。滅尽定心路過程。

同様に、2番目の意門心路過程は、先に、全ての、支離滅裂なものごとを全体的に識知する。2番目の意門心路過程全体で、当該の所縁を識知した後、3番目の意門心路過程が、形状を認知せんと作用する。その後、第4番目の意門心路過程において、見ているものが蓮の花と言う名を持つものであることがわかるようになる。ある論師は、先に名称を知って後に、形状を知るのだと主張する。また別の論師は、4個の意門心路過程だけではなく、6個または8個ある、と主張する。例えば、レディーサヤド一等。我々は、余り微細に探求する必要はない。ただ、1番目の心路過程は過去所縁を識知するもので、その次が、全体を総括的に識知し、次に形状、その後に、名称を知ることとなる、と知っておけば良い。ここに至って、それが蓮の花であることが、明瞭に見いだせるようになるのである。

これは蓮の花であると知った後、心は、反応し始める。もしも、蓮の花が好きであるならば、貪根心が生起する。8種の貪根心の内の、その中の1種が、速行の段階において7回生・滅する。もし、蓮の花が嫌いであるならば、2個の瞋根心の内の1つが生起する。貪根心であっても、瞋根心であっても、ただ7回生起すれば、終息する訳ではない。というのも、一瞬の瞬きの内に、数10億個の心が、走り去るのであるが故に。我々は現在、心の速度をゆっくりスローにして説明しており、故に、貴方は、一瞬の瞬きにおいて、数10億個の心が走り去るのを、想像して欲しい。蓮の花を愛でる時間は、一瞬だけではなく、5分程はあるであろうか。数10億に5分を掛けると、数えきれないほどの貪根心が湧いて過ぎ去るのである。1つ1つの不善心は、不善果報を生じせしめる。不善心と善心は、業を造る心であり、一度業を造ったならば、我々の生命流の中において、業力を残す事になる。時期が熟せば、業力は果報を生み出す。もし、何事に対して貪欲を起さず、見るもの全てに貪欲、聞くもの全てに貪欲、匂うものに貪欲、味わうものにも貪欲、触るものにも貪欲である場合、生命流の中において、それが習気（習慣・気質）として残り、貪根心の強力に強い人間になってしまう。こうした事から、人々は、1つ1つの反応に細心の注意を払わなければならない。それは、業力として、残留するが故に。

眼門心路過程の中にも速行心は存在する。速行心は、身・口・意の業を造る。しかし、五門心路過程の速行心が造る業は、あまり重くない。というのもこの段階では、所縁は余り明確でなく、（心の）反応は強烈ではなく、造られた業は、非常に重いと言うことはないからである。しかし、意門心路過程になると、目標がますます明確になる為、反応もまた強烈になって来て、生起する所の、貪欲、瞋恚、痴（愚かさ）もまた強烈になる。（心の）反応が強烈である時、造られた業もまた強化される。

この様に、意門心路過程の中において、身・口・意の業が強化されて、造られる。7個の速行心のその1つ1つが業を造り、生命流の中において業力を残す。そして、期が熟するのを待って果報が生じる。我々はなるべく、一切の不善業を避け、常に善の思い考えでもって、己が対面している色、音、香、味、触、法等の6塵に対応しなければならない。例えば常に、勇気ありおおらかで、慈愛あり忍辱し、誠実で、慈悲と憐憫でもって、一切の衆生に対応する事。又は一切の、われが体験する所、見る所、聞く所の諸々の事柄をば、善の念で対応する事。そうすれば、生命流の中において、良好な業を残す事が出来き、結果、次の生では比較的良好な環境の中に生まれる事が出来る。我々は、その為出来るだけ完全な人格形成を目指すべきであり、それは又、己の修行にも役に立つものである。

こういう事であるから、修行は生活の中から始めるべきである。もし、煩惱・習気が非常に重いのであれば、禪の修行では、座るや否や、瞋恚の心が立ち上がり、修行は成功しない。もし、日頃から常に善念でもって一切に対応するならば、生活の中において、心は柔軟になり、禪の修行も実践し易くなる。故に、ただ禪の修行の時にだけ煩惱を何とかしようとするのではなく、普段の生活の中において、細心の注意を払わなければならない。もし、善念でもって一切の現象、物事に対応する事ができるならば、実は、社会全体的に利益をもたらしているのである。世界の平和は個人から始まる。もし個々人が、持戒清浄であり、不殺生、不偷盗、不邪淫、不飲酒、不妄語であれば、実は十分に、社会全体の平和に貢献しているのである。

生活の中における慣性的反応は、我々の習気（習慣/気質）になる。習気は、雪だるまの様で、ころがる内にますます大きくなる。もし、貪欲の習慣性を直さないのであれば、貪欲はますます強くなる。同じく、ある種の人々は、瞋根心が特別に重く、善を実践している時でさえも瞋心を起こしている。例えば、布施をしようという時、多くの人がいるのを見て怒る。他人が自分より多く布施するのを見て怒る。どんな事柄にもいちいち怒る。この様な人は、生命流の中において、強大な習気を残し、最後には瞋の性格を形成する。この種の性格は、まさに人類の習気なのである。習気を変えるためには、如意作意が必要である。

如理作意

貪が生起した時、32身分（32の身体部分）を観察するのも良い。すなわち、身体を32の部分に分けて、観察する：頭髪、体毛、爪、歯、皮膚、筋肉、腱...その後は、身体の中の器官、例えば、肝臓、脾臓、大腸、小腸、糞便など。順序に従って、1つ1つ観察し、糞便を観察したならば、貪は、断ずる事ができるに違いない。

もう1つ、貪欲を滅する方法は、白骨観である。スリランカにTissaという比丘がいたが、彼は行・住・坐・臥全てにおいて白骨観を実践した。ある日、彼は托鉢の為に外出したが、その時もまた白骨観を実践していた。この種の修行方法は、行処正知（gocarasampajañña）と言う。すなわち、何処へ行くにも、行・住・坐・臥において禅修の業処（=己に課した禅の手法・課題）を身から離さず、実践するのである。

Tissa比丘は、托鉢の時、手には鉢を持つものの、しかし、心の中で実践しているのは白骨観である。この時、1人の婦人が夫と喧嘩をした為、実家に帰ろうとしていて、道でTissa比丘に出会った。彼女はTessa比丘を見ると、にっこりと、笑った。仏陀は言う：

「男性は女性の声に抗えない。」

彼女が笑い始めた時、もし、Tissa比丘が、己の心を業処においていないのであれば、彼の心の中に、貪欲が生まれたかも知れない。しかし、白骨観は内部も外部も観ずることが出来る。内観は己の白骨を観察し、外観は他人の白骨を観ずるのである。故に彼は笑い声を聞いた途端、すぐに外観で白骨を観察することに切り替えて、その結果、ただ女性の並んだ歯だけが見えて、姿形は見えなかった。歯もまた白骨観の一部分であり、故に、彼は即座に白骨を不浄として禅定に入った。禅定に入った後、出定し、彼は引き続き内部の名色の無常、苦、無我を観察して、その場で

アラハン道果を証悟したのである。その時夫が妻を追いかけて来て、比丘に出会ったので、彼に尋ねた

「尊者にお尋ねします。貴方は、女性を1人見かけませんでしたか？」

尊者は答えて

「私は、女性は見ませんでした。ただ、白骨が1体、通り過ぎました。」

故に、如理作意又は正念正知を修行することは、非常に多くの悪心の生起を防止する事ができる。悪心がひとたび生起するならば、すぐに念を転じなければならない。悪の念を善の念に転じるのである。例えば、誰かに対して怒ったならば、又は、嫌いな人に出会ったならば、瞋根心が継続して、その結果、（悪心が）肥大化し易いが、その様な事がない様に、出来れば慈愛の心を送って念を転じるのが良い。人によっては、それは実践するのが難しい事かも知れない。相手を骨の髄まで憎んでいる時、それでも尚、慈愛を送るのは本当に難しい！！！仏陀は言う：

「長い輪廻の中において、あなたはこのような衆生を見つけ出す事は出来ない。かつて、あなたの妻でなかった人、あなたの夫でなかった人、あなたの父母でなかった人、あなたの子供でなかった人、あなたの姉妹でなかった人、あなたの兄弟でなかった人を」と。

故に、過去世において、その人は、あなたの親戚や友人であったかも知れないと、想像することは出来る。この様にすれば、その人に対して、怒りの心は起きない。それでも成功しないのであれば、その他の方法を考えてみるのも良い。《清浄道論》では、多くの方法が記述されているので、参考にする事が出来る。

他人に対して瞋恨心が生起するのは、その人が己（我々）に対して害をなしたか、又はその人の無明、貪、瞋が、あなたを（我々を）傷つけたのであろう、からである。この時、我々は我相、人相、衆生相（＝私はこう思う、よき人々はこうあらねばならない、よき市民国民はこうあらねばならない等のべき論）に執着して、瞋の心を生起させてしまう。もし、他人相（あの人は良くない人だという批判・レッテル貼り）を取り除く事が出来るならば、瞋恨は生起しない。相手は貪、瞋、痴で苦しんでいる訳であるから、比較してみれば、我々の方より、先の方が更に辛いに違いない。煩惱があれば、苦しみがやって来る。その人の煩惱は、その人に、その様に振る舞う様、そそのかす訳であるから、実に可哀想なのである。なたはその人の因を観察して、次に彼の果を観察して、彼が苦の因から脱出出来る様、祈願してあげる事が出来れば、己自身の衆生相、人相、我相、相手の相、他者の相を取り除く事が出来る。北伝仏教の《金剛經》には、「如我昔為歌利王割截身体、我於爾時、無我相、無人相………」と記載されている。この中に道理あり。貴君に、一読をお勧めする！

欲界速行の善と不善業

欲界の7個の速行心は、善業と不善業を造る。その内、不善業は以下の通り（である）。

身業： 殺生、偷盜、邪淫。

語業（口業）： 妄語、両舌、悪口、綺語。

意業： 貪婪、瞋恨、邪見。

欲界速行の不善業の範囲は、12個の不善心の中に全て、含まれる。欲界速行の善行には、布施、持戒、禪修、恭敬、奉仕、分かち合い又は功德の回向、他人の功德への随喜、聞法、弘法、誠実合計10種。これら欲界の善業は、8個の善心の中において発生する。4個は智と相応し、4個は智と相応しない。布施は、富の果報をもたらす。持戒は、それが不殺生であれば、長寿または健康の果報をもたらす。もしあなたが心身の健康を願うならば、決して殺生をしてはならない。それは蚊をも含む。不善心は、不善の果報をもたらす為、己の心をしっかり保護しなければならない。

不殺生戒を持す人は、同時に、他者へ安全を提供しているのである。世界の平和は個人から始まるのであるから、まずは己を整える事は、社会に平和の貢献をもたらすものである。もし、10人が己を整えたならば、10の平和が実現する。1万人なら1万の平和が実現する。この事から、もし世界中の人が、己を整えたならば、全世界が平和になる。その他の10個の善行は、不殺生、不偷盗、不邪淫、不妄語、不両舌、不悪口、不綺語、不貪婪、不瞋恨及び正見の保持で、故に合計20個が、欲界速行において発生する善業となる。この20個の善業は、8個の欲界善心の中に含まれる。全ての善心及び不善心は、速行心の中において発生する。その他の心、例えば、領受、推度等などは果報心であり、果報心は変える事が出来ない。変えるべきは速行心である。

時間によって熟する所の4個の業

1. 現生受業：

1つ1つの善心と不善心は、皆業である。最初の速行心は「現生受業」を生む。この種の業は、造られたその1代の世においてのみ、熟する。もし、当該の世において十分な縁でもってそれが熟することが出来ないならば、それは無効になる。下の例は、現生受業が、どの様にして生じるのかを、説明したものである。

仏陀の時代、非常に貧しい夫婦がいた（当時のインドの一番下のカースト）。彼らの唯一の財産は、1枚の外套であった。それが1枚しか無い為に、2人は交代で、仏陀の説法会または正式な活動に参加するしかなかった。ある日、仏陀は布施の功德を説明した。それを夫が外套を着て聞きに行った。彼は布施の功德を聞いて、心中非常に歓喜した。そして思った：

「私も布施しよう」。

しかし、彼はこの1枚の外套しか持っていないので、もし外套を差し出してしまうと、これより先、外出が出来ない。その為、彼は布施をする考えを振り払い、続けて聞法した。仏陀の説法は聞けば聞くほど嬉しくなる。

「いや、やはり布施しよう。しかし、外套を布施してしまえば、二度と外出できなくなって聞法ができなくなる！わたしの損失は更に大きなものになってしまうではないか？やはり布施は出来ない」

そして、布施したい気持ちを抑えつけた。その後3度考えて、彼は思った：

「もうこれ以上考えるのはやめよう。私は私の唯一の財産であるこの外套を布施しよう。」彼は3度考えた後、ようやく外套を脱いで、うやうやしく仏陀に差し上げた。仏陀に布施した後、彼は嬉しくて叫んだ：

「私は勝利した！私は勝利した！私は勝利した！」

その時、舎衛城の国王もまたその場で説法を聞いていた。彼は「私は勝利した！私は勝利し

た！」と言う声を聞いて、心の中で思った：

「この言葉は、私が戦場で話すものだ。今どき、誰がこの様に言うのであるか？」

そして、彼は人を派遣して、この声の主を探るように命じた。探してみると、この貧乏人が叫んでいたのである。国王は彼を召して、訊ねた：

「お前はなぜこの様なことを言うのか？」

貧乏人は今日の出来事を国王に話した。国王はそれを聞いて大変に賛嘆し、心の中で考えた。

「彼は貧困の為、外套が1枚きりしかない。それでも布施をする事が出来る。この人の人格は非常に高潔である。私は彼をしっかりと、奨励してあげねばなるまい。」

そして、国王は彼の侍者を王宮に行かせて、2枚の、高貴で優雅な毛皮の外套を持って越させ、この貧乏人に贈った。これが現生受業である。貧乏人は3度熟考して、己の吝嗇の心に打ち勝ったものであるが、今、2枚の新しい外套は、何も迷う事なく、再びこの2枚の外套を仏陀に布施した。国王は：

「立派である！立派である！私は更に4枚の外套を贈ろう」。

しかし、貧乏人はすでに、己の心に打ち勝ち、二度と物に執着しなくなっていた為、この4枚の外套を仏陀に布施した。国王は

「素晴らしい！素晴らしい！」

といい、今度は8枚の外套を贈ったが、これもまた仏陀に布施された。国王は、更に追加して16枚を贈ったが、彼はまたこれも布施した。国王は更に32枚贈った。彼はまた布施しようとしたが、国王が

「あなたは、自分のために、少しは手元に残して置きなさい」

と言った為、彼は言った：

「はい。それでは私は2枚頂きます。1枚は自分に、1枚は妻に。そうすればこれより先、我々は2人で聞法に来る事が出来ます」。

この話は、そのまま周囲の噂になった。比丘達が言う：

「不思議だ！今実行した布施が、その場で果報を産むなんて。この様な可能性というのはあるものなのか？」

彼らは仏陀に教えてを希うために、出かけた。仏陀は言う：

「貴方は、彼の得た果報を、自分の目で、自ら、見たではないか？（貧乏人は布施したのち）すぐに32枚の高貴な外套を得たのです。」

この種の業は、現生受業と言う。1番目の速行心によって生じる。彼は3度考えた後に、ようやく外套を布施したが、この種の心は有行と言う。仏陀は言う：

「もし、貧乏人が、最初に生じた布施の心のままに、すぐに行動に移したならば、彼が今日得る果報は、32枚に留まらなかったであろう。」

こうした事から、無行の善心は、更に大きな果報が得られる（事が分かる）。故に、布施したいと考えているならば、余り長く考慮しない方が良い。実践は素早く！そうすれば我々は、更に多くの果報を得る事ができる。これは決して、果報に対して貪欲になっているのではなく、起心動念の結果、善を行なおうとしている時、ぐずぐず迷っていると、その後、実践を取りやめてしまう事が多い（からである）。というのも、心は悪法を喜ぶ為で、故に、善は急げ、なのである。もし、1番目の速行心が、果報を産まない時、それは無効業となる。1番目の速行心は、1個だけではない。というのも、1つの瞬きだけでも、10万億個の心が生じる為、故に、

1番目の速行心は、非常に沢山あるのである。

2. 次生受業：

7番目の速行心は「次生受業」を生じる。この業は、その造られた所の、次の1世に熟する。

もし、当該の世において、十分な縁がなくて、それを熟させることが出来ないならば、それは無効業になる。パオ森林僧院に、1人の比丘尼がいて、彼女が過去世を観察した所、彼女はある世において、メスのヒョウであり、1頭の子供を連れていた。ある日、狩人が彼女の子供を攻撃した。母ヒョウは、動作は非常に素早く、反撃能力も高かったが、殺生の業を犯すのが嫌で、身体をもって子供を守り、その為に、矢に射たれて死んだ。もし、母ヒョウが狩人に反撃して狩人を殺したならば、殺生業を犯した事になる。そうなれば、四悪道に落ちる果報を受けなければならない。母ヒョウは、殺生戒を守り、己の命を犠牲にして子供を守った為、死後、天神に生まれ変わった。これは、次生受業と言ひ、良い果報に属するものである。

布施をする時、貴方は業がすぐに生じる所の、「現生受業」がよいか、それとも「次生受業」がよいか??? 現生受業の果報は、比較的力があるだろうか??? それとも次生受業であるだろうか??? 現生受業だと思う人は、視野が狭すぎる!!! 外套を布施した貧乏人は、その場で果報を得たが、もし、その時彼が50歳であるならば、得ることの出来た果報を享受できるのは、長くて30年か、40年に過ぎない。もしも次生受業であるならば、彼は天界に生まれる事が出来たに違いない。天界の天神なら、36枚の外套など、簡単に手に入る。次生受業の果報が、より力があるのである。

最初に生起した速行心の力は、もっと弱い。その原因は、その前に存在する心から何らの支援も受けていないからである。例えば、生まれたばかりの赤子は、まだ小さく、弱々しい為、歩くことが出来ない。同じく、心は、生まれたばかりの時は弱く、弱いが為に、現生受業を生じる。真ん中の、2番目、3番目、4番目、5番目、6番目の速行心と比べると、7番目の速行心は、8番目の速行心が存在しないが為に、支援してくれるものがなく、やはり比較的弱くなってしまふ。例えば、石を空に向かって投げた後、地面に落ちて来るのは、上に向かう力が減衰しているのが、原因である。(それと同じく最後の速行心は) 真ん中の5個の速行心程、強くは無い。故に、それは、次生受業を生じるのである。

3. 無尽業：

今、(生起する一連の心のその) 中間の、最も華やかな、5個の速行心の講義に入る。第2番目から第6番目までの速行心は、「無尽業」を生じる。輪廻の中にいる限り、すなわち、涅槃に入らない限り、この種の業は、永遠に無効にならない。故に、この種の業の力は、非常に強いことが分かる。たとえ仏陀がすでに仏になったとしても、この種の業は受け取らねばならなかった。仏陀は、背中に強い痛みがあったが、それは、かれが相撲の選手であったとき、ある時(の試合において) 他人の背中を骨折させて、業を造ったことが原因である。この事から、たとえ正等正覚の仏陀でさえも、業は、引き続き果報を生じ続けるのだ、ということが分かる。その為この種の業は「無尽業」と呼ばれる。涅槃に入るのを待って、もはや名・色がなくなつて後、業は、ようやく無効となる。名・色がなくなることが原因で、最早、業力は、名・色に依存して、その果報を生じることが出来ないが故に。

《法句経》に、以下の例がある。Jambukaは、裕福な家庭に生まれたが、彼が幼児であった時、ご飯も食わず、ミルクも飲まず、糞便を食べたがった。服を着せると、彼はことごとく

それを破いてしまうので、いつも裸のままであった。彼はベットで眠らず、床の上で眠るのを好んだ。大きくなると、外道に従って出家した。

外道は、椰子で出来た櫛でもって、彼の髪の毛を1本1本抜いた。Jambukaは、1日中食事をしなくても平気であったが、夜中にこっそり、糞便を食べていた。ある時、その行為を外道の人に、見られてしまった。外道は、彼を自分たちの組織に置いておくと、彼らの名誉にかかわると考え、彼を追い出した為、彼は町を彷徨った。インド人は、裸で苦行する人も多くいて、Jambukaも又、1人で、裸で、苦行した。彼は糖蜜を塗った葉っぱを舌に貼り付けて、民衆に対して、彼は糖蜜で命を繋いでいるのだ、という振りをした。

彼が服を着ない事、1日に少しばかりの糖蜜しか食べない事から、非常に多くの人々が、彼を敬服した。しかし、彼が夜中に糞便を食べていることは、誰も知らなかったのである。こういう事から、人を（評価するとき）、表面だけを見てはいけない！！！！人々は、Jambukaがこれほど修行上手なことに感服していたが、彼自身は裸体の外道の道を極めたいと、思っていた訳ではない。これは、彼が過去の悪業が原因で、服を着たくても着れない状況にあった為であって、糞便を食べるのも、過去の業によるものである。しかし、当時の人々は、彼の外面だけを見ていた為、結果、Jambukaは、非常に多くの布施を貰っていた。ただ、多くの布施を貰っても、服は着れないし、食べ物も食べられないし、ベットにも寝られず、地面に寝ていたのである。この様な状況の下、非常に多くの歳月が流れた。

仏陀は毎日早朝に、神通でもって、どこかの衆生が、因・縁が熟して、波羅蜜も具足していて、アラハンになれるかと観察して、そうであれば、その人を度す為に出かけた。その日仏陀は、Jambukaの因・縁がすでに熟した事を観察したので、彼の住処のある処に来た。夜になると、多くの天神が仏陀に礼拝に来た。天神の身体は光を発する為、その地方は、光り輝やいた。それを見たJambukaは、この人は平凡な人間ではないと思い、次の日、礼拝する為に仏陀の所にきた。仏陀はお寺から歩み出て、本人を見て、たちまち言った：

「貴方は、四方八方、自分は物を食べないと喧伝しているが、実際には、夜中にこっそり糞便を食べている！」

Jambukaは思う：

「あらら！これはまずい事になった。全てバレてしまっている。」

そして、仏陀にうやうやしく、礼拝した。仏陀は言う：

「貴方はなぜこの様な苦しみを受けなければならないか、分かっていますか？」。

Jambuka：

「原因を、知りたいと思います」。

仏陀は彼に、彼が過去世になした業について説明した。この仏陀は、昨今は、釈迦牟尼仏と呼ばれている。釈迦は家族（一族）の名称であって、彼の名ではない。彼の名前はゴータマ仏陀である。ゴータマ仏陀の前の仏陀は、迦葉仏（Kassapa Buddha）と言う。迦葉仏の時代、Jambukaは比丘であり、ある1人の居士の供養を受けていた。ある日、1人のアラハン比丘がやって来た。居士はアラハン比丘の荘厳さを見て、彼に沢山の美味しい食べ物と新しい袈裟を布施し、また、理髪師を呼んで頭を剃ってあげ、ベットも1台贈った。その時、Jambukaは、アラハン比丘がここへやって来るや即刻、己の居士からこの様に供養されたのを見て、嫉妬を止める事が出来なかったし、又、この比丘がここに残ると、大変な事になる、と思った。その為、彼は比丘を大声で叱責した：

「貴方は私の居士の供養した食べ物を食べてはいけない。糞便を食べるとよい。貴方は私の居士の供養した袈裟を着てはいけない。裸で暮らせ。貴方は、私の居士の理髪師に頭を剃って貰ってはいけない。椰子で出来た櫛で貴方の髪の毛を引っ張って切れればよい。貴方は私の居士が贈ったベットに寝てはいけない。地面に寝なさい。」と、この様に、4つの話をした。

アラハン比丘は：

「私がここにおいて（引き続き居士の供養を受けるなら）彼は更に業を造すであろう。私はここを離れよう！」

そう言い終えると、すぐにそこを離れた。当時の人の寿命は2万年であった。現代人は寿命が短い。Jambukaは、比丘として2万年、修行したが何らの成果も得られなかった。これを「業障」と言う。往生（死亡）する時、彼は地獄に生まれ、そこから出たのは、ゴータマの出生の時であった。彼が地獄にいた期間は、非常に長いものであった。地獄から出て後、彼はご飯を食べる事ができず、糞便を食べなければならなかった。ベットに寝る事ができず、床に寝なければならなかった。どの様な服も着る事ができず、裸でいなければならなかった。彼の頭髪は椰子でできた櫛でもって、1本1本引き抜かれなければならなかった。彼は55歳になってようやく仏陀に出会えた。仏陀が彼に（経緯を）説明してやった後、彼は己が服を着ていない事は、非常に恥ずかし事であると思った。仏陀は彼に1枚の布を贈り、彼はそれで身体を包んだので、仏陀は経の説明を始めた。過去世において、彼は修行者であった。過去世の波羅蜜がその時熟した為、彼はその場でアラハンを証悟した。Jambukaが造した悪業は「無尽業」と言う。この業は長く継続する……般涅槃を証するまで。

次に、モッガラナ尊者の例を上げる。皆も知っている通り、仏陀の時代、モッガラナ尊者は神通第一であった。ある時、彼が部屋で座禅・瞑想している時、神通によって、500人の強盗が、彼を殺そうとしている事を知った。その為、彼は神通を使って、屋根を伝って、飛んで逃げた。その強盗の群れは又やって来た。彼は又神通を使って、ドアの鍵穴を通り抜けて逃げた。3度目、また強盗がやって来て彼を殺そうとした時、神通を使うには先に四禅にはいなければならない為、彼は四禅に入ろうとしたものの、突然入定できなくなってしまった。この時、500人の強盗は、部屋に雪崩込んで、彼の身体の骨を粉になるほど砕いた。頭蓋骨は、米粒程に砕かれたのである。

ただ彼はその時、その場では、死ななかった。仏陀の2人の上席弟子のサーリプッタ尊者とモッガラナ尊者は、般涅槃する時必ず、先に、仏陀に許しを請わねばならない。そうしなければ、涅槃に入れない。故に、モッガラナ尊者は、身体の骨が粉々になる程打ち砕かれても、死ぬ事はなかった。500人の強盗が去るのを待っている間に、モッガラナ尊者が攻撃された原因となった悪業も終焉した為、再び神通が使える様になったのである。彼は己の、バラバラになった身体を再度組み合わせて、仏陀の元に飛んで行き、仏陀の許可を得て、般涅槃した。般涅槃は、往生するのではない。往生すれば、出生がある。アラハンには、再度生まれる事はない。モッガラナ尊者は神通第一であったが、悪業を避ける事はできなかった。その時既にアラハンになってはいたが、やはり無尽業は受けなければならない。一体、どの様な悪業が、彼をして、この様な果報をもたらす事になったのか？

彼は、過去のある1世において、親孝行な農民であった。父母は2人共盲目であった。母親は、仕事を分担して貰う為に、彼に結婚する様に言った。初め彼は、結婚したくないと言っていたが、後に結婚した。妻を娶った後、最初の頃は、妻は、姑や舅に孝行した。しばらくして、

彼女は、2人もの、目が見えない人の世話をするのは疲れるし、苦勞が多い為、徐々に不満が大きくなり、夫に、盲目の両親を殺す様に唆す様になった。夫は最初、賛成しなかったが、しかし、妻が毎日耳元で呟きつづける為、最後には同意した。

彼は馬車を駆って、父母と共に森林にやって来て、そこで2人を降ろして言った：

「貴方は、ここで暫く待っていて下さい。私はすぐに戻ります。」

彼はそこを離れた後、己を強盗の様な振りをして、大きな棍棒を持ち声色を出して叫んだ：

「強盗だ！強盗だ！」。

そして、両親を死ぬほど打ちのめした。《法句経》と《本生経》では記載されている内容が異なる。1つは、父母を叩き殺したといい、もう1つは、半殺しにしたものの、死ぬまでには至らなかった、と書かれている。どちらにせよ、これが業の因となって、彼は往生した後地獄に落ちて、大変な思いをした。地獄を出た後、人間として生まれ、250の世において、毎回、頭を打ち砕かれて死んでいる。これを「無尽業」と言う。彼は後に、仏陀の上席弟子になり、神通第一と呼ばれた。しかし、彼の神通もまた、悪業によってもたらされた苦報を避ける事は出来なかったのである。故に、仏陀は《法句経》の中において、以下の様に言う：

「悪業を軽視してはならない。悪業は私の身の上に生じない、と思ってはならない。1滴1滴と悪業を累積するならば、最後には己の悪業は満杯になる。同様に、善業を軽視してはならない。小さな善業は果報をもたらさないと考えてはならない。1滴1滴善業を累積するならば、良善は充満して（人生は）幸福で楽しいものになる。」。こうした事から、我々の心を守る事は非常に重要な事（であることが分かる）。1つ1つの善心と不善心は皆、この7個の速行心の中において発生する。真ん中の5個の速行心は、無尽業を生じせしめる。1つ1つの善または悪は、全て業力を生じる。業力は、生命流の中に潜伏して、機が熟するのを待っていて、時期が来れば果報を生じるのである。

モッガラナ尊者は、ただ1回だけ、父母を殺したが、250もの世において、頭を打ち砕かれる経験をした。たとえ、アラハンを証したとしても、同じく、粉身碎骨された。一度だけの悪業であるのに、これ程多くの果報を受けなければならないのは、非常に不公平ではある。しかし、我々はよく考えてみなければならない。彼は棍棒を手に、絶え間なく父母を殴り続けた訳で、これが10分間であるとすると、一瞬の瞬きでも、10万億個の心識が生・滅する訳であるから、10分間なら、数えきれない程の速行心が生・滅、生・滅する.....そして、1つ1つの心識の真ん中の5個の速行心は、1つ1つ、それぞれ「無尽業」を残す。そして、その後、無尽の果報が生じる。もし、モッガラナ尊者が、今尚、般涅槃を証していないのであるならば、引き続き、債務を払い続けなければならない。故に、仏陀は我々を励ましてこう言う：

「早く解脱しなさい！早く解脱しなさい！」

というのも、まだまだ、非常に多くの悪業が、我々が債務を弁済する事、（苦しみを）受け取る事を、待っているからである。長い輪廻の中において、人々はどの様にしてこの問題を解決すれば良いのか??? 聡明な投資家は、最も少ないお金で、最高の利益を得る。故に、輪廻の中において、我々も又、少ない代償でもって、多くの見返りのある（行い、修行を）学ばなければならない。

勝蓮花仏の時代、人の寿命はほぼ、500万年の長さがあった。当時、ある1人の居士が、厳格に五戒を守っていた。500万年の間、一度も戒を破らなかった。当然、彼は止禪、観禪も修したと思われる。臨終の時、彼は己が戒を持するに、これ程清浄であったのであるからと、非常に

嬉しく思い、結果、天道（天界）に生まれた。天道に生まれて後、彼は持戒の力が非常に強い為、また別の天道に生まれた。または天道から人道に生まれ、人道から天道に生まれたりした。ずっと天界と人界を行ったり来たりして輪廻して、天と人界の福報を楽しんだのである。仏陀の時代になって、彼は人間界に生まれた。5歳の時、父母が彼を連れてある寺院に行った時、比丘が、五戒を伝授し始めた。突然、この子供は、己が過去世において、500万年の長きに渡り、非常に清らかに、五戒を守った事を思い出して、心中は喜びに溢れた。このときより、彼は修行を始め、名色法の無常、苦、無我の観察をして、最後にアラハンになったのである。彼は持戒清浄であった為、人道と天道において輪廻する時、1世毎に良いことが、3種あった。1番目は、長寿であること。持戒者は必ず長寿であり、健康である。

2番目は、顔が美しく莊嚴である事。

3番目は、智慧がある事。1つ1つの世において、彼は長寿で、容姿よく、智慧があり、この点において、他人より優れていた。この4種（ママ）は、誰しもが追及する所のものである思う。人がもしその様に願うのであるならば、五戒を守らなければならない。聡明な投資者として、少しの投資でもって、輪廻の中において、アラハンを証するまで、人と天の福報を得ることができるのであれば（戒を守るのが良い）。彼はただ1世においてのみ、五戒を清らかに守ったのであるが、その後の長い輪廻の中において、無上の楽しさを得る事ができた。これが（心識における）真ん中の五個の速行心によって生じた所の、無尽業の働きである。一瞬の瞬きで、心識は、10万億個あるのであるから、5万年の時間は、どれほどの長きであったであろうか。この様に、彼は多くの善なる業力を残し、それらの機が熟する毎に、善の果報を受け取る事ができた。故に、貴方は聡明な投資者にならなければならない。反対に、もし、我々が常に悪念に誤導されたならば、投資の失敗者になってしまうのである。

仏陀は《法句經》の中において、以下の様に言う：

「いかに敵があなたを害したとしても、貪・瞋・痴によって誤導されたあなたの心は、あなたに更に大きな災いをもたらす」

例えば、あなたが誰かに殴られる時、以下の様に考えるのが良い：

「大丈夫だ！私は前世において彼に借りがある。大丈夫だ！今、彼に借りを返そう」

この様にすれば良い！しかし、もし、あなたの心が貪・瞋・痴で誤導されて、反撃を開始するならば、その時に造される業は、非常に大きなものとなる。もし、あなたが彼を殴り殺したならば、今生では刑務所に入り、未来においては、非常に多くの果報を返済しなければならなくなり、非常に多くの苦報を受け取る事になる。というのも、あなたが反撃する時、非常に多くの無尽業、また、非常に多くの速行心の中において、（心識が）生・滅、生・滅して、非常に多くの「今生受業」（刑務所に入る事）と「次生受業」（地獄に落ちるであろう事）が残されるからであり、また、その真ん中（の心識）においては、非常に多くの「無尽業」があり、あなたはアラハンになるまで、絶え間なく借りを返さなくてはならない。アラハンになって、般涅槃に入って後にはじめて、業は終息するのであるから。

4. 無効業：

十分な縁を得ることがない為に、熟すことの出来なかった現生受業又は次生受業、すなわち、1番目と、7番目の速行心が、十分な縁を得られずに熟することがなかった時、無効業となる。諸々のアラハンにとっては、未来世においてのみ熟する業は、皆、無効業となる。というの

も、彼らは、この世で即、般涅槃を証入するが故に。

表H: (P262の別表参照)

四正勤

我々は既に、誤導された心は、これ程までに己にも、他人にも、大きな傷害をもたらす事を知った。その為、我々は善念を育成し、悪念を取り払う方法を学ばなければならない。善念を育成する事は、四正勤を通して行う。いわゆる四正勤とは：

1. 未生の悪は生じさせない：

悪法の生起するのを防止する為に、根門を守る。いわゆる、根門を守るとは、目、鼻等の根門を全部締め切って、見ない、聞かないというのではなく、行・住・坐・臥において、常に1つの業処を守る事を意味する。心が1つの業処に專注する時、目が綺麗な物を見たとしても、見ても見ていない風になる。耳は、貪を引き起こす可能性のある音を聞いても、聞いている様で聞いていない風になる。例えば、私が勉強に専念している時、頭上を飛行機が飛んでも気が付かない。というのも、私の心が勉強に専念しているが故に。同様に、心が業処に專注している時、煩惱は、目、耳、鼻、舌、身体、意から入り込む事は出来ない。この様にすれば、色、音声、香、味、触覚が、目、耳、鼻、舌、身体、意に衝撃する事によって貪、瞋、痴が生起するのを防ぐ事ができる。

この事に対して、仏陀は、亀と狐の比喻を用いてお話されている。岸辺に1匹の亀がいて、4本の足を伸ばして休んでいた。その時、狐が1匹、食べ物を探していた。亀を見つけたので、それを食べようとして、亀に近づいた。亀は狐が向かって来るのを見て、4つの手足と頭を甲羅の中に引っ込めた。狐は：

「よし、私はここで待っていよう。お前が手足を伸ばした時、俺はお前を食ってやる！」

そして、狐は亀の傍らで待つ事にした。亀は：

「よし、我々のどちらが忍耐強いのか、試して見ようではないか？」

と思った。狐は長い時間待ったが、亀はいつまでも出てこなかった。狐は飽きて、何処かへ行ってしまった。

同様に、狐とは我々の煩惱の如くで、我々の正念が無くなり、五根の緩まる時を待って、煩惱は我々に噛みつくのである。心の反応は非常に速く、外境に触れるや否や、即貪、瞋恚を起す。その迅速なこと……ただ我々には、それを観察することが出来ないのである。食事の時、味が舌を衝撃する際、心は必ず反応する。しかし、正念が強くない事が原因で、その時、非常に多くの貪欲と瞋恚が生起している事に気が付かない。同様の道理で、心を1つの業処に繋ぎ止めて置かないのであるならば、煩惱は、目、耳、鼻、舌、身体と意を通して、あなたを攻撃する。これが「根門を守る」意義である。先に述べたTissa比丘は、いつも業処と共に托鉢した。故に、婦人が彼に向かって笑いかけても、欲念は生起しない。というのも、彼の心は既に業処を守っているのであるから。この様にして初めて、未だ生起しない悪法の生起を、防止

する事ができる。

2. 既に生じた悪は断滅せしめる：

もし、悪法が既に生じたのであるならば、正確な方法を運用して、それを除去しなければならない。あなたは新車を買ったばかりで、この車に対して非常に執着、貪愛している、とする。この時、悪法が生起する。というのも、貪愛は悪法であるが故に。貪愛というこの悪法を取り除く為に、あなたは如理作意しなければならない。車は無常であり、世俗的（にのみ価値がある）ものであり、四大で構成されており、車もまた生・滅の法であり、無常の法であり、故に、あまりに執着しすぎない様にする。これは（我々がとり得る）色々な方法の内の1つである。

もしあなたが、誰かに対して瞋恚を起こしたならば、悪法もまた同時に生起する。前にも述べたが、瞋恚を退治する方法は、慈愛を送る事である。またもう1つ、別の方法として、あなたは以下の様に観ずる事もできる：

「私の瞋恚が生起するや否や、非常に多くの瞋根の速行心が走り過ぎて行き、心の中において、非常に多くの今生受業、次生受業、無尽業を残す。これは怖すぎる！瞋恚は止めておこう！」

この様にすれば、あなたは瞋恚を取り去る事ができる。この種の観想は、如理思惟とも言う。

3. 未だ生じない善を生じせしめる：

我々には、非常に多くの未だ生起せしめていない善法がある。例えば、五戒を保持していない人間で言えば、未だ生起していない善法は五戒である。未だ布施をしたことのない人間でいえば、布施が未だ生起していない善法である。我々には20種の善法がある。身・口・意の10種、布施、持戒、禅の修行、経の説法と弘法、回向等々各種の善業である。もし、（それらが）未だ生起しないのであれば、それを発生させるべきである。（善法の内）最も円満なものは、戒、定、慧であり、それが未だ生起しないのであれば、生起させる。定を生起させたいのであるならば、止禅（samatha）を修しなければならない。智慧の生起を願うならば、観禅（vipassanā）を修行しなければならない。

4. 既に生じた善を円満にする：

もし、あなたが既に持戒しているのであるならば、これから先も破戒しない様にすれば、善法は速やかに増長する。もし、既に、定の修行しているのであるならば、今は5分間しか專注する事ができなくても、引き継ぎ10分、20分、專注できる様、精進する。やがて禅相が出現し、その後にアーナーパーナ・サティ第四禅を証して、修行を円満する事ができる。智慧が増長しないのであれば、vipassanāによって、無常、苦、無我の観察を行い、己の希望する目標まで進む。これが、既に生じた善法を引き続き継続して、円満成功させる方法である。我々は、再度、心路過程を復習してみよう。食事を例にとると、味が舌根を衝撃し、舌門心路過程が生起する。合計17個の心識刹那があり、それらは以下の通り：過去有分、有分波動、有分断、五門転向、舌識、領受、推度、確定、速行×7、彼所縁、彼所縁。味が舌を衝撃する時、それが酸っぱいか、辛いか、甘いか、苦いかは分からない。というのも、最初の心路過程では、それがどのような味であるかを判断する事は出来ないからである。（その種の判断は）意門に依らなければならない。

所縁（味）の寿命は、ただ17個の心識刹那を維持する事ができるだけである。故に、ひとたび、寿命が終わるや否や、舌は味を味わい続ける事が出来なくなり、舌門心路過程は収束し、心は有分に落ち込む。心の法則とは、2個の心路過程の間には、必ず有分心が生起する。作用は、生命流を中断させないこと、それを維持する事である。その後、意門心路過程が生起する。意門心路過程の中における、心の運用順序は以下の通り：有分波動、有分断、意門転向、速行×7、彼所縁、彼所縁。

その後、心は又、有分に落ち込む。この時は未だ、甘い、酸っぱい、辛い、苦いなどは、分からない。尚多くの意門心路過程が次々に生起して、最後に、ようやく、「おお、これは甘い。」と判断する。甘い味が好きな人は、ひとたび甘さを味わうと、その最初の反応は、歓喜、樂受が生起し、受から愛が生起して、即刻執取が始まり、もう1つ欲しい、と思う。これが貪の始まりである。苦いのが嫌いな人が、苦味に出会うと、最初の反応は排斥であり、すぐに吐き出してしまいか、または、眉をひそめて、飲み込んでしまう。これは瞋の反応である。我々は色々な反応を通して、己の心を研究する事が出来る。

1番目の舌門心路過程の中の、7個の速行心は「悦具邪見相応無行瞋心」を生起せしめる。この心は舌門心路過程の7個の速行心の中において7回生滅し、その後に意門心路を生起せしめる。意門心路もまた、7個の速行心があり、それもまた、最初に生起するのは「悦具邪見相応無行一心」である。その時、1つ1つの意門心路過程の、その中間にある「有分」が生起する。それは、舌門心路過程から意門心路過程へ、または意門心路過程から意門心路過程へ、もあり得る。総じて、2個の心路過程の間には、必ず有分が生起する。これは法則である。

5個、6個の意門心路過程が過ぎた後、もし、味に対して反応を開始したならば、瞋恚心が生起する。この「憂具瞋恚相応無行一心」は、7個の速行心の中において、7回生・滅する。初めに生起するのは「悦具邪見相応無行一心」である。というのも、味が未だ明確ではない為、この心は非常に弱く、業力もまた重いという事はない。しかし、今、味が明確になって来て、それをあなたが嫌うならば、排斥の反応が生起して、その結果、瞋根心が生起する。

「憂具瞋恚相応無行一心」は、意門心路過程の中の、7個の速行心識において、7回、刹那生・滅する。もしあなたが、長時間、この味を嫌うならば、瞋根心は不断に生起し続ける。生・滅、生・滅、生・滅して、1つの瞬きでもって10万億個になる。あなたが味を排斥する時間が長い程、ますます多くの瞋根心が生起する。前に述べた通り、1番目の速行心は「現生受業」を生じせしめ、7番目の速行心は「次生受業」を生じせしめる。もしあなたが長く貪または瞋の中に耽溺するならば、1つ1つの心は皆業力を生じせしめる。

1つ例をあげる。ある1人の少女が、毎朝起きるとすぐに鏡の前に立って、自分の美しさを確認しないではいられなかった。彼女が最初に生起させるのは、眼門心路過程である。眼門心路過程の中には7個の速行心がある。彼女が己の美しさを確認する時「悦具邪見相応無行一心」が生起するが、この心は7回発生する。その後、非常に多くの意門心路過程が生起する。意門心路過程の中の7個の速行心は、先程の貪根心と同じで「悦具邪見相応無行一心」である。彼女には仏教の知識がある為、心に思う：

「いけない！己の美貌に耽溺するのは貪根心だわ。この美貌も、元はと言えば過去の善業の果報だし……」

もし、美しくありたいと思うのであるならば、瞋根心は避けなければならない。人があなたを侮っても、あなたは笑っているのがよい。少女は、己の美貌は、過去の業によることを知っ

ていたので、この時、業報智の智慧が生起した。意門心路過程の7個の速行心は、捨具である可能性もあり、また悦具の可能性もあるが、しかし必ず「智相応無行一心」である。故に、「悦具智相応無行一心」が彼女の意門心路過程の中の7個の速行心において生起した。その後、彼女はまた思う：

「この美貌もまた無常だわ。何日か後、何月か後、何年か後、きっと変わってしまうわ」
彼女はこの様に思うと、心の中で「悦具智相応無行一心」の善心が生起した。彼女は、己のこの美貌をば、無常、無常.....であると観じた。もし、無常を観じないのであるならば、己の美貌を執取（執着）してしまう。1人の人間が、美貌に執着すると、鏡の中に自分の顔が老けて突然、老人斑ができたのを発見すると、意門心路過程の中の速行心は「憂具瞋恚相応無行一心」を生起せしめる。もし、正念が無いなら、不善心が生起し続けるのである。

どの様な種類の心が、速行心の中において生起しているのか？

欲界不善心（12）、欲界善心（8）、無因アラハン生笑心（1）欲界唯作心（8）。

欲界唯作心は、アラハンの心に属する。アラハンが説法する時、仏陀のお供をする時、病気の比丘の世話をする時、功德の回向をする時、8個の欲界唯作心の中の「悦具智相応無行一心」が生起する。故に、欲界速行心の中において、合計29種の心が生起する事ができる。それぞれ：不善心（12）、善心（8）、唯作心（8）、アラハン生笑心（1）である。ジャーナ及び出世間の心は、安止意門速行であって、欲界意門速行ではない。この事は後の章で説明する。

安止心路過程

先程述べた安止心路過程は、以下の2種ある。

1. 世間安止心路過程：
色界安止心路過程、無色界安止心路過程
2. 出世間安止心路過程：
道心心路過程、果定心路過程、滅尽定心路過程

世間心路過程は、色界安止心路過程と無色界安止心路過程に分ける事ができる。

(1)色界安止心路過程：

禅修行者がアーナーパーナ・サティを観ずる時、禅相が出現する。それは先に灰色で、白色に変化する。更に白色から透明になり、ダイヤモンドの様に輝く。これを似相と呼ぶ。

次に、禅修行者の心は、似相に專注する。1時間、2時間.....彼は、徐々にジャーナに入る。

ひとたびジャーナに入ると、心は色界安止心路を生起せしめる。その過程は以下の通り：

有分波動、有分断、意門転向、遍作、近行、随順、種姓、ジャーナ。

生まれて初めて第1回目のジャーナを証する時、このジャーナは、ただ1個の心識刹那を生ずるのみである。それが滅し去ると、心は有分に落ち込むが、修行者は自分ではそれが分からない。というのも、心の動きは非常に速いが故に。心路全体は以下の通り：

- ① 有分波動
- ② 有分断
- ③ 意門転向心： アーナーパーナ・サティに転向を開始。

- ④ 遍作： 心が色界安止に入る準備をするの意。
- ⑤ 近行： 安止に近くなる。
- ⑥ 随順： 前の近行定心と後ろの、生起せんとするジャーナの心に随順する心。すなわち欲界の心とジャーナの心を繋ぐ心。
- ⑦ 種姓： 前の欲界の心を超えて、安止に入る。すなわち、欲界の心を超えて、ジャーナに入る心。
- ⑧ ジャーナ： 色界安止心。初めてジャーナに到達した時は、ただ1個の心識刹那のみで、すぐに有分に落ち込む。

表I: (P263の別表参照)

遍作、近行、随順、種姓は、皆、欲界速行心で、悦具智相応無行一心である。意門転向、遍作、随順、種姓、ジャーナは、皆、アーナーパーナ・サティの似相を所縁に取る。禅修行者は、何度も練習する事によって、ジャーナに入っている時間は更に長くなる。その時、ジャーナ心は、非常に多くの回数生起する。このジャーナ心がすなわち「尋、伺、喜、楽、一境性・具初禅善心」である。この心は、非常に多くの回数生・滅する。もし、ジャーナに2時間、住するならば、2時間、生・滅する。ジャーナに10分住するなら、10分生起する。あなたが出定するまで（生起し続ける）。その後、心は有分心に落ち込む。

(2) 無色界安止心路過程と色界安止心路過程は同じである。ただ、証するジャーナが異なるのである。出世間安止心路は、道心心路、果定心路、尽滅定心路の、3種である。

(3) 道心安止心路：

禅修行者は、止禅から出た後、初禅の34個の名法を無常、苦、無我、無常、苦、無我……とみなして、観ずる。もし彼が、無常を観じている時に涅槃を証したならばソーターパンナ道心が生起する。1番目は有分波動で、その後は、有分断、意門転向、遍作、近行、随順、種姓、道、果、果、最初に道果を証した心路はこれで収束し、有分に落ち込む。我々はそれぞれの内容を吟味してみよう：

- ① 有分波動：
- ② 有分断： 有分は離心路過程であるため、有分が中断しないのであれば、心路過程は生起出来ない。故に、心路過程は必ず中断されなければならない。心路過程に道を譲る為である。
- ③ 意門転向： 行法の無常、苦、無我の内の1つに転向する。例えば、もし、行法の無常であるならば、意門は行法の無常に転向する。
- ④ 遍作： 心が道果に入るのを準備する。
- ⑤ 近行： 心をして道果に近づける。

- ⑥ 随順： 前の遍作、近行等の世間欲界心と後ろの出世間心に随順する。
意門転向、遍作、近行、随順は皆、行法の無常を所縁とする。
- ⑦ 種姓： 凡夫の種姓を断じて、聖者の種姓に入る。種姓は、涅槃を所縁にする。
- ⑧ 道心： この道心はソーターパンナ道心である。
- ⑨ 果心： 2つのソーターパンナ果心。
- ⑩ 有分：

道心は生起するや否やすぐに滅し去り、即刻その果報を生じる。これが、出世間法の功德であり、「akaliko」と言う。果報は即刻生じて、間隙がない。すなわち、世間法とは異なるのである。前の例でも述べた様に、ある貧乏人が、仏陀に1枚の外套を贈った所、少しばかり時間が経ってから、国王から36枚の外套が贈られたのである。しかし、出世間心は、ただ、1個の心識刹那だけで、たちまち果報が生じる。すなわち、1個の心識刹那が生滅した後、次の1個の心識刹那の生滅が、その果報なのである。

(下記表Jの) 意から随順までの所縁：行法の無常、苦、または無我。

種姓から果までの所縁：涅槃。

<波→断→意→遍→近→随→種→道→果→果→有.....>

波=有分波動。断=有分断。意=意門転向。遍=遍作。近=近行。随=随順。種=種姓。

道=道心。果=果心。有=有分心。果心は2度生起する。それは、涅槃を所縁とする。

故に、種姓から2個の果心までは、すべて、涅槃を所縁として取る。その後、心の不断性を保持する為に、有分心が再度生起して、次の別の1個の心路過程が生起するまで、生滅、生滅.....する。

表J: (P263の別表参照)

種姓は、涅槃を所縁として取る。道心も又涅槃を所縁にする。その違いは、種姓は未だ煩惱を断じていないことである。ソーターパンナ道心が断ずるのは、身見、戒禁取見と疑の3個の煩惱である。果心は、煩惱が取り除かれた後の、清涼と自由を体験する。道心の作用は、煩惱を断ずるだけでなく、その上それは、1種の智慧を擁している。すなわち、徹底的に四聖諦を知り、苦諦を知り、集諦を捨て去り、滅諦を体験し、道諦を開発・展開する。故に、ソーターパンナ道心は、徹底的に四聖諦を知るのである。

- ① 苦諦を知る： 五取蘊は苦諦である。
- ② 集諦を捨て去る： 貪愛は集諦である。故に、貪愛を捨て去る。
- ③ 滅諦の体験： 涅槃は滅諦である。涅槃を体験する。
- ④ 道諦の開発と展開： 八正道は道諦である。故に、八正道を開発し展開すること。
この事から、ただ、聖者のみが、徹底的に四聖諦を知るのだ、
という事が分かる。道心はただ1回のみ生起する。この力量ある
道は、3個の煩惱を断じ除く事が出来るのである。

(4) 果定安止心路：

ソータパナ聖者が、涅槃の寂靜を体験する時、ソータパナ果定にはいる。果定に入った後、行法の無常、苦、無我を觀察しなければならない。その後に、果定心路過程が生起する。ソータパナ果定の心路過程とは、有分波動、有分断、意門転向、遍作、近行、随順であり、それらはすべて行法の無常、苦、無我の内の1つを所縁として取るものである。次に生起するのは「浄化」で、最早、種姓とは呼ばない。というのも、既に凡夫の種姓を斬り断じているからである。浄化された心は、涅槃を所縁として取る。その後、果心、果心、果心、果心……が生じる。聖者が、果定にどれくらいの時間入っているか、その間、ソータパナ果心は生起し続ける。彼が果定から出た後、心は、有分に落ち込む。

(5) 滅尽定安止心路：

色禪と無色禪を証したアーナゲーミとアラハンだけが、「滅尽定」に入る事ができる。アーナゲーミとアラハンは、常に行法の無常、苦、無我を觀じ、生滅の法を体験している。ある時には、彼等は倦怠を感じるが、その時は滅尽定に入って、心流を中断させる。まずはじめに、彼等は、必ず1つ1つのジャーナに、入らなければならない。まず、色界初禪から始めて、出定の後、34個の名法を無常、苦、無我と觀ずる。その後に、色界第二禪に入り、色界第二禪から出て後、同じく、無常、苦、無我を觀ずる。この様にして、色界第三禪、色界第四禪、色界第五禪、空無辺處、識無辺處、無所有處定まで、実践する。無所有處定から出た後、滅尽定に入るその前に、4個の準備作業を終えておかねばならない。彼は、以下の事を決意しなければならない。滅尽定に住する間、

- ① 彼の資具に属する何物も損害されてはならない。例えば、鉢、袈裟など。
- ② サンガに呼ばれた時は、自動的に定から出る事。
- ③ 仏陀に呼ばれた時は自動的に定から出る事。
- ④ 滅尽定に住する時間を決める。

7日間住すると決めても、もしも、彼の寿命が3日しかないならば、これは実践不可能である。彼は滅尽定に住する期限を限定しなければならず、それは己の寿命を超えてはならない。もし、1番目の決意がないのであれば、彼の資具は、彼が滅尽定に入っている間に、焼かれたり、盗まれたりするかも知れない。ある1人の辟支仏（パーチェカ仏）が、滅尽定に入る前、（必要な）決意をするのを忘れてしまった。定に入った後、その土地に火災が発生した。彼が滅尽定から出ると、鉢は既に焼かれてしまっているのを、発見した。ただ、彼自身は無事であった。というのも、聖者が滅尽定に入る時、死亡するということはないからである。この決意を終えた後、彼はまた非想非非想處に入る。その後、2個の刹那の安止速行禪心が生滅した後、心流の相續を断つ。名（心）が滅尽定に入るのである。彼の心流：1番目は有分、（次に）有分波動、有分断、意門転向、遍作、近行、随順、浄化、禪、禪。この禪心は、非想非非想定で、唯作心である。もし、彼がアラハンであるならば、その後の心流は、断じ終わり、心は二度と生起することはない。心流をどれ位の時間断ずるかは、彼の決意による。すなわち彼がどれ位の長きに亘り、滅尽定に入っていたいかにによる。出定の後、最初に生起する心は、アラハン果心である。涅槃を所縁に取る。その後に、心は再び有分に落ち込む。

第5章

離心路過程の概要

心路には2種類ある。

1つは「心路過程」：心路の活発な一面を言う。すなわち、生命の旅の途中において発生する心路過程である。

もう1つは「離心路過程」：不活発な心または「離心路過程心」の事である。というのも、それらは、心路過程の中にはないが故に。離心路過程は、ただ3種類の心しかない。結生心、有分識と死亡心である。

結生識：

生まれ変わるその1刻の作用の名称を、結生 (paṭisandhi) と言う。この1世 (1生。以下同様) と前の1世を繋ぐ。この作用を執行する結生心は、1世毎にただ1回のみ出現する。すなわち、生まれ変わる、その時の1刹那である。

有分識：

パーリ語「bhavaṅga」の意味は、「生命」 (bhava) が、「有」または「要素」 (aṅga) である、と言う意味。故に、有分 (bhavaṅga) とは、生命の要素、または生命の成分と言う意味になる。すなわち、生存において、欠かす事の出来ない条件、である。有分の作用は、1世の間、すなわち、生まれ変わり (受胎) から、死亡までの間の、生命の流れを中断させないことにある。結生心が生滅した後、引き続いて生起するのが、有分心である。その有分は、幾つあるか？16個である。この有分心と結生心は、同じ種類の果報心であるがしかし、異なる作用を執行する。心路過程が発生しない時、有分心は1つ1つの刹那において生滅する。最も明確なのは、夢を見ないで熟睡している時であるがしかし、目が覚めた時に、諸々な心路過程の合間に、無数回出現する。ある、何かの目標が、根門を衝撃する時、有分心は中断され、当該の目標が何であるかを識知する為に、活発な心路過程が引き続いて生起する。なぜ、心路過程は活発である、と言うのか？

1に、外部の6塵の衝撃を受けるが故に。

2に、心路過程は善と不善に相応して、業を累積するが故に。

ある種の心路過程は、煩惱を断ずる事ができる。煩惱を断つ程の心は、力が非常に強い為、故に活発である。煩惱を断つ事の出来る心は「道心」である。故に道心は非常に活発である、と言う。しかし、離心路過程である。結生心、有分心、死亡心は、心路過程の中には無く、静止しているものである。ひと度、心路過程が収束するや否や、有分心は即刻、再度、生起するが、それは、次の心路過程が発生するまで続く。この様に、(心が再び) 活発になる前の段階において、有分心は、1つ1つの心識刹那において、生滅する。それはまるで水が流れる様で、2個の心識刹那の間において、連続して停止する事がない。

死亡識：

死亡心 (cuti) は、1世 (1生。以下同様) の内の最後の1個の心であり、1世の終結である。この心と結生心、有分心は同じ種類の心であり、全て離心路過程心である。離心路過程心とは何であるか？すなわち、心路過程の外に属するののである。死亡識と有分識の違いは、作用が異なるだけである。すなわち、死亡を執行するのである。1世において、ただ1種類の心が、結生、有分、

死亡の作用を執行している。生まれ変わる時（受胎の時）、この種の心は、新しい1世と前の1世とを連結させる。生命の過程の中において、無数回の有分心の流れが出現するが、これも又、同じ種類の心であり、それが、生命を維持して、中断しない様にするのである。死亡の時は、死亡心が生起するが、これも又、この種の心である。それは、1世の終結を表すものである。

死亡と結生の過程

4種類の死亡の因：

死亡に面する因、4種類。すなわち、

1. 寿命が尽きる。
2. （今生の）業力が尽きる。
3. （上述の）2者が、（同時に）尽きる。
4. 毀壞業（が効力を発揮する）。

この4種類の因によって、死亡が発生する。通常、死亡の定義は、1世の中においての、命根の切断を指す。命根は色法であり、命根が切断されると、死亡が到来する。

1. 寿命が尽きる：

寿命が限定される生存界において、その他の有情は、寿命が尽きた時に死亡する。人間界においては、これは、年老いた為の自然な現象である事が知れる。仏教の考え方では、100年経過する毎に1歳減少し、現在の我々の平均寿命は70余歳となっている。もし、ある人が、70余歳まで生きて、自然な死に方をしたのであれば、これは、寿命が尽きたのだと言える。寿命が尽きて死亡する時、もし令生業の業力が未だ尽きていないのであれば、当該の業は、その有情を、同一の界または更に高度な生存界に生まれ変わる様に効力を発揮する。天界において、このような事柄が発生する事がある。

2. （令生）業力が尽きた時：

令生業を、既に使い果たした為に死亡する。本来の寿命は未だ尽きていない、又はその他の、寿命を引き伸ばす条件が整っていたとしても（死亡する）。というのも、人間として生まれる為の、その業が既に終結したが故に。この様なパターンは「令生業」が既に尽きた（為）と言う。

3. 上述の2者が同時に尽きる：

寿命と業力の2者が同時に尽きた場合、「2者が尽きた為の死亡」と言う。

4. 「毀壞業」の発効：

極めて強力な毀壞業が、寿命が尽きる前に、その人の令生業力をば、中断に追い込み、死亡に至らせしめる。例えば、ある人物が、本来なら70余歳まで生きられる所、35歳の時に、以前になしたある悪業が、この時突然熟して、彼に突然の自動車事故などをもたらす。これを「毀壞業」が効力を発揮した、と言う。この事は、まるで、オイルランプが消える時の様である。ある時はランプの芯が燃え尽きたから、又はオイルが尽きたから、又は芯が燃え尽きたと

同時に、オイルも使い果たしたから、と言える。最後のものは、突然、風（これがすなわち毀壞業である）が吹いて来て、火がその為に消える様なものである。

死亡の相：

人が臨終を迎えた時、過去のある1個の業が熟して、次の1世（1生。以下同様）の生まれ変わりをもたらす。故に、何らかの目標が、彼の最後の1個の心路過程に顕現する。この目標は、3種類に分類する事ができる。それぞれ：業、業相、趣相である。

病院の終末医療に携わる人は、人の臨時において、よく不思議な現象に出くわす。死に行く人が、よい相を見る時、微笑する。好ましくない相を見る時、大声で叫んだりする。故に、死に行く人の顔色や表情を観察すると、その人がどこに往生するか、だいたい事は分かる。

1. 業：

状況に応じて現前するのは、次の1世に生まれ変わる事になる業である。業（kamma）は、過去においてなした所の善業又は悪業である。もし、常日頃から布施をしておれば、臨終の時には、映画の様に、自分が布施しているの姿が見える。また、医師であるならば、常日頃、よく病人の世話をしたり手術をしたりするが、往生の時には、病人を治療したり手術したりする己の姿が見える。これを「業」と言う。

2. 業相：

すなわち、以前に業をなした時に知った所の色彩等、又は以前に業をなした時に使用した道具などである。善業又は悪業をなした時に使用した道具。例えば、あなたは常日頃、よく仏陀にお花の供養をしたとする。臨終の時、お花を供養した善業が熟したならば、あなたは、再びお花を見る事ができる。お花があなたの心に出現することがすなわち、「業相」であり、（そのお花は）あなたが善業をなすときの道具である。もし、常日頃、ピストルを持って他人を襲い強盗をしており、かつ、強盗の悪業が臨終の時に熟するならば、次の1世の、生まれ変わろうする時、ピストルが見えるのである。このピストルは「業相」であり、悪業をなした時の道具である。同様に、ナイフで人を殺した人間や、豚・牛などを屠殺する人間の、臨終の時にその殺生の業が熟したならば、この種のナイフを「業相」として見るのである。医師で、常日頃、よく手術する人であるならば、同じく、ナイフの業相を見るのである。

3. 趣相：

出生せんとする間際の場所の象徴。例えば、と殺業に従事していた人が臨終の時に見るのは、と殺に使っていたナイフかもしれない。これは「業相」である。また「趣相」（を見る）事もある。例えば、地獄に生まれる時は、火が見えるが、他人には、この火は見えない。と言うのも、これは彼の業であるが故に、彼にしか見えないのである。私がオーストラリアにいた時、ある居士が以下の様な事を教えてくれた。彼女の夫が癌になって、身体に疼痛があったが、彼はモルヒネも打たず、どの様な薬も飲まず、苦しみを禅の修行で乗り越えようとした。最後、臨終の時、彼は「とても明るい！とても明るい！」と言いつづけた。彼女は「電灯はつけましたよ」と言ったが、彼は尚も「とても明るい！とても明るい！」と言いつづけた。彼女は、これは一体どうした事か、全く理解出来ないでいたので、私にこの事を知らせて質問したのである。私は「彼は光を見たのでしょよう。」と答えた。光を見ると言うことは、「趣相」である可能性がある。と言うのも、天神は非常に明るいからである。故に、彼が光を見たという事は、それ

は「趣相」で、彼は天界に生まれたであろう事が想像出来る。私の説明を聞いて、彼女は大いに納得して、大いに慰められた。

同様に、ある種の人々は、臨終の時、非常な熱さを感じる。あなたはうちわを使ってあおいであげても無駄である。というのも、彼はその時、地獄の相・地獄の火を見ているが故に。この地獄の火は「趣相」であり、彼の次の1世は、地獄に生まれる事を表している。パオ森林僧院において、ある禅の修行者が、一生涯の内に非常に多くの布施をしたが、その為、臨終の時には、非常に多くの天女が彼を迎えに来た。この種の相は趣相であり、天界に生まれ変わるであろう事を表している。もし、動物、例えば虎、ライオン、猿等などに生まれ変わるのであれば、森林かジャングルが見えるであろう。この場合、彼は動物に生まれ変わる可能性がある。しかし、出家の比丘方は、一生、森林に住んで、森林の中で座禅・瞑想する為、往生する時、森林を見るかもしれない。故に、森林の趣相を見たからと言って、必ずしも、良くない場所に生まれ変わるとは限らないのである。離心路過程の概要において、「4個の4」があることを理解すること。

- (1)4個の生存地
- (2)4種の結生
- (3)4種の業
- (4)4種の死亡

四生存地：悪趣地

悪趣地 (apāyabhūmi) パーリ語「apāya」は、「全く無い」(apa)、「楽しい」(aya)で、悪趣地は、全く楽しみのない所、の意。悪趣地は、以下の4個の状況がある。

1. 地獄：

地獄は最下層の生存地、最も苦痛な生存地である。聞くところによると、地獄の衆生は、そこに生まれて死ぬまでの間、己の悪業の果を、絶え間なく受けなければならない。休息の時間は全く、許されない。これらの地獄の衆生は、ある者は絶え間なく身体を切り刻まれ、ある者は煮えたぎる油の鍋の中に、絶え間なく放り込まれる。ある者は、絶え間なく、(身体に)釘を打ち込まれる。地獄には、色々な刑罰がある。

諸々の論師は、その中に八大地獄がある、と言う。そして、それは(下に下るほど)その1つ1つは、ますます強烈に、耐え難いものだ(と言う)。それらは、等活地獄、黒縄地獄、衆合地獄、号叫地獄、大号叫地獄、燃焼地獄、大燃焼地獄、阿鼻地獄である。この中では、阿鼻地獄が最下層で、かつ、最も恐ろしい所である。デーヴァダッタは、サンガの分裂を企てた重業の為、阿鼻地獄に生まれた。1つの大きな地獄、その四方(四隅)には、それぞれ4個の小地獄がある。故に、合計136個の地獄がある事になる。地獄もまた、未来において、我々が行かねばならない所である。もし、地獄に行きたくないのであるならば、悪事は止めて、善を養う事である。良い事を多く実践して、善業を増やすこと。

2. 畜生道：

有情は、悪業の果報の結果、畜生道に生まれ変わる(事がある)。畜生は、空にいるもの、陸地、水中にいるもの(等がある)。衆生は、己のなした業に基づいて、異なる畜生道に生ま

れる。畜生道と人間界は同じ所にある。

3. 餓鬼道：

「餓鬼」と訳される所の、パーリ語は「peta」である。飢餓、喉の渇き、その他の病によって、苦しみ絶えない有情の事である。餓鬼は、己自身の世界を持っていない。彼らは人類と同じ世界にいる。例えば、森林、沼地、墓場等の場所。通常、人々には彼らが見えない。彼らが自ら出現する時以外は。

4. 阿修羅道：

阿修羅は幾つかの有情を含む。諸々の論師は、悪趣にいる阿修羅は、餓鬼と似ていて、長期的に苦しんでいる有情である、と言う。悪趣にいる阿修羅と、33天にいて、諸々の天神と争っている阿修羅は、区別しなければならない。後者の阿修羅は、33天に属する天神である。天神も人類と同じ様に、喧嘩もする。貪瞋痴のある所、争いは尽きない。

四生存地：欲善趣地

欲善趣地は7界ある。

1. 人間界
2. 四天王天
3. 33天（帝釈天）
4. 夜摩天
5. 兜率天
6. 化樂天
7. 他化自在天

人間界以外の、その他の6つは皆、天界である。

1. 人間界：

パーリ語は「manussa」（人）。直訳は「鋭敏な心を持つ者」。人類の心は、非常に鋭敏である為、その他の衆生よりも尚、善又は不善をなす事ができる。人は仏果（最高の境地）を悟る事もできれば、父殺し、母殺し、サンガの分裂、アラハン殺し、仏を出血させる等の極めて重い悪業をなして、阿鼻地獄へ墜ちる事もある。人間界は、苦あり楽あり、憂いと楽しみが相半ばしており、故に修行に適している、良い場所である。もし、あまりに楽しい環境の中に生れたならば、その中において、修行するのは困難である。仏陀の四聖諦の中の1番目は「苦諦」であり、これは又、仏陀がなぜ物質的に恵まれたアメリカに生まれなくて、インドに生まれたのか、と言う問への答えである。しかし、近年は、アメリカ人も又苦難に見舞われる事多く、その為、ますます多くの人々が、禅の修行法を学んでいる。苦を体験した人間だけが、苦から抜け出そうとし、最後には仏法に出会う。生活が余りに楽しい場合、仏法と共鳴する事はない。

2. 四大天王：

これは天界の第1番目の層である。四大天王は、四方にあって、4個の分かれた、界がある。1つ1つの界は、それぞれ1人の天王が統治しており、その住民は、半神の有情である。東方で

は、持国天王が乾達婆を統治しているが、それはすなわち、天界の音楽の神である。南では、増長天王が守護神を統治しているが、それはすなわち、森林、山岳、宝蔵などの守護神である。西では、広目天王が諸々の龍神を統治している。北では、多聞天王が、諸々の夜叉を統治している。

3. 33天：

伝説によると、昔、他人の幸せの為に、己の命を捧げた33人の善男子がいた。死後、彼らは、当該の天界に生まれ、当該の界の大王と32の小王になった。その為、当該の界は、その名を、「33天」と呼ぶ様になった。当該の界の大王は帝釈天王である。帝釈天には以下の小話がある。先程申し上げた通り、人間界は苦楽相半ばし、比較的修行するのに適している。反対に、天界は楽しい事が多く、放逸になり易く、修行に適さない。帝釈天は聖者ソータパナであり、ある時、外界に降りてきて仏陀に法を学んだ。彼が仏陀に尋ねた：

「衆生はどの様にして輪廻の苦痛から解脱するのですか？」

仏陀は言う：

「無明と愛慾を取り除けば、痛苦から解脱することができる」。

帝釈天はこれを聞いて大変に喜び、法義に随喜して

「sādhu ! sādhu ! sādhu ! 」

と述べた後、神通を使って天界に帰って行った。

モッガラーナ尊者は天耳通でもって、随喜の声を聞いて、心に思った：

「帝釈天はどの様な法義を聞いて、この様に喜ぶのであるか？私は彼から教えて貰おう」
そして、神通を使って帝釈天に付いて33天に行った。

4. 夜摩天：

夜摩天は極楽の境である。その王は善夜摩天王又は夜摩王。

5. 兜率天：

菩薩が仏陀になる前の最後の1世の住まい。

6. 化楽天：

化楽天の天神は、心任せに欲楽の物を創り出す事が出来る。

7. 他化自在天：

他化自在天は、心任せに欲楽の物質を造り出す事は出来ないが、他人が造り出した物をコントロールして、自分のものにすることができる。

四生存地：色界地

色界地は、生前において既にある種の色禪を証得し、かつ、死亡の時まで、怠惰により当該の禪を失うという事のなかった人が、死後生まれ変わる所である。色界地は16界ある。

1. 初禪：

梵衆天、梵輔天及び大梵天という、合計3個の界がある。初禪は、有限初禪、中等初禪、

高等初禪がある。もし、あなたが有限初禪まで修習してあるのならば、往生後、梵衆天に生まれる。中等初禪であれば、往生後初禪地の梵輔天に生まれる。高等初禪である場合は、初禪地の大梵天に生まれる。

2. 第二禪：

少光天、無量光天及び光音天がある。

3. 第三禪：

少淨天、無量淨天及び淨居天。合計3界。

4. 第四禪：

広果天、無想有情天及び淨居天。淨居天は又、5層に分けられる。無煩天、無熱天、善現天、善見天、色究極天。故に、第四禪は、合計7個の界がある。

5. 淨居天 (suddhavasa)：

既に三果を証したアーナガーミだけが、行くことの出来る地である。当該の地に生れたならば、それより下層の地・界に生まれ変わる事は決してない。ここの地において、必ず般涅槃を証し、入る。

仏陀は、菩薩道を修する時、淨居天と阿鼻地獄以外、その他の界は全て、出生した事がある。もし、菩薩が淨居天に行ったならば、必ずそこで般涅槃しなければならない為、人間界で仏陀になる事が出来なくなる。淨居天には凡夫はおらず、ソータパナもサカダーガーミもない。サカダーガーミとは、欲界にもう1度だけ来る所の存在である。無想有情天は第四禪に属する。ここの衆生は色法しかなく、心法はない。彼らは、未だこの界に来る前、心は諸々の煩惱が生じる原因である、心がなければ、心的反応もなくなると考え、心のない、色法だけの所に生まれたいと希望する傾向がある。これが無想有情天である。

聖者（ソータパナ、サカダーガーミ、アーナガーミ、アラハンを含む）は、無想有情天に生まれないし、又、悪趣にも生まれえない。というのも、既に有身見を捨て去っているが故に。有身見を捨て去れば、その者がその前になした悪業は、悪趣に生まれ変わる様に誘引する力を完全に失うのである。例えば、アングリマーラは999人の村人を殺したが、これは彼の悪業となる。しかし、仏陀に出逢って後、彼は刃を下ろして比丘戒を受け、アラハンを証した。彼がソータパナ道を証した時、有身見は取り除かれた。もし、彼がその時に死んだのであるならば、彼の悪業が彼を四悪趣に落とす事はないが、しかし、果報は受け取らなければならない、故に彼は毎日托鉢に行く度に、人々に石を投げつけられて、頭に流血するほどの怪我をして、戻らねばならなかった。これを現生受業と言う。

帝釈天は、33天に帰って来ると、花園に行った。花園には、多くの仙女が歌を歌い舞を舞い、欲楽を嬉しんでいたの、帝釈天もまた一緒に楽しんだ。この時、モッガラーナ尊者が突然現れ、帝釈天は、少しバツが悪く感じた。というのも、先程仏陀の説法を聞いたばかりなのに、戻ってすぐに享楽を楽しんでいるが故に。モッガラーナ尊者は、彼に、先程聞いたばかりの、仏陀の説法に関する法義を尋ねたが、帝釈天はどの様に頑張っても、思い出す事ができず、とても恥ずかしい思いをした。この小話は、あまりに享楽に耽溺しすぎると、頭がぼんやりして、修行ができなくなる事を物語っているものである。

四生存地：無色界地

臨終の時に、無色禪を擁する者が、死後生まれ変わる所。1つ1つの無色禪は、それぞれ相応の界へ導く。合計4層ある。すなわち、

1. 空無辺処
2. 識無辺処
3. 無所有処
4. 非想非非想処

四生存地：結論

1. 31界は、11個の欲界地、16個の色界地、4個の無色界地。31界は又1個の宇宙でもある。
宇宙は非常に多く、複数個あり、仏陀は我々の生存する宇宙に生まれたのである。
2. 11個の欲界地は、悪趣地（4個の界）、欲善趣地（7個の界）。
3. 16個の色界地は、それぞれ初禪（3個の界）、第二禪（3個の界）、第三禪（3個の界）、第四禪（7個の界）。
4. 4個の無色界地は、それぞれ4個の界（空無辺処界、識無辺処界、無所有処界、非想非非想処界）。

四種の結生

悪趣結生：

悪趣に生まれ変わるその1刻、不善果報捨具推度心は、結生心となる。その次に有分に落ち込み、それは有分心になり、最後に死亡心になる。この1世（1生。以下同様）は、これで切断される。すなわち：「悪趣によって結生された結生識、有分識と死亡識は、不善果報捨具推度心である」と言える。これは、唯一の悪趣結生である。

欲善趣結生：

善果報捨具推度心は、欲善趣地の中においては、盲目などの先天性疾患を擁する人類、有る種の神と、有る種の阿修羅の結生心となる。八大果報心（4個の智相応、4個の智不相応）は、一切の欲善地における結生、有分と死亡心になり得る。この9種は欲善趣の結生に、更に、唯一である所の、悪趣結生を加えたもので、故に、欲界の結生心は、合計10種ある事になる。

盲目等の先天性疾患を擁する人類：

いわゆる盲目等の先天性疾患の「等」は、先天性ろうあ、身体障害、知的障害、発達障害及び性的中性等のLGBTQ（性的マイノリティー）の人を指す。諸々の論師は、「先天性盲目」は熟した業が、幸福度の少ないものの故、結果（それが誘発する所の）眼根が発達しないタイプの結生心が原因である、と言う。上記の説明には、胎内において意外な事故が発生したり、又、有る種の病気が発生して、結果、出生時に既に盲目であった者は含まれない。というのも、この種の盲目は、結生心2因（八大果報心の中の智不相応者）と3因（八大果報心の中の智相応者）の人間

にも発生するが故に。先天性ろうあ等も又、その原則は同様である。一切の先天性障害を擁する人（と四悪道の衆生）の、彼らの結生心は、必ずや、無因である。

欲界の寿命：

四悪趣の中において、寿命の差は非常に大きい。それは、当該の地に生まれ変わる時の悪業の強さによる。故に、有る種の衆生は、地獄において何日間苦しんだだけで、直に他の場所に生まれ変わる。有る種の者は、幾百年もの長い間、地獄で苦しまなければならない。例えば、デーヴァダッタは、今も阿鼻地獄にいて、更に長い時間そこで過して初めて、彼の悪業によって生じた果報が終了するであろうと思われる。マリツカ皇后は、地獄に7日いただけである。故に、地獄にいる期間は、己のなした業の重さによるのである。重業である場合、地獄での寿命も長くなる。軽業の場合は、非常に短期間になる。

人間界において、人間の寿命で一番短いのは何分間（生まれてすぐに夭逝する）であり、又、長い場合は100年となる。我々の、この1期の生命は非常に短い、と言える。現行の平均寿命は70余歳であるが、その前の仏の寿命は8万年であった。仏教によると、人類の寿命は絶え間なく変化しており、最低は10年、最長は無数年である。もし、人類の戒（徳行＝徳のある行為）がますます劣ってくると（強盗、殺人.....）寿命も又、ますます減って来て、やがては10歳で往生する様になる。もし、持戒がますます清らかであるならば、寿命も又、徐々に増加して数万年になる。故に、寿命は無常で、変化している（事が分かる）。

《分別論》の中において、以下の様に述べられている。

四大王天の1「日」は、人間界の50年。

33天の1「日」は、人間界の100年。

夜摩天の1日は、人間界の200年。

兜率天の1日は、人間界の400年。

化楽天の1日は、人間界の800年。

他化自在天の1日は、人間界の1600年。

この様に、上層に行く程に、その寿命は倍加する。

梵天（界）の寿命は非常に長い。その間には既に、幾尊かの仏が出現したものと思われるが、彼らの寿命はまだ終わっていない。梵天の寿命が長すぎる為、彼らの中に己が世界を創造したのだ、と言う邪見が生まれた。すなわち、世界に存在する全てのものは、彼が創造したのであって、彼は創造主であると考えた。と言うのも、他の生き物は生き死にするのに、彼だけが死なないが故に。大梵天神に、この様な邪見が生まれた時、仏陀はそれに気がついて、梵天の所へ行って、梵天神に真実を知らせ、彼がこの様な邪見を捨てられる様に支援した。

色界結生とその寿命。無色界結生とその寿命。（解説を省略する）。

四種の業

業、パーリ語「kamma」。その意味は「造（ナ）す事」。善又は不善の思心所の事。52心所の中に1個の思心所があり、それは業を造る所の心所であり、それがまさしく業である。仏陀は《増支部》の中において以下の様に言う：

「比丘達よ。私は、業とはすなわち思であると言う。その願いに基づいて、人々は、身・口・意を通して、業を造る。」

業が熟した時、ある者は地獄に墜ち、ある者は動物になり、ある者は餓鬼になり、ある者は人身を得、又は天道を得る。業の異熟（すなわち果報）は、3種ある：現生受有、次生受有、無尽業。

業と果報：

1. 業：

1つ1つの願望を伴った行為は、皆、果報を生じる。因が果を生じせしめる為、それを見れば因が分かる。例えば、己の生活の様子、容貌、寿命、健康状態、性別、智慧等々は、果である。果をみれば、己が前世で蒔いた因を知る事ができる。業は善なるものと、不善なるものがある。果報の本質からみると、善と不善の区別は持たない。善であるとか、不善であるとかを言うのは、その善業又は不善業がもたらす、結果を言うのである。

業の定法、それは、なした所の業の、その善か悪かによって、それに符合する所の、果報を確保する。例えば、（植物の）種は、その種類の基づいて、果実を生む。我々が、手にあるボールを壁に向かって投げつけたならば、その力が大きい時は、ボールの戻って来る力は大きい。力が緩い時は、ボールの戻って来る力は小さい。これが、業の定法である。ボールは、壁に向けて投げつけられれば、必ず弾んで、戻って来る。業をなし（造り）続けるならば、必ず果報が生じる。どの様な果報を受け取るかは、どの様な種を植えたかによる。苦瓜の種を植えたのであれば、将来、生じる果実は苦瓜であり、ヘチマや冬瓜にはならない。我々は、善なる果が欲しいのであるならば、善の因を植えなければならない。苦の果が欲しければ、苦の因を植えればよい。この様に、野菜や果物を育てる事の中にも、非常に多くの仏法が内在している。

2. 果報：

諸々の縁が十分に具足した時、業はその果報（vipaka）を生じせしめる。果は、3種類ある：

(1) 心：

いわゆる果報心。人類又は天神など、これらは皆、前世にて蒔いた種が因となって得た結果である。結生心、有分心と死亡心は、共に同種の果報心である。我々の眼識、耳識、鼻識、舌識、身識も又、前世でなした業によって生じた果報であり、果報心に属するものである。ある種の人々は、生まれつきの盲目であるが、これは、前世の業によって、眼識が生起しない為である。

(2) 心所：

52個の心所。例えば、触、受、思……など等。

(3) 業生色：

以下の通り、四大（地水火風）、性根（男性又は女性）、眼浄色、耳浄色……など等。有る

種の人々は眼力が非常に良い。小さい頃から、年老いても眼鏡を必要としない。これは彼の善果報である。ある種の人々は、聴覚が非常に優れていて、70余歳になってもよく聞こえる。これも又その人の善果報である。ある種の人々は、50歳をすぎると耳が聞こえにくくなるが、これもまた彼の果報である。

業の根源：

業の根源は、無明である。無明とは、真実の法をありのままに知見することがない事である。12因縁法に基づいて、無明の縁により行が生じ、無明によって行為が生じる。それは意業、口業、身業を含むものである。無明と相応するのは愛欲であり、故に、無明と愛欲は業の根源であると言える。アラハンの行為（例えば説法）は、業とは言わず「唯作」と言う。と言うのも、彼の無明と愛欲は既に取り除かれている為に、彼のなす行為は、果報を生まないが故に。

凡夫がなした（造った。以下同様）善業は、3個の善因（無貪、無瞋、無痴）と相応するものの、無明と愛欲が未だ生命流の中において潜在している為、なした業は、依然として果報を生じる。例えば、1本の木にとって、根が最も重要であり、木の根を切らないで、枝だけ切ったのでは、木は依然として成長を続けるのと同じである。と言うのも、根が未だ取り除かれていないからである。同様に、長い輪廻の中において、無明と愛欲を取り除かないのであれば、我々がなす所の善業と不善業は、必ず果報を生じせしめるのである。

業の作用に基づく分類：

諸々の業は、各種の異なる作用を執行する。ここでは、重要な4種を紹介する。業は、異なる時期において、その中の1個または複数個、作用する。

1. 令生業（janakakamma）：

結生の時及び一生涯、果報心・心所・業生色を生じる所の、善または不善の思。仏陀は言う：「思が業である」

結生のその1刻、令生業は結生心と新しい生命における身体の業生色を構成する。我々が受胎するその一瞬、過去生においてなした令生業が、結生識と四大によつて構成されている身体を生じせしめる。1世の内において、それは継続して、その他の果報心と業生色、例えば、5根識、5根、性根色及び心所依処などを生じせしめる。臨終の時に熟した業のみが、結生識をば生じせしめる事ができる。しかし、一切の、善又は不善の業は、生命の期間中その果報を生じることができない。例えば、ある人が在世の時、よく赤い花を仏に供養するならば、臨終の時、彼の臨終眼門心路過程が生起する時、赤い花を所縁となし、それを縁として取る。その心路過程は過去の有分識、有分波動、有分断、五門転向、眼識（赤い色が見えた為）、領受、推度、確定、速行（5個）、その後、最後の1個の離心路過程の心、死亡識が生起し、その後、この人間は死亡した、ということになる。その後、間断なく、結生心が生起する。彼の臨終速行心の所縁は、母胎に現れた赤い色であり、それは、もうすぐ人間として産まれることを表している。結生識は、前の1世の臨終速行心の所縁を縁として取るのであって、死亡識の所縁を縁に取るのではない。結生識は果報心であり、花を供養するという所の、令生業によって生じた果報である。

結生識が生起し、かつ滅した後、心の過程に基づき、次に16個の有分心が生起する。16個の有分心も又、赤い色を所縁とする。と言うのも、結生識と有分識は、同一の果報心であるが故に。結生識が生起するその刹那、令生業も又同時に30種の色法（性根十法聚、身十法聚、心十

法聚)を生じる。結生識(が生起する)その一瞬、令生業も又果報心識、結生識、有分識、果報心と業生色(すなわち、30種の色法)を生じる。生命の期間中、徐々に5根が生起し、相応する5根識、例えば眼識、耳識、鼻識……など等もまた、その後引き続き生起する。故に、生命の期間中、令生業も又、その他の果報心と業生色を生じせしめるのである。

2. 支助業(支援業upatthambakakamma) :

これは熟することがないまま、結生を生じるチャンスがない業を言う。それは、令生業を支援して、後者(令生業)が生じせしめる所の善報(例えば人間界や、天道に生まれるなど)または悪報(例えば、四悪道に生まれるなど)を延長せしめる。支助業は、善でもあり得るし、不善でもあり得る。善なる支助業は善なる令生業を支援し、不善の支助業は、不善のものを助ける。

善なる令生業が熟すると、ある有情は、人間として生まれ、支助業(過去生における布施、禪の修行など)がこの人間の寿命が伸びる様に、健康である様に、衣食が足る様に、生活必需品が豊富である様に、気力が充実する様に、協力・支援する。もし、我々が、今、長寿であり、健康で、食事が進み、ぐっすり眠れるならば、それは、我々の過去生の支助業が、我々を助けてくれているのである。しかし、あまり喜んでいいられない。と言うのも、1生の内において、阻害業または毀壞業もまた随時熟するが故に。

アーナンダ尊者の例で言えば、アーナンダ尊者の寿命は160歳であった(一説によると120歳)。彼は王子として生まれたので、令生業は善である(人間として生まれる事はすでに令生業は善である)が、それに加えて、彼の強くて力のある支助業によって、彼は100歳を越す長寿であった。仏陀の時代、シワリと言う尊者がいて、供養第一であった。彼はどこへ出向いても豊富な供養を受け、食べ物に困る事はなかった。ある時、仏陀が某所へ出かける前に、天眼で観察してみると、その道は非常な悪路で、托鉢するには困難が予測された。故に、仏陀はシワリ尊者を連れて行った。シワリ尊者の支助業のおかげで、仏陀の衣食が豊富になったのである。

仏陀の時代の、もう1人の、布施第一の富裕な女性居士はVisakaである。彼女は富裕なだけではなく、美貌の持ち主であり、気力も強力であった。聞くところによると、彼女が手で象を押すと、象は皆後ずさりしたそうである。これらは、彼女の善の支助業が彼女の令生業を支援しているのである。反対に、不善の令生業が病苦をもたらす時、その他の不善業もまたそれを支持して、薬が効果を発揮できない様にしたたりする為、結果、病が長引く事がある。有る種の有情が、不善の令生業の為に動物に生まれたならば、支助業は当該の悪業を支援して、更に多くの苦果をもたらす(例えば、野犬等)か、またはその寿命を伸ばして、不善の果報心の流れが更に長引く様にする。

3. 阻害業(upapīlakakamma) :

この業も又結生を生じる事の出来ない業である。しかし、令生業を阻害する事はできる。すなわち、善報又は悪報を短縮するのである。阻害業は善でも不染でもあり得る。善業は、不善業を阻害し、不善業は善業を阻害する。ある衆生が、善の令生業によって人間に生まれたとして、阻害業は彼に多くの苦痛をもたらす。すなわち、その人が享受できるはずの善報を阻止するのである。人間に生まれた事は善の令生業の故であり、本来なら多くの幸福なる報いを受取できるはずであるのだが、阻害業が善業の発露を阻止するのである。故に、病多く、人間とし

ての楽しみを得る事が出来ない。阻害業は、我々をして、貧困な家庭に生まれせしめる事もある。これによって、人間としての楽しみを味わえなくなるのである。

阻害業の影響の下、本来は高度な善趣に生まれる事のできた令生業が、比較的下等な善趣に生まれることになってしまう事もある。天界に3人の仙女がいて、皆踊りが上手であった。ある男神が彼女達を褒め讃え、神通で、彼女達の過去世を見てみた所、彼女達は、3人の比丘であり、己自身は、1人の女性でた事を発見した。3人の比丘は、毎日、この女性の所へ托鉢に来て、女性は彼らに食べ物を布施した。3人の比丘は心が享楽へと傾いてしまい、また阻害業の影響を受けて、結果、彼らは比較的下等な天界に生まれる事となった。天神は彼女たちに注意を促して言った：

「あなた方が仏法を聴いていた時、その耳は役割を果たしたのかね？過去生においては私はあなた方に布施をしていた者だ。あなた方比丘の身分は私より高貴であったのに、今は反転してしまった。」

その中の2人の仙女は、それを聴いて非常に恥じて、その後精進努力し、やがて聖者になった。残りの1人は引き続き歌い踊り、結果、解脱することは叶わなかった。

もう1つ別の例を。仏陀の時代、説法第一の女性居士寿多羅 (Khujjuttara) は、皇后サマバティの使用人であった。生まれつきの猫背で、それは一説によると、彼女が前世でなした業によるものである、と。本来ならば比較的レベルの高い家庭に生まれる事が出来、使用人になる必要はなかったのだが、しかし、阻害業の影響で、低いレベルの家庭に生まれた、との事である。

阻害業の影響の下、もともとは長寿であった業が、短命になってしまう。もともと美貌で生まれるはずの業が、平凡な顔つきになってしまう、など等。《本生経》の中において、古利 (kusa) は、その1世は我々の菩薩であり、兄と共に住んでいた。彼の兄嫁は、後のヤソーダラである。多くの世において、菩薩とヤソーダラは、夫婦であったが、この世では異なった。ある日、菩薩は仕事に行き、兄嫁は家で昼食の準備をしていた。彼らが家に戻って昼食を摂る予定であった時、パーチェカ仏が托鉢に来た。家には余分な食べ物がなかった為、兄嫁は菩薩の為に準備した昼食をパーチェカ仏に供養した。菩薩は家に戻ってこの事を知ると、非常に怒り、外へ出て、パーチェカ仏を見つけて、鉢の中の、すでに供養された食べ物を全て取り戻した。兄嫁はそれを見て非常に怒り、実家に戻って、食べ物を用意して、パーチェカ仏に届けた。彼女は供養するとき、願を掛けた：

「この布施の功德により、私の身体が金色に輝きます様に。そして永遠に、この下等な人 (菩薩) とは、一緒になりません様に」

菩薩は彼女の願いを聞いた後、急いで己の食べ物をパーチェカ仏に供養し、1つの願をかけた：

「この布施の功德によって、世界の果てにまで、私は彼女を妻にして、彼女が私に仕えます様に」

我々がパーチェカ仏の様な尊者に供養する時、供養を受ける人の、成就の内容が非常に高度な為、どの様な願であろうとも、我々の願は実現するのである。

菩薩は、その布施の功德によって王子に生まれたが、容貌が非常に醜かった。というのも、前生で、彼は瞋恨から、既に供養した物を奪い返したことがあり、その瞋恨の心により、容貌が醜かったのである。しかし、彼は勇敢で良き戦士であり、体力が充実して力持ちであった。16歳の時、彼は既に己の容貌が醜く、妻を娶る事はできないであろうと考え、母の皇后に、一生

結婚しない旨をつたえた。しかし、皇后はそれを許さなかった。菩薩は一尊の金色に輝く女性の彫像を作り、世の中にはこの様な、美しい女性は存在しないであろうと思い、皇后に言った：

「もし貴女が、この彫像と同じくらいの美しい女性を見つけて来ることができたならば、結婚しても良い」。

皇后は、インド全土くまなく人を派遣して、探してみた所、他の国の1人の王女（後のヤソーダラ）を見つけた。菩薩の国は強くて、勢力も大きい為、他の国は彼の妻探しに必ずイエスと言わねばならない。しかし、皇后は女性が皇子の醜さを見て後悔するのではないかと心配して、条件を出した。女性は嫁いだ後、日中男性に会うことは出来ない。夜だけは逢えるが、それを懐妊するまで続ける事。

王女は嫁いだ後、何とかして夫の風貌を見たいと願った。皇后は仕方なく策略を施し、嫁に言った：

「今日、貴女の夫は象に乗って外出します。貴女は窓辺に立って、彼を見ても良いです。」

皇后には2人の息子がいた。1人はハンサムで洒脱、1人は非常に醜い。彼女は、ハンサムな方の息子を象の背に乗せ、醜い方を前方に乗せて御者とした。妻は、夫がハンサムで瀟洒なのを見て非常に満足した。しかし、前方に座っている御者が、彼女に向かって手を振るので、不敬であると、不快に思い、かつ、不思議に思った。彼女は思った：

「私は一国の高貴な后である。この御者は、なぜこれ程大胆にも、大衆の前で私に手を振るのか？」

これには裏があると考えて、彼女は人を派遣して調べさせた所、御者が自分の夫である事が判明したのである。

ヤソーダラが、非常な美貌であった為、菩薩もまた、彼女を見たいと思った。ある日、ヤソーダラは池の行って水浴びをした。菩薩は一足先に行って池の中に隠れ、池から飛び出して、彼女を見た。ヤソーダラは、妖精を見たのかと思い、大声を発して逃げた。その後、人を派遣して調べてみると、件の妖精こそ彼女の夫であることが分かった。その日の夜、彼女は馬車を用意して、夜中の内に、実家に駆け戻った。菩薩は大変に悲しんだものの「地の果まで探しに行って彼女を必ず連れ戻す」と決意した。故に彼は、ヤソーダラの国まで出かけていき、コック、御者になったり.....ヤソーダラに近づきたいが為に最下層の仕事に、色々取り組んだ。彼は大変な苦勞を重ねた後、ようやくヤソーダラを自分の国に連れて帰った。これら一切の出来事は、彼が過去に掛けた願が原因である。こうしたことから、願をかけるときは、細心の注意を払わなければならない事が分かる。願をかけるには代償が必要であるが故に。この物語の要点は、菩薩は、強力な国の王子であり、又一国の（将来の）王でもあつたか、しかし、阻害業の影響の下、彼は容貌が醜くかっただけでなく、コック、御者などに身をやつさざるを得なくなり、通常の国王が楽しむ事の出来る栄華と富を享受することができなかった事である。

もともと、大地獄に生まれ変わる事になる不善令生業であっても、阻害業がその影響力の下、小さな地獄又は餓鬼道に生まれ変わる様に導くことがある。アジャセ王 (Ajattasatu) は、己自身の父ビンビサーラ（既にソータパナを証悟）を殺害した。父親殺しは重業である。彼は本来、大地獄へ生まれ変わるべきであったが、しかし、彼は仏陀に出逢って後、仏陀に帰依しただけでなく、非常に多くの善業もなした。これらの善業が、不善業を阻害した関係で、彼は

小さい地獄に生まれ変わる事となった。一生の内において、阻害業が造る所の、非常に多くの出来事を見る事が出来る。人間界においては、この種の業は業生五蘊（名色、業生色）を阻害する為、悪業が熟した時、その人が富や財産・人間関係等において、多くの損失と苦痛（破産、親子の離散、天災人災の発生など等）に遭遇する事になるのである。

仏典の中に、以下の様な物語がある：

パタチャラ（Patacara）は、裕福な家に生まれた。しかし彼女は、家の使用人と出奔し、裕福な実家を離れて、苦勞の多い日々を送った。インドの習慣では、女性が懐妊すると実家に戻って出産しなければならない。その為彼女は懐妊すると、その事を夫に告げたが、夫は彼女が実家に帰る事を許さなかった。彼女は夫が留守の間に、こっそり実家に帰ろうとしたが、道半ばで夫に追いつかれてしまった。この時、既に子が生まれていたの、仕方なく彼女は、夫に従って自宅に戻った。2人目を懐妊した時も又、夫は妻が実家に帰る事を許さなかった。この時も又、彼女は、1人目の子を連れて、こっそりと実家に向かったが、前回と同じくやはり、夫に追いつかれてしまった。この時大雨が降って来て、陣痛も始まったので、夫は適当な場所を見つけて、そこを産褥にしたが、運悪く、夫は蛇に咬まれて亡くなってしまった。パタチャラは風雨の中で2人目の子を産み終え、2人の子を連れて夫を探しに出たが、見つけたのは夫の死体であった。彼女は辛く悲しい思いであったが、事ここに及んで彼女は仕方なく、2人の子を連れて実家に戻る事にした。

河のほとりまで来た時、前の日に大雨が降った為に、河は水が溢れ、氾濫していた。彼女は同時に2人の子を抱いて河を渡る事はできないと考えて、長男を河岸に置き、先に赤子を抱いて河を渡り、その後、赤子を岸辺に置いて、長男を迎えに行こうとした。この時、大きな鷹が飛んできて、岸辺にいる赤子を肉片だと思い、赤子を啜えて飛んで行った。彼女はそれを見ると大声で叫んだが、もう1つの岸辺にいる長男が、母親が自分を呼んでいるのだと思い、河に入った為、溢れる水に流されてしまった。彼女は同時に2人の子を失い、傷心やまずであったが、仕方なく1人で実家に帰る事にした。その途中、彼女は故郷の知り合いに出逢ったので、実家の様子を尋ねた所、その人が言うには：

「昨日の大雨の為に、電線（ママ）から火が出て、貴女の実家の方々は、皆焼け死にました」彼女は、もともとは、富豪の家の出であり、その富を享受できる身であったが、使用人と出奔したが為に、貧苦の生活を送らざるを得なかった。その夫とも死別し、子と父母を失い、立て続けに大きな災害に見舞われ、種々の苦難に落ち込んだ。これは阻害業が、彼女の善の令生業を阻害しているのである。

もし、業果の作用を理解するならば、我々は、己の身の上に発生する所の、種々の出来事を受け入れる事ができる。前の世でなした不善業は、ある時には我々の、この一生の善業を阻害することがある。この様に理解する事は、我々が、不平等な境遇に遭遇した時、他人を恨む様な事をしないで済む、という訳である。この種の智慧を業報智（業により生じた果報への理解）と言う。己自身の業によって生じた果報であるが故に、何ら他人に恨みを投影してはならないのである。悪趣において、阻害業が令生業と対抗する事があり、結果、（そこでの生活に）いくらかの楽しみをもたらす事がある。例えば、不善の令生業によって餓鬼（界）に生まれたとして、彼の善なる阻害業が、不善の令生業を阻害し、結果、当該の餓鬼は、昼間は辛く苦しいものの、夜は楽しく過ごす事ができる、などである。本来、餓鬼と言うものは、昼夜を分かつた苦しいものであるが、しかし、善の阻害業が、不善業を阻害する関係で、彼は、一時

の快樂を、楽しむ事ができるという訳である。

ある1人の餓鬼は、前世は獵師であった。その頃、ある1人の比丘がしきりに、彼に五戒（特に不殺生戒）を守る様に教えた。しかし、彼は、それを守れない、と言う。比丘は言う：「では、あなたは少なくとも夜には不殺生戒を守りなさい」

彼は、言われた通りに実行した。彼は獵師であるから、非常に多くの殺生の業をなした為、死後、餓鬼道に落ちて、苦しんだが、しかし、夜に不殺生戒を守った善業によって、餓鬼道において、夜には一息つく事ができた。故に持戒は、短時間の1刹那であっても、やはり効果はあるのである。例えば、午後食事をしないという戒律は、たったの1日ではあっても、次の生において、我々に非常に大きな福報をもたらすものである。悪趣において、犬に生まれる事は、不善の令生業であるが、しかし、阻害業が令生業に対抗する事によって、ある種の犬は、非常に大きな幸福を享受している。例えば、同じ犬であっても、西洋の犬は東洋の犬と同じ運命ではなく、西洋人は、犬を非常によく可愛がるものである。これも又、善の阻害業が不善の令生業に対抗したものである。

4. 毀壞業 (upaghātakakamma) :

この業は、善のものも悪のものもある。それは、比較的弱い業を中断させ、弱い業が引き続き果報を生じるのを止めさせる。ある人が人間に生まれて、本来は長寿であるべきものを、毀壞業が顕現して、彼を夭折させてしまう。この例は、我々の日常生活の中において、よく見聞きするものである。例えば、ある人が、本来75歳まで生きる事ができるのに（これは人間の平均寿命）35歳位で亡くなったり、天災に巻き込まれて、死んだりする。

これが（業に関する）4種類：令生業、支助（支援）業、阻害業と毀壞業の説明である。業の異熟は不思議なものである。仏陀は《増支部》の中において以下の様に言う：

「4個の不思議がある。それについて、考える必要はない。もし、それについて考えるならば、その人は挫折し、狂乱するであろう。」どの、4であるか？

1. 諸々の仏の境地。諸々の仏が到達した境地は、考える事が出来ない。
 2. 定を得た者の境地。1人の人間が定に入った時、その境地を考える事は出来ない
 3. 業異熟。業はどの様にして果報を生じるのか？なぜ、突然、熟するのか？
 4. 世界とは何か？と思惟すること。世界はいかにして始まったのか。どの様にして終焉するのか？これも又、我々の智慧では理解出来ない事柄である。
- もし、この4個について考えを巡らせるならば、精神錯乱する。果報は業の熟したものであり、それは因縁の法である、と知るならば、それで十分である。

熟する順番による分類：

業を、それが熟する順番（果報が生じる順番）によって分類する。以下の4種になる：

1. 重業
2. 臨終業
3. 慣行業
4. 已作業

長い輪廻の中において、我々は各式各様の業をなす。それは善業であつたり、悪業であつたりするが、臨終のその1刻、どの業が熟するのか？（それが問題だ）。1番目は「重業」である。もし重業がないのであるならば、2番目は「臨終業」が熟する。もし臨終業がないのであるならば、3番目に熟するのは「慣行業」である。もし、これら3種の業がないのであるならば、最後に熟するのは「已作業」である。故に、業の、果報の生じる順序から分類すれば、重業、臨終業、慣行業、已作業という事になる。《清浄道論》においては、1番目は重業。2番目は慣行業。3番目は臨終業となっているが、《アビダンマッタサンガッハ》では、2番目は臨終業、3番目が慣行業、となっている。

1. 重業：

所謂重業について、全ての殺生が重業になるわけではない。ただ5種の業のみ、重業と呼ぶ。それぞれ：父親殺し、母親殺し、アラハン殺し、仏陀に怪我をさせて流血する及びサンガの分裂（を奨めた者）。

デイバダッタは、仏陀に怪我を負わせて出血させるという重業をなしたことがある。仏陀が、霊鷲山の麓で経行（歩く瞑想）をしていた時、デイバダッタは山頂から大きな岩を落とした。その岩の破片が仏陀の足の指に当たり、仏陀は流血することとなった。これを仏陀身体の出血といい、重業となる。

デイバダッタは、もう1つの重業もなした。サンガの分裂である。比丘または比丘尼が会議を開いている時、すなわちサンガ（の構成員）が集まっている時を利用して、サンガを2つに分けようとしたのである。これをサンガの分裂という。デイバダッタは、仏陀がサンガを指導することによって非常に多くの供養を受けるのを見て嫉妬した。ある日の会議のとき、半分の比丘達を説得して、特に、出家したばかりの若い比丘達を連れて出て、サンガ全体を真っ二つにしようとした。仏陀は、サーリプトラ尊者とモッガラーナ尊者に、若い比丘達を連れ戻す様にと言った。その為、サーリプトラ尊者とモッガラーナ尊者は、デイバダッタの後について行った。デイバダッタは、2人の首席弟子も自分について来るのかと思い、非常に喜び、サーリプトラ尊者に説法してくれる様に頼み、自分は躰をかきながら大いに眠った。目が覚めてみると、総ての弟子は、2番目の首席弟子に連れられて元のサンガに戻っていた。

デイバダッタは、一生の内において、2種の重業をなしたのである。1つは仏陀の身体を出血させる事、もう1つはサンガの分裂である。故に、デイバダッタは、死後阿鼻地獄に落ちたのである。反対に、善の重業はジャーナである。ジャーナは、臨終のその1刻において、それを保持することができたならば、重業となる。もし、臨終の1刻にそれを保持出来ないのであれば、色界や無色界に生まれ変わる果報を生じることは出来ないが故に、重業とはならない。この種の重業は、次の1世において、必ず果報を生じるものである。

2. 臨終業：

もしも、重業がないのであれば、臨終業が熟する。所謂臨終業とは、臨終の時に思い出すか、または（その時に己が）なす所の、業の事である。《法句経》の中のMattakundali（の物語）は非常に良い例である。Mattakundaliは、裕福なバラモンに生まれた1人っ子であった。その後、重篤な肝炎を罹患した。しかし、彼の父親は非常に吝嗇で、彼を医者に見せて病気を治そうとしない（これは父親の業であり、如何ともし難い）。最後、彼は病膏肓に入り、彼の父親は

息子はもう治らないであろうことを察した。そして、父親は彼を門の外に捨てた。というのも、彼は知人や親友が彼を訪ねて来た時に、彼の家にお金があるのを見られるのを恐れたのである。仏陀は神通によってこの状況を知った。：

「ああ、可哀想な人！私は行って彼を助けて上げよう。」そして、神通力を使って、Mattakundaliの前に現れた。Mattakundaliは、仏陀と面識はなかったが、しか仏陀の32の身体（部分）の様子は非常に荘厳で、誰が目にしても、非常に大きな歓喜の心が湧き上がる。彼はもうすぐ病で亡くなろうとしている、その悲惨な時、突然仏陀が目の前に現れたのを見て、その荘厳さに、心は非常な喜びに溢れた。この1刻に彼は逝去したが、これを「臨終業」と言い、臨終の前になした業の事である。Mattakundaliは、仏陀を見て生じた善心によって、天界に生まれた。彼は善行為を实践したことはなく、ただ臨終の一瞬前に善心を起こしただけであるが、それだけで天界に生まれる事ができた。故に、往生する時の、その瞬間の心が、善であるか、悪であるかによって、往生する場所が決定される。一生の内において、非常に多くの悪行をなした悪人であっても、臨終の時に突然善なる思いを生起したならば、やはり善道に往生することができる。

ミャンマーのパオ森林僧院にいる比丘の1人は、前世は盗賊であった。ある時、盗みに入って捕まってしまった。相手が彼を思い切り殴ったので、彼の頭部には非常に大きな傷ができた。その後、彼らは彼を袋に押し込んで、河に投げ捨てた。彼は河の中で死なんとする時、突然ある事を思い出した。ある時、彼は1人の比丘が托鉢に来たのを見て、己が持っている総ての食べ物を供養してさしあげた上に、来世は比丘になれます様にと、願を掛けた。彼は河の中でもがいて、もはや死なんとする時、突然に、この善なる行為を思い出したのである。この善なる行為によって、彼は往生した後、人間として生まれ、比丘になることができた。彼は生まれつき、頭部に一条の傷跡の様なものがあるのだが、それは前世において、殴られた跡なのであり、今生に至るも、己の頭部に残っているものなのである。彼は今まで、なぜ生まれながらに頭部に傷があるのか理解できなかつたが、彼は己の過去世を見た事によって、これは過去の業が残した痕跡である事を、理解したのである。

3. 慣行業：

3番目は慣行業である。これは、習慣的に常になしている所の善業又は悪業である。仏陀への礼賛、灯火、献花、仏（像）へのお供え、禅の修行、寺院に来て布施するなど、良い習慣業である。悪い習慣業は、例えば、と殺業者で言えば、その習慣業は殺生である。漁師で言えば、魚釣りや魚を殺す事が、悪い習慣業である。パオ森林僧院で修行する1人の禅修行者は、己が前世において、漁師であったことが分かった。常に魚を捕まえ、殺していたので、この悪業によって、連続して3回地獄に落ちた。1つの地獄が終わり、往生すると、また次の地獄に落ち、その次もまた地獄に落ちた。こうしたことから、職業の選択もまた非常に重要であることが分かる。もし、あなたの職業が常にあなたに不善の心を起こさせるものであるならば、私はあなたに、転職を勧める。（業の効果は）ただこの1生だけのことと軽く見ないで、遠く（の未来）まで見通して頂きたい。

スリランカに住むDhamamikaは、よく布施をする。毎日多くの比丘に供養し、又、お寺に行って聞法もする。スリランカでは、人が往生する時、通常は、比丘が家に来て、死に行く人に対して、戒を授けるか、又はパーリ語のお経を唱える。Dhamamikaが臨終を迎えた時、その家族もまた、比丘を招いて《四念処経》を唱えて貰う様にした。比丘が《四念処経》を唱えて

いる時、Dammamikaは、六界の天神が同時に降りてきて、彼を迎えに来たのを見た。これは「趣相」である。しかし、Dhammikaは、《四念処経》を最後まで聞き終えたいと思い、天神に向かって言った：

「ちょっと待って下さい！ちょっと待って下さい！」

比丘はDhammikaがお経を聞きたくないのかと思い、不信に思い、どうしたら良いのかわからなくなった。彼の子どもたちも、父親が死に面して心が混乱しているのだと思った。というのも、父親は敬虔な仏教徒であるから、比丘に対して失礼な態度を取る訳がないからである。比丘は《四念処経》を途中でやめて、帰って行った。Dhammikaは、比丘がいないのに気がついて、子供たちに尋ねた。子供たちが事情を説明した所、Dhammikaは、「私が『少し待って！少し待って！』と言ったのは、比丘にお経を唱えるな、という事ではなく、六界の天神に対して、私を迎えに来るのをもう少し待って欲しい、と言っていたのだ」と説明した。

子供たちは父親が見た趣相を信じる事ができなかった。

「本当ですか？どうして我々には見えないのでしょうか？」

というのも、これはDhammika個人の業であるからである。Dhammikaは言う：

「お前たちは信じないのだね？よし、では、私に花輪を1つくれ。六界の天神は皆、私を迎えに来たのだ。私は己の行きたい所を選ぶ事ができる。」

子供たちは言う：

「兜率天が最もよい」

「おお、それなら私は、兜率天に行くことにする」

と父親は言い、花輪を天に対して投げて言った：

「この花輪が兜率天の馬車の上に掛かります様に」

花輪はその通りに空中に浮いて止まった。その後、Dhammikaは、確実に兜率天に往生したのである。これは慣行業によって生じた善報である。

4. 已作業：

もし、上に述べた重業、臨終業、慣行業がないのであれば、「已作業」が熟する。「已作業」は、上に述べた3種の業以外の総ての業を言う。この業は、次の1世の生まれ変わる場所を決定する。牛の群れの例えを用いて、この4種の業について説明する。ある1群の牛が、夜になって、総て、牛舎に追い込まれた、とする。次の朝、飼い主が牛舎の扉を開けた時、最も壮健な牛が真っ先に駆け出し、出てくる。というのも、彼は最も威力があり、他の牛の出る道を抑える事ができるが故に。この、最も強健な牛は「重業」に相当する。故に、もし人が重業をなすならば、往生の時には、真っ先に熟するのである。もし、最も強健な牛がいなければ、最も扉の近くにいる牛、即ち「臨終業」がチャンスを得て出てくる。もし、どの牛も、扉から離れて立っているならば、常に扉を気にしている牛が出てくる。これを「慣行業」と言う。

「已作業」は、例えば、弱くて小さい牛が、突然押されて、扉の前に出てくる様なものである。

業の熟する時間による分類：

これも又4種に分類することができる。

1. 現生受業
2. 次生受業

3. 無尽業

4. 無効業

第4章にて説明済み。

業の熟する場所による分類：

同じく4種ある。

1. 不善業

2. 欲界善業

3. 色界善業

4. 無色界善業

1. 不善業：

身業、語業（口業）、意業がある。

(1)身業：殺生、偷盗、邪欲による楽行（邪淫）。通常は身門を通して発生する。

(2)語業：妄語、両舌、悪口及び綺語（無駄話等）。通常は語門を通して発生する。

(3)意業：貪婪、瞋恚及び邪見（因果を信じない事）。通常は意門において発生する。

89種の心に依り、これらの身業、語業と意業は、合計12種ある。12個の不善心によって造られる（なされる）。

2. 欲界善業：

善身業と善語、善意業等10種ある。

(1)善身業：3種の不善身悪行から遠く離れる。

(2)善語業：4種の不善語悪行から遠く離れる（妄語、両舌、悪口及び綺語から遠く離れる）。

(3)善意業：無貪婪、無瞋恚及び正見。欲界善業は、又、10種に分ける事も出来る：布施、持戒、禅修行、敬い、奉仕、功德の享受または回向、他人の功德を随喜する、聞法、弘法、正直己見（己の正しい見解を確立する）。故に、欲界善業は合計20種になる。欲界八大善心によってなされる。もし、善業をなす時、業報智の智慧がないのであれば、智不相応の善心によってなされる。反対に、善業をなす時に、業報智の智慧があるならば、智相応の善心によってなされる、と、言える。

3. 色界善業：

色界善業は、完全に意門に属する。それはすでに安止のレベルの禅の修行に到達している。

諸々の禅支の区別により、以下の5種がある。

(1)初禅：尋、伺、喜、楽、一境性の5個の禅支。

(2)第二禅：伺、喜、楽、一境性の4個の禅支。

(3)第三禅：喜、楽、一境性の3個の禅支。

(4)第四禅：楽、一境性の2個の禅支。

(5)第五禅：捨、一境性の2個の禅支。

4. 無色界善業：

同じく、無色界善業は、純粹に意門に属し、身門と語門がない。已に安止に到達した禅修行で

あるが、所縁の違いによって4種に分ける事ができる。色界善業は、諸々の禅支の区別に基づいて、5種に分類する事ができる。無色界善業は、所縁の区別に基づいて、4種、空無辺処、識無辺処、無所有処、非想非非想処、に分類する事ができる。無色禅は、2個の禅支、捨と一境性しかない。これらはそれぞれ異なる所縁を取る。色禅は反対に、初禅から第五禅まで、所縁は同じであるが（例えば、安般念の所縁は皆似相である）、禅支が異なるのである。

表K: 4個4種の業の総覧 (P263の別表参照)

業の果報：

どの種の業であっても、それが善であろうが不善であろうが、業は皆、業力を残す。業力はひとたび熟するならば、必ず果報を生む。

1. 不善業の果報

不善業は、12種の不善心によって造られる。不善心の中の痴根心は、2種ある。疑相応と、掉挙（心の散乱）相応である。掉挙を除いて、11種の不善心は、結生心、有分心、死亡心としての不善果報推度心を生じ、結果、有情をして、四悪道に生まれ変わらせることになる。12種の不善心は皆、欲界の有情の生命期間中において、7種の不善果報心を生じせしめる。即ち、五識、領受心と推度心である。餓鬼の生命期間中において、以前になした不善業によって（12種の不善心の中に含まれる所の）7種の不善果報心が生じる。色界においてはただ、4種の不善果報心が生じる。即ち、鼻、舌、身体の3個の根識を除き、残りの眼識、耳識、領受心と推度心である。色界の衆生が人間界に降りて来た時に、目で喜ばしくない所縁を見た時、不善眼識無因果報心が生じる。耳に聞きたくない音声を聞いた時、不善耳識無因果報心が生じる。眼識が生じた後、次には不善の領受、推度心等が生起するのである。

2. 欲界善業の果報

欲界の善業は、欲界における結生を生じる事ができるし、又、生命の期間中に、8種の大果報心を生じる事もできる。又、状況によっては、欲界又は色界において、8種の無因果報心を生じる事もできる。故に、欲界善業は、16種の果報心（8種の大果報心と8種の無因果報心）を生じる事ができるのである。

善果報及び因（根）：

殊勝なる三因善業は、三因を擁する結生を生じることができし、又、生命の期間中、16種の果報心を生じる事もできる。

果報の生じる能力に応じて、善業は、2種に分ける事ができる。殊勝なものとは低劣なもの、の2種である。殊勝な善業は、清浄な無染の心によってなされるものである。その上、業をなす前もその後も、共に良好な動機を持つ。例えば布施は、如法に得た財物を徳のある人物に供養するもので、又、供養の前もその後も、喜びに満ちたものでなければならない。善業をなす前と後において、もし、心が煩惱によって汚染されているならば、例えば自画自賛、他人を貶める、善を行った後に後悔する等であれば、当該の善業は低劣に属する。一念の差でもって、あなたの善業が殊勝なものであるか、低劣なものであるかが決定される。故に、心は非常に重要であ

る。布施や、善業をなす前の動機も又重要である。もし、布施が純粹に、それを受け取った人の健康、幸福を願い、心中に良くない動機がないならば、これは殊勝な善業である。もし、良くない動機であったり、布施した品物が如法に得たものでないならば、又は、己には良い物を残し、布施に出したものが粗悪品であるならば、これらは皆低劣な善業となる。

3. 色界善業の果報

五色禪のどれか1つのジャーナは、そのレベルと同等の色界天を生じる事ができる。色界天は、ただ、四禪天しかない。故に、第二禪と第三禪の色界善業は、第二禪に生まれ変わる事になる。第四禪色界善業は第三禪天に生まれ変わり、第五禪色界善業は、四禪天に生まれ変わる事になる。

4. 無色界善業の果報

無色禪善業を育成した後、彼らは（己が得た所のジャーナ）と同等のレベルの無色界天に生まれ変わる。例えば、既に空無辺処禪を証した人は、臨終の時に、懈怠またはその他の理由で当該の禪を失う事がないのであれば、その人は空無辺処禪天に生まれ変わる。「万物唯心造」心が世界を導いている、即ち三界を。三界とは欲界、色界と無色界である。三界に衆生が生まれる事は、（その本人の）心の反映（の結果）である。欲楽を目指すなら欲界に生まれ、禪定ある者は色界に生まれる。外の世界は己の内部世界と同じ、心の反映に過ぎない。

表L: 業と果の総覧表（P264の別表参照）

殊勝なる三因善業は、三因を伴う結生をもたらす。そして、生命の期間中において、16種の果報心を生ずる。表を参照して説明する。「業と果の総覧表」の左側は「業」で、善業と悪業があることがわかる。真ん中の欄は、「結生心」、右側の欄は「生命期間中に生起する路心」、路心とは心路の事である。最下部は、「殊勝三因」で、

1. 悦具智相応無行一心
2. 悦具智相応有行一心
3. 捨具智相応無行一心
4. 捨具智相応有行一心

である。この4個は、殊勝なる三因である。というのも、この種の人物が行う布施は、清浄なもので、他人を貶めることなく、自賛せず、良い動機から始まり、私利私欲で布施をすることはなく、等などであるが故に。この種の、殊勝なる三因善業が、結生識の果報を生じる時、4個の三因大果報が生じるが、それは皆、智慧相応である。その内の1個がその人の結生識、有分識、死亡識になる。

生命の期間の中において、殊勝なる三因は、16個の路心を生じる。それは、8個の無因善果報心、8個の大果報心である。8個の大果報心は、この1刻には彼所縁となり、結生識の作用を果たす事はない。心識は異なる作用を演じ分ける事ができ、ある時には結生識を演じ、ある時には彼所縁を演じるが、この時は彼所縁を演じる。故に、「殊勝なる三因善業は三因の結生を生じる事もでき

るし、また、生命期間中において、16種の果報心を生じる事もできる」8個の無因善果報心及び8個の大果報心は、彼所縁となる。

低劣な三因善業及び殊勝な二因善業は、二因を伴う結生をもたらず事ができ、それは生命の期間中において、12種の果報心を生じる事ができる。ただし、三因を擁する果報心は除く。

「業と果」の表の中から、はっきりと見て取れるのは、低劣な善因を造り出した原因は、その人の布施への不純な動機である。布施した後に後悔したり、布施の品物が、不純な方法で手に入れたものであった、など等である。低劣な三因善業は、4個の二因大果報心を生じ、それは結生心となる。故に、三因善業は、必ずしも三因果報を生じるとは限らない（事が分かる）。もしも、低劣な三因善業である時、二因果報が生じる。もしも、殊勝なる三因善業であるならば、三因果報が生じる。

もし、ある人の結生心が殊勝なる二因である時、その生命期間中において、彼はジャーナを証する事はできないし、道果を証する機会もない。この事から以下の事柄が分かる。業を造る時（＝なす時）、動機は非常に重要である。生命の期間中において生じる12種の果報心は、8個の無因善果報心及び彼所縁となる4個の大果報心である。彼所縁となる4個の大果報心及び生命期間中の路心、例えば眼識、耳識……等は、業を造る心ではないため、とりたてて覚える必要はない。重要なのは結生心である。

然しながら、低劣な二因善業は、（ただ）無因の結生を生じるだけであり、また、生命の期間中においては、（ただ）無因の果報心を生じるだけである。二因とは、智と不相応である事を言い、それは、合計4個あり、それぞれ、無因の結生心を生じる事ができる。無因捨具善果報推度心、例えば、先天性の障害者、福の少ない土地神様、ある種の阿修羅の結生識等である。本来、二因とは智慧が欠けているものであり、それに加えて業をなす時の動機が不純であり、かつ、その後後悔したりするのが原因で、低劣な二因となり、無因捨具善果報推度心が生じ、結果、先天性障害者の結生識となる。生命の期間中において、それは8個の無因善果報心と、無因捨具善果報推度心、無因悦具善果報推度心を生じるが、この2つの推度心は、2個の彼所縁になる。12個の欲界不善心によって生じた結生識は、欲地四悪道における（結生をもたら）。その結生心は、無因捨具不善果報推度心である。生命の期間中において、ただ7個の無因不善果報心と1個の彼所縁のみ生じる（無因捨具不善果報推度心）。

表Mと表N: 31界（P266の別表参照）

初禪を育成して、ある程度のレベルに到達した修行者は、梵衆天に生まれ変わる事ができる。

中等のレベルに到達した修行者は、梵輔天に生まれ変わる事ができる。高度なレベルにまで到達した修行者は、大梵天に生まれ変わる事ができる。第五禪を育成した修行者は、広果天に生まれ変わる事ができる。想に対して嫌悪する修行者が、それを育成した場合は、無想有情天に生まれ変わる事ができる。しかし、アナーガミの場合は、浄居天に生まれ変わる。

31界の図表の中には第五禪が表記されていない。第五禪を育成した修行者は、第四禪天に生まれ変わる。第四禪天の（層の）分け方の原則は、前の三種の禪天とは異なる。前の三種の禪天で

は、一層毎に3個の界があった。もし、第五禪を通常通りに証すること事が出来たならば、凡夫であろうと、ソータパナ、サカダーガミであろうとも、またその禪が低いレベル、中等のレベル、高度なレベルのものであっても、臨終の時に第五禪を維持することができたならば、皆、広果天（第四禪の第1層）に生まれ変わる事ができる。しかしながら、ある種の凡夫の内、心と想が厄難の元であるとの考えから、第五禪を育成するにあつて、その心が、「想」に対して強烈な嫌悪・厭離の気持ちを持つ者がいる。第五禪の心による、「想」を止息したいという願望を受けて、彼らは死後、無想有情天に生まれ変わる事がある。その1生の間、彼らは純粹にただ、生命を有する色身（バナナの幹の様に）、即ち命根九法聚のみによって構成されているのである（心法がなく、色法のみがある）。

しかし、アナーガミは浄居天に生まれる事ができる。聞く所によると、この5界に生まれるかどうかを決めるのは、彼らの比較的顕著な根に関係する。信根が最強のアナーガミは、無煩天に生まれる。精進根が最強のアナーガミは、無熱天に生まれる。念根が最強のアナーガミは善現天に生まれる。定根が最強のアナーガミは善見天に生まれる。慧根が最強のアナーガミは色究極天に生まれる。アナーガミだけが浄居天に生まれる事ができるのではあるが、しかし、アナーガミは、必ずしも必ず浄居天に生まれなければならない、という訳ではない。この1世において、既にアナーガミを証した人は、浄居天に生まれられない事を選択する事もできる。例えば、大梵天王（の様に）。仏陀は成道の時に以下の様に言った：

「私の法は非常に奥深く理解し難い。世間の人は理解することが出来ない。」

故に、仏陀は、弘法するつもりはなかったのである。しかし、大梵天王（彼は三果（ママ）アラハンである。本来ならば浄居天に生まれることが出来たが、しかし、彼は初禪天に生まれる事を選択した。）は、初禪天から降りてきて、仏陀に衆生の為に説法してくれる様に頼んだのである。

第五禪を擁するアナーガミだけが浄居天に生まれる事ができる。ジャーナのレベルの比較的低いアナーガミは、その他の色界天に生まれる。どちらにせよ、全てのアナーガミは、必ず色界天に生まれる。というのも、彼らは既に欲界に生まれる原動力となる欲欲を断じ除いてあるが故に。

死亡と結生：

臨終の状態にある人にとって、心路の最後尾、又は有分が滅尽した後、それは、その人の1世が終結して死亡を迎える所の、死亡心の生起とその滅尽を意味する。ひとたび、（死亡心が）滅尽すると、次の1世の結生心が即刻生起し、その1刻において獲得した所の目標（即ち業相、趣相、又は業の内の1つ）を識知し、状況に応じて、依処（例えば欲界と色界の衆生であれば、心所依処が支えになる）があるか又は支えになる依処がないか（例えば、無色界の衆生にはどの様な支えもない）を判断する。業相、趣相、又は業は、無明によって束縛され、かつ、渴愛の潜在的傾向を根本とする所の行（業）によって生じる。言い換えれば、この目標とは、過去の業が無明による隠蔽と渴愛の束縛によって生じたものであると言える。

結生心の作用とは、2つの世を連結し、相応の名法を伴いながら、相応する法の住処として、それらの先導者となる事である。一切唯心造、即ち、一切は心が造るのであるから、心は心所と色法の先導者、と言う訳である。臨終の間際にいる人（の心）は、1世の中の最後の1個の心路過程が生起する前、有分心は、2度波動を起こした後、停止する。その後、五門心路過程の1つ

が、根門の目標を縁に取って生起するか、又は、意門心路過程意門に顕現した6個の所縁の内の1個を縁に取って生起する。その力が弱い為に、最後の1個の心路過程の速行は、ただ5回生起するだけであり、通常7回生起する場面とは異なるのである。通常、速行は業を造る能力があるが、臨終心路自身は、業を造る能力に欠けており、ただ、過去の業を令生業となすパイプの役割を果たすのだけである。速行の後、2個の彼所縁は、生起したりしなかったりする。ある時は有分が、最後の1個の速行の後に生起する事もある。その後、最後の1個の心としての、死亡心が生起して、死亡の作用を執行する。死亡心が滅尽した後、命根も又切断される。この後、身体には、命の伴わない1塊の時節（時節によって生じた色法）が残され、それはやがて毀壊され灰になる。

ひとたび、死亡心が滅尽した後、新しい1世の結生心が即刻生起するが、（その時は）前の1世の臨終速行心の目標を縁に取る。色法を擁する生存地では、結生心は心所依処によって支えられる。しかし、無色地においては、何らの依処もないが故に、それは行（即ち業）によって生じるが、この行とは、取りも直さず、過去の速行の業であり、この業の根基は、2種の生死輪廻の根であり、それは即ち、無明と渴愛と言う2種の潜在的傾向の事である。離心路過程には、合計3種の心がある。

1番目は結生心：新しい1世と前の1世を連結させる。

現在のこの1世と、前の1世を連結させる事でもある。

2番目は有分識：1世の中において、結生から死亡までの間の生命の流れを中断させない様にする。

3番目は死亡識：死亡の作用を執行する。

欲界結生心の所縁：

欲界とは、四悪道の衆生、人と天神を言う。ここにおいて、臨終の心路過程の中では、ただ5個の軟弱な速行が生起する事が知れる。故に、もし死亡の時に、眼門に生起する所の現在の所縁（例えば赤い色）を縁に取るならば、新しい1世の結生心と最初のいくつかの有分心もまた現在の所縁（赤い色）を所縁として取る。即ち、臨終速行心において、眼門に赤い色を見たなら、その死後、引き続き新しい1世の結生心の始まりにおいても、赤い色が今だ存在しているのを、現在所縁と呼ぶ。結生心、有分心と死亡心は、ともに1つの心である。同じ1つの所縁（現在所縁）を縁に取るが、その所縁は色法である。1個の色法は、17個の心識の寿命に相当する為、17個の心識が消滅した後、赤い色は、初めて消える。所縁は、現在のもの、過去のもの、未来のものに分類する事ができる。欲界における結生は、6門（眼門、耳門、鼻門、舌門、身門、意門）の内の1つで、識知する所の目標は業相（業をなした時の道具）又は趣相（生まれ変わらんとする場所）である時、当該の目標は、現在所縁か又は過去所縁であり得る。例えば、動物のと殺を仕事にしている人が、臨終の時に己が見るのが業相であるならば、それはナイフであり、過去所縁である。目標としての所縁は必ず過去のものであるが故に、意門を通して識知する事となる。一切の欲界での結生の目標は、ただ有限の法に限るものである。業とは、善をなすか又は悪をなす所の思心所のことである。例えば、私が説法をし、かつ、その善業が熟したならば、己が、再度説法しているが如くの様子を見る事ができるが、これを業と呼ぶ。業相ではない。

臨終眼門心路過程を例にして説明すると、もし、臨終の時に1輪の蓮の花を見たならば、臨終眼門心路過程が生起する。臨終眼門心路過程は以下の通り：過去有分識、有分波動、

有分断、五門転向、眼識、領受、推度、確定、その後に5個の速行心。臨終において死なんとする時は、心臓が特に衰弱しており、その為、5個の速行心しかない。この眼門心路過程は、花の色彩を所縁として取る。5個の速行心が過ぎ去った後、彼所縁は、生起するときもあれば、生起しない時もある。もし、彼所縁が生起しない場合、有分は非常に多く生起する。その後に死亡識が生起し、この人の命根は断絶する。故に死亡識は、死亡（をもたらす所）の作用を果たす。死亡した後、即刻、もう1つ別の1個の心識が生起して、古い1生と新しい1生を連結する。これを「結生識」と言う。死亡識と結生識の間には、中断はない。この件に関して、上座部の説と、チベットの中陰身の説とは、若干、異なっている。

結生識が、31界のどの界において生じるかは、過去の業に基づくのである。この例では、過去にお花を供養した業により、その事によって（その様な）結生識が生じたのである。お花を供養した結果としての業は、（その性質上）色界に生まれる事はなく、また無色界に生まれる事はもない。ただ、因は善業であるが故に、四悪道に生まれる事もない。故に（この場合の）結生識は、欲界の人道または6天界の内の1つに生まれる事になる。即刻、引き続いて、16個の有分識が生起し、次に、この1生の内における1番目の意門心路過程が生起する。生命流は、この様にして、結生識の流れが最後の1個の死亡識まで続くのである。

表O: 臨終眼門心路過程（P267の別表参照）

1つ1つの心は、皆、1個の所縁を取る。ここでの例では、新しい1世の結生識は「花の色彩」を所縁として取る。有分識もまた、「花の色彩」を所縁として取る。死亡識も又「花の色彩」を所縁として取る。故に、結生識、有分識、死亡識は、実は同じ1つの心識であり、同じ1つの所縁を取ることが分かる。即ち、過去の臨終速行心の所縁を所縁とするのである。それらは、果報心である。これは、布施をした善業によって生じた果報である。結生識の生起は、過去の業による所、その、既に熟した所の果報からもたらされる。結生識、有分識と死亡識は、皆同じ1個の心識であり、名称が異なるだけである。それらは、異なる時刻に、異なる役割を演じるのである。例えば、それが結生心であるその時は、それは生まれたばかりの時刻である。結生心の役割は、過去世とこの1世とを結びつけるのである。有分識である時は、生命流が中断しない様に、その役割を担うのである。死亡識である時は、死亡の作用を担うのである。例えば、私が、実家に帰れば母の娘を演じ、今ここでは、教師であり、寺院に戻って和尚と一緒にいる時は、和尚の弟子となる。私は1人であるが、しかし、異なる場面において、私は異なる役割を演じる為、異なる名称を持つのである。

豚を殺すことを生業としていると殺業者が、臨終の時に、己が又も豚を殺している様を見るならば、この相を「業」と呼び、これを臨終意門心路過程の生起と言う。その過程は以下の通り：有分、有分波動、有分断、意門転向、5個の速行心、彼所縁、彼所縁、その後に死亡心。前の例では彼所縁はなく、有分のみであったが、ここでは2個の彼所縁がある。この様に死亡時の状況は、皆同じであるとは言えない。ある時には有分が生起し、ある時には彼所縁が生起し、ある時には両方共に生起しない。しかし、どれをとっても、最後は死亡識が生起するのは必定である。次

に、結生識が即刻生起し、その中間には如何なる中断もない。と殺業者の生識は、四悪道の1つに出現し、かつ、己が見た所の豚を殺す「業」を所縁とする。同様に、有分識と死亡識もまた同じ相を、所縁をとして取る。というのも、この3種の心は、同じ1つの心であるが故に。

結生識が減した後、必然的に、16個の有分識が生じる。その後、第1番目の意門心路過程が生じるが、これを「有欲」速行と呼ぶ。この意門心路過程は、新しい生命に執着する。例えば、屠殺業者の結生識は四悪趣にあり、彼は、1匹の動物、例えば豚になるかもしれない。彼の結生識が生滅し去った後、16個の有分識が生じ、その後、1番目の意門心路過程が生起する。その後、彼は、この豚の命に執着し始める。

《菩薩本生經》の中において、以下の様な物語があり、衆生がどれ程命に執着するかを説明している。ある国の国王はAssakaと言う名前であった。その皇后はUbbariと言ひ、国王は彼女を非常に愛しており、彼らは常に花園にいて人生を楽しんでいた。Ubbariは、非常な美貌の持ち主で、夫に気に入られる為に、常に化粧をしていた。ある日、皇后が往生（死亡）した。国王は悲嘆にくれた。彼は彼女の遺体に香料を塗り、ベッドの下に隠した。7日間食うや食わず、皇后の死を嘆き悲しんだ。当時の菩薩（即ち釈迦牟尼仏の前世）は、天眼通でもって、Assaka王の苦痛を見た。Assaka王は元々は英明であったが、1人の女性の為に、これ程悲嘆し、7日の間国政を執り行う事がなかった。菩薩は彼を助けようと考え、隠士の姿で国王の花園に現れ、石の上に座った姿は1尊の金の像の様であった。あるバラモンが彼を見つけて、彼の非凡な莊嚴の様に、彼を礼拝し、国王を助けてくれないかと、懇願した。隠士は言う：

「あなたが、国王を花園に連れて来てくれるならば、私は皇后がどこに転生したかを教える事ができる。」

バラモンはそれを聞くと非常に喜んで、即刻国王に報告した。国王は興奮して、花園にやって来て、隠士に礼拝した。

「隠士にお尋ねします。私の皇后は、今、どこに生まれ変わっていますか？」

「あなたの皇后は、この花園の蛆虫になっています。」

蛆虫とは即ち、牛の糞便の中にいる蛆虫のことである。国王はそれを聞くと、大声で叫んだ：

「まさか、まさか、そんな事はあり得ない！」

「あり得ない？それならば、私は彼女を呼び出して、あなたと話をしなさい。良いですか？」

「良い、良い。」

隠士は神通力でもって、蛆虫と会話した。「こっちに！Ubbari蛆虫、こちらにどうぞ」蛆虫は国王の前まで来たが、側には蛆虫の夫がいた。隠士はUbbariに質問する：

「あなたは前世は誰でしたか？」

蛆虫が答える：

「私の前世はUbbariです。Assaka国王の皇后でした」

Assaka王はとても信じられない。蛆虫：

「私は楽しみばかりを追い求めて、お洒落ばかり気にかけて、何らの善業もなませんでした。その為、今世は蛆虫になりました。」

隠士は又尋ねた：

「今もあなたは国王を愛しているか？」

Ubbariは言う：

「皇后から蛆虫になった時から、私の記憶は曖昧になってしまいました。このAssaka国王は、今の私には何も関係がありません。私は国王の首に噛み付いて、その血で夫の足を洗って上げたいくらいです。」

Assaka国王は非常に腹が立って、即刻、宮殿に戻って皇后の遺体を焼いた。その後、妻を1人娶り、元の英明な国王に戻り、叡智でもって国を統治した。

Ubbariは、皇后から、小さくて汚い雌の蛆虫に生まれ変わったが、それでも尚、己の命に執着して、雄の蛆虫と戯れていた。故に、生命を貪愛する事は、輪廻の根源の1つである（事が分かる）。動物でも、天神でも、人類でも、地獄でも、1番目の速行心は、新しい生命に執着する。これを「有欲」速行と言い、貪根心の1つである。Ubbariの物語の中において「輪廻転生した為に記憶が曖昧である」という言説があるが、この意見は非常に（深い）意味がある。記憶は、輪廻の中で曖昧になってしまう。故に、我々は、以前の親しい人々を敵とみなし、お互いに認め合わない。仏陀は我々に、総ての衆生に慈愛を散布する様に指導する。というのも、輪廻の中において、総ての衆生は、曾ては我々の妻、夫、父、母、兄弟姉妹等であったが故に。

緬甸に、相思相愛の夫婦がいた。夫は死後、妻に執着する余りその家の犬に生まれた。妻は犬は夫の生まれ変わりとは知らないでいたが、過去世の縁で、妻はこの犬を非常に可愛がり、外出時も一緒に連れて出た。多くの村人が、余りに犬と仲のよい妻をからかったので、妻は怒って犬を殺してしまった。殺生してはならない。知らないのが原因で、無知のまま、己の眷属を殺す様な事が発生するが故に。1番目の意門心路過程から始まり、心流は、不断に結生識から死亡識へと流れ続ける。そして、死亡識から再び新しい結生識へと流れる。それは、車輪が次々と回転していくが如くである。

5個の因が、結生識の生起をもたらす：行、業、無明、愛と取である。

1. 業を造る、これを「行」と言う。
2. 残された業力を「業」と言う。
3. 「無明」、生命は楽しいものだという誤解。
4. 「貪愛」、生命への執着。
5. 何度も何度も生命に執着することを「取」という。

廣大結生心の所縁：

廣大（心）は、色界と無色界に分ける事ができるが、色界心と無色界心を廣大心という。というのも、その心は、広く十方向の世界に広がるが故に。例えば、慈愛禅は、慈愛の心を十方世界の衆生に拡散するものである。地遍も又同じであって、地遍を修行する時、地遍を十方世界に拡散しなければならない。その心が廣大であるが故に、廣大心と呼ぶ。色界の結生に関して、その所縁は概念であり、又必ず業相でなければならない。安般念の似相は概念である。呼吸は四大によって構成されているが、しかし、我々が安般念の修行をする時、四大を対象とせず、呼吸を所縁として取るものである。呼吸は概念であり、禅相も又概念である。無色界の結生に関しては、その所縁は概念であるか（例えば、空無辺処は、虚空を所縁として取る。虚空は概念である）又は廣大心（例えば、識無辺処は、空無辺処禅心を所縁に取る。心は究極法であり、概念ではな

い)であり、必ずや業相である。故に、無色界における結生の、その所縁の2個は概念であり、2個は究極法(心)である。

無想有情に関して、結生として生起するのは命根九法聚である。故に「色結生」と言う。無色界の有情は、「非色結生」(名結生)といい、その他のものは「色非色結生」(色と名結生)と言う。例えば、vipassanāを修行する禅修行者が臨終の時、もし行法の無常を観ずるならば、臨終速行心は行法の無常を所縁として生起する。その後死亡識が生起し、滅し去る。次に結生識が生起し、新しい1生が始まる。その結生識は、欲界において生まれる。欲界には2個の善趣があり、1つは人間で、1つは天界である。この人物が人間に生まれたならば、彼の結生識、有分識、死亡識は、行法の無常を所縁として取る。もし、天界に生まれたとしても、同様である。有分識は主人心とも言う。有分識は絶え間なく生滅しており、生命の流れが絶えない様に作用している(が故に)。有分識、結生識、死亡識は、主人心と呼ばれるが、五門と、意門心路過程の心は、客人心と呼ばれる。と言うのも、(その心は)ある種の、外在する所の、所縁の衝撃を受けた後にしか生起することができず、その心は、あったり、なかったり、するが故に。もし、1人の人間の有分心が、無常を所縁として取るならば、彼がひとたび禅修行に取り組むならば、必ずや快速に、ソータパナ道果を証得することになる。

仏陀の時代、1人の比丘が仏陀と共に1ヶ月修行した。彼の心は人間界において四果アラハンを証したかった為、禅の修行に非常に猛然と精進した。彼はしばしば食事を摂らなかった。時間の無駄であるし、飽食すると眠くなるからである。長時間食事を取らなかった為、彼は胃が痛くなり、苦痛であったが、それでも彼は禅の修行に打ち込み、結果、そのまま死んでしまった。禅の修行中に死ぬのは善業であり、故に彼は天界に生まれた。死亡識と結生識は、ただ1個の心識刹那であり、間隔はないに等しい。彼は己が死亡した後、即刻往生したことが理解できず、天界に生まれた時は、尚座禅の姿勢であったと言う。天界において、福の果報の多い男性の天神は、左右に500人の天女が侍り、歌い舞うが、天女たちは、彼が今だ比丘の格好で座禅していて、彼女たちに興味を示さないのを見て、「彼は前世は出家者であったに違いない。少し様子が変わったけれど.....彼は己が天界に生まれたのを知らないでいるに違いない。我々は彼に知らせてあげようではないか。」と思った。そして、彼女たちは、大きな鏡を持って来て、彼の前に置いて、大声で歌を歌った。比丘は女性の居士が来たのかと思い、急いで目を開けてみると、己が天神になっている姿が見えた。彼は非常に失望した。と言うのも、彼はもともと、人間界でアラハンを証得したかった故に。今、一果も得ておらず、天界に往生してしまった。天界は楽しみの多い所で、精進修行するのは非常に難しいのである。

天神には神通がある為、彼は神通を使って、己の前世が1人の比丘であった事を思い起こした。そして、仏陀は今だ人間界にいるのを知ると、彼は天女を連れて人間界に降り、仏陀に再度彼に法を説いてくれる様に頼んだ。彼の死亡識、結生識、有分識は共に行法の無常を所縁として、縁に取っている為、仏陀が説法を始めるや否や、彼は即刻ソータパナ道果を証得した。ここにおいて、彼は満足した。こうなれば天界に戻って、天界の楽を楽しんでも良いし、引き続き修行するのも良い。と言うのも、二度と四悪道には落ちないが故に。禅の修行中に死ぬのは、無上の幸福である。(この場合)心に恐れを抱かなくてもよい。一番怖いのは、楽しみを貪っている最中に死ぬ事である。享楽の内に死ぬのは貪根心であり、四悪道に往生する。安般念を修行する止観行者は、禅修行の時、常にダイヤモンドの様に明るく光る似相を所縁に取る為、臨終の時にも初禅を

保持できる者は、その結生識は色界初禪天において出現する。また、安般念似相を所縁に取り、梵天神になる事ができる。この場合、有分識と死亡識もまた安般念似相を所縁に取るものである。

次に、心が有分に落ち込む場合の心境を説明する。我々が禪の修行をする時、ある時は心は落ち着いており、定力が非常に良い。しかし、突然、心は非常に幽玄な、静かな心境に落ち込む事がある。それはあたかも、何もかも知らない、業処（例えば安般念）まで忘れてしまう様な風である。実際は、その時点で、心は既に有分に落ちているのである。どうしてあなたは、何もかも知らないでいる風になるのか？というのもそれは、有分は前の1世の所縁を縁に取る為であり、そしてあなたは、前の1世の所縁を確認する事ができない。その為、あなたは何もかも知らないでいる風になる。その時点では、ただ有分心の生・滅のみが発生しており、あなたは正念を失念しているのである！呼吸（の観察）を忘れて、心は有分に落ち込んでいる。多くの人はこの法義を知らない。私はアメリカで、禪の修行を指導する1人の老師に出逢ったが、同じくこの様な問題に遭遇していた。彼は毎回、ある段階まで修行すると、彼の心は非常に静寂な心境に入る。しかし、非常に静寂である以外、如何なる所縁も認識する事ができない。彼は出会えるすべての教師に質問したが、彼に適切な回答の出来る人はいなかったのである。彼が私と、この問題について討論している時、私は答えた：「あなたは有分に落ちているのです！」その後、心の（働きの）全体の過程を説明すると、彼は忽然と、己に起きている事柄を、理解したのである。

この様な状況に遭遇する時、ただもう一度、正念を取り戻しさえすれば、有分から抜け出す事ができる。あの幽玄さに執着しない事。ある種の人々は、己の価値を高く評価して、この心境は涅槃であるとして執着する。あなたが、その境地に入りたいと願いつづけていると、禪の修行は退化する。有分心は果報心であり、故に善心ではなく、不善心でもない。しかし、あなたがそれに執着するならば、それは不善心である。持戒清浄の人は、持戒による業力を保つ為、臨終の時、もしこの業が熟したならば、彼は人間に生まれる事ができる。その時彼は「深い色彩」の「趣相」を見る。この相は、過去の持戒の業から生起するもので、その1刻において、次の1世の結生を生じる。臨終速行心と一般的な速行心は異なる。臨終速行心は、過去の令生業がまさにその果報を生じんとする時のパイプ・管道となるものであり、業の成分を持たない。その他の欲界速行は皆、業の成分を擁するが、臨終速行心が「深い色彩」の「趣相」を取った後、死亡識が死亡の作用を果たす、と言う事になる。その後、人は死亡・往生する。次に引き続き、結生識が、母胎の中において生起する。30個の色法は、それぞれ、性根十法聚、身十法聚、心十法聚である。この事は、現代の妊婦が、医学的検査を通して、胎児の性別が判明するかの説明になる。というのも、結生のその瞬間、性根がすでに生じているからである。心所に関しては、以下の章にて説明する。結生識に33個の心所、30個の色法を加えれば、所謂「人間」になる。実は「人間」とは1つの概念に過ぎない。実際に存在しているのは、心識、心所と色法だけである。

表P: 死亡と結生の過程（人類）（P267別表）

結生識の役割は、ちょうど1基の橋梁の様である。それは過去世と新しい1世を結び付ける。ただし、何か1つの靈魂が存在して、過去世からこの1世に漂って来る訳ではない。この様な意見は常見と言う。しかしまた、この結生識は過去世と全く関係がない、とも言えない。一切関係がないという様な意見は、断見と言う。常見と断見の両極端を避けること。仏陀は言う：

「無明の縁により行があり、行の縁により識があり、識の縁により名色がある。」

無明の縁により行あり、とは何であるか？所謂無明とは、四聖諦を知らないことを言う。

例えば、ある人が、未来世において人間として生まれたいと願う時、その人は、人間という生き物が実在しているのだ、と思っている（究極法で言えば、人も又生滅の法である）。これが無明である。無明であるが故に、業を造る。彼は持戒するが、（その結果）業を造るのである。故に、無明の縁により行あり、というのである。業、ひとたび造られたならば、必ず業力が残る。業力は、ひとたび因と縁が熟したならば、果報を生じる、即ち結生識を生じる。故に、無明の縁により行あり、行の縁により識ありといい、識とは即ちこの結生識の事である。

結生識が生起する時、30個の色法（性根十法聚、身十法聚、心十法聚）と33個の心所が同時に生起する。上で、無明の縁により行有り、行の縁により識有り、識の縁により名色あり、と説明した。33個の心所とは、その中の「名」である。30個の色法は「色」である。故に、識の縁により名色、と言う。心が先導して、生命は、結生識の生起を因として、名または心所が続いて相応し、これによって色法も生起する。故に識の縁によりて名色あり、と言う。その後、生命の流れは継続し続き、名色の縁により六処あり……母胎の中で、徐々に目、耳、鼻、舌……が生じ、故に名色の縁により六処あり、と言う。縁起の法に関しては、ひとまずこの辺で打ち切り、第8章でまた説明する。

結生の時、30個の色法と、33個の心所が生じる。結生識を含む所の、これらは五蘊と呼ぶ。30個の色法は「色蘊」と呼ぶ。33個の心所の中に、1つの「受」と呼ばれる心所がある。これを「受蘊」と呼ぶ。もう1つ、想という心所があり、これを「想蘊」と呼ぶ。残りの心所は「行蘊」と呼ぶ。それに加えて、結生識は「識蘊」と言う。故に、結生の時、すでに五蘊が生じているのである。ひとたび結生識が生起すれば、衆生は五蘊を「私」「私の」「私の自我」として執着するが、これが即ち苦諦である。仏陀は、初転法輪の時に「五取蘊は苦諦である」と述べた。結生の1番目の心識において、すでに「五取蘊」が生じているが、当時に「苦諦」も生じているのである。

「集諦」はどこから来るのか？集諦とは何であるか？「集諦」とは苦の原因であり、それは即ち無明と愛欲である。結生識は、1世の中において、1番目に出現する心識であり、果報心である。その因は、必ず過去世にある。結生の瞬間にある訳ではない。結生識は果であり、因と果が同じ1つの心識刹那の中で生起する事はできないが故に。無明の縁により行あり、行の縁により識あり。この中の無明と行は、過去世の無明によって造られた業（行）を言い、これによってこの1世の苦諦が生じるのである。もしこの1世で、無明と愛欲を断じないのであれば、衆生はまた引き続き、業を造り続ける。業が果報を産むとき、また次の1世が生じる。故に、生命の流転はこの様に継続して行く。無明と愛欲が断じられないならば、輪廻が中断することはない。これらの事は、第8章で、再度解説する。

生まれ変わりの法則

無色界の梵天が死亡すると、生まれ変われるのは、更に高度なレベルの無色界天だけになる。比較的低レベルの無色界天に生まれる事は出来ない。例えば、空無辺処の梵天が死亡したならば、識無辺処又は無所有処、又は非想非非想処に生まれる。識無辺処の梵天が死亡したならば、無所有処又は非想非非想処に生まれる。空無辺処界には生まれない。彼は近止定の力で欲界に生まれる事は出来る。色界の梵天が死亡したなら、無因（結生心）による生まれ変わりは無い。

（無因結生には、2種ある：1. 四悪道に生まれるが、これは不善果報心である。2. 先天性障害者は、善果報心である。）欲界において、三因の天神または人が死亡した時、四悪道、天界、色界と無色界を含む、どの様な場所にも生まれ変わる可能性がある。その他の（死亡の時、二因又は無因の者）は、欲界にしか生まれ変わる事が出来ない。というのも、二因しかない為、智慧がなく、ジャーナを証する事ができないが故に、色界又は無色界に生まれる事は出来ないのである。

心の相続流

故に、この様にして生まれ変わる者は、結生（心）が滅尽した後、即刻、同一の所縁を識知する所の、同じ種類の心（有分心の事である）を生起させるのであるが、それは河川の流れの様に、不断に流れて行くのである。心路過程が生起しないのであれば、死亡するまで、有分心の流れが続いて行く。有（即ち生命）の主要な要素の為に、この心は有分と呼ばれる。生命が終わる時、それは死亡心となり、滅尽の後、完全に停止する。その後、結生心とその他の心は、車輪の如くに、引き続き捻転して行くのである。

結生心の後、16個の有分心が生起する。その後、1個の意門転向心及び7個の「有欲速行」即ち新しい生命に執着する所の速行であるが、それらが生起する。苦集滅道の「集」は、合計3種ある。欲貪、有貪（即ち生命への貪愛）と無有貪である。人が母胎にいる時、1番目の意門心路過程は、まさに新しい生命への貪愛を實踐する。生命を貪愛するエネルギーの力は非常に強いもので、この生命が四悪道のものであっても、人類、天神または色界梵天であって、無色界梵天の生命であって、（同じ様に強力である）。生命を貪愛する力は、衆生をして、1世また1世と輪廻させる事になる。

新しい1世の、1番目の心路過程は結生心を目標として縁に取るが、これらの速行心は、欲界邪見不相応無行の貪根心である。この心路過程が終結すると、有分心が生・滅し始める。心路過程が生起しないならば、有分心は不断に生・滅する。この様に心の流れは、結生から死亡まで、また死亡から次の新しい1世から始まり、順次捻転する。常に自制している智者は、（生命の）無常を知ることができ、不死の境を覚証する事ができる。貪欲による束縛を完全に断じ除き、永久の静寂を証得るのである。智者は、以下の様に生命の流転を探求する。生（生まれる事）から死亡、死亡から生、生から死亡、死亡から生。生命の無常を知った後、精進努力し、最後に不死の境を証得し、貪欲による束縛を完全に断じ除く事ができるのである。

復習

《アビダンマ論》は、各種の心が、合計14種の作用を実行している事に言及している。これらの作用は、心路過程又は離心路過程の中において執行される。故に、心路過程は2種ある事が分かる。1つは「心路過程」で、もう1つは「離心路過程」である。その様に呼ばれるのは、それらは心路過程の中にはないからである。離心路過程には、3種の心がある：結生識、有分識、死亡識である。この3種は、共に同じ1つの果報心である。ただ異なる時刻に異なる作用を執行しているのである。

結生識：新しい1世と前の1世を結び付ける。

有分識：1世の内に保存される。生まれ変わりから死亡までの間の生命の流れが中断しない様にする。

死亡識：死亡の作用を執行する。

19種の心が、結生、有分、死亡の3種の作用を執行する事ができる。欲界、色界、無色界の三界に分けて、以下に説明する。

欲界

欲界には24種の美心がある。それぞれ欲界善心、欲界果報心、欲界唯作心に分類する事ができる。欲界善趣に生まれ変わって、人間又は天神になり、かつ、障害のない者について、この3種の作用を執行するのは、八大善果報心（4個は智相応、4個は智不相応）の中の1つである。我々のこの1世の結生識は、即ち、この8個の内の1個である。ある者は捨具で、ある者は悦具である。ある者は智相応で、ある者は智不相応である。もし、智不相応である場合は、「二因」となる。智相応である場合、「三因」と呼ばれる。三因とは、無貪、無瞋、無痴である。この種の善心は、通常、我々が行う布施、持戒、聞法、寺院への奉仕、説法、長老への尊敬、衆生への慈愛の散布、心に悲心、随喜心を保つ……等などこれらは皆、8個の善心の内の1個である。この善心が果報を生じる時、衆生は、人間界か、又は天界に生まれる。その時の結生識は、八大果報心の内の1つである。人が布施をする時、常に心が歡喜に満ちていて、かつ、因果業報の觀念も持つならば、その上、それが自発的行為であるならば、この布施の行為は、悦具智相応無行善心である。この業が、もし臨終の時に熟するならば、その人が人間又は天神に生まれる果報となる。彼の1番目の心識は、結生識と言ひ、それは悦具智相応無行一心果報心である。この様に、心の分類には、あやふやな所がない。

有情が地獄、畜生、餓鬼、阿修羅の四悪道に生まれる時、結生識等の3種の作用を執するのは、不善果報無因心の中の「推度と捨具行」である。この心に属する心所は非常に少なく、7遍一切心心所に、尋、伺、勝解を加えて、合計10個しかない。四悪道に生まれる衆生の、その結生識は不善果報心である。まさに過去世における、ある1個の「不善業」が熟すると、彼は四悪道に生まれざるを得なくなる。89種の心の中に、「結生識」の心というものはない。「推度と捨具行」の不善果報無因心が、四悪道の衆生の結生識、有分識、死亡識の役割を演ずるのである。

8個の善果報無因心の中の「推度と悦具行」は、推度（推定）と彼所縁の役割のみ、果たす。結生、有分と死亡の3種の作用は執行しない。8個の善果報無因心の中の「推度と捨具行」は、目、

耳などに障害のある人、または低級の天神の結生識、有分識と死亡識となる。彼らは生まれつきの障害者であり、後天的のものではない。ある者は先天的に知能に問題があるが、この人の結生識も、また「推度と捨具行」である。障害は不善業の果報ではあるが、人間に生まれた事の業は善である。ただ、この善が比較的弱いのである。1粒の心は、異なる作用を執行する。「推度と捨具行」又は「推度と悦具行」は、5門心路過程の中において、推定の作用を執行する。ただし、結生と有分の段階においては、推定の作用を執行する事はない。というのも、心は同じ1刻においては、1つの作用しか執行する事が出来ないが故に。

色界

色界天に生まれる梵天の、結生、有分、死亡として出現するのは、5種の色界果報心の内の1つである。この5種だけが、色界梵天神の結生識、有分識、死亡識になる。

1. 尋、伺、喜、楽、一境性具初禅果報心。
2. 伺、喜、楽、一境性具第二禅果報心。
3. 喜、楽、一境性具第三禅果報心。
4. 楽、一境性具第四禅果報心。
5. 捨、一境性具第五禅果報心。

もし、あなたが、次の一世は色界に生まれ変わりたいという願望を持っているならば、この1世において、あなたはジャーナを修行し、止観 (samatha・vipassanā) を修行し、往生の時には、ジャーナを維持できなければならない。あなたが初禅を証した時、心中に生じた速行心は、尋、伺、喜、楽、一境性具初禅善心である。この種の心を持って往生するならば、色界の第一層、初禅天の内の何れかの一層に生まれる事ができる。その結生識はとりもなおさず「尋、伺、喜、楽、一境性具初禅果報心」である。もしあなたが、第二禅を証して往生するならば、その結生識は「伺、喜、楽、一境性具第二禅果報心」である。果報心は、色界第二禅天梵天神の結生識、有分識、死亡識として出現する。故に (上記から)、色界天に生まれ変わる梵天の、結生、有分、死亡として出現するのは、5種の色界果報心である事が分かる。

無色界

4つの無色界に生まれ変わる梵天は、四無色界果報心が、彼らの結生識、有分識、死亡識になる。四無色界果報心は、人間界、天道には出現しない。というのも、それらは、梵天神の結果識、有分識、死亡識であるが故に。では、5個の色界善心、4個の無色界善心は、人間界や天界に出現することは可能であろうか？可能である！というのも、ひとたびジャーナに入れば、この善心は生起するが故に。我々は、既に、非常に多くの心路過程の中の速行の各種の組み合わせを学んだ。あるものは欲界速行、あるものは安止意門速行など等である。

合計55種の心が速行の作用を執行している：

1. 12個の不善心

2. 21個の善心：

8個の大欲界善心。5個の色界善心。4個の無色界善心と4個の出世間道心。

3. 4個の出世間果報心：

出世間果定心路の中に出現して、速行の作用を執行する。又は、初めてソータパナを証した時のその後に、生起する所の、2個の果心。これも速行の作用を執行する。

4. 18個の唯作心：

8個の欲界唯作心、5個の色界唯作心、4個の無色唯作心、1個のアラハン生笑心は、速行の作用を執行する事が出来る。1種の心は、非常に多くの作用を執行する事が出来る。ちょうど、1人の人間が、異なる場面において、異なる役割を演ずる様である。捨具推度心は、5個の作用を執行する事が出来る：結生、有分、死亡、推度（推定）、また彼所縁の役割も執行する。悦具推度心は、2個の作用を執行する事が出来る：推度、彼所縁である。

第6章

色の概要

3番目の究極法は「色」である。ここでは、総ての種類の色法を列挙する。それらは、どの様な原則でもって分類されるのか？生起の因、構成される所の色聚、及びそれらの生起の過程など等を、1つ1つ、解説する。「色」とは何か？色、パーリ語では「Rūpa」。語源は「Ruppati」から来ており、その意味は、「変質、破壊、圧迫、干渉」。もし、正念を己の身に保ち続ける事ができるならば、身体が不断に変化している事に気がつくであろう。これが色の本質である。色の本質とは即ち、破壊され続ける事。変化とは、色の持つ意味である。

《相応部・応食経》の中において、仏陀は以下の様に言う。

「比丘たちよ。色とは何であるか？比丘たちよ。変化し破壊される故に、色と呼ばれる。変化し破壊される、とは何であるか？寒さによって変化し破壊される。熱さによって変化し破壊される。飢餓によって変化し破壊される。渴きによって変化し破壊される。蛇、蚊（によって）、風に吹かれ、日に晒され、爬虫類によって、変化し破壊される。比丘たちよ。変化し破壊されるが故に、色と呼ぶ。」

寒い時、身体には、どの様な変化が起きるか？身体は硬くなり、血流は緩やかになる。暑い時、身体は発熱する。飢餓の時、身体は虚弱になる。蚊に刺され、風に吹かれ、日に晒されると、身体は変化する。故に、身体の変化と破壊は、色の本質であると言う。「色」は因縁法であり、外部の環境の変化に伴って、身体という色法も又変化し続ける。因縁法は皆、無我である。故に「色は無我である（色は私のものではない。色は私の管理の及ばないものである）」と言っても「色は私のものである」とは言えないのである。仏陀は《無我相経》の中において、以下の様に解説して言う：

「もし色が私のものであるならば、私は、私の色よ、この様にあれ。私の色よ、あの様にあれ、と言う事ができる。しかし、色は己のものではないが故に、私は、色が、こうあるべきであるとか、あああるべきであるとかは、言えないのである。」

なぜ色の事を理解しなければならないのか？《中部・大牧羊者経》において、仏陀は以下の様に言う：

「もし、色について知らないのであるならば、その比丘は、この法、律の中において成長し、進展し、成就する事ができない。」

何故であるか？色は、五取蘊の1つであり、色、受、想、行、識を己、己のもの、己の自我として執着するならば、それは苦諦であり、苦諦は必ずや徹底的に知られなければならない、集諦は必ずや取り除かれなければならない、滅諦は必ずや体験されなければならない、道諦は必ずや展開されなければならない。苦諦を徹底的に知るには、五蘊の無常、苦、無我を観じなければならない。もし、色を知らないのであれば、色の無常、苦、無我を観することは出来ないのである。

科学者はひたすら物質についての研究に余念がなく、一切の物質は、最も小さいクォークからできている、と考えている。しかし、これらは、尚、世俗諦に属しており、究極諦には到達していない。我々の身体は、千々万々個の色聚によって構成されているが、これらの色聚もまた生滅の法である。色聚とは、色によって構成されている。色法は独自に存在する事は出来ない。例え

ば、地大は、独自に生じたりする事は出来ず、必ず、他の色法と組み合わせられなければならない。色聚自身も、今だ世俗諦に過ぎない。というのも、それはもっと小さな単位にまで分解出来るが故に。1粒の色聚は、少なくとも8種の色法があり、それぞれ地、水、火、風、色彩、香り、味、食素（栄養素）であり、八不離色と呼ばれる。この8個の色法は、同時に生起して、同時に滅する。同一の依処に依る。同一の依処とは何か？即ち、総ての色法は、必ず四大種色：地、水、火、風に依存して生起する事を言う。色彩、香り、味、食素は所造色と呼ばれる。全ての所造色は、皆、四大種の色に依存して、初めて生起する事ができる。

色法の列挙

非常に多くの経の中において、仏陀は常に以下の様に言う：

「比丘たちよ。色には何があるか？四大種の色及び四大所造色がある。」故に、合計2種類の色法がある事になる。四大種色及び四大所造色である。四大はまた、「大種色」(Mahā - bhūta)とも呼ばれる。地、水、火、風は皆、己自身の自性を擁している。例えば、地は硬さの自性、火は熱さの自性、風は移動又は圧力の自性、水は流動性又は粘着性の自性を擁している。所造色は24種ある。それは大種色に依存して初めて生起する事ができる。大地を四大の比喩に使うとすれば、大地の縁によって、成長する所の木の根が、所造色であると言える。

四大種の色（四界）

四大種色（又は四界）は、

1. 地界 (paṭhavī - dhātu)
2. 水界 (āpo - dhātu)
3. 火界 (tejo - dhātu)
4. 風界 (vāyo - dhātu)

世間にある一切の物質は、最も高く最も大きな山から、最も小さなクオークまで、皆、四大種色によって構成されている。究極法を知りたいのであれば、4種の鑑別法がある。

1. 特相（特徴）
2. 作用
3. 現起（現象）
4. 近因

1. 地界

広がる要素を持つ。目を外に向けると、広がる大地が見える。この大地は世俗諦である。

究極諦の場合、これより先、細かく分解する事が出来ない上に、己自身の特徴または自性を持つ。大地が持つ自性は硬さ、これは究極諦である。地の特徴は、硬さである。作用は具生色法の足掛かりとなる。具生色法とは、共に生起する所の色法の事である。地と共に生起する色法には、水、火、風、色彩、香り、味、食素がある。これらの具生色法は地の基礎の上に建立される。故に、地の作用は、具生色法の足掛かりである、と言う。地の現起は、具生色法を受け入れる事。近因は、水、火、風という、その他の三界に依存する事。体内の地界の最も

顕著な部分は20箇所である：頭髪、体毛、爪、歯、皮膚、筋肉、腱、骨、骨髄、腎、心、肝、肋膜、脾、肺、腸、腸間膜、胃中物、糞便、脳。しかし、この20個の部分は、ただ地界によってのみ構成されている訳ではなく、その他の三界もまた同時に存在している。というのも、色法は、単独では生起する事が出来ないが故に。

2. 水界

川を見た時、最初の印象は「流れ」である。流動が、水の特徴である事が分かる。川自体は世俗諦であるが、その流動性は究極諦である。水的作用は、具生色法を増加成長させる事。ご飯を炊く時、洗い終えたお米の中に水を注いで、その後、煮たり蒸したりする。その時、米は膨張するが、これが水的作用である。水的作用とは、具生色法の増加と成長である。水の現起は具生色法を1塊にする、又は粘着させる事。我々の身体が全体を保って分解しないのは、水が身体の各部分、足、手、胸、四肢を1つに粘着せしめて、一定の形状を保っているからである。一連の念珠の様に、もし、糸が切れたならば、念珠は分散してしまう。それと同じ様に、もし、身体内部の水界を取り除いたならば、身体全体は分散してしまう。我々の身体又物質は、例えば、円形、三角形、四方形等の、異なる形状を取る事ができるが、それは、水が、地、火、風を粘着力で1つに纏めているからである。水の近因は、地、火、風という、その他の三界である。この様に、四大は同時に生起し、同時に滅するのである。体内の水界の顕著な12の部分は以下の通り：胆汁、痰、膿、血液、汗、脂肪、涙、油分、唾液、鼻水、関節液、尿。

3. 火界

火を見ると、熱いと感じる。熱さは火の特徴である。熱さと冷たさは相対的なもので、熱さを感じない時、冷たいと感じるものである。故に、冷たさも又火の特徴である。熱さは、食べたものを消化する助けになる。氷水は、消化の火を冷却する為、冷たい飲み物を飲むと、（胃が）膨張して、消化不良になる。我々中国人は、熱いものを好んで食するが、これは非常に智慧のある事である。火的作用は、具生色法を老化させる事。人間で言えば老化を促進すること。なぜ、白髪になるのか？なぜ、顔に皺ができるのか？火界色法が、成熟して老化するが故に。もし、何事にも怒ってばかりいたならば、火界が過剰に強いために、火の力は殊の外強く、老化も速くなる。故に、美人でいたい女性は、怒らないのが得策である。

世間の一切の物質的現象は皆、火界によって維持されている。一座の山は、千万個の色聚によって構成されているが、1つ1つの色聚には地、水、火、風、色彩、香り、味、食素と言う8個の色法が含まれている。心法は、生、住、滅の三時があるが、色法も又、生、住、滅がある。8個の色法の中の火が、住の時期に到達したならば、又別の1代の色聚が生じる。これを時節生色聚と呼ぶ。時節生色聚の中にも又火があり、火は、又住の時期に到達すると又新しい1代の色聚が生じる。代々引き継がれて行くため、山全体は火界によって維持されている、と言える。一切の有為法は、皆、生滅無常であり、火界の勢力が徐々に衰えて行く時、生じる色聚の数は徐々に減少して行く。エネルギーが徐々に消失する時、山はゆっくりと崩壊して、灰になって行き、最後には、この世間の中に埋没する。故に、「一切の有為法は、皆因縁の法である」と言うのである。生があるが故に死があるのは、この（山の存在の）道理と同じである。あなたが、死にたくないのであれば、生まれない事である。

火界の現起は、不断に柔軟性を提供する事である。バナナは未熟な時は非常に硬いものであるが、青色から黄色に変色して熟すると、非常に柔らかくなる。何がバナナを柔らかくしたの

か？火界である。火界の現起は、不断に柔軟性を提供する事である。寒い冬の日に、あなたは身体が硬直しているのを感じるが、それは火界が欠乏したのが原因である。しかし、夏は、身体が比較的柔らかく感じる。それは、十分な火界があるからである。火界の近因は、その他の三界である。体内の火が最も顕著であるのは、4つの部分である。即ち、体温の火、成熟と老化の火、発熱の火、消化の火。

4. 風界

風界は移動と圧力の元素である。特徴は支持（支え）。身体を真っ直ぐにして座ることが出来るのは、風の特徴、支持（支え）による。もし、風をしぼんだ風船に送り込んだならば、風船は膨らむ。膨張も又支持と圧力の要素である。中風の人は移動が困難であるが、それは風の作用が足りない故である。風は、その他の色法を移動させたり、活動させたりする事ができる。手を曲げられる事、これは風によって生じる。風の生起は、心が手を曲げたいと思う、その結果である。故に、四大もまた心によって生じているのである。あるものは業から生じ、あるものは心から生じる。風の現起は、1個の色法を帶動して、別の所に移す事。実は、この様な説明は正確ではない。色聚は生じるや否や即刻滅し去る為、ある所から別の所に移動する事はない。故に、風の現起とは、風は、それと相次いで生起した所の新しい色法の近くに、元の場所ではない所に生起せしめる事と言い換えるべきである。もし、元の所において生起するならば、色法は動けなくなる。心が、動きたいと思う時、非常に多くの色聚を生じる。

1粒毎の色聚の中には、1つの、風と呼ばれるものがあり、それが色法を、1つの場所からもう1つの場所まで、帶動するのである。風の近因は、その他の三界（地、水、火）である。風は、その他の三界に依存して、初めて役割を発揮出来る。身体内部の風で、最も顕著なのは以下の6個の部分である。

- (1) 上行風、しゃっくり、咳、くしゃみ。
- (2) 下行風、排便の支援、おなら。
- (3) 腹内部の風、大腸小腸の外で行き来する風。
- (4) 大腸小腸の内部で行き来する風。腸内の風は、食物を移動させる事ができる。この為、我々が食べたものは、胃から腸まで届いて、（栄養が）吸収される。
- (5) 肢体内部で動く風。
- (6) 出入息。我々が呼吸する時、風も動いている。

四大の修習

四大は非常に重要である。世間の万物は、四大によって構成されている。《法聚論》によると、四大は以下の4種の特徴に分類する事ができる。

1. 地界：

硬さ、粗さ、重さ、柔らかさ、滑らかさ、軽さの6個の特徴。もしそれが硬くないならば、柔らかい。粗くないならば、滑らかである。重くないならば、軽い。身体の硬さを観ずるならば、身体の骨を観する事ができる。骨の事を思えば、硬さの特徴は思い出せる。滑らかさを観るのであれば、あなたはあなたの心を柔軟にして、皮膚の事を思えば、滑らかさを知る事ができる。

2. 水界：

流動、粘着の特徴を持つ。《アビダンマ論》では、水界は、身体によって体感する事ができない。身体はただ、地、火、風の3種しか感じ取る事が出来ない、と言う。水界は意識、意門によって感受される。例えば、手で水を叩く時、冷たいと感じたならば、それは火界であり、圧力を感じたならば、それは風界であり、水の柔らかさ、滑らかさを感じたならば、それは地界である。あなたはその流れを感じる事は出来ない。流動性は、意識によって感受するものであって、身体を用いて触れるものではない。

3. 火界：

冷たさと熱さの特徴を持つ。我々は、身体における冷たさ熱さを明確に感じ取る事ができる。非常に明確である為、観ずるのも非常に簡単である。

4. 風界：

支持（支え）と推進（押し動かす）特徴がある。例えば、身体を直立させて座る時の支持力。腹部の蠕動、心臓の鼓動等々である。（訳者注＝四界分別観の修習は、その体験内容を毎日指導者に報告し、指導を受ける必要がありますので、自己流での修習はお勧めいたしません。）

28種の色法

合計28種の色法がある。四大、及び四大によって造られる24種の所造色。合計28個の色法となる。28個の色法は又18種の真実色法と10種の非真実色法に分けられる。真実色法は又完成色と言う。完成色と呼ばれるのは、それらが自性を擁しているからであるが、その故に、観禅の目標に適している。10種の非真実色法には自性はなく、観禅の目標に適さない。

表Q: 28種の色法（P268の別表参照）

18種の真実色

7類に分ける事ができる。

1. 四大種：

地、水、火、風。

2. 五浄色：

眼、耳、鼻、舌、身体。浄色とは、明るい、と言う意味である。故に、眼浄色、耳浄色、鼻浄色、舌浄色、身浄色は、皆、明るいのである。

3. 四境色：

これは色彩、音、香り、味。触はない。というのも、触は既に地、火、風に含まれているが故に。

4. 二種類の性色：女性根、男性根。

5. 心所依処色。

6. 命根。
7. 食素（栄養素）。

以下に説明する。

1. 四大種：

既に説明した。

2. 五淨色：

- (1) 目淨色：

目（自体）と、眼淨色とは異なるものである。目は世俗諦で、異なる色法によって構成されている。目の中には、54個の色法があるが、眼淨色はただ1個しかない。眼淨色は、網膜にある淨色であり、色彩と光に対して、敏感である。その特徴は、色所縁が衝撃してくるのを待つ所の、大種の淨（明淨色）である。大種色とは、四大の事である。色所縁が衝撃する所の、四大の明淨なる色を眼淨色と呼ぶ。眼淨色の作用は、色所縁を縁に取って、目標とすることである。現起は眼識の依処と門である。近因は、色愛を縁として生じる業生四大である。過去の業（目）により色塵を貪愛するが故に、眼淨色が生起するが故に。どのような事柄も因があれば、必ずや果が存在する。眼淨色と9種の色法は、同時に存在する。地、水、火、風、色彩、香り、味、食素、命根、それに眼淨色を加えて、合計10種の色法の、この構成を「眼十法聚」と呼ぶ。眼十法聚の中の眼淨色は、光に対して、特に敏感である。目の中には、2種類の明淨色があるが、それは、身十法聚と眼十法聚である。どの様に、この両者を区別するのか？少し遠くにあるその他の色聚の色彩を選択して、もしその色彩が、選んだ所の淨色に衝撃するならば、これをば眼淨色である、と判定する事ができる。眼淨色の淨色とは、明るい事を言い、それは四大の明るさであり、依処は四大である。

- (2) 耳淨色：

耳の洞内にある淨色。音に敏感である。六塵が六根に衝撃する時、例えば、音が耳根を衝撃する時、反応する作用のあるものを耳淨色と言う。耳淨色の特徴は、音の衝撃を受け取る準備をする所の、大種（四大）の淨（明淨色）である。作用は、音を所縁の目標として取る。現起は、耳識の依処と門。耳識の生起は、耳淨色に依存している。何故、耳淨色が生じるのか？近因は、音への愛を縁とする業生の四大。耳淨色は、業生色である。即ち、過去の業によって生じた業報である。耳淨色は、9個の色法と共に同時に生起する。地、水、火、風、色彩、香り、味、食素、命根。合わせて「耳十法聚」と呼ぶ。この10種の色法の中において、ただ、耳淨色のみが、音に敏感である。

- (3) 鼻淨色：

鼻孔内部にある淨色。匂いに敏感である。鼻淨色の特徴は、匂い又は香りが、大種（四大）の淨（明淨色）に衝撃するのを待機しているものである。鼻淨色の作用は、香りを所縁として目標に取ること。現起は、鼻識の依処と門。鼻識の生起は、必ず鼻淨色に依存しなければならない。故に、鼻淨色は、鼻門心路過程における1個の門となる。その近因は、香りへの愛の縁による業生四大。鼻淨色は単独では生起出来ない。必ずその他の色法と共に生起する。その種の構成を「鼻十法」と呼ぶ。それは即ち、地、水、火、風、色彩、香り、味、食素、命根、鼻淨色である。この中において、鼻淨色だけが匂いに敏感であって、色聚の中

の全ての色法が、匂いに敏感であるわけではない。

(4)舌浄色：

舌にある浄色。味に対して敏感である。特徴は、味が大種（四大）に衝撃するのを待機している浄（明浄色）である。作用は味を縁としての取って目標とする。現起は舌識の依処。近因は味への愛の縁による業生四大。我々がなす所の業は、この、味というものを貪愛するが故に、舌浄色が生起するのである。舌浄色はその他の色法と共に生起する。この色聚は「舌十法聚」と呼ぶ。それは即ち、地、水、火、風、色彩、香り、味、食素、命根、舌浄色である。舌浄色は、味に敏感である。舌十法聚は、舌において初めて生起する。この他の場所で生起する事はない。

(5)身浄色：

全身に遍満する浄色。触（地、火、風）の所縁に対して敏感である。頭から足まで、どこにも身浄色は存在する。故に、手を動かせば、推進力を感じ取る事ができる。足を地面につける時、粗さや硬さを感じ取る事ができる。特徴は、触の所縁が衝撃するのを準備している所の四大の浄（明浄色）である。作用は触を所縁として取って目標とする。現起は身識の依処。身識の生起は必ず身浄色に依存する。身門心路過程の生起も又、身浄色に依存しなければならない。近因は触に対する愛を縁とする業生四大。なした所の業が妙なる触に貪愛するが故に、身浄色は生起する。身浄色は単独では生起する事ができない。必ず、その他の色法と共に生起する。地、水、火、風、色彩、香り、味、食素、命根、身浄色である。この種の色聚は、「身十法聚」と呼ぶ。耳の中には、身十法聚と、耳十法聚がある。しかし、色聚はこれ程までに微小であるのに、どの様にして区別するのか？所縁がそれに衝撃するのを観ずるのである。所縁が衝撃した所の耳浄色ならば、それは耳十法聚である。所縁が硬い、柔らかい、熱い又は冷たいのであれば、それは身浄色をば衝撃したのである。その色聚は、身十法聚である。

3. 四境色

境色の意味は、五根における所縁の、その外境（外部にある様）、である。五根とは即ち、五浄色の事である。合計4種の境色がある。

(1)色彩：

特徴は、眼浄色を衝撃する事。作用は眼識の所縁となる。現起は眼識の境。近因は同一の色聚の中の四大。四大は全ての色法の依処。

(2)音：

特徴は耳浄色を衝撃する事。作用は耳識の所縁。現起は耳識の境。近因は四大。

(3)香り又は匂い：

特徴は鼻浄色を衝撃する事。作用は鼻識の所縁。現起は鼻識の境。近因は四大。

(4)味：

特徴は舌浄色を衝撃する事。作用は舌識の所縁。近因は四大。合計4種の境色がある。色彩、音、香り、味である。触は何であるか？既に、地、水、風に含まれている。

4. 性色

(1) 女性根：

女性に関して言えば、女性根は全身に分布している。男性は、男性根が全身に分布している。女性根の特徴は、「女性」である。作用は「この人は女性である」と顕示する事。現起は女性の身体、特徴、動作と方式を通して、表現される。女性の身体と、男性の身体は、構造が異なる。女性の皮膚は比較的柔らかく、男性は比較的粗い。女性の動作は比較的穏やかで、男性は比較的荒い。これらの種々の動作、特徴は、女性根の現起であり、それによってあなたは、相手が女性である事が分かる。

(2) 男性根：

特徴は男性。作用は「この人は男性である」と顕示する事。現起は、男性の身体、特徴、構造、動作と方式によって表現する事。あなたにこの人は男性であると、知らせる。男性根は全身に分布している。故に、暗闇の中においても、手に触れただけで、相手な男性か女性かが、分かる。男性根は男性根十法聚において生起する。合計10種の色法である。地、水、火、風、色彩、香り、味、食素、命根、男性根。女性根は女性根十法聚において生起する。地、水、火、風、色彩、香り、味、食素、命根、女性根。人間は、ただ1つの性根を持つ。性根は、1生の内において、変化する事があるであろうか？自然に性別が変化する事があるであろうか？

仏陀の時代、ある既婚のバラモンがいた。彼は外出の時、ハンサムで荘厳な男性のアラハン (Mahākaccāna) に出会い、突然心中に邪念が生じた：

「もしこの尊者が私の妻であったなら、どれ程良いことか！」

アラハンの境地は無比に崇高であり、アラハンに対してこのような不敬の心を抱く事は非常なる不善である。目、耳、鼻、舌、身体、意を正念で繋ぎ止めておくのでなければ、煩惱に侵され、邪念が生起する。上の考えが生起するや否や、バラモンは、己の性根が変化するのを感じた。己の性根が、女性根へと変化し、男性から女性になったのである。彼は非常に恥ずかしく思い、家に帰る事ができず、他の村へ行き、ここで暮らして、結婚して子を産んだ。ある日、1人の友人が、彼の村にやって来た。彼は昔の出来事を思い出して、思うことあり、これまでの事情を全て、友人に話した。友人は

「あなたはMahākaccāna尊者に懺悔しなければならない」

女性になったバラモンは、

「そうなのだ。私は彼に邪悪の心を起こしたのです。私は彼に詫びなければならない。」

彼は手を尽くしてアラハン尊者を探し出して、彼に直接詫びを入れ、彼はアラハンから許しを貰えた。懺悔の後、バラモンは己の性根が又変化を起こし、女性から男性に戻ったのである。バラモンは人生の浮き沈みに嫌気が差し、故郷に帰ることもせず、サンガに参加して髪を剃って僧になった。彼の人生は紆余曲折あり、又父親になったり母親になったりしたので、多くの比丘が、彼をからかった：

「君は母親の時に一番子を愛せたか？それとも父親の時？」

彼は最初

「母親の時、子を愛する事が多かった。というのも、子は私の身体から生まれて来たのだから。」

と答えていた。後になって、同じことを聞かれると、彼は面倒くさくもあり、又、恥ずかし

くもあった。その為、彼は深山に入り、勇猛に精進努力して、最後にはアラハンになった。その後、また同じサンガに戻ったが、人々は、彼が既にアラハンを証した事を知らない為、前と同じ様な問いを聞いた。その時、彼は

「私は誰をも愛さない。」

と答えた。彼はアラハンを証得した為、既に愛欲を断じ除いた故である。比丘たちはこの答えを聞いて、彼に変化があった事を知り、ある種の果位を得たであろうと思った。故に、これ以降、彼を笑う者はいなくなった。彼を馬鹿にすれば、その後、果は己が引き受けなければならないからである。この物語は、我々に「業力は人の性別を変える事ができる」事を教えている。

5. 心所依処

心所依処の特徴は、意界（五門転向心と2個の領受心）の提供、及び意識界の依止又は意識界の支えとなる色法。作用は五根識以外の全ての心識の依処。五根識とは何か？眼識、耳識、鼻識、舌識、身識である。眼識の生起は、眼浄色に依存しなければならない。耳識の生起は、耳浄色に依存しなければならない。鼻識の生起は、鼻浄色に依存しなければならない。舌識の生起は、舌浄色に依存しなければならない。身識の生起は身浄色に依存しなければならない。この5個の根識以外に、全ての心識の生起は、皆、心所依処に依存する。心所依処の現起は、これらの名法を支える事である。心所依処は、心臓の下部において流動する所の血の中である。心臓全体、ではない。心所依処も又過去の業によって生じたものであり、同じく生滅の法である。1つ1つの心識刹那毎に、心所依処は生じる。1つのまばたきにおいて、十億億個の心識刹那が生滅する。故に、心所依処も又刹那生滅する。これは即ち、生滅の法である。全ての色法は、皆生滅の法である。心所依処は、必ず、その他の9個の色法と共に生起する。これを「心所依処十法聚」と呼ぶ。地、水、火、風、色彩、香り、味、食素、命根、心所依処。もし、1本の指を動かしたいと思ったならば、必ず、心に指を動かしたいと言う心念が生起する。この心念は、心所依処において生起するのである。

6. 命根

命根の特徴は「住」時において、業生の具生色法を維持する事である。同一の粒の色聚の中の全ての色法は、皆具生色法である。これらは、当時に存在して、同時に滅する。命根は、それらの「住」時を維持する。例えば、性根十法聚は、業生色であるが、過去の業によって、今の我々が、男性であったり、女性であったりする。性根十法聚の中に、命根がある。そして、性根十法聚の住時を維持している。1粒1粒の色聚には、皆、生、住、滅がある。命根は即ち、具生色法の住時（即ちその生命）を維持するものである。命根の作用は、色法を発生せしめる事。もし、これが発生しないのであれば、色法は、各自の任務と作用を遂行する事が出来ない。命根の現起は、業生色法の存在を維持する事。命根は、同時に生起する所の色法に生命を与える。それはちょうど、水が蓮の花に生命を与える様なものである。命根は、具生色法が存在する為の、その生命力を維持する。しかし、命根は全ての色法の生命力を維持する訳ではない。ただ業生色法、過去の業力によって生じた所の、色法の生命力をのみ維持するのである。色法が生じる原因は4種ある：

- (1) 業生色
- (2) 心生色

(3)時節生色

(4)食素生色

命根は、ただ、業生色法の生命力をのみ維持する。命根は、8個の色法と共に生起する。これを「命根九法聚」と呼ぶ。地、水、火、風、色彩、香り、味、食素、命根。命根を区分し、判定する方法は、(vipassanāの修行で) 観照をする時に、ある種の色法が、生命力がある、よく動くものがあれば、それが命根である。命根九法聚は全身に遍満している。特に、我々の腹部、消化の火の近く。

7. 食素

食素の特徴は、食べ物の中の栄養素。作用は色聚の維持。現起は、色聚を滋養する事。食素は、その他の7個の色法とのみ同時に生起する。「純八法聚」と呼ぶ。地、水、火、風、色彩、香り、味、食素。これは基本の色聚であり、八不離色と言う。我々は、既に18種の真実法を学んだ。18種の真実法は、以下にまとめる事が出来る。

(1)有自性色：

例えば、地には硬いという特徴があり、水には粘着という特徴があり、風には支持性、火には熱さという特徴がある。

(2)有相色：

全てに無常、苦、無我の三相がある。というのも、生じるや否や即刻滅するが故に。

(3)完成色：

直接的に業、心、時節と食素によって造られるが故に。

(4)思惟色：

観智が三相を観照する時の目標となるが故に。色業処を修行する時、この18個の真実色の無常、苦、無我を観照しなければならない。というのも、それらは、観智の目標であるが故に。

(5)「色色」：

色法の特徴を持つが故に。即ち、破壊と変化を免れない。

10種の非真実色

10種の非真実色とは、空界、身表、語表、色軽快性、色柔軟性、色適業性、色集積、色相続、色老性、色無常性である。この10種は、又、4種に分ける事ができる。

1. 制限色：

空界。

2. 表色：

身表、語表。

3. 変化色：

色軽快性、色柔軟性、色適業性。

4. 相色：

色集積、色相続、色老性、色無常性。なぜ非真実色と呼ぶのか？というのも、それらは、完成色の1つの形態であって、究極真実法ではないが故に。10種の非真実色は「不完全色」と

呼ばれる。というのも、それらは、4種の色法を因として直接造られたものではないが故に。それは、ただ、完成色の素質と形態（を言うの）である。

1. 空界：

空界の特徴は、色聚との境界を画す事である。色聚と色聚との間には1個の空隙があり、それが空界である。例えば、4粒の異なる色聚があるとして、ここには1個の空界が必要とされる。

そうして初めて、これは眼浄色、あれは耳浄色であると、区別する事ができる。そうでなければ、全てが1塊になってしまう。こうしたことから、空界の特徴は、色聚の境界を区分する事であり、この様であるならば、修行者の判別も容易になる、と言う訳である。作用は、色聚の端の顕示。現起は色聚の境界又は間隙。

2. 身表：

心生風界の特別な作用によって、身体を移動させて、自己の意念を表現する事。例えば、手招きしながら「花子さん、こっちに！」と言う時、私の心は、花子さんに来てもらいたいと思っており、その心は、非常に多くの色聚を生じ、心生色聚の中の風界が掌を動かし、結果我々は、掌をヒラヒラさせる事ができ、手招きに成功する。これが身表である。故に、身表の作用は意念の表現。現起は身体の動作。近因は心生風界。

3. 語表：

心生地界の特別な作用によって、発声を通して、自己の意念を表現する。例えば、私が私の心によってあなたにこちらに来てもらいたいと思う時、非常に多くの心生色聚が生起し、喉に到り、「こちらへ！」と言う。喉自体は業生色であるが、業生色の中にも「地」界があり、心生色聚のなかにも「地」界がある。2個の「地」界がぶつかる時、音声が出現する。「こちらへ」と言う音は、心生色聚の中の地界と、業生色の喉の中の地界がぶつかり合った結果である。

故に、語表の作用は、心生地界の特別な作用であると言える。即ち、音声を発する事によって自己の意念を表現するのである。現起は言語の因。近因は心生地界。《アビダンマ論》は非常に科学的である。感情でもって理解するのではない。ロジックでもって分析、分解し、智慧でもって理解しなければならない。

4. 色軽快性：

特徴は遅鈍でない事。作用は色法の沈重を取り除く事。現起は色法が軽快に生起する事と、変化する事。近因は軽快な色。我々な病気の時、身体は重くなるが、これは軽快性の欠如である。

5. 色柔軟性：

特徴は硬くない事。作用は色において硬直性が取り除かれている事。現起は身体は一切の作業について対抗しない事。近因は柔軟な色。

6. 色適業性：

特徴は、身体作業に適している事。作用は色法の不適業性を取り除く事。現起は色法が軟弱ではない事。近因は適業な色。

7. 色集積：

色の相続流の最初の生起の刹那から、及び、結生から諸々の根具足の最初の生起の段階まで。特徴は、色法の生起が始まる事。作用は、色法の生起を開始せしめる事。現起は、開始の状態。近因は生起した色法。1番目の結生識が生起する時点を、色集積と言う。

8. 色相続：

1番目の結生識が開始された後、色法は不断に再度生起する。これを色相続と言う。特徴は、色法が継続して不断に生起する事。作用は、連続的な結合。現起は、絶え間ない事。近因は、連結された色法。色集積と色相続に関して、2種の解釈が存在する。世俗な解釈では、結生識が生起し始める時の色法を、色集積と言う。その後、又非常に多くの色法が生起するが、これを色相続と言う。究極諦の解釈。色法の寿命は、17個の心識刹那であり、色法の寿命は又、生、住、滅に分ける事ができる。「生」のその1刻が取りも直さず、色集積と色相続である。

9. 色老性：

特徴は、色法の成熟と老化。作用は壊滅への導き。現起は新しさの喪失。近因は、老衰しつつある色法。色法の寿命の「住」の時、正に色老性である。これより先、色法は老化するが故に。

10. 色無常性：

特徴は色法の完全なる壊滅。作用は色法の消失。現起は色法の壊尽。近因は壊尽した色法。色無常性とは即ち、色法の「滅」時である。この10個の非真実色はあまり重要ではない。というのも、観智の対象ではないが故に。真実色法の別の形態に過ぎない。故にこれ以上の説明は割愛する。

色法が生じる4種の原因

色法が生じる原因は、合計4種である。即ち、業、心、時節と食素（栄養素）。

1. 業生色：

というのも、これは過去の業によって生じる色法であるが故に。例えば、目、耳、鼻、舌、身体、などである。

2. 心生色：

心も又非常に多くの色法を生む事ができる。例えば、私があなをこちらに呼びたいと思った時、私の心は非常に多くの色法を生じる。

3. 時節生色：

時節とは火界の事である。

4. 食生色：

食べ物も又色法を生む事ができる。

業生色

業生色は、9種の色聚を含む。眼十法聚、耳十法聚、鼻十法聚、舌十法聚、身十法聚、女性十法聚、男性十法聚、心所依処十法聚、命根九法聚。過去に造られた善と不善の業は、我々の目、耳、鼻、口を形作る。美しいか醜いか？身長は高いか低い？太っているか、痩せているか？ただ、肥満は業力ではなく、食べ過ぎの時もある。25種の業が、色法を生じる事ができる。12個の不善心、8個の大善心、5個の色界善心。以下に例を上げて、12個の不善心が、どの様にして、目、耳、鼻、舌、身体を形作るかを説明する。

古代に、1人の辟支仏（Pacceka Buddha）が、クティの修復の為に粘土を必要とし、ある村の貧しい女性の家に托鉢に来た。女性の手には少しばかりの粘土があった。彼女は粘土を惜しんだが、上げない訳にもいかなかった。その為、彼女はいよいよ粘土を辟支仏に供養した。供養そのものは善業であるが、彼女は、少しばかりの怒りの心でそれをなした。善と悪の2つの心路過程が不断に交互に生起して、ある時は善であり、ある時は悪であった。彼女は布施の業により、お金持ちの家に生まれた。しかし、彼女の名前は五醜と言った。その意味は、身体の上五箇所が特別に醜かったのである。目、鼻、口、両手と両足。彼女の善行為は、怒りに取り囲まれている為、醜い目、低い鼻、歪んだ口等々になった。しかし、彼女は、過去において、粘土を、既に徹底的に煩惱を断じ除いた辟支仏に布施した為、その功德は非常に大きく、又自らの手で供養した為、この1つの善業が善報をもたらした。結果、彼女の感触は非常に妙やかなもので、一度、彼女に触れると、誰でも彼女を好きになった。

ある時、彼女は思いがけなく、パカ（Paka）国王に出会った。パカ国王は一目で彼女が好きになった。国王は紳士の振りをして、彼女の家に行き求婚し、彼女を宮殿に連れ帰った。パカ国王は彼女を後にしたかったが、彼は又、5つの醜さを持つ醜い女性を皇后にする事で、周囲に嘲笑されるのを恐れた。彼は非常に悩んだ末、1つの方法を思いついた。皇族の人々が皆、五醜に触れられる様にしたのである。というのも、彼女に触れさえすれば、人々は皆、彼女を好きになるが故に。そうすれば、人々は彼女の醜さを気にしなくなるであろう、と。こうして、国王は皇族の1人1人を、彼女に触れさせた。結果、皆は、彼女が皇后になることに賛成した。ただ、多くの王妃は不満であった：

「私達は明らかに彼女より美しい。なぜ彼女が皇后になるのですか？」

そして、彼女を袋に入れて船に乗せて捨てた。五醜と船は漂って後、又別の国に漂着した。ある人が彼女を宮殿に連れて行った所、国王が無意識に彼女に触れ、結果、国王も彼女を愛した。この頃、パカ国王は、皇后がいない事に気がついて、あちこち探し回った後、もう1つ別の国の国王が彼女を皇后にしていることを知り、非常に怒って、戦争を仕掛けた。五醜は

「お二人とは、1週間毎に行き来して、一緒に過ごしましょう」

と提案した。この様にして、彼らは戦争をする事もなく、不思議な関係性を保つ事となった。

ある人が、女性になったり男性になったりするのには、過去の業による。ある禅修行者が、己の過去世を観ずると、1世毎に、女性になりたいと祈願している事を知った。この事が因と縁になり、彼は、代々女性として生まれる業になった。ある人は男性に生まれたいと祈願する。これらは、過去の業と関係がある。1つ1つの心には、生、住、滅の3つの段階がある。業生色は、結生識の1番目の「生」の段階から、業力によって色法が生じ始める。結生識の「住」の段階においても色法は生じる。「滅」の段階においても色法は生じる。臨終の時、死亡する前の、17個の心識に

において、業生色は色法を生じるのを停止する。一生涯において、業は色法を生じ続ける。私という人物が、今ここで説法しているが、業力は、私の身体において非常に多くの色法を生じるのである。

心生色

89種の心の中において、4種の無色界異熟心と双五識以外の、その他の75種の心は、全て心生色を生じる事ができる。双五識とは、目、耳、鼻、舌、身体、5個が善果報で、5個が不善果報で、合計10個になる。この10個は、非常に弱い心で、色法を生むことは出来ない。無色界異熟心識は、無色界において生起するが、これもまた、色法を生ずる事は出来ない。しかし、無色界善心は色法を生ずる事ができる。あなたが無色禅に入る時、身体は直立する事ができ、2、3時間それを保持できるのは、心生色と関係があるのである。このことから、無色界善心は色法を生ずる事ができる事が分かる。心生色は、各種各様の色法を生じる。例えば、微笑であるが、笑いは、心所によって生じるのである。というのも、心が、笑いたいと思う時、非常に多くの色聚を生じる。1粒1粒の色聚の中には、風界があり、風界があなたの唇を上に向けて上げる。故に、あなたが笑う時、唇は上向く。同様に、苦悩する時も又、心は非常に多くの色聚を生じる。1粒1粒の色聚の中の風界が、唇を下に向けて下げる。そうなれば、あなたの顔は苦渋に満ちる。これらは、心生色と呼ばれる。1個の善心は、非常に多くの良質の色聚を生む。不善心、苦悩の心、瞋恚怨恨の心も又、非常に多くの不良・悪質な色聚を生む。それが身体に影響して、我々を不快にさせる。

禅の修行の時にできる光は、どの様にして生まれるのか？止観の心によって生じた色聚は、「心生色聚」と言い、合計8種の色法がある。地、水、火、風、色彩、香り、味、食素である。強くて力のある定によって、この「心生色聚」の中の「色彩」は、通常より明るくなる。又その中の「火」界も又、新しい代の色聚を生じ、これを「時節生色聚」という。この事から、我々の体内には心生色聚、時節生色聚がある事が分かる。例えば、次の図の灰色の部分の時節生色聚であり、白点は心生色聚である。この2種類の色聚の中の「色（色彩）」は、定力の関係で、特別に明るく光る。これら特別明るく光る「色（色彩）」は、全て1箇所を集まると、身体内部の光となる。禅相は外部に存在する。外部の光は如何にして生じるのか？時節生色聚（灰色）の中の火界は、体内においても生じるし、体外においても生じる。体外の時節生色聚にも「色（色彩）」がある。千々万々の色聚の中の「色」が1箇所に集中すると、光を生ずる。故に、外部の光は、時節生色聚から生じているのが、分かる。そして、時節生色聚は、止観の心生色聚を縁にして、初めて生起する事ができる。

表R: 禅修行の時の光は如何にして生ずるか？（P269の別表参照）

もし、定力がないならば、この時、生じる心生色聚の中の「色（色彩）」は、余り明るくなく、その為、光が発現する事はない。定力と智慧が鋭敏な時、生じた心生色聚の中の「色

「色彩」は、非常に明るくなる。千々万々の「色」が、1箇所集まると、光になるのである。1種類は体内に生じ、もう1種類は体外に生じる。質問：

「他人が、その光を見る事は出来ますか？」

多分！私がカナダで《アビダンマ論》の講義をした時、全身全霊で法話をしたので、頭から明るい光が出て、その時、その場にいた生徒達は、それを見た。

1粒の色聚には、少なくとも8個の色法がある。地、水、火、風、色彩、香り、味、食素。

「香り」とは匂いの事。1粒毎の色聚の中には、皆、匂いがある。もし、色業処まで修行が進んだならば、あなたは、己の歯を観ずる時、非常に多くの色聚を観ずる事ができる。その時に、色聚の中の「香り」を観ずるならば、その匂いは非常に臭い事に気がつくであろう。全身の、頭から足まで、良い匂いのするところは、ないのである。故に、仏陀は言う：

「身体は臭いものであって、執着してはならない」。

1粒の色聚の中には皆「味」がある。胃酸の多い人が、腹部の色聚の味を観ずる時、酸っぱい味を観ずる事ができる。又は、胆汁の色聚を観ずる時、苦味を味わう事になる。こうしたことから、「香り」とは、必ずしも鼻を使って嗅ぎ取るだけではなく、心でもって、匂いを嗅ぐ事ができる。「味」も又同じく、胆汁の中の苦味、胃の中の酸など、舌、舌浄色で味わうことなく、意門でもって、知る事ができる。これらは、実際に修行して、初めて分かるのである。

4種の無色界異熟心と双五識以外の75種の心は、皆、心生色を生む事ができる。現在、非常に多くの医師が、病人に対して、意志の力で病魔と戦う様に推奨している、特に癌患者に対して。私の知人に1人のスリランカ人がいるが、彼女の娘さんが19歳の時に癌になり、1年半程入院し、最後には癌に打ち勝った。医師は母親に言う：

「私は娘さんの治療はしておりません。娘さんは己の意志力で病に打ち勝ったのです。」

心は、非常に強い色法を生む事ができる。もし癌を得て、憂いの中で不機嫌で、1日中、何故自分が癌になる？何故他人ではなく自分が？と責め続けたならば、それは不善の心である為、生じる色法も又弱いものであって、故に、痛みは増え、苦しみは増え、病は悪化する。身体に病を抱えても、意志の力が強く、常に善の心でいたならば、善心は健康な色法を生む事ができ、それは、あなたの身体内部にある、毒を持つ色法に、対抗する事ができる。病気をしたら即刻病院へ行かなくてはならない、という訳でもない。心は、身体（の不調に）打ち勝つ事ができるのである。

故に、生きている間の、種々の挫折や浮き沈みには、心が一切を、決める事ができる。もしあなたが、予想外の怪我や病、又不公平な境遇などに遭遇した時、あなたが種々の憂具瞋恚相応無行一心、又は有行一心などを生起するならば、既成の事実を改変する事が出来ないだけでなく、己自身に対して、非常に多くの不善心、不善業を成す事になる。奮闘努力する事、如実に知見する事、これは己の業であると知る事、それを受け入れる事。今回債務返済しておかねば、どのみち、将来どこかで取り立てられる。ゆっくりと返済していけば、やがて業の力も緩くなって来る。もし、この様に考える事ができるならば、心の中には、智と相応する善心が生起する。善心は健康的な色聚を生む事ができる為、これらの色聚が、あなたを支援して、あなたをして再度、前を向かせてくれる。柳暗花明又一村、人生での浮き沈みは、笑って見送れば良い！余り執着しない事。何度も執着するならば、それは第2の矢となる。最初の矢で身体が痛み、2の矢で心が痛む。身体の痛みは誰にもある。仏陀も、腰痛、頭痛があったが、聖者は身体が痛くても、心は痛まない。又は、病身の痛みから生まれる苦受を観じ、この苦受は無常であり、因・縁の法

であると観ずる。その時、智相応の心が生起する。心生色は非常に重要である。（何事も）心が主導するが故に。

心生色は、どの様な色法を生ずる事ができるのか？心は、6種の色法を生ずる事ができる。

1. 純八法聚。
2. 身表九法聚。
3. 軽快性十一法聚。
4. 身表軽快性十二法聚。
5. 語表十法聚。
6. 語表音声軽快性十三法聚。

1. 純八法聚：

八不離色。

2. 身表九法聚：

八不離色に身表を加えたもの。

3. 軽快性十一法聚：

八不離色に、軽快性、柔軟性、適業性を加えたもの。あなたが、説法を聞く時、心が、非常に喜ぶならば、軽快十一法聚という色聚が生じる。説法を聞くのが嫌で、眠い、コックリするならば、この3個の色法は生じず、ただ、八不離色のみとなる。心がひとたび、軽快で楽しくなるならば、身体もまた、軽快で楽しくなる。故に、軽快な心は、軽快性十一法聚を生じる事ができる（事が分かる）。

4. 身表軽快性十二法聚：

八不離色を含む、身表、軽快性、柔軟性、適業性。重い病を得ていて、何かを手伝ってもらいたくて人を呼ぶとき、元気な時の様には振る舞えない。というのも、病の時は、軽快性、柔軟性、適業性と身表に欠けるが故に。体調が良い時、全ての動作には、軽快性、柔軟性、適業性と身表が伴う。

5. 語表十法聚：

八不離色を含む、語表と音声。皆様、少し笑ってみて下さい。「ワッハッハ」。これが、語表十法表である。あなたが笑いたいと思ったその時の心は、1番目には八不離色が生まれる。1つ1つの笑いの心は、皆、8種の色法を生む。その中の1つが「地界」である。「地界」が喉の中にある業生色にぶつかり、業生色の中の8個の色法の、その中にも「地界」がある為、心生色の中の「地界」が、喉の中の業生色聚の「地界」にぶつかる事になり、その時、「ワッハッハ」という笑い声が生まれる。笑い声で、己の愉快を表現するのは、語表である。合計すると、語表十法聚となる。八不離色に、語表と音声を加えたものである。

6. 語表音声軽快性十三法聚：

八不離色に、語表、音声、軽快性、柔軟性と適業性を加えたもの。病気の時や冷笑する時は、軽快性や柔軟性、適業性はない。業生色の最初の生起は、結生識の「生」時という小さな刹那

から始まり、1つ1つの心識刹那の中の生、住、滅の3個の小刹那において、皆、業生色を生じる。これが、臨終の前の17個の心識まで続くのである。心生色は、新しい1生の、2番目の心識（有分識）から生起し始める。新しい生命の、1番目の心識（結生識）は、ただ業生色を生起するのみであって、如何なる心生色も生起しない。結生識が収束した後、生起する所の1番目の心識は「有分識」と言う。心は「生」の時が一番強い。故に、有分識の「生」のその小さい刹那の時に、心生色は生起し始める。住と滅の段階では、心生色は生起しない。同様に、2番目の有分心の「生」の小さな刹那の段階において、心生色が生まれる。最後の1個の心識まで、である。あなたは疑問を持つかもしれない：サヤレーは以前、1番目の速行心が最強であり、故にそれが、現生受業を生じせしめるのだ、と話されたが、今は又、心は生の時が一番強いなどと、言うのであるか？と。2者は異なるものである。以前に説明したのは、心路過程の中の速行心の事である。前の速行心の支持を受けていない為、最も弱いものとなる。これは、24縁の中では、無間縁と呼ばれる。前にある、同一の速行心の支えを受けて初めて、2番目の心は強くなる事ができる。今説明しているのは、1粒の心の中の、生、住、滅という3個の小さい刹那の「生」の段階の事である。2者は異なる2つの状況下にある。混同してはならない。

食生色1粒毎の色聚が「住」時に到達する時、その火界は初めて、新しい1代の色聚を生じる事ができる。心は「生」の段階の刹那においてが最強で、色法は「住」と段階が最強である。色法にも生、住、滅がある、純八法聚を例にとると、純八法聚は、業生でもありえるし、心生でもありえる。純八法聚の中において、1個の火界と呼ばれるものがあり、火界が「住」の段階まで来ると、次の新しい1代を生じる能力を有する様になる。これを時節生八法聚又は時節生色と呼ぶ。新しい1代の時節生火界が「住」の段階に来ると、次の、新しい2代目の時節生色聚を生む。この様に続いて行くのである。

故に、外部に生命のない世界では、全て時節八法聚によって維持されている。というのも、その火界は、絶え間なく延命しつづける能力を持ち合わせているからである。エネルギーが使い果たされた時、物質は世界から消失する。諸々の法は因縁生起であり、諸々の法は因縁滅でもある。縁が滅した時、果も又再度、生起する事が無い。業生色は、4、又は5代の時節生色聚を生じる事ができる。通常的心は、2代又は3代の色聚を生起する事ができる。止観の心は、定力が非常に強く、智慧が鋭敏な為、非常に多くの代の色聚を生じる事ができる。故に、1人の人間が、禅定に入る時、ジャーナに留まる時間は長時間でも可能である、例えば、3時間、4時間等。というのも、ジャーナの心は、非常に多くの代の色聚を生む事ができ、その色聚の中の「風」界は、長時間修行者を支える事ができる。もし定力がないならば、少しの時間座っただけで、足の位置を変えたくなるが、これは、心が散乱している為であり、生じる風界には、身体を直立させる力はないのである。定力のある人が、3、4時間座っても足を変えないのは、彼の止観の心が、非常に多くの代の色聚を生み出す事ができる結果、彼の姿勢は長時間保たれるのである。

時節生色は、4種の色聚を生じる事ができる。

1. 純八法聚
2. 音声九法聚
3. 軽快性十一法聚
4. 音声軽快性十二法聚

2番目の音声九法聚は、八不離色と音声である。我々は、時々胃の中音を聞く事があるが、これは音声九法聚で、（体内に）内在するものである。風が吹くとき、音が出るのも又、音声九法聚であり、外部に属するものである。時節生色は又、軽快性十一法聚を生み出す事ができる。八不離色、軽快性、柔軟性、適業性である。例えば、天気がよく、寒くもなく、暑くもない時、あなたは身体の軽快性、柔軟性、適業性を感じる事ができる。例えば、天気が悪く、寒い時、火が欠けておれば、身体は固くなり、軽快性、柔軟性、適業性に欠ける事になる。時節生色は又、音声軽快性十二法聚を生む事ができるが、これは八不離色に、音声、軽快性、柔軟性、適業性を加えたものである。

食生色消化の火（命根九法聚の中の火界）と、食べ物を飲み込んだ時の外から来た食素（栄養素）の支援の下、体内の食素は食生色を生じる。胃の中の未消化の食べ物は、時節生八法聚と呼ぶ。時節生八法聚の中の食素は、消化の火の支援を受けて、新しい1代の色聚を生ずる事ができる。これを食生純八法聚と呼ぶ。食生純八法聚は全身に遍満し、全身を滋養する。目に届いたもの、食生純八法聚の中の食素と命根九法聚の中の消化の火（命根九法聚も又全身に遍満している）は、業生眼十法聚の中の食素を支えて、新しい1代の業生食生色聚を生む。食生純八法聚の食素に消化の火を加えて、その上に、2代目の業生食生色聚の中の食素を加え、結果、第3代の業生食生色聚が生じる。この様に継続して行き、業生色聚は、食素の支援の下、合計5代まで生じる事ができる。どれほどの代を生む事ができるかは、業生色と食生色聚の力による。もし食べた食物が健全なものであるならば、更に多くの色聚を生じる事ができる。もし食べた食物がジャンクなものであれば、色聚を生ずる力は非常に劣る。業生命根九法聚の中の消化の火が非常に弱く、食べ物を消化できないのであるならば、色聚を生む力も弱く、身体は虚弱となる。

心生純八法聚の中にも、1つの、食素と呼ばれるものがある。食生色聚の中の食素に、命根九法聚の中の消化の火を加えたものは、心生純八法聚の中の食素を支援し、結果、新しい代の心生食生色聚を生む事ができる。新しい代の心生食生色聚の中の食素は、食生色聚の中の食素と消化の火の支援を受けて、又新しい代を生み出す。この様にして、心生純八法聚は食素の支援を受けて、合計3代続ける事ができる。時節生八法聚の中の食素は、食生色聚の食素と消化の火の支援を受けて、新しい代の色聚を生む事ができる。新しい代にも食素があり、食生色聚の食素と消化の火の支援の下、又新しい代が生じる。時節生色聚は食素の支援を受けて、合計12代まで、生ずる事ができる。食生純八法聚の中には食素があり、後に生じた食生色聚の中にも食素がある。そして、後に生じた所の、食生食素と消化の火の支援によって、先に生まれた食生純八法聚の中の食素も又、新しい1代を生む事ができる。合計12代生ずる事ができる。これを食生色聚と呼ぶ。

表S: 胃の中の未消化物（P269の別表参照）

色法の転起（転換）

欲界地

欲界地における衆生は、その出生毎に、4種に分ける事ができる。化生、胎生、卵生、湿生である。欲界地の衆生は、地獄、餓鬼、阿修羅、人間と天神である。その内、化生の有情は、天神と地獄、餓鬼（一部分の餓鬼は、胎生である。ただし特例。）化生とは何か？化生とは、生まれ出ると既に大人である事。母胎を必要としない。化生の有情は、結生識の時点で、生まれた時点で既に大人である為に、眼底十法聚、耳十法聚、鼻十法聚、舌十法聚、身十法聚、性根十法聚、心所依処十法聚を具備している。最多で、7種の十法聚を獲得する事ができる。

人類等の、胎生有情の結生の時、上に述べた様な、7種の十法聚がいきなり同時に生起する事は不可能である。母胎内における、1番目の結生識は、ただ身十法聚、性根十法聚と、心所依処十法聚を生起させるのみである。結生識の後に、ゆっくりと生命期を進展させる事によって、眼十法聚、耳十法聚、鼻十法聚、舌十法聚を生起させる。人類は胎生有情に属する。畜生は、卵生、湿生があり、天神と梵天は化生である。

色界地

色界地の衆生は、結生起識の最初の段階では、ただ眼十法聚、耳十法聚、心所依処十法聚と、命根九法聚のみ生起する。あなたは、梵天神には身体はないのですか？と質問するかも知れない。例えば、梵天Sahāmpatiが、降りてきて仏陀に法輪を回す様をお願いした時に、仏陀の説法を聞いたが、この時確かに身体はあった。では、なぜ、身十法聚がない、と言うのか？

梵天神は、身体はあるものの、身浄色はない。身浄色は触に敏感で、それは地、火、風を含むのであるが、梵天神は身浄色がないが故に、痛みを感じる事がない。梵天神は又、舌浄色もない。故に食べ物を食べず、禪の悦楽を食とする。彼らは鼻浄化色もない。彼らの耳は、仏法を聞くためにある。我々も、耳を賢く使わなければならない。聞く所によると、梵天神の目は、聖者を見るためにある。故に、仏陀がご在世の時、彼らは下に降りてきて、仏陀の三十二身相を賛嘆したのである。十六色界地は、合計4個ある。初禪、二禪、三禪、四禪である。四禪は、合計7層あり、その内の2番目の層の、無想有情天梵天神は、身体しかなく、心はない。それはバナナの木か、金の像の様である。この種の衆生の結生識は、色法、命根九法聚しかない。

業は、各種の異なる種類の衆生をつくり出す。衆生は業にそって流転する。無想有情天梵天神は、心があると苦痛であると思ひ、故に、彼らはただ命根9法聚の色法をのみ生起させるのである。

無色界地

無色界地の衆生は、色法がない。無色の為、色法はなく、故に色法の転起もない。

涅槃

4番目の究極法は「涅槃」(Nibbāna)である。パーリ語では「Nibbāna」。サンスクリット語では「Nirvana」。「Nirvana」は、2つの部分から成り立っている。「Nir」は、離れる、「Vana」は、貪愛。故に、「Nibbāna」は、貪愛を去ること。貪愛は、一切の苦痛、輪廻の根本であるが故に。涅槃とは、苦の止息。故に、涅槃の意味は、貪愛を去ること。涅槃は、無為界とも言う。というのも、因・縁によって生じる法ではないが故に。涅槃は又、滅諦とも言う。四聖諦の中の3番目の聖諦であり、出世間法であり、名色又は五取蘊を超越しているが故に。又、貪、瞋と痴の息滅でもある。有為法の苦痛から解脱脱出する所の、最後の境地である。有為法は、因縁和合の法であり、例えば、名色、五取蘊などである。涅槃は、名色、五取蘊の苦痛の中から解脱する所の、1種の境地である。それは無為法であり、如何なる因にも依存せずに生起し、生・滅の支配を受けない。故に、涅槃は常である、と言う。生・滅の圧迫を受けない為、楽であり、無我である。主宰者は存在しない。涅槃は、四道と四果の所縁である。2種の涅槃がある。1つは有余涅槃で、もう1つは、無余涅槃である。有余涅槃とは、アラハン为例にとると、彼の煩惱は既に断じ尽くされているが、五蘊はまだ存在している。この状態を有余涅槃と呼ぶ。無余涅槃は、彼の煩惱は既に断じ尽くされており、かつ、五蘊も又同時に消失している。我々の仏陀は、無余涅槃に入られた。ある種の人々は、仏陀は、又化生して再来する事ができると言うが、それは不可能である。もし、仏陀が、化生して再来出来るならば、弥勒菩薩は、出現する必要がない。というのも、(この世界は)1尊で、足りるからである。

第7章

類別の概要

これより〈類別の概要〉に入る。前に説明した4種の究極法は、72種の個別の法に分ける事ができる。即ち、自性の法であるが故に。

72種の個別の法

1. 心：

心は89種に分類する事ができるが、しかし、全て同一の法であると、みなされる。というのも、一切の心は、同一の自性を擁するが故に。即ち、目標又は所縁を識知する事。

2. 52心所：

1つ1つの心所は、1個毎の究極法と見なされる。というのも、1つ1つの心所は、皆、己自身の自性を擁するが故に。例えば、受は、目標を体験する事。想は目標を標識する事。

3. 18種の完成色：

我々は、合計して28種の色法を擁しているが、ただ、18種が完成色であり、他の10種は、未完成色である。（故に）この中には含まれない。18種の完成色は、同じ原因（皆、己自身の自性を擁する）に基づく為、1つ1つの完成色は1個の個別の法と見なされる。

4. 涅槃：

涅槃はただ1個のみである。1個の個別の法となる。

類別の列挙

類別の概要には4個の部分がある事が分かる：

1. 不善の概要
2. 混合的な類別の概要
3. 菩提分の概要
4. 一切の概要

この内、菩提分の概要と一切の概要は最も重要である。というのも、これらは修行と関連するが故に。

不善の概要

1. 四漏（Āsavā）：

不善の概要の中には4種の漏（Āsavā）がある。

- (1) 欲漏
- (2) 有漏
- (3) 邪見漏
- (4) 無明漏

経典の中で屢々出てくる。アラハンを証すると「諸々の漏が已に尽きる」訳であるが、それは、この四漏の事である。漏のパーリ語は「Āsavā」。意味は「流出するもの」。膿を持つ傷から膿が流れ出る様。又は長期間発酵した酒。漏である煩惱は、流れ出る物、と呼ばれる。というのも、それは流れ出た膿、久しく発酵した酒の様であるが故に。諸々の注釈書において、それらが漏と呼ばれるのは、それらは、最高の生存地（無色界）に向けて流れるから、又は種姓を変更せしめるから、と言う。道心心路過程の中において、未だソータパナを証していないのであれば、その前の心は、「種姓」と呼ばれる。四漏の内、欲漏と有漏は、貪心所に属する。欲漏は、欲楽に対して貪欲である事。有漏は、有（生存又は生命）への貪である。欲楽は外部にあるもの（色、音、香り、味、触、法）又は内部にあるもの（目、耳、鼻、舌、身体、意）があるが、全て欲楽の貪である。有に対する貪とは、生命に執着する事を言う。邪見漏は邪見心所、無明漏は痴心所の事を言う。

2. 四暴流（Oghā）：

四種の暴流は、漏とは、全く同じ。名称が異なるのみ。

- (1) 欲暴流
- (2) 有暴流
- (3) 邪見暴流
- (4) 向けて明暴流

何故、暴流と言うのか？というのも、それらは、諸々の有情を生存の大洋に投げ入れるが故に。又、それらは渡る事が非常に難しいが故に、暴流と呼ばれる。

3. 四軛（Yogā）：

4種の軛と、漏、暴流は、同じ意味を持つ。それぞれ

- (1) 欲軛
- (2) 有軛
- (3) 邪見軛
- (4) 無明軛

なぜ軛と呼ばれるのか？というのも、それらは、諸々の有情を苦痛の中に嵌め込むが故に。苦痛から彼らを逃さない。農夫が牛を田畑に放ち、かつ、牛に軛を被せる事と同じである。

漏、暴流、軛は、皆、同じ意味である。共通して4種ある。即ち、欲、有、邪見、無明である。この様に、名称を色々に分けて分類するのは、衆生の習性が各々異なるが故に。ある時には「漏」と言えば分かってもらえるが、ある時には理解出来ない（人がいる）。その場合は「暴流」（諸々の有情を大洋に流れ出させる）と言い換えたり、「軛」（諸々の有情を苦痛な中に嵌め込む）と言い換えたりする。この様に言い換えれば、多くの人が理解出来る。経典の中において、非常に多くの同義語が出て来るが、これは仏陀が、衆生の各々の異なる習性に適応させる為に、異なる名詞を用いて表現したものである。この4種は、合計3個の心所がある。即ち

- (1) 貪心所
- (2) 邪見心所
- (3) 痴心所

4. 四繫 (Gantā) :

- (1) 貪婪による身の縛
- (2) 瞋恨による身の縛
- (3) 儀式への執着 (戒禁) による身の縛
- (4) 武断の信 (独善的な執着)

「これが真実、これだけが真実」という身の縛。身の縛と言うのは、それらが心をして身体に繋ぎ止めるが故に。または、今世の身体を未来の世の身体と結びつけてしまう為、この様に言う。ここで言う「身」(Kāya)の意味は、「集める」である。名身と色身の2者を指す。身は、名と色を含む。身という文字を見て、短絡的に、身体の意味と取り、色法の事であると考えてはならない。

(1) 貪婪 :

諸々の有情が、欲楽的な目標に向かう所の、渴愛又は貪。

(2) 瞋恨 :

瞋心所。排斥したい目標を嫌悪する事。

(3) 儀式への執着 (戒禁取) :

儀式を執り行うと、解脱に向かうと信じる事。これは、インドでは非常に普遍的で、インドには、各種各様の儀式が実践されている。

(4) 武断の信 (独善的な確信) :

己の見たものだけが真実であると、堅く信じ、その他は間違いであるとする。この種の人には、変わる事が非常に困難である。コップに水が満ちている時、あなたが更に水を注いでも、溢れて流れ去るだけである。この種の人には、己を蝮壺化するが、修行にとっては、非常に大きな障害となる。

後ろの2者の身縛は、皆、邪見心所に属する一面がある。縛には合計3個の心所がある。

- (1) 貪心所
- (2) 瞋心所
- (3) 邪見心所

5. 四取 (Upādānā) :

四種の取。

- (1) 欲界取
- (2) 邪見取
- (3) 戒禁取
- (4) 我論取

(1) 欲取 :

欲楽に対する強烈な渴愛。しかし、諸々の注釈書では、対象は更に広範囲に、一切の世間の事物に対する渴愛としている。

(2) 邪見取 :

道徳上、邪悪と見なされる所の、どの様な見解にも執着する事。例えば、無作見 (己がなしたどの様な行為も果報を生じないと言う考え)、断見 (人が死ねば、全てが断滅して、何も

かもが消えて無くなるという考え。)等々、又は、「世界は永恆である、又は永恆ではない」等の憶測。これらの憶測は、修行に何らの役に立たない。我々は、断じなければならぬのは、己の貪瞋痴であることを知っていれば良い。貪瞋痴が絶たれたならば、輪廻の苦痛から解き放たれる。その時、世界は永恆か、永恆でないかなどは、重要ではなくなる。これらを研究する事は、ちょうど、毒矢に射られた人が、先に矢を抜くのではなく、この矢は誰が射たのか？どこの国で作られたのか？などと研究する事に似ている。これらは、己の苦痛を解決する為には、何らの役に立つ事はない。邪見取は多くの種類がある：無作見、断見、「人類以外の世界を知る人はいない、例えば、色界、無色界」と固執する。煩惱は浄化する事が出来る事を認めない、等。

(3) 戒禁取：

儀式を執り行ったり、苦行を修すると解脱出来るという考え。これは「儀式に執着」する身の縛と似ている。菩薩が仏陀になる前、やはり戒律禁取に執着した。その為、苦行を6年修行した。あの時代のインドでは、多くの人々は、皆、煩惱は身体から来るものと考えた。身体がある為に煩惱が沸き起こるのだ、と。結果、苦行を修して、己の身体を虐待したのである。菩薩は6年苦行を修した後、身体は骨だけになったが、後に彼はこれは道ではないと悟り、放棄し、中道：八正道に進んだのである。彼は苦行を放棄する時、子供の時にリンゴの樹の下で、初禅に入ったのを思い出した。彼は、この種の初禅の境地は、過患のない楽しみで、この種の楽しみはレベルを上げていく事ができる（と考えた）。そして、彼は、安般念の修行を開始し、初禅、二禅、三禅、四禅と入って行ったのである。聞くところによると、安般念は、菩薩であれば、仏になる前、誰でも1度は必修の法門となるそうである。菩薩が6年もの間、苦行を実践したのは、原因がある。迦葉仏 (Kassapabuddha) の世の時、彼はバラモンであった。インドは4種の階級に分かれているが、バラモンは最高位で、最高位であるが故に、慢心が重い。彼の友人は最下層のシューダラで、既に三果アラハンであり、聖者であった。ある日、この友人が、菩薩を誘って迦葉仏に会いに行こうとした。菩薩はバラモンの出である為、傲慢自大、言ってはならない一言を口にして、口業をなした。

「ハゲ頭の間人でも無上正等正覚の境地を証せるものか？」しかし、迦葉仏は、確実に己に無上正等正覚の境地を証していた為、菩薩は口業を造したのである。彼の友人は、焦って、菩薩の服の端を引っ張って、彼に迦葉仏に会いに行くよう促した。菩薩は考えた。彼はシュードラであるのに、私の服の端を引っ張る勇気があるなんて。その行為の中に、どうしても言いたい事が含まれているに違いない。故に、彼は迦葉仏に会いに行く事にした。結果、最終的に彼は仏教徒になった。しかし、業は己に造されたのである。この口業が原因で、彼は仏陀になる前の、最後の一世代の、シッダッタ太子であった時、出家して6年苦行する事になってしまったのである。というのも、この6年間の苦行は、彼が前世でなした口業の結果であるが故に。故に、仏陀は言う：

「我々の口の中には斧が隠されている。気をつけないければ、先に己自身が傷つく」と。

(4) 我論取：

即ち「身見」 (Sakkāyadiṭṭhi) に執着する事。即ち、五蘊のどれか1つを「我 (私)」又は「私のもの」と思う事。経典では、20種の身見が表記されている。五蘊の1つ1つには、それ

ぞれ4種の観念がある。例えば、「色蘊を我であると思う。又は私は色蘊を擁していると思う。又は色蘊は私の中にあると思う。又は私が色蘊の中にあると思う。」受蘊、想蘊、行蘊と識蘊もまたこの様に思う。こうして、20種の身見が得られる。（《中部》経44等を参照の事）。色蘊は究極法である。観念的には身体と呼び、究極法では色蘊と呼ぶ。四大によって構成されている。もし、色蘊（身体）を己のものだと思えば、執着が生まれる。ひとたび執着が生まれたならば、色蘊が変化する時、苦痛が生じる。この種の執着は、恒常の考えを含み、その為、あなたはこれを私のものだ、恒常だ、楽しいものだと思すが、ひとたび身体が変化すると苦痛に思うのである。故に、執着を取り去り、苦痛から抜け出す為に、常に、身体を無常、苦、無我として観じなければならない。身体にどの様な変化があっても、それが楽具であっても、苦具であっても、如実にその無常、苦、無我を観じなければならない。受蘊も又同様である。心の変化は更に速い。我々の1生の内、経験する所の心の苦受、楽受、不苦不楽受もまた、それは私のもの、私の自我であると執着し易い。この様に、それらを我、我のものと、執着してしまうと、それらの変化を観察できなくなってしまう。故に、受が生起するや否や、それらを因縁法と見なし、触から受が生まれるのであるから、因は無常であり、そうであるならば、果が常である訳がないとみなす。この様に身体を観じて、先に理論上で、身見を捨て去り、その後に実修して、1歩1歩前進するのが良い。理論上においても、この様に思惟する事ができない、作為もできないのであれば、無常生滅の法を会得するのは非常に困難である。4種の取に関して、欲取は貪心所であり、その他3種の取は、邪見心所である。

6. 六蓋 (Nīvarāni) :

6種の蓋

- (1) 欲欲蓋
- (2) 瞋恨蓋
- (3) 昏沈睡眠蓋
- (4) 掉挙悪作蓋
- (5) 疑蓋
- (6) 無明蓋

一般的に、禅修行の時、我々が聞くのは、五蓋である。しかし、《アビダンマ論》ではもう1つ、無明蓋を言う。無明は智慧の障害になる為、無明蓋と言う。蓋とは天界又は涅槃へ行く道を阻害するので、この様に言う。注釈書によると、諸々の蓋は、今だ生起しない善法が生起するのを阻害し、又、已に生起した善法が長く保てない様にする心所であると言う。生起しない善法をば、生起させることが出来ないのも、全て六蓋が原因である。已に生起した善法も、蓋が顕現する事により、持久する事が出来ない。先の五蓋は、ジャーナを証する時の主要な障害になり、この五蓋を克服出来たならば、ジャーナを証する事が出来る。もし、ジャーナを証する事が出来ないならば、この中の1つの蓋が、障害になっているのである。6番目は、智慧が生起するのを阻害する主要な原因である。無明が生起するや否や、智慧は消えて無くなる。無明が智慧の生起を阻害するのである。

7. 7つの潜在的傾向 (随眠) (Ānusayā) :

- (1) 欲貪が潜在傾向にある状態

- (2)有貪（存在に対する執着）が潜在的傾向にある状態
- (3)瞋恚（嫌悪）が潜在的傾向にある状態
- (4)傲慢心が潜在的傾向にある状態
- (5)邪見が潜在的傾向にある状態
- (6)疑が潜在的傾向にある状態
- (7)無明が潜在的傾向にある状態

潜在的傾向とは、属する所の名法の中に「潜伏」する煩惱を言う。諸々の縁が具足すると浮上して、問題化する。「潜在的傾向」と言う言葉は、諸々の煩惱が、未だ諸々の出世間道によって断じ除かれていない時、再度生起する事を示している。全ての煩惱は、「潜在的傾向」を持つと言えるが、しかし、上に述べたものは、最も顕著なもの7種である。欲貪と有貪の2者は、「貪」の範疇に入る。その他は、個別の心所に属する。故に、合計6種の心所において潜在的傾向があると言う。潜在的傾向は、因と縁が具足した時、出現する。経典に以下の様な話がある。マハナカと言う長老がいて、彼はひたすら静かに止禅と観禅の修行をしていた。60年間1度も煩惱が出現する事なく、己はすでにアラハンを証したのだ、もう精進する必要はない、とっていた。彼の弟子に、ダンマディンナと言う人がいて、すでにアラハンであった。彼は師がアラハンでない事を知っていたので、師に進言しようとした。ある時、ダンマディンナは、「先生、あなたは神通が出来るでしょう。大きな象を1頭出せますか？」と言った。マハナカは、「問題なくできます」と言い、神通を使って、大きな象を1頭出した。彼の弟子は言う「先生、この象を、神通を使って、私達に向けて走らせてください」。この大きな象が彼らに向かって走って来た時、マハナカは突然恐ろしくなって、逃げ出した。ダンマディンナは、師の袈裟を掴んで、「アラハンなのに、まだ怖いものがあるのでしょうか？」といい、これを聞いた長老は、己がアラハンでないことに気がついた。潜在的傾向は潜伏した煩惱である。因と縁が具足せずに、あなたが試される事のない時、潜在的な煩惱は浮上しない。長期的にこの様であれば、我々は、己には煩惱がない、と思い込んでしまうのである。

8. 十結：

論の教えでは、10種の結は、

- (1)欲貪結
- (2)有貪結
- (3)瞋恚結。嫌悪結とも。
- (4)慢心結
- (5)邪見結
- (6)戒禁取結
- (7)疑結
- (8)嫉結
- (9)慳結
- (10)無明結

諸々の結は、有情をば、生死輪廻に繋ぎ止める為に、不善心所である。1番と2番は、貪心所で、5番目と6番目は、邪見心所、その他は個別の心所である。

9. 十煩惱：

- (1) 貪
- (2) 瞋
- (3) 痴
- (4) 慢心
- (5) 邪見
- (6) 疑
- (7) 昏沈
- (8) 掉挙
- (9) 無慚
- (10) 無愧

これらを煩惱と呼ぶのは、それらが、心を「いじめる」為である。又は、有情をして、心内の汚れに引きずり込むか、又は墮落の境に汚染させるが故に、煩惱と呼ぶ。

不善の概要総括

不善の概要は、合計9個の部分がある。

1. 四漏
2. 四暴流
3. 四軛
4. 四繫
5. 四取
6. 六蓋
7. 七潜在的傾向
8. 十結
9. 十煩惱

表T: 諸々の煩惱の所属する心所 (P270の別表参照)

1. 四漏
2. 四暴流
3. 四軛は3個の心所：貪、邪見と痴。
4. 四繫は3個の心所：貪、邪見と瞋。
5. 四取は2個の心所：貪と邪見。
6. 六蓋は8個の心所：貪、痴、瞋、疑、掉挙、昏沈、悪作と睡眠。
7. 7個の潜在的傾向は6個の心所：貪、邪見、痴、瞋、疑と慢心。
8. 十結は9個の心所：貪、邪見、痴、瞋、疑、慢心、掉挙、嫉と慳。
9. 十煩惱は10個の心所：貪、邪見、痴、瞋、疑、慢心、掉挙、昏沈、無慚と無愧。

上の表で分かる様に、不善の概要の、9個の部分には、全てにおいて貪心所がある。これは、貪は、非常に強い煩惱である事を表している。又、「貪」は、四聖諦の中の「集」諦であることも分かる。一切の苦痛の根源は、貪愛である。2番目に重要なものは邪見心所である。邪見心所は多くのものを含む。例えば、身見、因果を信じない、断見、常見など、各種各様の邪見がある。非常に重要な不善心所である。3番目は痴心所（無明）である。無明は潜在的な根であり、一切の煩惱は、無明による。4番目は瞋心所である。これも又非常に重い煩惱である。貪、瞋、痴と邪見という4個の心所は、非常に重い煩惱である。不善の概要の9個の内、仏陀が比較的よく提言したのは：

漏（例えば、諸々の漏は既に尽きた。）

取（例えば、愛の縁により、取が生起する。）

蓋（ジャーナに触れる時に、常に五蓋、それに無明を加えて説明した。）

結（例えば、ソータパナは何の結を断じているか、サカダーガミは何の結を断じているか。論蔵の中では、不善の概要を、心所に依るものとして、分析している。我々はこれによって、悪を造す時は、どの様な心所によるのかを、知ることができる。

混合的な類別の概要

混合的類別の概要は、その列挙された組み合わせが、善、不善と無記心所が含まれている為、この様に言われる。合計7個に分けられる。

1. 六因（根）：

- (1) 貪
- (2) 瞋
- (3) 痴
- (4) 無貪
- (5) 無瞋
- (6) 無痴

2. 七禪支：

- (1) 尋
- (2) 伺
- (3) 喜
- (4) 一境性
- (5) 悦
- (6) 憂
- (7) 捨

經典では5個の禪支が挙げられているが、論蔵では7個の禪支が挙げられる。ここにおける

「禪那」（禪支）は、一般的な用法である安止定とは異なり、目標を「緊密に観察する」と言う、もう少し広範囲な意味に用いられる。ここに列挙した諸法は、禪修行の安止の時以外にも発生するが、これも又禪支と見なす。例えば、悦と憂は、共に禪修行の安止の外にあるが、しかし、禪支と見なすのである。この7個の心所を禪支と見なすのは、心をして、緊密に目標に密接させる事から、そういうのである。その中の「憂」は絶対的な不善であるが、しかし、2種

の瞋恚相応の心にしか生起しない。その他の6個は、善であつたり、不善であつたり、又は無記であつたりする。即ち、それらがどの様な心において生起するのか、による。善心に生起すれば、善であり、不善心に生起すれば不善である。

3. 十二道分：

- (1) 正見
- (2) 正思惟
- (3) 正語
- (4) 正業
- (5) 正命
- (6) 正精進
- (7) 正念
- (8) 正定
- (9) 邪見
- (10) 邪思惟
- (11) 邪精進
- (12) 邪定

ここで言う「道」は、ある目的地に導く意味である（道路の様に）。即ち善趣、悪趣又は涅槃に導くのである。十二道分の内、前の8個（即ち八正道と呼ぶもの）は、善趣と涅槃に導く。後ろの4者（邪見、邪思惟、邪精進、邪定）は、悪趣（四悪道）に導く。八正道は、世間的八正道と出世間的八正道に分けられる。世間的八正道は善趣に導き、出世間的八正道は、涅槃に導く。後ろの例は、例えば、ある人が強盗を企てており、彼は因果の応報はない、と考えているとしたら、これは邪見である。彼は先に襲撃に関する計画を立てるが、これは邪思惟である。行動している最中は邪精進である。銃でもって撃つときは、邪定である。この道分は、縮小すると9個の心所になる。正見は慧心所。正思惟、正精進、正念と正定はそれぞれ、有因善心と無記心の中の尋、精進、念と一境性心所である。正定と一境性は同じ意味である。正念は念心所、正精進は精進心所である。正思惟は尋心所、正語、正業と正命は3個の雑心所である。出世間心の中において1度出現し、世間善心においては、状況に応じて個別に出現する。悪語を意識的に遠慮しようとする時、正語が生起する。意識的に悪語から遠慮しようとしなない時は、生起しない。4個の邪道分（邪見、邪思惟、邪精進、邪定）の内、邪見は邪見心所で、諸々の道分のなかにおいて、絶対的に不善の心所に属する。その他の3個の道分は、不善心所の中の尋、精進と一境性心所に属する。ここでは、個別の邪語、邪業と邪命道分はない。というのも、それらは煩惱によって引き起こされた不善行であるが故に。ここには又、邪念道分もない。というのも、念は絶対的に美心所に属するが故に、不善心所において現れると言うことはない。

4. 二十二根：

- (1) 眼根
- (2) 耳根
- (3) 鼻根
- (4) 舌根
- (5) 身根

- (6)女根
- (7)男根
- (8)命根
- (9)意根
- (10)楽根
- (11)苦根
- (12)悦根
- (13)憂根
- (14)捨根
- (15)信根
- (16)精進根
- (17)念根
- (18)定根
- (19)慧根
- (20)未知当知根
- (21)最終智根
- (22)具最終智根

根とは、その範囲内において、相応する法をコントロールする法である。例えば、台湾の台北市、桃園市には、それぞれ市長が統治管理しており、市長はその市の根に相当する。前の五根（眼根、耳根、鼻根、舌根、身根）は、五淨色である。2個の性根は、2種の性根色である。命根は、2種あり、それぞれ命根と命根色である。意根は、心の全体、即ち89心を言う。五受根（楽根、苦根、悦根、憂根、捨根）は既に前に述べた通りである。五個の修行の根（信根、定根、念根、慧根、精進根）は、非常に重要なもので、五根はバランスされて初めて、修行が進歩する。信根は慧根とバランスされ、定根は精進根とバランスされなければならない。念根は、いつの時にも必要である。念根があつて初めて、信が過剰で慧根が足りない、又は慧根が過剰で信根が足りない事が分かる。これを知って後初めてバランスを取る事ができるのであつて、これを知ることがないのであれば、念根が足りない事を示しており、修行はなかなか進まない。信根の強すぎる人は、容易に他人の話信じ、誰の話でも信じてしまうが、この状況は、アジアに多い。

《カーラマ経》は、南伝仏教において、非常に重要な經典である。以下の言葉は考察するに値する：

「經典で述べられている事、伝統的に述べられている事、教師が述べた事、文化的に伝承された事.....等々は、軽々しく信じてはならない。」

經典にあるからといって、教師が述べたからといって、伝統的に継承されているからといって、その全てを信じてはならない。仏陀は我々にこの様な態度を求めていない。仏陀は、先に質疑をし、その後己自ら実修してみる事を勧めている。修行を通して、貪、瞋、痴が軽減したならば、それは正しい。もし、我執、慢心、貪、瞋が増加するならば、その道は正しくない。ので、これを放棄しなければならない。

「彼は私の教師である。私は必ず彼の言う事を聞かなければならない」と執着してはならない。執着すれば、信は愚かさになってしまう。仏教徒であれば、聞いた事柄を何でも信じるのではなく、深く理解し、実験してみる事、いわゆる、聞く、思（考える）、修行する、が

必要である。反対に、ただ質問するばかりで、修行しないのであれば、それは例えば、宝の山に分け入っているながら、目の前の宝は偽物であるかと懷疑して、せっかく宝の山に入っても、空手で帰ってくる様なもので、これも間違っているのである。西洋人は、慧根が強すぎる。何事にも疑問を持ち、「それは何故か？」と聞いてくるので、進歩がとても遅い。アジア人は信根が非常に強く、進歩は速い。しかし、聞いた事を何でも信じて、考察しないならば、間違いを犯してしまう。これが、アジア人と西洋人の違いである。精進根が強すぎると、掉拳が生じる。特に安般念を修行する時、呼吸が非常に微細になる為、それを明確にしようとして、力を入れて呼吸する様になり、結果、鼻が硬くなり、痛くなる。そして、定を得られないまま、更に努力する為、心は更に混乱し、最後には修行に興味がなくなる。故に、精進根と定根は、バランスしなければならない。もし、定が強すぎて、精進力が足りないのであるならば、人は昏沈する。念根に関しては、料理をする時の塩の様である。故に、仏陀は言う：「いつ如何なる時も、念は必要である。」

諸々の根の中において、「未知当知根」は、ソータパナ道智である。「具最終知根」は、アラハン果智である。「最終知根」は、中間の、6種の（出世間）智で、ソータパナ智、サカダーガミ道智、サカダーガミ果智、アナーガミ道智、アナーガミ道智、アラハン道智を含む。合計22根ある。

5. 九力：

- (1) 信力
- (2) 精進力
- (3) 念力
- (4) 定力
- (5) 慧力
- (6) 慚力
- (7) 愧力
- (8) 無慚力
- (9) 無愧力

この九力は、対立する法に影響を受けて、動揺する事がない。又は、その相応する法を強化する事ができる為、この様に言われる。信力、念力、慚力と愧力は善又は無記である。無慚力と無愧力は、絶対的な不善である。精進力と定力は、善又は不善又は無記である。精進力には邪精進があるため、定力には邪定があるため、これらは善又は不善である。

6. 四増上：

- (1) 欲増上
- (2) 精進増上
- (3) 心増上
- (4) 観増上

増上法とは、所属の心を支配して、艱難な事柄を実行させる、又は完成させる。又は重要な任務を遂行する事を言う。増上法と根の間の違いは、支配の程度と範囲である。増上法は、心全体を全面的に支配し、整備する。根は、ただ、その範囲内において、その支配の能力を発揮する。故に、1個の心の中において、多くの根が存在する事ができる。例えば、色塵が眼根

を衝撃した時眼識が生じるが、眼識と捨受が共に備わっており、眼浄色は根、捨も根、故に根は2個と言う)。しかし、同一の刹那においては、ただ1個の増上法しか存在しない。増上法は、国王の様で、唯一の統治者であり、全ての官僚を支配している。根は官僚の様であり、それぞれの区域内において支配権を擁しているが、しかし、他人の守備範囲を干渉する事は出来ない。

(7)四食 (Ahāra) :

- (1)段食
- (2)触食
- (3)意思食
- (4)識食

「食」は、強大な助縁として（その他の法）を維持する法である。経典の中において、しばしば、四食について言及されている。もし、その意味を理解する事ができたならば、以後、経典を読む場合に有益である。

(1)段食：

色身を維持する。段食は食べ物の事で、食べ物は四大によって構成されており、時節生色である。食べ物を飲み込んだ後、消化の火の助けを受けて、食素生色になる。食素生色は全身に分布しており、目、耳等を支え、全身に力を与える。

(2)触食：

受を支える。経典では、受を苦受、楽受、不苦不楽受に分けている。十二縁起によると：「触の縁によって、受が生起する」と言う。触が受を維持しているのである。

(3)意思食：

三界（欲界、色界、無色界）の輪廻を支える。業は思であり、かつ、業は、三界へと生まれ変わるのを導く。

(4)識（心）食：

名色を維持する。というのも、心識が生起してはじめて、心所が生起する為、心は名を維持する、と言う。心が色を維持する事については、結生を例にすると、結生識が生起するその1刻、30個の色法が生起する。身十法聚、性根十法聚、心十法聚である。もし心がないのであるならば、30個の色法は生起する事ができない。故に、心は名色を維持すると言う。論の教えでは、段食は、身体内部の4種の因によって生じた色法を維持すると言う。触食、意思食、心食の3個の食は、一切の、それと共に具生する所の名色法を維持すると言う。色法に属する段食は、無記法に属し、その他の3個の食は、3種の道徳的性質（善、不善、無記）に属すると言う。

菩提分の概要

菩提分のパーリ語は、「Bodhipakkhiyā Dhammā」である。その意味は「覚悟（覚醒、悟り）の方法」。これが、菩提分と呼ばれるのは、覚悟、悟りの助けになるが故に。即ち出世間四道智を証する事を言う。三十七菩提分は、7個の部分に分ける事ができる。

1. 四念処

2. 四正勤
3. 四成就法（四神足）
4. 五根
5. 五力
6. 七覚支
7. 八道分

1. 四念処（Satipaṭṭhāna）：

四念処の、修行全体において、最も重要と言えるのは合計4個ある。

- (1) 身念処
- (2) 受念処
- (3) 心念処
- (4) 法念処

四念処のパーリ語「Paṭṭhāna」は、2種に解釈できる。即ち「打ち立てる（Upaṭṭhāna）」と、「念」（Sati）の「立脚点」（即ち念を打ち立てる事、及び念の立脚点と、なる事）である。正念をば、身、受、心、法の上に打ち立てる。故に、四念処は、念の立脚点と言う。四念処は、4者に共通する要素がある。即ち、正念を伴って、諸々の法を觀照する事である。4者の間の違いは、正念によって觀照している目標：身、受、心と法が、それぞれ異なり、4種ある事である。最後の法念処は、五蓋、五蘊、六処、七覚支及び四聖諦等の法を含む。

(1) 身念処：

安般念、四威儀、正念正知、三十二身分、四界分別觀、不淨觀（墓地觀）を含む。安般念の修行は、身念処である。四威儀は、行、住、坐、臥である。四威儀はどの様にして觀ずるのか？行く時（歩く時）、四界が歩くのを觀ずるのである。もし、あなたが、1個の「我（私）」が歩いていると思うのであるならば、それは身念処ではない。歩こうとする心が生起する時、非常に多くの心生色聚が生じる。この「心生色聚」の中の「風」が拡張する時、あなたは、足を上げたり下げたりする事ができる。このことは、究極法から見れば、名色が歩いているのである。風は、縁もゆかりもなく生起する訳はなく、行こうとする心が生起する事によって、多くの心生色聚が生じ、その中の色法「風」が足を上げたり下げたりするのを可能にするのである。同様に、立つ、座る、横になるのも、全て心から始まるのである。これらの色法の中において、ある時は「風」が比較的明瞭であり、ある時は「地」が比較的明瞭であり、ある時は、「火」が比較的明瞭である。故に、眞實は、名色が歩いており、その後に（名色が）「風」によって拡散されていくのである。この様に觀察する事ができた時初めて、身念処の觀察ができた、と言うのである。もし、「我（私）」が歩いているのを觀ずるのであるならば、それは有身見であり、20年修行しても決して、進歩しないのである。

(2) 受念処：

苦受、樂受、不苦不樂受を含む。目は欲樂相應の色塵を見ると、樂受を生じる。喜ばしくない色塵を見ると、苦受が生じる。好ましくもなく、不快でもない色塵を見ると不苦不樂受を生じる。この一切を知っていなければならない。仏陀は言う：

「苦受が生起した時、苦受が生起したと知る。樂受が消滅した時、樂受が消滅したと知

る。」「苦受が生起した時、苦受が生起した事を知る」

この覚知が、「正念」心所である。慧心所は、即ち、一切の有為法は、生起すれば、必ず滅し去る事、無常である事を、徹底的に知ることである。禅の修行で、観智の段階に来ると、「念」と「慧」の2個の心所は、非常に重要になってくる。私が、アジア又はアメリカ等多くの国を訪問して発見したのは、皆、非常に正念を強調するけれども、慧を軽視している事である。楽受が生起した時、楽受が生起したと知る。苦受が生起した時、苦受が生起したと知る。しかし、ここで観ずる事、察知する事、その無常を作為する事を忘れている。修行の道筋において、「念」と「慧」は、同じくらい重要である。ただ「念」でもって知っているだけでは足りず、「慧」でもって、行法を無常であると徹底的に知らなければならないし、又、快速に生滅することから派生する所の、圧迫の苦も体験しなければならない。あらゆる生起するものは、最後には断滅する。これも又1種の苦である。故に、無常の圧迫を受けるのは、苦である。この生滅の過程を主宰している主宰者はいない。故に無我である。「無常、苦、無我」は、観智における智慧である。

もし、楽受が生起したのに、それを観ずる事がないならば、それに伴って「貪」が生起する。貪は、楽受の中に潜んでいる。もし、苦受が生起した時に、それを観じないならば、「瞋」が生起する。瞋は苦受の中に潜んでいる。貪が生起した時に覚知しないならば、口業又は身業を造す事になる。この事には、深い相関関係がある。この様であるだけでなく、もし、貪が生起した時に、貪を因縁法として観照しないのであるならば、貪を我のものと見なし、「貪は我の中にあり、我は貪の中にある」と思ってしまう。これは「有身見」であり、その時、我々は、更に己の有身見を強化してしまう。有身見が強化されると、人は執着を強め、愛欲が生まれる。愛欲は輪廻の根本であり、結果、輪廻を延長する所の業を不断に造すことになる。故に、楽受であろうが、苦受であろうが、不苦不楽受であろうが、1番目は正念でもってそれを知り、2番目には智慧でもってそれを無常又は無我と観じなければならない。というのも、それは因縁法であり、因縁法は我々のコントロールを受けないものであり、因縁が消滅する時、それも又消滅するが故に無我なのである。

(3)心念処：

各種各様の心を観ずる。例えば、貪心や瞋心等。貪が生起したなら、貪が生起したと知る。瞋が生起したなら、瞋が生起したと知る。痴が生起したなら、痴が生起したと知る。昏沈が生起したなら、昏沈が生起したと知る。妄念が生起したなら、妄念が生起したと知る。

(4)法念処：

五蓋、五蘊、四聖諦、十二処及び七覚支の観法を含む。五蓋を例にとると、欲蓋、瞋蓋、掉挙、悪作、昏沈睡眠、疑蓋である。我々には、昏沈睡眠を退治する方法があり、よく活用する事ができる。昏沈が未だ軽めの時、それが生起するや否や、すぐにそれを覚知する。そうすると、それが消え去るのを見る事ができる。居眠りが始まってから覚知するのではない。それでは間に合わないのである。というのも、その場合は、それは既に非常に強い力を具備してしまっているが故に。正念が非常に強い時、昏沈が生起するや否や、即刻知ることができる。昏沈を己のものだと見なしてはならない。昏沈も又因縁の法であり、まるで赤の他人の様に昏沈を眺めていればよい。正念が強い時、昏沈を覚知するや否や、それは

消失し、心は明晰さを取り戻す。これは昏沈を觀ずる最も良い方法である。しかし、これには、非常に強い正念が必要である。妄念が生起した時も又、この様に觀照する。

2. 四正勤：

第四章で説明したので、ここでは説明しない。四正勤は精進心所である。

3. 四成就法 (iddhipādā)：

四神足とも言う。これは非常に重要である。「Iddhi」の意味は、完成させる事、成就する事ができる、である。それを「神」と呼ぶ。「Pādā」は、「足」で、その意味は根、基礎である。一切の成功、成就を完成させる為の基礎は、欲、精進、心と觀の4個である。故に四神足又は四成就法と呼ぶ。パーリ語の「Iddhi」（成就）は、一切の、仏陀の教えを通して、務め修めた結果、証得した所の、廣大心（色禪及び無色禪の廣大心）と出世間法を言う。唯一、それらを運用して、仏教の目標を証得した時にのみ、それをば、成就の法で、あると言える。商いで金儲けするのは、成就の法とは言えない。成就の法は、世間と出世間法の2者がある。

(1) 欲成就（欲神足）：

神聖な目標を達成したいという強烈な欲望。到達するまで、永遠に放棄しない。この欲望は、貪に属さない。《中部》に、ラタパラの話が有る。彼はお金持ちの家のひとり子であった。彼は初めて仏陀の説法を聞いた時、心中に、出家したいという強烈な希望が生まれた。彼は父母に向かって、出家を許して貰う様申し出たが、父母は：

「あなたは私達のひとり子です。あなたが出家すると、我々の財産は誰が引き継ぎますか？」

と言って反対した。彼は床に寝て、飲まず食わずで、絶食して抗議した。父母は焦って、彼の友人に頼んで彼を説得しようとした。彼は友人に言う：

「父母に伝えて欲しい。もし、彼らが私の出家を許可したならば、私は彼らに会う機会があるでしょう。もし、許してくれないのであれば、私はここで死にます。彼らは私に永遠に会えないでしょう。」

後に、父母は彼の出家を許した。これは欲神足の例である。目的を達成しないならば、休む事もないし、放棄する事もない。

(2) 精進成就（精進神足）：

4個の特徴がある。皮があり、骨があり、腱があるならば、たとえ血と肉が乾いても、努力を放棄する事がない。これを精進神足と言う。菩薩が未だ成道する前、菩提樹の下で座って禪定に入った時、願をかけた。

「私の皮、私の腱、私の骨があるならば、血と肉が乾いても、私は仏果を証するまで、この宝座から降りる事はない。」

最後に彼は目標に到達して仏果を証し、精進神足を円満成就した。この様に、四神足の力は非常に強いのである。ソーナ (Sona) 比丘は非常に裕福な家庭に生まれた。しかし、彼は仏法に出会った後、すぐに出家した。出家の後、彼は修行に励んだ。夜になると、座禅をすると眠ってしまうのを恐れて、徹夜で歩行禅をした。彼の皮膚は非常に繊細であった為、夜更けまで歩いた後は、足の裏に血が流れたが、彼は修行を放棄することなく、這って修行した。行、住、坐、臥、這う、どの様な姿勢でも觀照はできる。彼が這っている時、1人の

獵師が彼を1匹の動物だと思い、矢で射た。矢は彼の背中から胸を貫いたが、彼は修行を放棄する事はなかった。もし、我々に精進神足があるならば、非常に快速に解脱する事ができる。

(3)心成就（心神足）：

成就するに当たり心の重要性を言うもの。人が仏法に出合った後、非常に熱心になり、仏法と共にいることを楽しく思う事。ちょうど、科学者が、実験室に入って実験する時、寝食を忘れて、全身全霊で研究に打ち込む事がある。同じく、心成就も又この様な事が起こる。エジソンは、60年間実験室にいて、不眠不休で仕事をし、多くの物を発明した。ある日、妻が彼の健康を心配して、旅行に出かける様に勧め、本人もそうすると答えたが、次の日、妻は、彼を実験室で発見した。なぜかと彼に問うと、彼は：

「ここが私が、一番楽になる所であるから」

と答えた。これが、心神足である。

(4)観成就（観神足）：

観を成就の法とするもの。観は智慧である。智慧は、輪廻の苦痛、地獄の苦痛を知ることができる。もし、智慧を有して、苦痛を了知するならば、修行に精進したいと言う心が生まれる。我々一般人は、智慧がない為、輪廻や地獄の苦痛を知らず、その為に修行に精進しない。観神足は、奥深い法を了知する事ができる。奥深い法とは、十二因縁法、四聖諦、無我等を指す。すべての宗教は、私は有る、創造者はいる、と教えるが、仏教だけは、無我を言う。これらを了知する智慧は、我々が出世間に到達する為の基礎となる。

私がアメリカで【10日禅の会】を主催した時、ある1人のアメリカ人が、非常に長い手紙をくれた。彼は、30年前に定の修行を始めた時に、非常に強い光を見、かつ、自分の見るもの全てが透明に見えた。光は3、4日持続し、食欲もなかった（禅悦を食とした）。全く眠れず（定力の強い人は2、3時間眠れば足りる。仏陀は1時間ほど眠れば足りた。）、1個の我もない、という体験をした。その時、彼は少し怖くなり、何かの間違いではないか？と疑った。そして、あちらこちら人に聞いて回ってが、相談した相手は、経験のないアメリカ人の為、皆、彼が精神錯乱を起こしたのだと言い、本人もその様に理解し、結果、精神病院に入院した。彼は「無我」を体験した時、それを「1個の我さえもない」と言う言い方で、周囲に説明したが、その説明は、アメリカの文化では受け入れられる事はなく、故に、多くの人々によって、彼は、精神病患者にされてしまったのである。後に、己自身が掌握できる「我（私）」を取り戻し、アメリカの文化に適應する為に、彼は墮落し始めた。タバコ、飲酒、異性等など、非常に多くの悪業を造した。20年後、彼は1人の出家者に会い、彼から己の修行が正しいものであったと印証され、その時、大いに悟ったのである。彼を精神病患者であると謗った人々こそ、間違っていたのである！20年かかって、彼は己が精神病患者でない事を知った。なんと可愛そうなことか！今では彼の全ての禅修行における境地は、2度と出現する事はない。最初の1歩から始めなければならないのである。この事から、仏法を聞く事と、善知識に出会う事は非常に重要である事が、分かる。ソータパナを証悟するには、4個の条件がある。

① 仏法を聞くこと

② 善知識と交流すること

③ 如理作意する事

④ 法随法行

もし、20年前、彼に仏法の知識があり、善知識に出会う事ができたならば、彼は今頃、悟っていたであろうと推測する。彼はなぜ善知識に出会えなかったのか？ 阻害業である。善知識に出会えない原因は、

① 持戒不清浄

② 布施の欠如

もし、布施と持戒が具足していたならば、業力は我々をして、善知識の所へ連れて行ってくれる。故に、業力を信じなければならない。ある種の人々は、非常に多くの時間を費やして初めて正法に出会う。それは、彼に十分な福報がなく、早い内に正法に会うことができない為である。

法随法行の意味は、法の本質は、無常、苦、無我、空であることを観ずる事。五蘊を無常と見なし、五蘊を矢の様だ、棘の様だ、病の様だ、空だ、無我等々と見なす。その様に見なす事によって厭離が生じる。厭離は、修行上、非常に重要である。厭離があつて初めて解脱したいと思う。厭離がなければ、輪廻に執着する。これが「観成就」である。論疏では以下の様に言う：

「四神足のない人は、シューダラの子供の様である。神足のある人は（四神足の中の1つでも擁すれば良い）帝王の子供の様である。」

シューダラの子供は、帝王の子供になりたいとは夢にも思わない。というのも、彼には四神足が具足されていないが故に。しかし、帝王の子供は四神足が具足している為、引き継ぎ、己の帝国を保有する事ができる。菩薩は、華麗な宮殿の中で成長し、栄華富貴を尽くした。夏には夏の宮殿があり、雨季には雨季の宮殿、冬には冬の宮殿があつた。それでも彼は、生・老・病・死の事を考えた。これも又観成就であり、智慧でもある。一般の衆生は、生活は苦しく、解脱を考える事もない。即ち、観成就に欠けているのである。

4. 五根：

根は、その範囲内において作用を執行支配する所の心所である。五根は、

(1) 信根

(2) 精進根

(3) 念根

(4) 定根

(5) 慧根

五根は、それぞれの目的：勝解（信根）、尽力（精進根）、覚醒（念根）、不散乱（定根）及び照見（慧根）の範囲内においてその支配的な作用を執行する。修行において、五根は必ずバランスされなければならない。五根はバランスされなければならないだけでなく、又、成熟されなければならない。唯一、五根が成熟して初めて、ソータパナを証する事ができる。故に、我々は常に学び続けなければならない。五根をバランスした後、それが成熟するまで。

5. 五力：

五力は、

(1) 信力

- (2)精進力
- (3)念力
- (4)定力
- (5)慧力

根と力は、作用が異なるものの、しかし、同等の作用を持つ、5種の心所である。五力の作用は、心所をして対立する法によって動揺する事がない、事である：猶予して決断できない、懈怠、失念、散乱及び愚かさ。信力は猶予を退治し、精進力は懈怠を退治し、念力は失念を退治し、定力は散乱を退治し、慧力は愚かさを退治する。

6. 七覚支：

- (1)念覚支
- (2)択法覚支
- (3)精進覚支
- (4)喜覚支
- (5)軽安覚支
- (6)定覚支
- (7)捨覚支

七覚支の中において、択法覚支は慧心所、即ち、名色法を如実に知見する所の観智である。軽安は心と心所、2者の軽安を言う。捨覚支は遍一切美心心所の中捨性心所を言い、捨受の事ではない。七覚支は、2つのグループに分ける事ができる。択法、精進と喜の3個の覚支が1組。心の軟弱無力を退治する。例えば、禅の修行の時に、昏睡を感じたり、禅の修行に興味がもてなかつたり、心が軟弱無力の時は、択法覚支、精進覚支、喜覚支を育成するのが良い。軽安、定、捨の3個の覚支は、又別のグループである。心の激動を退治する。例えば、初めての禅修行で、いきなり光がやってきた。2回目の禅修行では、期待に満ちて望んだが、情緒が激動し、心が定まらない。この様な時は、軽安覚支、定覚支、捨覚支を育成する。以前の体験を捨てて初めて、心は平安になる。心が平安になった後、定を感じ、軽安を感じる事ができる。情緒が激動している時に、択法覚支、精進覚支、喜覚支を育成するならば、火は激しく燃えて欲しくないのに、火の中に、枯れ草を投げ込む様で、火は更に燃え盛る。この時に必要なものは、湿った草であり、湿った草とは、即ち、軽安覚支、定覚支、捨覚支である。バランスは、修行にあたっては、非常に重要である。我々は己の心境が、今ここにおいて、どの様であるか、激動であるか、軟弱であるか、精進であるか、散乱であるかを、知らなければならない。散乱している場合は、択法覚支、精進覚支、喜覚支を応用しなければならない。この様にして初めて、修行は進歩する。念覚支は、2者のグループをバランスする。即ち、2者のグループの内、どちらかが強すぎる事のない様にするのである。

7. 八正道：

- (1)正見
- (2)正思惟
- (3)正語
- (4)正業
- (5)正命
- (6)正精進

(7)正念

(8)正定

八道分の中において、正見とは、四聖諦を了知する慧心所である。仏陀は經典の中において、再三再四言う：

「正見は苦、集、滅、道の四聖諦を了知する事である。」

正思惟は、心をして出離、無瞋、無害に導く尋心所である。正語、正業、正命は、3個の離心所と同じである。

正精進は、四正勤と同じである。

正念は、四念処と同じである。正定は仏陀の教えの、四禪（初禪、二禪、三禪、四禪）に定義される。

八道分は、解脱へと向かう道である。三十七菩提分は、縮小すると、14の個別法になる（個別法は合計72個ある）。その内の1つは心（即ち、神足の中の心神足）で、その他の13個は心所である。三十七菩提分の中において、精進は9回出現する、即ち、四正勤、精進成就法、精進根、精進力、精進覚支と正精進。念は8回出現する、即ち四念処、念根、念力、念覚支と正念。定は4回出現する、即ち、定根、定力、定覚支、正定。慧は5回出現する、即ち、慧成就法、慧根、慧力、択法覚支と正見道分。信は2回出現する、即ち、信根と信力。その他はただ1回のみ出現する。三十七菩提分の内、精進の出現が最も多い。故に、仏陀は言う：

「精進が、一切の成就の根本である。」

修行の道の中において、精進、念、定、慧、信等の五根をバランスする事は非常に重要である。その中では、信が最も基本である、信が我々の修行を推し進めるが故に。精進（安般念を例に取る）は、努力して注意力を呼吸の上に置く事、この様にして精進して後、初めて、念は呼吸の上に括りつける事ができる（正念とは、呼吸を忘れない事である）。この様に精進を続ければ、やがて定が育成される。定があれば智慧が生起する。仏陀は言う：

「定のある者は、真実法を如実に知見する。」

修行全体の過程は、信、精進、念、定、慧（の順である）。

一切の概要

5個の部分がある。

1. 五蘊
2. 五取蘊
3. 十二処
4. 十八界
5. 四聖諦

これらは、観智の目標であり、非常に重要である。修行において、これらの真実法を知らないのであれば、進歩するのは非常に困難である。一切の概要の目的は、観智が観照する所の、その範囲内の諸々の法である。故に、Vipassanā観智を修行する時、五蘊、五取蘊、十二処、十八界と四聖諦を離れない事。唯一、徹底的に四聖諦を知ることによって、初めて、ソータパナを証する事ができる。この事は、仏陀が《相応部》で述べた所の、「もし、一切を実際に知ることがなく、

一切を遍知する事がないならば、人々は、絶対に苦を滅尽する事は出来ない。」（と符合する）。一切とは、五蘊、五取蘊、十二処、十八界、四聖諦である。

1. 五蘊：

五蘊は、

- (1)色蘊
- (2)受蘊
- (3)想蘊
- (4)行蘊
- (5)識蘊

パーリ語の「Kkhandhā」（蘊）の意味は、「グループ」「塊」「聚集」である。仏陀は有情をこの五蘊に分析した。我々が「人」と言うのは、それが分かりやすいからであるが、究極的に存在するのは「五蘊」である。諸々の經典ではこの様に言う：

「どの種類の色であっても、過去、未来、現在、内、外、粗い、細かい、劣る、勝、遠い、近いがあり、その一切を色蘊と呼ぶ。」

我々は過去の色蘊に執着する。未来の色蘊に執着する。このことは、我々は、一切を色蘊と観照し、1個の私、と言うものはないと知らなければならない。その他の四蘊も同様である。受蘊では、「どの様な種類の受（苦受、楽受、不苦不楽受）であっても、過去、未来、現在、内、外、粗い（例えば苦受）、細かい（不苦不楽受）、劣る（例えば、欲界の楽受は、ジャーナより劣る）、勝（優れている）、遠い又は近い、これら一切を受蘊と呼ぶ。」同様に、想蘊、行蘊、識蘊等、皆この11種を擁する。

2. 五取蘊：

五蘊に執取する事は、一切の苦痛の来源である。仏陀は言う：

「生・老・病・死・怨憎会・愛別離・求不得苦.....総じて、五取蘊は苦諦である。」

五取蘊とは何か？色取蘊、受取蘊、想取蘊、行取蘊、識取蘊、この五法は、執取の目標となる。一切は貪愛されて、「私の」ものとして執取されるか、又、邪見によって、「私の自我」と執取される色は、全て色取蘊と呼ばれる。受取蘊、想取蘊、行取蘊、識取蘊も又同様である。五蘊は因縁法である。例えば、識蘊は、如何にして生起するか？色塵が眼浄色を衝撃して初めて、眼識が生起する。仏陀は《六処経》において言う：

「識蘊は因縁法であり、『我（私）』ではない。眼識が『我』であるならば、今、色塵が消失して、色塵が眼根を衝撃しないならば、それに従って、眼識も消滅する。もし眼識が『我』であるならば、私も又消滅しなければならない。しかし、私は消滅する事はないのであるから、眼識は『我』ではない。眼識は因縁法である。」

その他の色、受、想、行蘊も又同様である。何故、五蘊は、我、我のものであると、執取され続けるのであるか？というのも、潜在する煩惱：無明と貪愛が、心流れの中にあって、徹底的に取り除かれる事がない為である。勿論、我々は、理論上は、五蘊を我、我のものとして執取してはならない事は知っていても、しかし、五塵が五根を衝撃する時、どうしても、それを我、我のものとして執取してしまう。これを避けるためには、今ここにおいて、観を起さねばならない。例えば、受が生起した時、すぐに受の無常、無我等を観ずるのである。修行は、その時、今ここにおいて、観ずる事が実践されなければならない。そうして初めて、無明と貪愛が断じ除かれる。もし、リトリートを待ってから修行するのでは、（余り）効果はないのであ

る。ここにおいて、一切の四取（欲取、邪見取、戒禁取、我論取）によって執取される所の五蘊は、皆、取蘊と呼ばれる。それは、全ての色蘊と世間に属する所の四名蘊である。出世間の四名蘊は取蘊には属さない。というのも、それは完全に執取の範囲を越えているが故に。言い換えれば、それらは、貪又は邪見の目標とはならないのである。五蘊と五取蘊の違いは何であるか？アラハンには五蘊はあるが、五取蘊はない。凡夫には、五蘊もあれば、五取蘊もある。これが2者の違いである。

3. 十二処：

眼処、耳処、鼻処、舌処、身処、意処（略称して六内処）、色彩処、音声処、香処、味処、触処、法処（略称して六外処）。この十二処は、又別の一体的な分類法であり、先の五処と五淨色は、同じものである。7から11処までは、五根と所縁が同じであり、意処は即ち、89種の心を含む。法処と法所縁は異なるもので、法所縁は5の淨色、16の微細色、心、心所、涅槃、概念などの6種を含む。法処は、52の心所、16の微細色、及び涅槃を含む。十二処は非常に重要な修行の法門である。何故十二処が非常に重要なのであるか？というのも全ての煩惱は、全て六外処が六内所に接触することによって発生するからである。仏陀は言う：

「この一切（十二処）を遍知することがないならば、人々は、一切の苦を滅する事は出来ない。」

六外処は例えば強盗の様で、六内処は空っぽの村の様である。色彩処は、毎日、眼処（空っぽの村）を襲撃する。目が好ましいものを見ると、貪を生じ、好ましくないものを見ると瞋が生じる。耳も同様であって、心地のよい音を聞くと貪が生じ、喜ばしくない音を聞くと、瞋が生じる。鼻、舌、身も又同様である。仏陀は、目、耳、鼻、舌、身、意処を空っぽの村と比喻しているが、それは、それらが無我である事を言いたい為である。六外処が、六内処を衝撃する時、貪瞋痴が生起しやすい。故に、修行は、六外処が六内処を衝撃するその時に行うのである。六内処は、毎日オープンしており、常々六塵が六根を衝撃している。故に、毎日の1刹那毎が、修行の時である。

4. 十八界：

眼界、耳界、鼻界、舌界、身界、色彩界、音声界、香界、味界、触界、眼識界、耳識界、鼻識界、舌識界、身識界、眼界、法界、意識界。何故、界と呼ぶか？界（Dhatu）は、それらが己自身の自性を「持つ」又は「背負う」からである。例えば、地界は硬さ、粗さ等の己の性を擁しており、眼界、耳界等々も又、各自の己性を擁している。仏陀は、それらの己性を基礎に十八界の解説をしたのは：

「それらは1個の人間、1個の我ではない。それらを界と呼ぶのは、我見を破り除く為、あなた、わたし、彼（が存在するという）錯誤顛倒想を打ち破る為である。」実際は、十二処と十八界は同じものである。（十八界は十二処より）更に細かい分解をしたものである。どの様にあるか？眼処は即ち眼界である。耳処は即ち耳界である。鼻処は即ち鼻界である。舌処は即ち舌界である。身処は身界、色彩処は色彩界、音声処は音声界、香処は香界、味処は味界、触処は触界、法処（16微細色+心所+涅槃）は法界（16微細色+心所+涅槃）である。意処は即ち7個の界を含む：眼識界、耳識界、鼻識界、舌識界、身識界、眼界（五門轉向心+2個の領受心）、意識界（89-10-3=76）。眼識界、耳識界、鼻識界、舌識界、身識界等の5識

界は、合計10種の心があり、その上に意界の3種の心を足すと、合計13種の心になる。89心から、13種の心を引くと、意識界は、76種の心になる。(89 - 13 = 76)

表U: 4つの究竟法と蘊、処および界の対照 (P271の別表参照)

5. 四聖諦：

仏陀は言う：

「徹底的に四聖諦を知ることがないが故に、衆生は、ひとえに、輪廻の中において旋回し続けている。」

四聖諦は、

(1) 苦聖諦

(2) 苦因（集）聖諦

(3) 苦滅聖諦

(4) 苦の滅に向かう道聖諦

四聖諦は、仏陀の根本的な教法である。それは、彼が証悟の夜に発見し、かつ、長い弘法の期間中（45年間）、不断に重ねて開示されたものである。四聖諦が「聖」と呼ばれるのは、聖者によって洞見され、又、至上の聖者仏陀によって教えられた諦であり、又、聖者の境地に導く事のできる教えであり、真実であり、変更できないものであり、決して嘘偽りのない、諦であるが故に（その様に呼ばれる）。生・老・病・死等々は、決して嘘偽りではなく、変更することの出来ない事実である為、諦と呼ばれる。

(1) 苦聖諦（Dukkham Ariyasaccam）：

苦には、4個の意味がある。圧迫（無常に圧迫されている）。因縁法（有為法。因縁によって生起する）。燃焼（心身が熾烈に熱される為）。変化（常に生滅の変化の中にある為）。
仏陀は言う：「有為法は皆、無常であり、苦である。」

苦は、身体上の苦だけではなく、上記の4個の意味も含む。苦のパーリ語「Dukkham」は、2個の文字から構成されている。「Du」の意味は、「邪悪な」で、「Kkham」は、楽しくない、楽しいと言えない、「空洞である、実体がない、変化するものである」。苦は空洞であり、変化するものであり、無常であり、無我であるから、悪である。パーリ語の語彙、語根を研究すると、その意味を容易に理解することができる。我々、一般的に理解する所の苦と、パーリ語で言う苦の意味は異なるのである。

(2) 苦因（集）聖諦（Dukkha Samudayam Ariyasaccam）：

パーリ語の「Samudayam」には、いくつかの意味がある。1つ目は、「累積」で、業の累積を言う。2つ目は「来源」で、苦の来源の意味である。3つ目は「束縛」で、縛られている、という意味である。

(3) 苦滅聖諦（Dukkhanirodham Ariyasaccam）：

パーリ語の「Nirodha」の、1つ目の意味は、「解脱、離脱」で、貪愛からの離脱、苦痛からの離脱。貪愛は苦痛の来源であり、貪愛を離脱するとは、即ち、苦痛から離脱することである。2つ目の意味は、「無為」である。滅は、無為法であり、即ち涅槃でもある。涅槃は無為法である。3つ目の忌みは、不死の境である。涅槃は、不死の境である。

(4)道聖諦（Dukkhanirodha Gaminiṭipada Ariyasaccam）：

道には「出入り」の意味がある。1個の、苦痛から解脱する事の出来る出入り（のできる所）を道と呼ぶ。2つ目の意味は「因」である。3つ目の意味は「見る、照見する」である。この道を歩み終えたならば、我々は、涅槃を照見する事が出来る。苦・集・滅・道は、それぞれ独特の意味を持つ。字面から、四聖諦の意味を知る事が出来るが、次に更に詳しく四聖諦の説明をする。

(1)苦聖諦：

生老病死、愁い、悲しみ、苦、憂、悩、怨憎会、愛別離、所求不得苦及び五取蘊の苦。簡単に言えば、渴愛（集諦）以外に、三世間地の一切法は有為法であり、全て苦聖諦に属する。有為法とは、即ち、因縁和合の法であり、変化の法であり、因縁の影響を受けて変化するものであって、全て変化するものは苦である。五取蘊は苦である。というのも、五蘊（色受想行識）を私、私のもの、として執取する結果は、苦であるが故に。

(2)集聖諦：

ただ1法のみ。即ち、貪心所の渴愛（Taṇhā）に相当する。仏陀は初転法輪の時に言った：「比丘たちよ。苦集聖諦とは何であるか？生まれ変わりが生じるのは、愛欲の為である。喜と貪を伴って同時に生起する。四方に愛樂を追い求めるが、即ちこれ欲愛、有愛及び無有愛である。」

① 欲愛：

6種ある。色愛、身愛、香愛、味愛、触愛、法愛である。欲樂への愛を、欲愛と言う。

② 有愛：

注疏では以下の様に言う。3種の愛：常見に具生する所の有愛。常見とは、恒常不変の靈魂が存在すると信じる事。靈魂が、1つの生命から、もう1つ別の生命に転じると信じる。色界、無色界の生命への愛。ジャーナへの愛。

③ 無有愛：

断見に具生する愛。断見を擁する人は、人の死後、又来世があることを信じない。人は死ぬと何もかも無くなり、完全に存在しないと、考える。パーリ聖典の《諦分別》においては、又別の5法によって集諦を説明する。

④ 愛欲：

⑤ 10種の煩惱：

⑥ 一切の不善法：

例えば、四漏、四取、7個の潜在煩惱、十結等。愛欲、10種の煩惱も含む。一切の不善法と3個の善根（無貪、無瞋、無痴）。しかし、一切の状況の下にあって、なお、三善根が皆、集諦であるとは限らない。ただ生死輪廻の中において、果報を生む事の出来る三善根は、その様である。例えば、持戒、布施は三善根を含み、かつ、集諦の中に集約される。というのもそれは果報を生み、輪廻を延長せしめるが故に。ソータパナ道心を証した時点で、37個の名法があるが、その中の無痴は、集諦の中に含まない。というのも、それは輪廻を断ち切るか、又は輪廻を短縮するが故に。

- ⑦ 一切の不善法及び一切の、生死輪廻の中において果報を生じる事の出来る善法。不善が集諦であるだけでなく、善法も又、集諦である。というのも、善法も又果報を生じる事が出来、結果、輪廻を長引かせるからである。

何故、集諦（愛欲）が、苦痛の来源であるのか？例えば、台湾で水災が発生し、非常に多くの人々が死亡したとして、あなたは心がとても辛くなる。暫くして、その中の1人は己の友人であった。あなたは更に辛くなる。更に何日か経って、あなたの愛する血縁者が亡くなったことを知ると、あなたの苦痛は更に増す。執取のレベルに違いがある為、あなたの、この3者に対する感受は異なる。辛さが深ければ深い程、執着している事を表す。執着は苦痛の来源なのである。苦痛を感じる時、以下の様に思考する：

「私は何故この様に辛いのか？」

その原因を探し出し、貪愛から離れられない事を発見する。衆生は、時には、苦痛を取り除く為に、飲酒して憂さをはらすが、結果は、更に憂いが深まる。苦痛は果であり、果を滅する行為は役に立たない。因（貪愛）を滅しなければならぬのである。因が消えれば、果も同時に滅し去る。論疏では、以下の様な比喩がある。ある人が、棍棒を犬とライオンに向けて投げて、攻撃した。2者の反応は同じではない。犬は棍棒に噛みつく。ライオンは棍棒を投げた人間を直接攻撃する。棍棒を投げた人間が死ねば、ライオンはそれより以降、棍棒で打たれる事はない。しかし、犬はずっと棍棒を噛み続ける。これは効果がない。というのも、犬を攻撃する人間は生きて以上、犬は棍棒で攻撃され続けるのであるから。仏陀の教法は、ライオンが棍棒を持つ人を襲うのと同じであり、修行者が苦を断じ除きたいのであれば、苦の因を退治しなければならず、苦の果に対応するのは無駄なのである。

(3) 苦滅聖諦：

1法のみ。即ち、渴愛を取り除く事を通して証得する所の涅槃。涅槃は、渴愛の止息である。

(4) 道聖諦：

苦の滅に向かう道聖諦は、八聖道分である。四諦の教法の中における、四出世間道心の中に生起する所の八道分心所である。菩提分の概要における八道分は、世間又は出世間に属するが、しかし、四聖諦の教法においては、純粹に、出世間法に属する。ソータパナ道心を証した時、37個の名法が生起するが、全て涅槃を所縁として取るものである。その内の8個は、八聖道分に属する：

① 正見：

慧心所に属する。又無痴とも。その作用は、四聖諦を覆い隠す無明を取り除き、涅槃を了知する事。

② 正思惟：

尋心所。

③ 正語：

正語離心所。

④ 正業：

正業離心所。

- ⑤ 正命：
正命離心所。
- ⑥ 正精進：
精進心所。
- ⑦ 正念：
念心所。
- ⑧ 正定：
一境性心所。

出世間法を証したその刹那、我々には、出世間八聖道分がある事になる。

仏陀は、苦集滅道を解説する時、先に苦の原因を解説する。というのも、衆生は、三界の中において、ただひたすら楽を享受したい、欲界、色界、無色界の楽しみを享受したいと願い、生老病死の苦痛を忘却しているからである。故に、仏陀は先に苦を教え、彼らが生命の実相に回帰して、恐怖心を生起できる様にする。(仏陀が) その様にするのは、(衆生は) 楽しみが多すぎると放逸になり、失念するが故に。

次に集諦を教える。苦痛には来源があると、説明する。彼は衆生に教えて言う：

「苦痛は、決して創造主が造り出したものではない。」

というのも、創造主が人類に：

「あなた方は生まれながらにして罪悪である。」

と宣うので。アメリカでは、非常に多くの人々は、この種の思想を受け入れる事ができず、その為にキリスト教、天主教を放棄している。この種の思想を注入されて後、人々に、己を憎悪する心理状態が起きる。仏陀は創造主を否定し、又、因・縁はないとする説も否定する。彼は我々に教えて言う：

「人生は苦である。しかし、苦そのものは、来源がある。因縁和合して生じるのである。」

苦滅聖諦に関しては、仏陀は、苦及び苦の来源を説明した後、我々を安心させてくれる：

「苦は消滅させる事ができる。ただ涅槃を証すればよい。」

故に、仏陀は滅諦を説明した。即ち、苦の止息である。

苦の滅に向かう道聖諦においては、彼は敢然と我々の為に、1本の道を示してくれた、即ち、八聖道である。八聖道を歩み終えることができたならば、一切の苦から解脱する事ができる。苦・集・滅・道(苦、苦の来源、苦の解脱、苦の出口)の教えは、我々に、以下の様に言う：

「一切は全て因縁和合である。実際には、我と言うものはない。ただ苦のみが、存在している。苦の受者はいない。」

仏陀の經典では、2句に短縮して言う：

「私が教える法は、純粹に、ただ、苦と苦の息滅のみを言う。」

この句は非常に重要である。仏陀は、決して、我、あなた、彼、衆生、人とは言わない。時には、説法を分かりやすくする方便として、彼も又、我、あなた、彼とは言うものの、それは、衆生が理解しやすくする為の方便であり、この様な表現を借りて、究極諦の話をしているのである。もし仏陀が、我々に対して、いきなり究極諦の「無我」を説いたならば、非常に多くの人々は、それを受け入れる事が出来なし、発狂する人さえいる。というのも、衆生の、「私(自我)」に対する執着は、非常に根深いものがあるが故に。

故に、仏陀は、巧みな技でもって、先に世俗諦（人、我、彼...）を使い、衆生と疎通する方便とした。衆生の心に法が浸透した後、彼は初めて、これらの世俗諦は真実ではない、と解説したのである。実際に存在するのは、「因縁生、因縁滅、ただ苦と苦の息滅のみがある」。經典に以下の様な話がある。ある外道が仏陀に尋ねた：

「我というのはあるのですか？この私は、存在するのでしょうか？しないのでしょうか？」

仏陀は沈黙して答えない。彼は再び尋ねる：

「我というのはないのですか？」

仏陀は沈黙して答えない。彼は又尋ねる：

「私というのはあるのですか？」

仏陀は沈黙を通し、外道は頭をフリフリ去って行った。この時、傍らにいたアーナンダ尊者が尋ねた：

「なぜ、世尊は、はっきり答えて上げないのですか？」

仏陀は言う：

「彼の様な、『我（私）』に対して非常に強い邪見を持つ人に、もし『我』はないと告げるならば、彼は正常な心理状態を失う（精神病になる）。彼は未だ無我を受け入れるレベルにはない。」

仏陀は、我々に、仏法の最も深い奥義を教えたいと思うものの、しかし、我々の智慧が、未だ彼の話した法のレベルにはない場合、彼はそれを話さないのである。もし彼が話したとして、我々の困惑が増すだけであって、我々に益はないのである。これが彼の巧みな方便である。仏陀は巧みな医師の様である。あなたが病を訴えると、彼はあなたに言う：

「あなたは病気だ。病原はこれこれである。私の薬を飲みさえすれば、その病は治るであろう。」

仏陀は我々に言う：

「あなた方が病気の時、この病は、愛欲、執取から来ている。この病は、治す事ができる。」そして、八聖道の処方箋を書いてくれる。飲むか飲まないか、あなたが決める。

総括

一切の概要：五蘊、五取蘊、十二処、十八界、四聖諦。

1. 色、受、想、その他の心所（行）及び識の五者。五蘊と呼ばれる。
2. 三（世間）地に属する同等の法。五取蘊と呼ばれる。出世間のものは、五取蘊とは言わない。欲界、色界、無色界のものだけを五取蘊と呼ぶ。というのも、それらは執取の対象になるが故に。
3. 涅槃は、過去、現在、未来の区分がない為、蘊の類に分類されない。蘊類は11種ある：過去の、現在の、未来の、内、外、遠い、近い、粗い、細かい、劣る、優秀。門（眼、耳、鼻、舌、身、意）と所縁（色所縁、香り所縁.....等など）の間の違いにより、十二処がある。
4. 門、所縁及び相応の識によって、（十八）界が生起する。
5. 三地輪廻の苦。渴愛がその因。涅槃は滅といい、道は出世間。道及び果と相応する心所は、四諦な中に含まない。

以上、5種の方法によって、一切の概要を説明した。

第8章

縁の概要

この章は、2個の部分に分かれる。1番目は発趣論（24因縁）、2番目は縁起。ここでは縁起の法のみ解説する。

縁起の法

縁起の法（Paṭicca - Samuppādanayo）は、基本的には、生死輪廻の因縁構造の解明、即ち、生死輪廻の維持及びそれをして1つの世からもう1つの別の世に転じせしめる所の、諸々の縁を解明するものである。注疏の中において、縁起は以下の様に定義される：

「諸々の果は、諸々の縁の聚合に依存して、同等に生起する。」

仏法の中において、1因が1果を生じるとは言わない。又、多因が1果を生じるとも言わない。又、1因で多くの果が生じるとも、言わない。「縁起」というこの1句は、「Paṭicca」（縁において）及び「Samuppāda」（正確に生起する）を組み合わせた文字である。その意味は、ある因の縁でもって、その果が正確に生起する、である。縁起の法則とは、：

「此れあるが故に、彼あり、此れ生ずるが故に彼生じ、此れ無くば彼無く、此れ滅するが故に、彼滅する。」

人、我、衆生は出て来ない。

アーナンダ尊者（尊者はソータパナであった）が、ある日、座禅瞑想していると、縁起の法が彼の心の中において鮮明に顕現した。彼は喜び勇んで仏陀に会いに行き、仏陀に言った：

「世尊、この十二因縁は、大変に奥深く又殊勝です！非常に奥深く、殊勝であるだけでなく、確かに非常に奥深く、殊勝です。しかし、私の智慧の中において、明確に顕現しました。」

世尊は彼を遮って言った：

「アーナンダ、この様に言うてはならない。アーナンダ、この様に言うてはならない。この縁起の法は、甚だ深い相を備えている。人類が、この法に対して、知ることなく、覚醒することもないが故に、1束の絡まった糸の様に、門逸草及び波羅波草の様に、苦界から出離する事が出来ない。」

これらの草は、絡まり合って1塊になり、慮落鳥の鳥の巢の糸の塊の様に、何が因で、何が果であるかを、見つけられない。（それと同じく）そのために衆生は、苦界、悪趣、墜処と輪廻から出離する事が出来ない。衆生が、四悪趣から出られない、解脱する事が出来ないのは、因縁の法を理解しないからである。四聖諦も又因縁の法である。仏陀の回答は、半分は褒め言葉で、半分は、アーナンダを叱責しているのである。叱責の部分は「あなたは縁起の法を簡単に考え過ぎていて。それならば、あなたアラハンを証する事が出来るはずだが？」称赞の部分は「あなたはソータパナであるが、しかし、縁起の法があなたの心中に明確に顕現したのは得難い体験である。」

十二縁起の法則

無明 (Avijja) の縁によりて行 (Saṅkhāra)

行の縁によりて識 (Viññāṇa)

識の縁によりて名色 (Nāma - Rūpa)

名色の縁によりて六処 (Saḷāyatana)

六処の縁によりて触 (Phassa)

触の縁によりて受 (Vedanā)

受の縁によりて愛 (Taṇhā)

愛の縁によりて取 (Upādāna)

取の縁によりて有 (Bhava)

有の縁によりて生 (Jāti)

生の縁によりて老死 (Jarāmaraṇa)、愁 (Soka)、悲 (Parideva)、苦 (Dukkha)、
憂 (Domanassa)、惱 (Upāyāsa)。

これによって、この様に、1塊の苦蘊が生起する。古代の師は言う：

「4種の法が非常に奥深く、教えるのが難しいだけでなく、理解する事も難しい。」

教える人は説明が難しく、聞く方も、理解するのが難しい。仏陀は、成道したばかりの1番目の1週間、菩提樹の下で、涅槃の静寂を享受した。1番目の1週間が過ぎて後の初夜、彼は涅槃の定から出て、因縁の法を観照し始めた。順縁：無明の縁によりて行、行の縁によりて識……から始め、老死まで。中夜になると、彼は逆縁の滅から観を実践した。

無明の滅 → 行の滅

行の滅 → 識の滅

識の滅 → 名色の滅

名色の滅 → 六処の滅

六処の滅 → 触の滅

触の滅 → 受の滅

受の滅 → 愛の滅

愛の滅 → 取の滅

取の滅 → 有の滅

有の滅 → 生の滅

生が滅するや否や、老、死もなくなる。

後夜になると、彼は順縁と逆縁を觀じ、又順と逆を同時に觀じた。無明の生起から……1塊全体の苦蘊の生起まで。その後に、無明の滅から、1塊全体の苦蘊の滅まで。

仏陀は、成道の最初の1週間の、その後に、十二縁起の省察を始めたのである。

表V: 12支による因と縁の法則 (P272の別表参照)

縁於無明、行生起（無明の縁によりて行が生起する）

無明は、52個の心所の中の痴心所である。特徴は心の盲目性又は智慧のない事。經典では、無明の事を盲人と同じである、と言う。無明の現象は迷惑（惑い、惑乱する事）、作用は目標の真実の法を覆い隠す又は知ることが出来ない事。例えば、月が、突然漂って来た暗雲によって遮られる様なもの。暗雲は無明と同じく、真実の法を覆い隠し、あなたは月が無いのか、と誤解する。無明は、真実の法を覆い隠すだけでなく、涅槃と四聖諦をも覆い隠し、我々をして、徹底的に四聖諦を理解出来ない様にする。これが無明の作用である。故に、無明が生起すると智慧が消失するのである。經典の中において、無明とは、四聖諦を知らない事だ、と言う。

《アビダンマ論》の中において、無明は、8種あると言われている。

1. 苦諦を知らない。
2. 集諦を知らない。
3. 滅諦を知らない。
4. 道諦を知らない。
5. 過去の五蘊を知らない（過去世を知らない）。
6. 未来の五蘊を知らない（未来世のある事を知らない）。
7. 過去の五蘊と未来の五蘊を（2個ともに）知らない。
8. 因縁の法則を知らない。業力とその果報を含む。

無明には、2個の意味がある。1個は、知らない事、もう1個は、間違っただけで知る事、錯誤である。

無明の縁によりて行ありと言うのは、29個の世間善及び不善心に相応する所の思心所である。

12個の不善心の中の思は、「非福行」と呼ばれる。8個の欲界善心と5個の色界ジャーナ善心の中の思も含まれ、それら全体で、「福行」と呼ばれる。4個の無色禅善心の中の思は「不動行」と呼ばれる。無明の特徴は、心の盲目又は無知である。作用は迷惑（迷いと惑乱）。現象は目標の真実法又は真実性を覆い隠すか、又は徹底的にそれを知らない事。目標の真実性とは何か？

無常、苦、無我である。ある種の人には、もし更にお金を儲ける事ができたならば、世界で一番楽しい人になるだろうと考えている。これも又無明である。というのも、金銭を基準にして物事を計るならば、大金持ちになった後で、己自身は大して嬉しくない事を発見する。というのも、貪自体の特徴は、満足出来ない、というものであるが故に。西洋の国家は、物質において非常に進歩しているが、しかし、今、多くの西洋人が、最貧国のインドにやって来る。その理由は、人々は、心霊の成長を求めて来るのであり、物質を求めて来る訳ではない。無明は、究極法を徹底的に知ることが出来ないし、又、知らないだけでなく、錯誤するのである。金銭は、人をして犯罪を犯しめる事もある。このことを知らずして、金銭は楽しみをもたらすのだと錯覚する。徹底的に煩惱を断じ除いた人こそが、真正の楽しい人である。故に、アラハンは、涅槃から出定した後、思わず「非常に楽しい！非常に楽しい！非常に楽しい！」と言うのである。この話は《長老尼偈》において見つける事ができる。

次に8種の無明と、無明の縁により、如何にして行となるかを解明する。

1. 無明は、五取蘊は苦諦である事を知らない上に、五取蘊を執取する事を、楽しいと錯誤している。《中部》75経に以下の様な記載がある。1人の先天性盲目の人がいて、黒色、赤色などを見た事がなく、彼にとって色彩は何の意味もなさない。ある時、彼は、己の友人が白い上着の、白くて汚れのない事を賛嘆するのを聞いて、白い衣服に非常に強い執着を覚え、家に戻っ

て父母に白い服をねだった。父母は：

「あなたは盲目だから、白い服、黄色い服、青い服など、あなたにとって何も意味がない。」
といい、彼の望みを見捨てた。しかし、彼は非常に強烈に白い服を着たいと欲し、友人の所へ
貫いに行った。彼の友人は、彼にボロボロに破れた、炭の様に黒い服を渡して、言った

「これは瑕疵のない純白の服だ。」

彼は喜んでそれを身に着け、あちらこちらに出かけて、己の白い服を見せびらかした。その
後、友人が彼の行いを母親に知らせたので、母親は、彼に言った：

「あなたが着ているのは、黒色の服ですよ」。

2. 無明は集諦を知らない。無明は、渴愛が苦の因であることを知らない。知らないだけでなく、
欲楽と渴愛は、楽しみの元であると錯覚している。
3. 無明は、滅諦が即ち涅槃であることを知らないだけでなく、苦の滅又は滅諦を、もう1つの、
別の世界に往生するのだと誤解している。例えば、キリスト教は、天堂（天国）に往生すれ
ば、永恆であり、苦痛からの解脱である、と思っている。浄土宗は、浄土に往生すれば永遠の
楽しさがある、と考えている。ヒンズー教は、梵天に生まれる事は、苦痛の終焉であると思っ
ている。無明の為に、実際は、苦痛の終焉は、もはや再び生まれぬ事である、のを知らな
い。天国に生まれるのは、1個の生命の出生であり、浄土に往生するのも、梵天に往生するの
も、同じく生命の出生である事を知らない。生まれれば、必ず死がある。これは不変の真理で
ある。無明は、不生不滅を知らないだけでなく、名色の終焉が涅槃である事を知らないだけ
でなく、涅槃又は苦の滅を、もう1つの別の世界に生まれるのだと思っている。この様であるか
ら、業を造す（なす。以下同様）のである。ある種のバラモンは、動物を多めに殺して、天を
祭り、神を祭るが、これは非福行である。彼らは無明である為に、この様にすれば、天国・
天界に生まれる事ができると考えているが、却って非福行の身口意の業を造している。ある種
の人々は、梵天に往生したいと思ひ禪定を修するが、不動行を修する無色禪ならば、死後、
梵天に往生する事ができると考えている。以上が、無明が如何にして行の縁になるか、と言
う例である。
4. 無明は、苦の滅の道は八正道である事を知らない。知らないだけでなく、八正道の事を、人類
又は畜生への祭り事、又は天の祭り、火の祭り、又はその他の儀式であると、誤解している。
我々が八正道について誤解する時、歩む道を間違えてしまう。ひとたび、道を間違えてしま
うと業になる。それは、非福行（12善業）又は非常に多くの善心業である可能性がある。そし
て、これをば、解脱の道であると錯覚してしまう。無明は、八正道が唯一の道であることを
知らず、却って、他の道に入り込んでしまい、間違った終点に到達してしまう。ある種の衆生
は、禪定（止禪を修行して観禪を修行しない）を修行すれば、それが八正道であると思っ
ている。そして不動行（4個の無色善業）をなす。八正道には、戒、定、慧が含まれる。その中の
1個だけあっても足りない。戒、定、慧の3種が具足されていなければならない。
5. 6. 7.
過去世を知らず、未来世を知らず、過去世と未来世を知らない。ある種の人々は、過去世があ
る事を知らないし、又、未来世がある事も知らない。未来世がある事を知らない為、本日な
した悪業は次の1世まで持って行かねばならない事を知らない。次の1世では、債務を返済しな

ればならないが、それを知らないが故に、悪を造しても恐れない。未来世のあるの知らない為、善い事もせず、結果、次の1世における果報もない。善を造して、何の意義があるか？これは邪見である。衆生はこれによって非福行の業を造す。

8. 無明は十二因縁を知らず、又は縁起を知らず、一切は縁起の法である事を知らないが故に、非福行（不善業）を造す。例えば、他者があなたに害を造した時、あなたは、これは前よつて造した悪因による果報である事を知らない。あなたは他人に傷つけられたと思い、復讐を企て、不善業を造す。無明であるため、縁起を知らず、故に非福行を造す。又、ある時には善業を造すが、ある時には不動行を造す。

行縁識（行の縁によりて識あり）

行とは、前に述べた非福行、福行、不動行である。それには語行、身行、意行を含む。不動行は純粹に意行（意業）であり、無色善心である。非福行は、不善の身口意の行為で、福行は、善の身口意の行為である。行は如何にして識の縁になるのか？この識は、果報識の意味である。果報識は、2個ある：結生識と生命の期間中に生起する所の識である。例えば、眼識、耳識、鼻識、舌識、身識、領受心、推度心等々。結生識は、19種ある。欲界においては、10個の結生識がある。1個は、不善果報推度心、1個は、善果報推度心に8個の欲界果報心を加えたもの。色界には5個の結生心、無色界には4個の結生心がある。故に、合計19個の結生識となる。行の縁によりて識が生起する。行は如何にして識の縁になるのか？《清浄道論》では、非常にはっきりと解説しているが、しかし《アビダンマ論》の基礎がないならば、《清浄道論》の慧品は理解出来ないのである。というのも、それは《アビダンマ論》を濃縮したものであるが故に。行は如何にして識の縁になるのか？人が臨終を迎える時、ある種の目標が、彼の最後の1個の心路過程に顕現する。この目標は、業、業相、趣相の内の1種である。これらの相が、臨終者の心路過程の中において顕現する。というのも、過去の業がその時点で熟する為、結果、その果報が生じ、その果として相が顕現するのである。今、我々は、臨終者に生起する所の眼門心路過程について説明する。例えば、彼が花の色彩を見たとする。ただ花の色彩だけで、花全体ではなかった。もし、彼が花全体を見たのならば、それは意門心路過程が生起したのである。眼門であれば、色彩しか見えない。有分心が生滅した後、五門転向、眼識、領受、推度、確定、5個の速行心が起きるが皆、花の色彩を所縁に取る。次に非常に多くの有分心が死亡識に至るまで続き、その後、間をおかずに結生識が生起する。こうして新しい生命が始まる。結生識は果報心であり、過去の業によって生じた果報（例えば、過去世において花を仏像に供えた善業により生じた果報）である。故に、結生識は、花の色彩を所縁に取る。結生識は欲界地で生起するが、これは八大果報心の1つである。ある時は智と相応し、ある時は智と相応しない。この結生識は、行の縁によりて識あり、の識であつて、行とは即ち、業である。というのも、業は臨終の時に熟し、その結果、未来世において識を生じるのである。この識は結生識そのものである。

もう1つ例を上げる。屠殺業を営んでいる人が臨終の時に、己が豚を殺している様なイメージを見たとする。これは業であり、業相ではない（もし、ナイフが見えたならば、業相である）。業とは通常は、意門心路過程であり、意門心路過程と眼門（五門）心路過程は異なるものである。先に有分心が生起し、次に意門転向（五門転向、領受、推度はない）、その後5個の

速行心、2個の彼所縁（ある時は生起し、ある時は生起しない）、有分心（ある時は生起し、ある時は生起しない）、次に死亡識が生起する。臨終速行が豚を殺す業を所縁として取り、間を置かず結生心が生起する（結生心は豚を殺す者の不善業の果報）のであり、故に結生心は同じ業（屠殺の業）を所縁として取る。結生心は果報心であり、悪趣地無因捨推度心であり、行の結果でもあり、過去の不善業が縁になっているものである。もう1つ例を上げる。禅の修行者が、臨終の時に、ジャーナに入れるとすると、その時、安般念似相を所縁に取って初禅に入る。その後に往生する。往生する前、意門心路過程が必ず生起する（修行による禅相は全て意門であり、五門ではない）。先に有分心が生起し、その後に意門転向、次に5個の速行心：似相を所縁に取る（この似相は業相である）。5個の速行心の後は死亡識で、死亡識が過ぎた後、この1期の生命は終わる。その後、新しい1生の結生心がまた始まる。結生心は、安般念の似相（業相）を所縁に取り、色界初禅果報心として、色界初禅天に生まれる。結生識が過ぎた後、16個の有分心が生起し、同一の似相（業相）を所縁として取る。その後、1番目の意門心路過程が生起し、次に心路は生滅、生滅……し、最後の1刻になると、この梵天神は死亡する。

我々は既に説明した：「4種の法は、非常に教え難いし、又非常に理解するのが難しい。その中の1つは、この結生識で、非常に多くの人々は、結生識を、過去世の靈魂が、この1世に来たものだと考えている。もし、その様であれば、同一の我が存在する事になるが、その様な見方は、常見である。しかし、結生識が、過去世と全くもって無関係であるとも言えない。というのも、結生識は、過去世の臨終速行心の所縁を縁にして生起するのであるから、過去世とは関係がある。もし、結生識は過去世と全く関係がないと言うならば、これはまた別の、もう1つの邪見であり、断見と言う。心識（結生識）は純粹に、因縁が生滅しながら相続する所の、不断なる過程であり、生・滅・生・滅……しているものである。これが最も標準的な答えである。十二因縁に基づけば、因が生起するが故に、果が生起し、因が減するが故に、果が減するのである。」

故に、仏陀は言う：

「無明の縁によりて行あり、行の縁によりて識あり、識の縁によりて名色あり、名色の縁によりて六処あり……皆、因縁の法である」と。

結生識が生起する因縁について、我々は既に説明した。「1個の因が、1個の果を生む、という事はない。多種多様な因が、多種多様な果を生む。」結生識もまた1個の果ではない。結生識の生起は、相応の心所及び色法が関わっており、1個の果のみ、という事はないと。結生識が生起する因縁は、4種ある：

1番目は無明。

2番目は愛欲。例えば、人が臨終の時、愛欲が未だ取り除かれていない為に、なお依然として生命に執着する。生命に執着する事は、非常に強力なエネルギーであり、心識をば、この1世から次の1世に押し込んでいく。これが貪愛の力である。生命を貪愛する事は、無明であり、無明は、貪愛の危険性を知らず、生存の危険性を知らず、1つ1つの生命は皆、危険である事を知らない。何故危険であるのか？例えば、我々の身体は、病魔が充満している。全ての病の基礎である。全ての病は、身体を縁として生起する。故に、過患に満ちていると言う。無明は、輪廻の危険を知らない。故に貪愛し、生命に執着する。

3番目は業である。全ての、無明と愛欲を基礎にしてなされた業は、皆、結生識を生む。

4番目は、所縁、即ち、臨終速行心の所縁である。1つ1つの心識は、必ず所縁を取って生起する。所縁がなければ、心は生起しない。結生識が生起する為には、やはり所縁が必要である。これは、二十四縁の中の所縁縁に相当する。この4個の因が、結生識が生起する為の因縁である。もし「誰1人として輪廻する衆生はいない。誰が果報を体験しているのか？」と問うならば、果報は楽と苦を含むが、楽と苦を体験しているのは受の作用であり、受蘊が果報を体験しているのである。誤解して、受、受蘊を我（受は我、我は受）と見なすならば、これは皆、有身見である。有身見は、我々の頭をして、四悪道に向かわせる煩惱である。我々は既に行が如何にして結生識の縁になるのか、を説明した。今、行は如何にして生命期間の中における心識の縁になるのか、を説明する。結生識が過ぎた後、16個の有分識が生起する。その次に1番目の心路過程等々……で、ゆっくりと、胎児の五根が、母胎の中で成長する。出生の後、目が色塵に触れると、眼門心路が生起し、耳に音塵に触れると、耳門心路が生起する。五門心路過程の中においては、領受、推度……がある。故に、双五識、領受、推度等々は、皆、生命期間の中に生起する所の果報識なのである。

縁於識、名色生起（識の縁によりて名色が生起する）

この識は、果報識と業識である。ここでは、名色を分けて説明する。先に識の縁によりて名が生起する、を解説する。名とは心所の事である。心は単独では生起出来ない。必ず心所が同伴していなければならない。しかし、識は心王であり、先導者であり、識が生起して初めて心所が生起する。結生識と相応するのは、33個の心所（人類の場合）である。識の縁によりて、色が生起する。この色は、業生色である。結生識が生起するその1刻、30個の業生色：身十法聚、心十法聚、性根十法聚が同時に生起するが、もし、識が生起しないならば、30個の業生色も又生起する事はない。状況はこの様ではあるが、しかし、結生識は、これらの色法が生起する為の直接の因ではない。直接の因は、過去の業であり、これを業縁と呼ぶ。識の縁によりて色が生起する。識は、助縁に1つにすぎない。ちょうど、果樹に果実が実る時、水分はその中の1個の縁に過ぎないのと同じである。最も重要なのは、種である。結生識に上の33個の心所を加え、更に30個の色法を加える。この3種を五蘊と呼ぶ。五蘊は色蘊（色法）及び4個の名蘊：受、想、行、識で構成される。名蘊は、心と心所を含み。故に、結生識が母胎の中で生じたその刹那、五蘊（名と色）も又生起し始める。五蘊は果報であり、その因はこの1世のものであるはずがない。因と果は、同じ1つの心識刹那に同時に出現する事はないが故に、もし、結生五蘊が果報であるならば、因は必ず過去世の業であるに違いない。これが先に述べた「行の縁によりて識あり」である。次に、識は如何にして名色の縁になるのか？先程説明したのは、人類に関してであるが、今は、天神を例にとって説明する。識は結生識の事である。識の縁によりて名（3個の心所）及び70個の色法が生じる。天神は直接化生する為、合計70個の色法を擁する：眼十法聚、耳十法聚、鼻十法聚、舌十法聚、身十法聚、性根十法聚、心（心所依処）十法聚である。

縁於名色、六処生起（名色の縁によりて六処が生起する）

名は心所で、色は四大である。六処は、眼処、耳処、鼻処、舌処、身処と意処（意処とは心の事である）である。心所が生起すると、心も又共に生起する（というのも、心が生起すれば、心所も生起するが故に）。二十四縁に基づけば、この種の関係性は、相応縁と呼ぶ。色（四大）の縁によりて眼処、耳処、鼻処、舌処、身処と意処が生起する。前五処は、所造色であり、四大種色の縁によって生起する。

縁於六処、触生起（六処の縁によりて触が生起する）

6つの所縁が六処を衝撃する時、六識が生起する。この3種（所縁、処、識）の集合を触と呼ぶ。触は6種ある：眼触、耳触、鼻触、舌触、身触、意触。触は心所である。

縁於触、受生起（触の縁によりて受が生起する）

例えば人の目が宝石を見た時、ある種の受が生起する。受の特徴は体験である。受は非常に重要である。受念処は必ず修行しなければならないものである。受の作用は所縁の体験である。現起（現象）は楽受又は苦受である。近因は触である。触の為に受が生起する。この受こそが、今世又は前世の善悪の果報を体験するのである。受は決して1個の我ではなく、単なる1個の心所である。生起するやたちまち消滅する。又再び生起して、又即刻消滅する。六塵が六処を衝撃する時、6種の感受が生起する。眼触は受を生み、耳触は受を生み、鼻触は受を生み、舌触は受を生み、身触は受を生み、意触は受を生み、1つ1つの受は、皆、苦、楽、不苦不楽を体験する。故に、合計18種の受がある。過去の18種、未来の18種に現在の18種を加えると54種の受になる。この他に、内の54種、外の54種、合計108種の受がある。我々は、ゆっくり学ぼう！仏陀は、受を形容して、泡の様だと言う。形成された後、非常に速く消滅するが故に。故に、受は無常である。苦受であっても、楽受であっても、不苦不楽受であっても、それを全て無常、無常、因縁法、因縁法と観じなければならない。この様にすれば執着は生じないし、又有身見も生じない。

受縁愛（受の縁によりて愛が生起する）

愛は、一切の貪念、情欲、欲望、願望、好み.....等々を含む。愛の特徴は、目標に執着する事である。作用は目標への粘着。まるで肉が鍋に貼り付いた様である。現象は放棄出来ない、捨てられない事。近因は、束縛に至る法に楽味を見出す事。束縛の法とは即ち、五蘊、六塵を言う。例えば、我々の目は色塵を貪愛し、目が色塵を楽しむ事に楽味があると思う。結果、束縛されてしまうのである。ある1つの比喻が、貪愛の現象が、放棄したくない事であることを説明出来る。アジアでは、猿を欲しいと思い、それを、捕まえ様と思った猿使いは、椰子の実に穴を開けて、その中に手を入れる時は必ず手を丸めなければならない様にする。そして、猿使いは、椰子の実の中に良い香りのする食べ物を入れ、それを木の枝に吊るす。香りが猿の鼻根を衝撃する時、彼に楽愛が生じる。猿は、無常を観ずる事が出来ない為、楽受によって、直接貪が生起する。こうして猿は、香りの来源を探し始める。（これにより六処は煩惱の入る門である事が分かる）。猿は

椰子を見つけた後、手を丸めて、椰子の実の中に突っ込み食べ物を掴む。しかし、穴は非常に小さいので、食べ物を目一杯掴んだ手を抜く事ができない。どれ程もがいても役に立たない。唯一の方法は、手の中の食べ物を放棄する事であるが、しかし、貪愛の作用によって、食べ物に粘着する為、放棄出来ないという現象が起きる。近因は、束縛に至る法に楽味を見出す事。言い換えれば、猿は食べ物に楽味があると考えている、と言う事である。故に、食べ物は猿が束縛を受けるに至る要素であると、言える。この例から、以下の事が分かる。貪愛は、我々を輪廻の過程の中に縛り付ける。この猿の様に、食べ物を放棄したくないが為に、完全に捕捉される。猿は食べ物を放棄しさえすれば、手は穴から抜けるのであるが、貪愛の現起により、それが出来ない。我々は猿を笑えない。我々もまた同じであるが故に。

愛は6種ある。

1. 色愛：
目が綺麗な色塵を貪愛する。
2. 音愛：
耳が耳に心地よい音を貪愛する。
3. 香愛：
鼻が香りを貪愛する。例えば、レストランのそばを通っていて、良い香りがすると、中に入って食べたくなる。これが香愛である。猿が香りに惹きつけられるのと同じである。
4. 味愛：
舌が美味しい食べ物を喜ぶ。
5. 触愛：
触は、地、火、風の3者である。我々の身体は、柔らかい感覚に貪愛する。
6. 法愛：
我々の各種各様の考えを含む。己の考えに執着するのも法愛の1種である。

通常、楽受によって愛が生じる。しかし、苦受でも、愛は生じる。心中に苦受が生起する時、我々はその苦受から抜け出し、楽受を享受したいと思う（楽受に向かうのも愛の1種である）。故に、苦受を縁にして、愛が生起する事がある。この6種の愛は、3種の愛として解釈する事もできる。

1. 欲愛：
前に説明した所の、色、音、香り、味、触は、欲愛に属する。
2. 有愛：
生命に貪愛する。例えば、有る人が、川の中で溺れそうになっているとする。そこへ非常に臭い豚の死体が流れて来たならば、今までならば、鼻をつまんで通り過ぎていたものを、溺死するかも知れない今となつては、どれ程臭くても、それを掴んで延命しようとする。有愛の力は非常に強烈であり、我々をして、不断に輪廻せしめる。
3. 無有愛：
断滅を渴愛する。即ち、断見を含む渴愛。貪愛は、輪廻の中において、我々を縛り付ける、非常に重要な、基本的な煩惱である。愛はどこから生起するのか？その根は、如何にして張るのか？を理解しなければならない。仏陀は《大念処経》において、言う：
「快樂と喜ばしい所の所縁は、愛を生起せしめ、根を張らせるものである」。

どの様な喜ばしい色であっても、音・声であっても、香りであっても、味であっても、触であっても、法であっても、これらが、楽しいもの、喜ばしいものでありさえすれば、愛は生起し、根を張るのである。輪廻の最も重要な要素は、無明と愛である。「無明縁行、行縁識」識は今世のものであり、無明と行は過去世のものである。無明は過去の因であり、現在における所の、五蘊の果をもたらす。結生識において、名色が、即ち、結生識のその1刻において、五蘊が生起する。五蘊が生起するのは、過去の無明が関係する。愛は現在の因で、六処が六塵に衝撃される時、受が生起する。受の縁によりて、愛が生起する。愛は、生起するや否や、未来の五蘊の為に道を敷くのである。故に、愛は現在の因であり、未来において五蘊果をもたらすと言う。

縁於愛、取生起（愛の縁によりて取が生起する）

取は非常に強烈な愛である。特徴は掴んで放さない事。作用は緩めない事。現象は強烈な愛欲又は貪欲。合計4種の取がある：

1. 欲取：

欲楽への取。欲楽への強烈な渴愛。

2. 邪見取：

邪見に対して執着する取。例えば、無作見（全ての行為は、果報をもたらさないと言う考え）、断見、又は、世界は永恆である、又は不永恆である……等々の見解を憶測する。

3. 戒禁取：

儀式又は苦行を実践すれば、解脱に向かう事ができると言う考え。仏陀の時代、又、現代のインドでは、非常に多くの人々が、戒禁取を修行している。仏陀の時代、2人の修行者がいた。1人は犬の真似をした修行、もう1人は、牛を真似た修行をしていた。犬の真似をする修行とは、犬の様に歩き、犬の食べ物を食べ、眠る時も犬の様に寝た。牛を真似る修行者も、また牛の諸々の行為を真似た。彼らは、この様にして、非常に長期にこの修行をした。ある時、仏陀が来た事を聞きつけて、非常に喜んで、彼らが長年修行して来た苦行は、どの様な善報があるかを、尋ねた。その内の1人が、仏陀に以下の様に言う：

「この人は私の親友です。彼は長年、犬の真似をして、苦行を修しました。世尊、あなたにお聞きします。彼がもし往生するならば、何処に往生しますか？」

仏陀：

「私に聞かないで下さい。」

彼は言う：

「我々はこれ程、熱心に答えを待っています。必ずお答え下さい。」

仏陀は言う：

「私に聞かないで下さい。」

彼は仏陀に答えて貰たくて引き下がらない。仏陀は又「私に聞かないで下さい」と3度返事したが、先方はなお、引き下がらない。

仏陀は言う：

「私に聞かないで欲しいと言っても、あなたは承知しない。それならば、私はあなたに告げましょう！犬の真似の修行をして、善趣に往生できると思うのは邪見である。威力強大な天神に

生まれると思うのも邪見である。彼は2つの場所に生まれる可能性がある。1つは地獄で、もう1つは犬（畜生）である。」

仏陀は続けて言う：

「彼が臨終の時に、この種の錯誤した考えを放棄するならば（良いのだが）、彼は、既に長年犬の真似をする修行を実践してきた為に、彼の心は犬に似ている。故に、犬に生まれるであろう。」

犬の修行をしていた人は、それを聞いて、大いに泣いた。仏陀は、言う：

「だから、私は、私に聞くな、と言ったのだ。」

この様に、あなたが師に質問しても、師が答えない時、それ以上質問しない方が良い。というのも、師は、あなたが傷つくのを心配しているのである。この人は以下の様に答えた：

「私が泣くのは、世尊の答えのせいだけではありません。これ程、長く修行してきたのに、全て無駄になった事を泣いているのです。」

これは邪精進である。現在の社会の中において、非常に多くの人々が、戒禁取を修行しているが、己自身は、戒禁取である事を知らない。故に、私は以前、注意した事がある：

「全ての事柄に関して、全面的に受け入れる事はあってはならない。智慧を持って、思考する事。全てを受け入れて実践した場合で、その中に1つの戒禁取があった場合、代償を求められる。」と。

4. 我論取：

身見への執着及び、五蘊の中の1つを我、我のものと見なす事。「縁於愛、取生起」（愛の縁によりて、取が生起する）、愛とは即ち、こそ泥が、物を盗もうとする時に伸ばす手の様である。取とは、こそ泥が、その品を掴んだ様なものである。

縁於有、生生起（有の縁によりて、生が生起する）

生の意味は、新しい1世において、初めて生起する所の、何かの蘊、五蘊でも、四蘊でも、一蘊でも、どれも皆、生と呼ぶ。生は又、新しい1世の世間的果報心及び相応の心所及び業生色を指す。どこか1個の生存地、それが悪趣地であっても、善趣地であっても、色界や無色界地であっても、そこにおいて生起する事を、生と呼ぶ。

縁於生、老死等生起（生の縁によりて老死等が生起する）

生は老いをもたらす。

「老い」は、身体の老化を言う。例えば、歯が抜ける。白髪になる。皺が増える。視力等の五根が退化するのは老いの現象である。

「死」は、蘊の崩壊、分裂を言う。

「愁」は、精神上的の極度の悲哀。

「悲」は、無くした後に悲泣する事。

「苦」は、身体上の苦痛。

「憂」は、精神上的の苦痛。

「悩」は、精神上的の極度の悲哀と絶望。

生がひとたび発生したならば、老いと死亡は避ける事ができない。そして、生と死亡の間には、その他の苦、例えば、愁、悲、苦、憂、悩、怨憎会、愛別離………が発生する。これら一切の苦の根源は即ち生である。故に、「生」はそれらの主要な縁と見なされる。

輪廻を断つ方法

十二因縁とは：無明縁行。行縁識。識縁名色。名色縁六処。六処縁触。触縁受。受縁愛。愛縁取。取縁有。有縁生。生縁老、死、愁、悲、苦、憂、悩。これが、十二支の循環である。これを如何にして断つのか？受から始めるのである。触を断つ事は出来ない。というのも、色塵が、眼浄色を衝撃する時、即刻眼触が生じるが故に。受を観ずるのは比較的容易である。受には、苦受、楽受、不苦不楽受がある。如何にして受を切断して、受が愛まで伸延しない様にするのか？受を無常、苦、無我として観ずる。もし失敗したならば、受は愛まで伸延するので、それを無常、苦、無我として観ずる。受を観ずる事は受念処であり、愛を観ずる事は、心念処である。愛が生起する度に、愛を無常、苦、無我として観ずる事が出来るならば、燃えている灯火に、もはや油を注がない様に、一定の時間が経てば、火は消えるであろう。もし、常に油を注ぐならば（愛を伸延させる）、灯火は永遠に消える事はない。同様の道理で、油は愛であり、愛が生起する度に、それを、無常、苦、無我と観ずるならば、灯火に油を追加しないのと同じであり、愛はやがて滅し去るであろう。愛が滅すれば、取が滅する。取が滅すれば、有が滅する。有が滅するれば、生が滅する。これは仏陀が《相応経》において述べているものである。もし、愛が生起したその時に、それを無常、苦、無我として観ずる事がないならば、即ち、愛が生起する度に、愛の縁によりて取が生起し、取の縁によりて有が生起し、有の縁によりて生が生起する。生の縁によりて、老い、死亡、愁、悲、苦、憂、悩が再び生起する。その後、又、無明の縁によりて行が生起し……輪廻はひたすら循環する。これは灯火に油を注いで燃え続けて、滅する事がないことを意味する。これは、非常に重要な一節である。もし、修行の中において、（上のレベルに向けて）突破したいと考え、輪廻を断ち切りたいと思うならば、愛の生起するその1刻において、それを取まで延伸させてはならない。我々は、受から観を始める事ができる。もし、受が愛まで延伸したならば、愛を無常等と観じなければならぬ。又は愛の過患を見る。故に、1刻1刻が、修行であり、リトリートの時を待って後に、修行に取り組んではならない。

縁於取、有生起（取の縁によりて有が生起する）

有は、2種類に分けられる。

1. 業有：

思が即ち業である。合計29個の善と不善業がある。12個の不善心、8個の欲界善心、5個の色界善心、4個の無色界善心。業とは、29種の善と不善の思、又は一切の、新しい1世を生じる事の出来る善と不善業を言う。

2. 生有：

これは、業力が形成する所の、蘊である。業力によって形成された欲界五蘊、色界五蘊、無色界四蘊及び一蘊（無想有情天は、色蘊しかない）。無色界の衆生は、無想有情天以外、皆4個の名蘊がある。生有とは、32種の果報心及び相応の心所及び業生色を言う。32個の果報心は：

8個の大果報心、5個の色界廣大果報心、4個の無色界廣大果報心、7個の無因不善果報心、8個の無因果報善心。4個の出世間果報心は、輪廻の果報を増加させる事がない為、故に、ここには含まれない。36個の果報心から4個の出世間果報心を引くと、残りの、32個の果報心が、生有と言う事になる。取は、業有の縁である。取の影響の下、人は初めて行動を起こし、業を累積する。取も又生有の縁である。というのも、取は、人をして、造した所の業に基づいて、生死輪廻を繰り返す故。我々は既に「縁於無明、行生起」、「縁於取、有生起」を学んだ。「行」と「有」は同じ1つの意味であり、2者の違いは、それぞれ「行」は過去世と関係があり、「有」は、現在世と関係がある、と言う事である。

分析の類別

我々は、7つの方法で、十二因縁を分析する：三時、十二支、二十法、三連結、四摂類、三輪転、二根。

三時

三時とは、3世の意味である。過去世、現在世、未来世である。過去世には2種ある。無明と行。未来世は生と老・死。現在世は、中間の八支（識、名色、六処、触、受、愛、取、有）。十二因縁を研究するに当たって、過去、現在、未来の三世を考察しなければならない。勿論、この十二支は、1生（今世）の内に発生するものとして考察しても良いが、十二因縁を徹底的に理解したいのであるならば、3世に渡って分析しなければならない。十二支を3世で分析する時、それは、生死輪廻の中の因縁の構造を明確にする為であり、ある1世の縁起支として帰納されたものは、当該の1世にのみ、運用されて、別の世では運用されないというものではない。実際、1つ1つの世において、十二縁起は、お互いに影響し合うものである事を知らなければならない。

十二支

十二支は、無明、行、識、名色、六処、触、受、愛、取、有、生と老・死。

二十法

1. 過去世の5因：
無明、行、愛、取、有。無明は、愛と取に相応する。行と有は同じ意味である。
2. 現在世の5果：
識、名色、六処、触、受。識は、結生識とこの1世の心識を指す。
過去の5因が、現在の5果を形成する。
3. 現在世の5因：
愛、取、有、無明と行。現在世の5因は、未来世の5果になる。

4. 未来世の5果：

識、名色、六処、触、受。現在の因から生じる所の未来の果である。

四摂類

過去の因、現在の果、現在の因、未来の果の4種を言う。無明と行に言及する時、愛、取、有もまたその中に含まれる。同様に、愛、取、有に言及する時、無明、行もその中に含まれる。生と老・死に言及する時、識などの5果もその中に含まれる。心の中の無明が未だ断じられていない時、愛と取が生起する。愛と取が生起する度に、無明を根本として、かつ無明と俱行する。次に、「行」と「有」の2句は、同じ種類の究極法を指している。即ち、業をなす所の思である。故に、毎回、この句が言及された時、もう1つも含むものとする。二十法の中において、個別に生と老・死を取り上げていない。というのも、それらは、名色の相であり、究極法ではないが故に。究極法を代表するのは、識から受までの、5個の縁起支である。

三連結

1. 過去の因（行）と現在の果（識）の因果連結：

「縁於行、識生起」。行は過去の因、識は現在の果。

2. 現在の果（受）と現在の因（愛）の因果連結：

「縁於触、受生起」。「縁於受、愛生起」。受は現在の果、愛は現在の因。

3. 現在の因（有）と未来の果（生）の因果連結：

「縁於取、有生起」、有は現在の因、生は未来の果。有は業であり、行でもある。というのも、「有」というこの因の為に、未来の果：新しい生命が始まるが故に。

三輪転

1. 煩惱輪転：

無明、愛と取を含む。煩惱の関係で、衆生は業を造し、業輪転を引き起こす。

2. 業輪転：

行と有を含む。業を造すが故に、業力が残り、業力が熟した時、果報が生じる。結果、果報輪転が生起する。

3. 果報輪転：

識、名色、六処、触、受を含む。

表W: (P272の別表参照)

三輪転は、生死輪廻の方式を明らかにした。最も基本的な輪転は、煩惱輪転である。無明の覆いと渴愛の駆使の下、人々は、世間的な不善と善の業を造す。そしてこの様に、煩惱輪転が業輪転を引き起こし、業が熟して果報の生ずる。その時には、業輪転が、果報輪転（異熟輪転）を引き起こす。これらの苦楽の果報に対して反応する時、無明に沈潜する人は、渴愛に征服されてしまう。そして更に多くの愉悅の体験を享受し、すでに得たものに執着し、又、苦痛な体験を避けようと試みる。この様な状況の中において、果報輪転は、もう1つ別の煩惱輪転を引き起こす。三輪転とは、この様に、不断に転回する。無明が、諸々の聖道によって根本から取り除かれるまで、煩惱輪転は止むことがない。

二根

1. 無明：

無明は、過去から現在まで通貫する所の、「受」の根である、と言われる。無明とは、真実の法を如実に見る事がない事を言い、無明と相応する、もう1つ別の根は「愛欲」である。

2. 愛欲：

愛は現在から未来の「老・死」にまで通貫する根と呼ばれる。

輪廻の根本は、無明と愛欲が原因であるが、この二根を断ち切る事によって、輪廻は断滅する事ができる。老いと死に追い立てられる事の多い人は、諸々の漏が生起すると、無明が回転し始める。そうであるから、大賢者は、三地結縛及び無始の輪廻を「縁起」と呼ぶ。我々がアラハン道果を証する時、輪廻を断じる事ができる。アラハン道果は、どの様にして証するのであるか？八正道（戒、定、慧）を修行しなければならない。アラハン道果を証したならば、無明は滅する。無明が滅したならば行滅する。行滅したならば、識滅する。識滅したならば、名色滅する。名色滅したならば、六処滅する。六処滅したならば、触滅する。触滅したならば、受滅する。受滅したならば、愛滅する。愛滅したならば、取滅する。取滅したならば、有が滅する。有が滅したならば、再び、生まれる事はない。再び生まれる事がないならば、老い、死亡、愁、悲、苦、憂、悩はない。この様にして、一切の苦痛は、止息する。十二縁起は、「無明縁行」から始まるが、しかし、無明が最初の因という事ではない。仏教において、第一因というのは存在しない。仏陀は言う：

「無始の輪廻の中において、衆生は無明に覆われ、愛欲に縛られ、長く輪廻の中で旋回している。」

仏陀は十二因縁を解説するが、しかし、最も重要なのは、仏陀は、苦は如何にして生起するかと言う問題と、苦を如何にして止息するかと言う問題を説いたに過ぎない（事を知るべきである）。ここにはどの様な衆生もいないし、人もいないし、創造神もいない。仏陀の言う

「無明縁行、行縁識」は、誰が1人の創造神が識を創造した訳でもなく、生命を創造した訳でもなく、全ては無明によるものである事を証明しているのである。無明は、1個の心所に過ぎない。行もまた、各種各様の心である。善心、不善心等々を言うのも、輪廻の過程全体には、1人の人間がいる訳ではない、のである。苦は存在しているが、苦を受け取る者（受苦者）は、いないのである。

第9章

業処の概要

業処

業処は2種ある。止禅と観禅である。業処 (Kammattāna) は「作業の地」又は「仕事の地」という意味である。この1句で、禅修行の方法を表しており、禅修行者が特別な成就を育成する所の、作業の場所である。仏教の中において、2つに大きく類別される禅法がある。止禅と観禅である。この2者の中において、観禅は仏教に特別に存在する所の禅法であり、この禅法を修する目的は、即ち己自ら仏陀が発見し、かつ教えた所の四聖諦を体験する事である。仏教ではない宗派においても、止禅はあり、インドでは非常に多くの人々が、止禅を修している。菩薩が、未だ仏陀の境地を証していない時、2人の大禅師に師事して、止禅即ち無所有処と非想非非想処まで、学んだ事がある。後に彼はこれでは徹底的に煩惱から解脱する事は出来ないことを発見し、止禅は解脱の道ではない、と考えた。故に、2人の師から離れ、不死の道を探し求めた。そして最後に菩提樹の下で、悟りを得たのである。止禅は仏教特有のものではないものの、それでも仏教の中において止禅を教える目的は、止禅によって培われた定力を、観禅を修行する時の強固な安定した基礎とする為である。これは非常に重要である。何故、止禅を修しなければならないか？仏陀は言う：

「定のある者は真実の法を如実に知見する事ができる。」

この事が原因で、故に、我々は先に止禅から始めて定を育成し、定を通して智慧を発展・展開せしめる。この、2種に大きく分けた所の業処は、皆それぞれ固有の修行方法及び範囲がある。以下において解説する。

止と観

「止」と訳される所の「Samatha」は、「心の安寧・静寂」を意味する。専門用語では、「止」であり、それは、八定の中の「心一境性」に定義されるが、それは即ち、経教の法による所の四色禅（初禅、二禅、三禅、四禅）及び四無色禅の、一境性心所である。普通の、一般的な一境性をレベルアップすれば、定になる。一般的な心一境性は定とは呼ばない。不善心の中にも心一境性は存在する。心一境性は、遍一切心心所である。心一境性を定のレベルまで、引き上げて初めて、止と呼べる。これらの定 (Samādhi) が、止と呼ばれるのは、心一境性が、心の戸惑い又は驚愕（の現象）を平息するからである。「観」と訳される所の「Vipassanā」は、「各種の異なる方面から照見する」と解釈される。例えば、五蘊を、内部の、外部の、過去の、現在の、未来の……と、異なる方面から照見するのである。「観」は直接、諸々の究極法の無常、苦、無我の三相を照見するものである。もし、今発生している現象のみ知っていて、その無常、苦、無我を照見する事がないのであるならば、我々は観の修行をしているのだとは言えない。観は、諸々の究極法の真実の本性を明らかにする様に導く所の慧心所の作用である。故に「観」は、慧心所の作用であると言える。それは、諸々の究極法の真実の本性を透視し、照見する事が出来る。この章〈業処の概要〉は、《清浄道論》全体の概要である。更に詳しく知りたいと思う者は、《清浄道論》を参考されたい。

止の概要

止禅には、合計40種の業処がある。止業処の概要の中には、7つのグループがある：10の遍、10の不浄、10の随念、4の無量、1の想、1の分別、4の無色である。以下に解説する。

十遍

地遍、水遍、火遍、風遍、藍（青又は褐色）遍、黄遍、赤遍、白遍、虚空遍、光明遍。

遍（Kasiṇa）の意味は「全部」又は「全体」で、この様に呼ぶのは、その似相を十方無辺の処まで拡大しなければならないからである。地遍を修習する時、禅修行者は、直径30センチ程の円盤を用意する。その中に黎明色の土を満杯に詰める。その上で、表面を平かにする。これが即ち地遍円盤であり、地遍を修習する時の遍作相とする。円盤を己から1m程離れた所に置き、目を見開いてこれを凝視し、かつ、それを「地」「地」として、観察する。その後目を瞑る。もしその時に、あなたの心中にその地が出現したならば、これを遍作相と言う。

もう1つ別の方法は、土地のある場所に行って、そこで1個の丸を描く。上部に木の葉、木の枝などがあってはならない。土を平にし、その後に立って「地」「地」と観察する。これを取相と言う。次に目を瞑る。その時にあなたの心に、地が出現したならば、これを遍作相と言う。これで、あなたは座禅堂に戻っても良い。もし、出現しないのならば、目を開いて、引き継ぎ観察する。座禅堂に戻ったならば、地の遍作相があなたの心流の中に顕現する。もしそれが消失したならば、戻って引き継ぎ地を観察する。己の目の前に1個の円盤を造るならば、いちいち戻らなくても済むので、その様にするのを勧める。目を瞑っても遍作相が顕現しないのであれば、目を開いて再度相を取る。それを、心流から消えなくなるまで精進する。ゆっくりと徐々に、我々の定力は深くなって行く。その後、地の遍作相を十方世界に拡大する。身体が地に顕現する事も含む。最後に、注意力を小さな点に置き、再度「地」「地」と作意する。この様にして初禅に入る。方法は簡単であるが、実際の修習には一定程度の時間が必要である。

もし、水遍を修習するならば、一桶の清らかな水（波立たない、静かな水）を用意する。それを「水」「水」と観察する。もしあなたの心流に顕現しないならば、目を開いて相を取る。水遍を観察する時、水の冷たさに注意を払ってはならない。その様にすれば、あなたは寒くて震えが来る。水が顕現したならば、これが遍作相である。定力が安定した後、それを十方に拡大する。全体が水になるまで。その後、注意力を1個の小さな方向に集中させ、「水」「水」と作意する。定力が安定したなら、初禅に入る事ができる。

もし、火遍を修習するのであれば、焚き火を作る。その後に、皮か布に穴を開けて、穴を通して火（これは取相である）を凝視し、「火」「火」と観察す。又、以前見た事のある火災、己の記憶の中にある火が燃えている現象を使って、それを取相としても良い。

風遍の修習をする禅修行者は、窓か又は壁に空いた穴から吹いてくる風、又は梢の風に専注して、それを「風」「風」と観察する。もし、色遍（4個の遍）を修習したいのであれば、上に述べた大きさの円盤を用意し、褐色、黄色、赤又は白色に塗る。又は褐色、黄色、赤又は白色の布を用意して、直接円盤の上に被せて、それを自分の目の前に吊るす。次に心の中において、その色彩を黙念し、それに専注する。又、ある種の色を持つ花を目標とする事もできる。古代に遍の修行をした事のある人は、赤い花を見るや否や、例えば、赤いバラ等、すぐに相を取る事ができる。花の赤を取り、そのまま、立って禅定に入る事ができる。これは彼の前世の波羅蜜で

ある。パオ森林僧院の修法では、もし、すでに安般念四禅まで修している人ならば、三十二身体部分の血の赤さを見て赤遍に入る事ができる。尿の黄色から黄遍に入る。白骨を取って白遍を修する事もできる。初めは、骨を観察し、それを白色であると作意する。骨は消えて、白色だけが残る。その後、白遍を十方世界に拡大する。最後に、注意力を一定の方向に固定的に向け、「白」「白」と作意し続ける。これで初禅に入る事ができる。褐色遍を修するならば、頭髪の色彩を取る事ができる。光明遍を修したい禅修行者は、月光又はゆらぎのない灯火、又は地上に映る光、又は壁の隙間から漏れ出て、もう1つの壁に映る光に專注する事ができる。光を見ながら「光明」「光明」と黙念する。目を閉じた後でも、光が出現するならば、作意するのを開始して良い。虚空遍の修習をしたい禅修行者は、1個の直径30cmほどの丸い穴に專注する。それを「虚空」「虚空」と観察する。丸い穴を通してその先を見ればそれが虚空（視線を遮るものはない）である。我々はこれを相に取るのである。遍処は五禅まで到達する事ができる。全ての10遍は皆、五禅に到達する事ができるのである。

10不浄

不浄観の事である。死体の腐乱する異なる段階を観察する。以前のインドでは、人が死ぬと、死体はお墓に捨てられた。比丘はそこへ行って、その最初の日から死体の変化を観察する。2日目、3日目、死体は膨張を始める。比丘は死体の膨張の相に対して「不浄」「不浄」と作意し、初禅に入る。幾日か経つと、死体の様子は又変化する。次は、2. 青色相になるので、彼はそこに座って青色の死体を「不浄」「不浄」と作意する。これも又初禅に入る事ができる。死体は徐々に腐乱するので、彼は又3. 膿爛相を取り、初禅に入る。その後、彼は死体の4. 断壊相を取り、初禅に入る。5. 食残相。6. 散乱相。7. 斬切離散相。8. 血塗相。9. 虫聚相。10. 骸骨相。この10種の不浄の相は、初禅に到達する事ができる。10種の不浄とは、腐乱する死体の、異なる段階の事である。この種の業処は、欲欲を退治する事ができる。この業処は、現代では修行するのが困難である。というのも、死体は火葬されるか、そうでなくとも、棺に入れられている事が多いが故に。又、誰でもが、死体を見る勇気を持ち合わせている訳でもない。

10随念

1. 仏随念：

仏陀には9つの徳行がある。

- (1) アラハン。意味は全ての煩惱を殺した人。仏陀もアラハンであるが、全てのアラハンが仏陀であるとは限らない。
- (2) 正等正覚（他人の指導を受けずに己自身で悟りを証した。）
- (3) 明行足
- (4) 善逝
- (5) 世間解
- (6) 無上士調御丈夫
- (7) 天人師
- (8) 仏陀（四聖諦を証悟している。）

(9)世尊

この中の、9種の徳行の内の1つを選んで長く思惟する。近行定に入る事ができる。仏随念は安止定に入る事は出来ない。というのも、仏陀の境地は非常に奥深く、凡夫は理解出来ない為、又、思惟する行為は、安止定を証するには、難点がある。

2. 法随念：

法の6種の徳行を随念する。法とは、世尊の、

- (1) 善く説く。
- (2) 己自ら見る。
- (3) 時間なく（すぐに、という意味）。
- (4) 見に来るもの。
- (5) 導かれるもの。
- (6) 智者が、各自で証して知る。

3. 僧随念：

聖弟子の徳行を随念する。

4. 戒随念：

己の自身の清らかで汚れのない戒行を憶念する。

5. 捨随念：

捨は布施の意味である。己自身の布施の功德を憶念する。近行定を証する事ができる。

6. 天随念：

正念を保ちながら、以下の様に憶念する：

「諸々の天神は、彼らの信、戒、多聞、布施及び智慧によってこの様な殊勝な地に生まれる事ができた。私も又これらの品德を擁している。」

己の自身の信などの功德を目標にして、正念を育成する。又それを諸々の天に証明して貰う。

7. 寂止随念：

涅槃の本質を随念する。

8. 死随念：

己は必ず死ぬのだと観察する。死亡が何時になるかは、決める事は出来ない事、死亡の時、人々は一切を放棄しなければならない事を観察する。死随念は、四護衛禅の中の1つでもある。死随念を観ずることは、精進力を高める事ができる。死亡を観想しない場合、我々は放逸になる。死亡は如何なる時にも発生するのだという事、例えば、不注意で階段から落ちたとか、食べ物を喉に詰ませたとか、何時死亡するかは、図れない。呼吸する時に、吸ってばかりいて、吐かないならば、やはり死亡する。故に、生命は呼と吸の間にある、と言う。もし、この様に考える事ができたならば、精進力は増加する。

9. 身至念：

己自身の頭髪、体毛、爪、齒、皮膚、肉、腱、骨、骨髓等32の不浄の部分を観察する。この種の観法は、己自身のと、異性の色身への貪愛を退治するものである。特に出家の衆にとっては、必修の禅修行の法門である。というのも、仏陀の時代、比丘は外に出て托鉢した。供養者は美貌の女性である事も多く、この法門を修しないならば、欲愛を引き起こして、継続して禅の修行をするのが困難になる。故に、異性の身体の32の不浄の部分を観察して、欲念を取り除く事によって初めて出家の生活が確保されるのである。

10.安般念（入出息）念：

呼吸する時に鼻孔の縁辺に接触するか又は人中に接触する所の入る息と出る息に專注する。多くの人々が安般念を修する為、以下に安般念の修習について解説する。

安般念の所縁は呼吸である。注意力は、鼻孔の中に置いてはならず、人中に置く。余りに接触点を気にしすぎてもいけない。その様にすると、心は非常に緊張するが故に。ただ、注意力を鼻孔の下のある一定程度の範囲に置いておくのが良い。もし、接触点を感じられなくても問題はない。なぜ、接触点等と言うのか？それは、注意力が呼吸と共に頭に行ったり、腹部に行ったりするのを防止する為である。故に、接触点を言うのである。もし、心が、呼吸と共に、上に行ったり下に行ったりしないのであれば、接触点を気にする必要はない。ただ、呼吸が鼻孔の前面において、入ったり、出たりするのが分かっているならばそれで良い。

次は、呼吸を観ずる時の態度について。我々の受けた教育は、目的を達成するまで、何事も全力で対応せよ、と言うものである。例えば、お金儲けは一番金持ちに、試験は一番に……等々、全て目標達成型である。この種の心理は、心の緊張をもたらすが、しかし、我々は自覚しない。というのも、それは子供の時から累積されたものであるが故に。我々は、何かをする時、本を読むのも、皆この様な傾向がある。故に、あなた方は授業を受ける時は、非常に緊張している。授業がこうであるから、禅の修行も又この様である。これは、心理的に累積された習性である。師は、常に注意喚起して初めて、あなた方はゆつくりと、この習性を手放す事ができる。そうでないならば、この心理は慣性的反応となり、本人は自覚しない。故に、観ずる時の態度は非常に重要である。私がアメリカで禅の修行を指導した時、（私が）1つの（参考）例を紹介した所、あるアメリカ人の学生が応用した為、進歩が非常に速かったのである。その例とは、以下の様なものである：

あなたは、岸边に立って川の流れを見ている。緊張する必要はない。真面目に川の流れを見ているだけで良い。ただ、気軽に自然な態度で、川の水が流れて行くのを見ているだけで良い。まさに、この様な態度で、呼吸を観察するのである。

座って、先に想像してみる：

私は川岸に座って川の流れを見ている。私の呼吸は、この川の流れと同じである。自然な、リラックスした心でもって、川の流れを見る様に、同じ態度で、呼吸を観察する。このアメリカ人は、初めて10日禅に参加したのであるが、6日目には、すでに半時間以上、專注する事ができる様になった。7日目には、彼の禅相が出現しただけでなく、心全体が吸い込まれる様な感覚を得た。これは非常に良い境地である。私は、なぜこの様に進歩が速いのかと、問うてみた。彼が言うには、彼は私の説明をよく覚えていて、活用したのだ、との事であった。この様に、定の修行は、リラックスした態度で実践するのが良いのである。

呼吸の冷たさと熱さに注意を払ってはならない。冷熱は、火界に属するが、もし長時間呼吸の冷たさ熱さに注意を払うならば、四界分別観の修行になってしまう。これは間違いである。初めは、呼吸の入ると出るだけに注意を払う。

次の段階において、呼吸の長短に注意を払う。次は、呼吸の全体に注意を払う。もし、呼吸の入り、出るのみに注意を払い続けるならば、深く入定出来ない。故に、呼吸の始まり、中間、終わりに注意を払う。しかし、余りに造作してはならない。一切は自然でありたい。もし、心が、密接に、呼吸の開始、中間、終わりに注意を払うならば、妄念は出にくい。呼吸の開始、中間、終わりは皆、鼻の同じ場所にあるべきで、呼吸に従って上下してはならない。

この様な心は静まり易い為、我々の定も又比較的深くなる。この3つのステップは、安般念を修行する時には、覚えておくべきものである。

もし、妄念が多く出て来るならば、息を数える。息を数えるのは、妄念を克服する良い方法である。入る、出るで、1。入る、出るで、2。入る、出るで、3.....もしこれを面倒だと感じるならば、未だ禅修行の楽しさを知らないのである。実際、もし、呼吸の長短に注意を払う事ができるならば、即ち、この息は短い、この息は長いと知るならば、呼吸の全体（始まり、中間、終わり）も知っているのである。もし、呼吸の始まり、中間、終わりを知らないとしても、余り気にし過ぎる必要はない。呼吸は時には長くなり、とき短くなる事を知っていれば良い。

定力の良い時、光は非常に早くに出て来る。光が出て来た時、ある種の修行者は、驚いてしまい、そのために、光は消えてしまう。故に、光が初めて出現した時、あつと言う間もなく、消えてしまう。光が出現すると、通常は、皆非常に興奮し、期待感も高まる。これも又心の慣性である。心が激動し始める時、七覚支の中の軽安、捨、定を用いて退治する。光もまた因縁の法であり、我々が望めば出て来るものではない。例えば、果物を植えるにしても季節があり、まだ結実の時期が来ていないのであれば、いくら懸命に水をあげても、果物は成らない。故に、光に対する期待を放棄しなければならない。以下の様に己に告げる事：

「光は出てくる時には出てくる。出て来ない時には、どう頑張っても出て来ない。」

この様に（光への期待を）放棄する。この事も非常に重要である。あのアメリカの禅修行者の様に、7日目の光は非常に強くて、心全体が吸い込まれるかの様であった。彼は一面ではとても興奮し、一面では非常に恐れた。そのため、次の日に、再度光が出る様に努力して待ったが、光は二度と出て来なかったのである。彼は心の中で思った：「2、3日努力したものの光は出て来ない。放棄しよう！」放棄すると、光は再度出て来たのである。修行はこの様にあるのが望ましい。一切は自然に任せる事。あなたの心が激動し、光に期待するのは、心の不純、不浄を表す。煩惱があれば、当然、光は出て来ないのである！

4無量

四無量心とは、慈、悲、喜、捨である。4無量が「無量」と呼ばれるのは、禅の修行の時、必ず心を十方の一切の無量の衆生にむけ、遍満しなければならないからである。それらは又「梵住」（Brahmavihāra）とも呼ばれる。というのも、梵天界の諸々の梵天の心は、常にこの境に安住しているが故に。

1. 慈：

一切の衆生の幸福と安楽を願う。慈は瞋根を取り去る一助になる。慈、悲、喜と捨の所縁は衆生である。慈心禅は安楽なる衆生を所縁に取り、安楽なる衆生に慈心を送る。彼に精神的な苦痛のない様に、身体的な苦痛がない様に、瞋根のない様に、平安に日を送れる様にと願う。合計4句あり、どの句をもってしても、三禅に到達点する事ができる。最初、我々は先に己自身に慈愛を送る。5分か10分の後に、2番目の対象を選ぶ。あなたが尊敬する人（執着ではない）を選ぶ。父母を選ぶのは賛成しない。又己と同一の性の人を選ぶ事。異性を選ぶと愛欲が生まれ易い。というのも慈愛は愛欲と非常に近いが故に。

《清浄道論》にこの様な話がある。ある居士が比丘について、慈心禅を修行した。比丘は

彼に異性に慈愛を送ってはならない事を、教えるのを忘れたので、彼は己の妻を対象にして慈愛禅を実践した。その結果、欲愛が生じて、彼は妻の寝床を常に恋しがらる様になってしまったのである。

慈愛は、すでに往生した衆生（死者）を所縁に取ってはならない。というのも、彼はあなたの慈愛を受け取る方法が出来ないが故に。

慈愛の力は非常に大きい。私はある時、マレーシアにて、1人の出家者と1人の女性居士と共にいた。居士は、我々2人の出家者に対して非常に非礼であった。話し方は粗野で無礼で、このまま一緒にいると、彼女が多くの不善業を重ねるだけでなく、我々も不快である。その為、私は瞑想の時、彼女の相を取って彼女に慈愛を送った。その時、私は、己自身の不快を取り除こうとしただけで、彼女を変えようなどとは考えていなかった。20分か30分が過ぎて、私は下座して部屋に戻ろうとした所、この居士は2人分の品物を用意して供養してくれたばかりでなく、ひざまずいて我々に布施を捧げたのである。誠に不思議でありました！これ以降、彼女の態度はまるで別人の様であった。この体験から私は、慈愛禅への信頼が揺るぎのないものになったのである。

我々の尊敬する人を対象に取る時、非常に速く慈愛心が生じる。成功したならば、次は、比較的中立的な対象（特別な感情を持たない人、偶に見かける人）を取る。

成功の後、我々は怨敵を対象に取る。もし、慈愛心を怨敵に送って第三禅に到達する事ができるならば、世界には我々を傷つける人は存在しなくなる。

この後、我々は、我、尊敬する人、中立的な人、怨敵というこの4種の衆生への限界を取り除かなければならない。この4種の衆生に対して、差別のない平等の慈愛を送る。彼は敬愛される人物故に慈愛を多めに送。怨敵には少な目に送るなどはしない。もし、この様に実践できるならば、限界を取り除いた、という。安般念を修行する時、先に5分から10分程の慈心禅を修するのを提案する。この様にすれば、心は比較的柔軟になり、その後に安般念に転じれば、心はリラックスできる。

2. 悲：

苦痛の中にある衆生を対象に取る。他人が苦痛の中にあるのを見て、心は忍ばず、我々は、支援の手を差し伸べて、彼が苦痛から抜けられる様に願う。もし、我々の支援が成功しないで、彼と共に泣いてしまうならば、それは悲ではなくて、瞋である。悲心も又三禅に到達する事ができる。

3. 喜：

他人の成功や富裕を随喜する。他人への敬いの態度であり、他人の成功への嫉妬や不満を取り除く事ができる。実は、喜は修行し易いのであるが、しばしば、忘れ去られるのである。誰かの成功を見た時、それが世間的な事業であっても、出世間的な成就であっても、彼の功德に随喜する事は、我々自身にも法の喜びをもたらしてくれる。というのも、他人の功德は、自分のものと同じである。人がこの様な苦勞をして成功した結果、我々に祝福される。この修行は非常に良い法門である。随喜の所縁は、何かの方面に成功した人物とする。例えば、初禅に到達しない禅修行者は、ジャーナに成功した人を随喜する。嫉妬してはならない。ジャーナに到達する人は、多くの世においてそれを修行して来たので、今世は比較的容易に成功するのである。過去世で彼は勇猛に精進した。あなたは、ままごとをして遊んでいた。彼と自分を、

比べてはならない。

4. 捨：

梵住に属する捨は、執着がなく、嫌悪もなく平等に他人に対応する心境の事である。平等な態度が、主要な特徴である。捨に到達する為には、先に慈から開始し、その後に悲と喜を（修）する。慈と悲と喜は、三禪に到達する事ができる。その後に三禪から直接捨に入り、四禪に到達する。ある時、禪修行者は師に尋ねる事がある：

「私は今捨を修している。初禪、二禪、三禪、四禪から捨に来ました。」

師は笑う：

「本当に？」

捨には、喜は存在しない。初禪、二禪、三禪共に喜と楽が存在している。どうして捨と共存でき様か？《アビダンマ論》によると、慈、悲、喜は四禪に到達する事ができる。捨は五禪である。

1想

食厭想の事。食事の厭な一面を省察して後、生起する所の想。例えば、食を求め探す苦、食べる事、消化、排泄と時の不浄を省察する。古では、比丘は1日1度しか食事しなかった。彼らは、ただ1回の食事の為に、太陽の下、裸足で歩いて托鉢に行き、路上では石につまずくかも知れないし、藤の蔓に絡まって、怪我をするかも知れない。故に彼らは、食べ物を探す事への苦痛を省察して、食べ物への貪を取り去った。彼らは、全ての食べ物を1つの鉢に投げ込んで、食べ物に対する分別心を起こさず、食べ物への執着心を取り除いた。彼らは口に入れた食べ物を吐き出して、それを確認し、再度食べる事ができるかどうか考えた。この様にすれば、食べ物に対する食厭想が生まれ、食べ物に執着しなくなる。出家者は、時には食べ物はただの四大で出来ているに過ぎない事を省察しなければならない。食べる前は美味しそうでも、汚い身体に触れた後、排出されるのは臭気フンポンである。人がトイレから出てくると、笑顔で迎えられる事はない。というのも、不浄であるが故に。こうした事から、出家者は思惟しなければならない：

「食べ物はもともと清潔であったが、汚い身体に触れた後、同じ様に汚くなってしまった。」
この様に思惟した後、食べ物に対して嫌悪を生じ、食べ物に対して、余り執着しなくなる。食べ物への執着は取り去るのは非常に困難であり、1個の障碍である。仏陀の時代、弁才第一の女性の外道がいた。彼女は砂の上に木の枝を1本立てて、もし彼女に挑戦したい人がいたなら、その枝を抜く様にと言った。ある時、シャーリプトラ尊者が枝を抜き、彼女は尊者に非常に多くの問題を投げかけた。尊者も又1つ1つ回答した。その後、尊者は彼女に問うた：

「一とは何か？」

これ程簡単な質問に弁才第一の彼女は答える事が出来なかった。答えは：

「食べ物。というのも、民は食を天となしているが故に。」

後に、彼女は尊者を師として従った。食べ物は非常に重要な一節である。我々の色身は食べ物を段食として生存し、依存している。故に、食べ物への貪を取り除くのは、容易ではないのである。

1分別（四界分別観）

2種の修法がある。1つは簡易的なもので、もう1つは詳細なタイプのものである。

パオ・サヤドーの教えられるのは、簡易法である。仏陀は言う：

「あなたが身体を省察する時、それがどの様な格好であろうとも、行、住、座、臥、皆四大で構成されているものである（事を知れ）。」

仏陀が初め四念処を開示した時、人々の智慧は相当に高く、仏陀は手短かに説明しただけであったが、彼らは即座に理解したのである。我々は仏陀の時代から2500余年離れ、智慧は当時の人々より劣る。身体は四大で出来ていると聞いても、何が地、水、火、風かは、全く知らないでいる。人々は、《アビダンマ論》を読んで後、ようやく理解するのである。故に経と論、2者相互に補完し合わなければならないのである。詳細な修法は、シーヤリプトラ尊者が、《大象足跡経》の中において説明している：

「地は2つに分ける事ができる。外部のものと内部のもの。身体内部にあつて邪見及び貪愛に執取されている所の全ての硬いもの、粗いもの、これを内部の地と呼ぶ。頭髮、体毛、齒、爪、皮膚、肉、腱、骨、骨髓、腎臓、心臓、肝臓、筋膜、小腸、大腸、胃中物、脾臓……等々20種であり、皆、硬いか粗い特徴を持つ（硬さ、粗さが特に顕著である）。故にこれを地と呼ぶ。」

この種の観法は、比較的詳細であり、又容易に観ずる事ができる。ただ必要とされる時間は比較的長い。我々が頭髮、体毛等々を観ずる時、硬さと粗さの特徴は顕現する。水とは何か？例えば、よだれ、血液、汗、痰、尿など。これらを観ずる時、流れるという感覚が出現する。火は、我々の身体の温度を保つもので、胃中の火、病の時の発熱の火等々。風には、上向きの風、下向きの風等々、がある。

4無色

4個の無色禅の事である。

1. 空無辺処
2. 識無辺処
3. 無所有処
4. 非想非非想処

以上、我々は40種の業処の説明を終えた。次は性格について説明する。

性格

性格は合計6種ある。

1. 貪行者
2. 瞋行者
3. 痴行者
4. 信行者
5. 知識行者（覚行者）
6. 散漫行者（尋行者）

「性格」又は「習性」は、個人の本性を指して言う。個人の自然的な態度と行為によって現れた性格の事。過去世になされた業が異なる為、人の性格も又それぞれ異なる。性格はどの様にして作られるのか？6種の色塵が、色根を衝撃する毎に、毎回の反応が貪であるならば、久しくして、貪行者の性格が育成されてしまう。これは、長い長い輪廻の中において蓄積されたものである。1回毎の反応が皆瞋である時、徐々に瞋行者の性格が育成される。もし我々が、毎回それを無常、苦、無我として観ずるならば、知識行者になる事ができる。これを習性と言う。6種の性格の内、貪行と信行者は、同等の一对である。というのも、この2者は、目標に対して好感を持つからである。貪は、どの様な目標に対しても好感を持ち、信は何でも信じてしまう。共に好感を保持している為、2者は一对であると言う。同様に、瞋行と知識行者は、同等の一对である。というのも、瞋は、不善の方式で目標を嫌悪し離れ、知識は、真実の過患を発見する事を通して、目標から遠く離れるが故に。我々が、一切の法は、無常であると見るとき、一切法は、皆過患である事を知り、故にそれから厭離する。痴行と散漫行は、同等の一对である。というのも、痴行者は、配慮が浅く惑う為、散漫行者は、憶測ばかりして同じく惑うからである。40種の止禅業処の中で、どの行者が、どの業処を修するのが良いか？業処を選択する時、これを考えるのは非常に重要な事である。まず、己はどの性格であるか研究する。基本的には（1人の人間の中に）全て（の性格が）含まれるが、しかし、その中の1つが、特別に強烈であるなら、我々は、それを己の性格と認める。性格は、話し方や、食事とも関係がある。1人の人間が、喋り方が非常に速い時、通常は、瞋と覚行者共に含むと考えられる。彼は智慧が非常に速い為に、のんびりしていられず、他人がのんびりしていると、容易に瞋を起こす。

今、40業処と性格の関係性を見てみよう。10遍（10個の遍処）は第五禅（安止定）に到達できる。この6種の行者全員に適合するのは、地、水、火、風遍。瞋行者は、青色、黄色、赤色、白遍である。光明遍と虚空遍は全ての行者に適合する。10不浄（死体の腐乱を観察する）は、貪行者に適合する。10念の中の仏随念、法随念、僧随念、戒随念、捨随念、天随念の6は、信行者に適合する。死随念は難しいが、覚行者に適合する（智慧のレベルが高い人）。寂止随念は、涅槃を観ずるもので、智慧のレベルが高い覚行者に適合する。身至念（三十二身体部分の観察）は、貪行者に適合する。安般念は、痴行者、尋行者（散漫行者）に適合する。四無量心は瞋行者に適合する。我々がもし、瞋が非常に強い事を発見したならば、日常生活の中において、慈・悲・喜・捨を多く修するのが良い。四無色定は全ての行者に適合する。食厭想は覚行者に適合する。四界分別観は、究極法を観察するもので、覚行者に適合する。

修行の道において、もし、法門を選び間違えたならば成就に、非常に時間がかかる事になる。仏陀の時代、ある人がシャーリプトラ尊者の下で出家した。尊者が神通力で彼の過去世を見ると、彼は500世において、錬金術士であった。金は非常に美しいものであるから、尊者は彼を貪行者とみなし、不浄観を修行して、貪愛を退治する様に指導した。この弟子は雨季の3ヶ月の間、何らの成果もなかったのが、傷心して還俗しようと思った。尊者は彼を仏陀の所へ連れて行った。仏陀は尊者に言った：

「安心したまえ。彼は今夕にもアラハンを証するであろう。」

仏陀は、彼が金を好きな事を知って、それは美しい所縁が好きな事を意味した。不浄観は彼には相応しくないのである。故に、仏陀は彼に赤遍を修行させた。美しい蓮の花を作り、その赤い色を所縁として修行した所、彼はいきなり四禅に入ったのである。仏陀は蓮の花を枯らしてみせた。

彼は蓮の花がいきなり枯れたのを見て、強烈な無常感が生じた。過去世の観智が再び出現したので、仏陀は彼に引き継ぎ観ずる様にと云った。結果、彼は夕方にはアラハンを証したのである。この事から、己に相応する法門を選ぶのは非常に重要である事が分かる。しかし、どの法門が、己と適合するのであろうか？仏陀の時代、智慧第一であったシャーリプトラ尊者でさえも弟子に不都合な法門を与えていたのであるから、現代の教師が、あなたに適合する法門を与えてくれると期待してはならない。世界で、仏陀以外に、あなたにどの様な法門が適合するかを知る人はいない。しかし、仏陀はすでに涅槃に入られた。故に、唯一の方法は、先生が教えた法門で何ヶ月か修行してみて、進歩がないなら法門を変えてみる。最後には、己に適合する所の法門に出会うであろう。何をもちて比較的相応する、と言うのであるか？修行してみて比較的安楽なもの、比較的リラックスできるもの、比較的内定し易いもの。安般念に執着しない事。安般念は誰にも適合する訳ではない。

10不浄の修行では、初禪に到達する事ができる。仏随念、寂止随念は近行定にしか到達出来ない。というのも、2者の法門は、非常に強い尋を擁している為、例えば仏陀の功徳を思惟し続けるなど、心一境性を安止定のレベルまで高める事が困難であり、結果、近行定にしか到達しない。身至念（三十二身分）は初禪に到達する事ができる。安般念は5禪に到達する事ができる。四無量心（慈・悲・喜）は《アビダンマ論》に基づく所の、第四禪にしか到達出来ない。捨無量心は直接第五禪に入る事ができる。四無色定の全ては第五禪であり、又、遍作定、近行定、安止定に到達する事もできる。食厭想は近行定にしか到達しない。四界分別観は、地、水、火、風を観ずるもので、目標が比較的多く、心一境性は、安止定のレベルに到達出来ない。近止定には到達する。全ての業処に似相がある訳ではない。似相は遍処（10遍）、10不浄、身至念（三十二身分）と安般念、例えば、身至念で白骨が出現した時、これは似相である。安般念の透明で、明るい光は、鼻孔の下部に出現するが、これは似相である。似相を通して、近行定、安止定が生起する。四無量心、四無色定、食厭想、四界分別観も又似相は出現しない。

表X: 40業処の総覧表（P273の別表参照）

禪相

3種の禪相（Nimitta）の内、通常、一切の業処は適切な方法によって、遍作定相と取相を獲得する事ができる。しかし似相は、遍処、不浄、三十二身分、安般念にしか出現しない。似相を通して近止定と安止定が生起する。近行定が安止定に進入した後、禪定に入るが、この時、色界初禪が証せられる。この後に初禪の五自在を修習する。五自在は必ず修習する事。仏陀は言う：

「人が初禪を証した後、五自在を修習しないで、第二禪に入ったならば、彼は初禪を失うし、第二禪も証する事ができない。」

五自在とは、

1. 転向自在
2. 入定自在
3. 決意（住定）自在

4. 出定自在

5. 省察自在

である。その後に（五自在を完成させた後に）、尋などの比較的粗い禅支を捨て、伺などの比較的細かい禅支を育成し、己の能力に合わせて順次第二禅などに進む。

1. 転向自在：

心の欲するに従って、簡単迅速に、尋、伺などの禅支を転向せしめる能力。

2. 入定自在：

簡単に、各種のジャーナに入る能力。かつ、入定の過程で、非常に多くの有分心を生起しない事。何時でも入定できる事。座るや否や即刻入定できる事。

3. 決意（住定）自在：

己の決めた時間の間、入定する能力。また正式に入定していない時点で、先にどれくらいの時間入定するかを決める（例えば、3時間、5時間など）。そして、注意力を似相に戻し、初禅に入る。己の決意に基づいて、決めた時間が経過した後、自動的に出定できる事。

4. 出定自在：

簡単に又迅速に、禅定から出て来る能力。ある種の人々は、一度禅定に入ると、出定を知らず、定が出来ない。これは不都合である。仏陀の時代、時には仏陀が比丘達を招集する事がある。この時、サンガの会議に参加出来ないのは不可である。定に入って出てこれないのは良くないのである。必ず出定自在の練習をする事。

5. 省察自在：

出定の後、先程入定していたジャーナへの考察をする能力。

神通

神通は5種ある。神変通（如意通）、天耳通、他心通、宿住随念及び天眼通。神通を修習したいならば、必ず先に四禅八定を修しなければならない。その後に、14種の行法を修する。非常に速く、飛禅ができなければならない。初禅から無色禅へ、無色禅から初禅へと飛ぶ。その速度は非常に速くなければならない。修行は非常に難しい。1万人いて、成功するのは、1人くらいである。特に、神変通は、更に難しいものである。宿住随念及び他心通は、比較的容易に修習出来る。《清浄道論》では、神通を現す過程を以下の様に説明する。：

「彼は神通の基礎となるジャーナに証入する。次にそのジャーナから出て、その後に、もし彼が百の身体を顕現したいのであれば、以下の様に予備に成す『我に百の身体に変えん』。その後に、再度、神通の基礎となるジャーナに入り、出定して、かつ、決意をする。そうすれば、心が決意するのと同時に、百の身体になる。」この時、この人間全体は消えて無くなり、その後に、何処か別の場所（例えばアメリカ）に、出現する。まさに、天神が天界で消失して、人間界に現れるのと同じである。故に、神変通と呼ぶ。

1. 神変通：

色々な種類がある。例えば、一身が百身になるもの。仏陀の時代、チューラパンタカと言う人がいた。彼は非常に愚かで、仏陀の教える1句さえ覚えられない。彼の兄はアラハンで、もう彼を教えるのが嫌になった。彼は非常に悲しんだが、この時仏陀が彼に1枚の布を渡した。それで己の身体を拭いて「不浄、不浄」と観察した。彼はこの布が白色から黒色に変わるのを見て

観智が熟し、アラハンを証し、かつ、神変通を擁したのである。ある時、サンガ全体の比丘を招いて、食事の供養がなされた。居士が食べ物を仏陀の鉢に入れようとした時、仏陀は手で鉢に蓋をした（食べ物を受け取らない意思表示である）。居士が尋ねた：

「どうしてお受けにならないのですか？」

仏陀は答える：

「1人の比丘が寺院に残っていて、まだ、供養の品を受け取っていない。」

その為、彼らは人を派遣して寺院に行かせ、チューラパンタカを食事に招こうとした。チューラパンタカは彼らが来る前に、1千のチューラパンタカになっていて、居士はどれが本当のチューラパンタカか、判断できなかった。これが神変通である。1個の身体が、1千個になる事ができる。神変通は、又如意通とも呼ぶ。心の欲するままに、顕現したり消失したり、壁抜け、遁地、水上歩行、天空を舞う、月日を触る、梵天界に行く、などの事が、できる。水上を歩くのは、彼が水をば、地遍に変えているからである。彼は水の上を歩いているのではなく、地を歩いているのである。我々には、彼が水の上を歩いている様に見えるだけである。空を飛ぶのも同じ原理で、彼は虚空遍か風遍に入るのである。

2. 天耳通：

遠い所、近い所の、粗い又は微細な音声を聞く事ができる。

3. 他心通：

多人の心の思いが分かる。又、他人の心境が直接分かる。

4. 宿住随念：

非常に多くの過去世を思い出す事ができる。その出来事が、どの世の事であるか、詳細に思い出す事ができる。この種の神変は、輪廻に対して嫌悪を生じるのに良い役割を果たす。というのも、己の過去世、どこで生まれ、名前は何で……死後、又別の1世に生まれ、又死亡し……。長い輪廻の中において、あなたはその始まりを見つける事はできない上に、今になっても、輪廻は終わらない。どれも似た様に、生まれて死んで、生まれて死んで…。梵天であっても、生死から逃げられない。地獄でも生死はある。我々は、生死が不断に続くのを見れば、自然に、輪廻に対して倦み飽きる。仏陀の時代、その大弟子の内、ヤソーダラが宿住随念優秀者であった。

5. 天眼通：

天界又は地界などの遠近の状況を見る事ができる。天眼通の中には、「生死智」も含む。

即ち、諸々の有情がどの様な業で死んで、何処へ生まれ変わったかと言う事を直接知る事ができる。この神通も又我々の、因縁果報の理解をする助けになる。仏陀の大弟子の中で、天眼通第一はアヌルッダであった。仏陀が横になって涅槃に入ろうとする時、アーナンダがアヌルッダに聞いた：

「今、仏陀の様子は如何に？」

アヌルッダは、彼の天眼通でもって、アーナンダに告げた：

「仏陀は、今初禅に入り、二禅に入り、三禅に入り、四禅に入り、又四禅から三禅、二禅、初禅と飛んで、涅槃に入られた。」

これらの神通は、皆世間に属する。仏陀は、神通を擁する弟子が、軽はずみに神通を使うのを諫めた。仏陀は言う：

「もし、弟子が軽はずみに神通を使うならば、それはまるで女性が軽はずみに己の胸を見せるのと同じである。」

ある種の特種な要因のある時以外、例えば、モッガラーナ尊者は、時々地獄に行つて尋ねた：

「何故あなた方は、地獄に生まれたのか？」

又天上に行つて尋ねた：

「何故あなた方は天上に生まれたのか？」

その後、人間界に戻つて来て、人々に、善なる行いは天に生まれる因縁、悪の行いは地獄に生まれる因縁になる事を解説した。彼がこの様にしたのは、衆生が悪をやめて善なる行為をするのを支援したかったからである。世の人々は、神通のある人を崇拝するが、実は、最高の神通は漏尽通である。4個の漏が全てなくなる、これはアラハンの境地である。神通のある人を崇拝し過ぎてはいけない。煩悩を断ち切つた人を崇拝しよう。

デーヴァダッタは、5個の神通を擁していたが、彼は現在、阿鼻地獄にいる。神通はあなたを助ける事はない。ただ、煩悩を断じ除く事だけが、我々を解脱させてくれる。経典では、6番目の神通に言及している。即ちそれは、観禪の修習を通して証得する所の出世間「漏尽智」である。

清浄の段階

観業処の、清浄の概要は7ある：

1. 戒清浄
2. 心清浄
3. 見清浄
4. 度疑清浄
5. 道非道智見清浄
6. 行道智見清浄
7. 智見清浄

この七清浄は、順序に従つて（修行し）、成就する。1つ1つのレベルは、更に上のレベルへの基礎になる。

1番目の清浄のレベルは、三学の内戒学に相当する。

2番目の清浄のレベルは、定学に相当する。高レベルの5個の清浄は、慧学に相当する。

先の6個のレベルは、世間に属する。最後の1個は、諸々の出世間道に属する。

1. 戒清浄 (Sīlavisuddhi) :

4個の清浄がある。

- (1) 別解脱律儀戒 (Pātimokkhasamvarasīlam) :

別解脱は、比丘が守らなければならない基本的な戒。この戒は、軽重異なる227条ある。

完全に別解脱を守る事を「別解脱律儀戒」と言う。

- (2) 根律儀戒 (Indriyasamvarasīlam) :

正念でもつて諸々の根を守る事。外縁に会う時、喜ばしい所縁に心が執着しない様にする。

又、喜ばしくない所縁に対しても心が排斥しない様にする。例えば、我々の正念が安般念である時、喜ばしいもの、喜ばしくないものにかかわらず、どれも皆、我々の心に影響しない。というのも、心は1個の業処に縛り付けであるが故に。

(3)活命遍淨戒 (Ājīvapārisuddhisīlam) :

比丘が生活に必要な品物を得る方式の事。彼は、比丘に相応しくない方法で、必需品を獲得してはならない。信者が供養して初めて、比丘は受け取る事ができる。もし、信者が供養しないならば、比丘は自分から先に口に出して要求してはならない。

(4)資具依存止戒 (Paccayasannissitasīlam) :

比丘は、衣・食・住・薬の4種の資具又は必需品を使用する前、それらを利用する正確な目的を省察する。例えば、袈裟を使用する正確な目的は、身体を保護して、風に吹かれない様、日に晒されない様、蚊や虫に刺されない様、隠れ家を覆う等々である。食べ物の正確な目的は、色身を滋養して、我々をして修行出来る様にするためである。壮健、傲慢、美しさの為ではなく、飢餓の苦しみを避ける為である。又、暴食して、別の苦しみを引き起こしてはならない。毎回食事する度に、この様に思惟する事。

2. 心清淨 (Cittavisuddhi) :

2個の定を含む。即ち、近行定と安止定。即ち、止禪である。

3. 見清淨 (Ditthivisuddhi) :

特徴、作用、現象と近因に従って、名色の識別をする。見清淨は人々の「永恆なる我」の邪見が、清らかになる様に支援する為、この様な呼び名がある。所謂、人というのは、ただ因縁和合の下に生起した所の、名色法の組み合わせに過ぎない。それらの内部又は後ろに、1個の主宰者としての我が存在している訳でない(事が分かれば)、この段階における清淨に到達する事ができる。この段階は「名色分別智」(最初の觀智)と言う。というのも、名色法の特徴などに従ってそれらを区分けしていくが故に。名の特徴は、所縁に傾く傾向を持つ。色の特徴は、冷たさ、熱さなどの影響を受けて破壊される事。例えば、受の特徴、作用、現象、近因を研究した後、受は1個の我ではない事を知る。同様に、思は1個の我ではない、想は1個の我ではない.....この様にして、見清淨に到達する。

4. 度疑清淨 (Kankhāvitāranavisuddhi) :

名色の諸々の縁を識別する。我々は、見清淨の段階で、名と色を識別した後、更に一步進んで、名と色は何故生起するのかを理解しなければならない。度疑清淨は、それが、過去、現在、未来の三時の名色の名色法の諸々の縁に対する疑惑が取り除かれる為に、この様に呼ばれる。縁起の智により、現在の名色の組み合わせを識別する事を通して、それが意味もなく生起するのではなく、又、万能の神が造るものでもなく、靈魂のせいでもなく、過去世の無明、愛、取(行)と業が原因で、生起するのだという事が分かる。同じ法則を活用して、過去と未来(の名色の諸々の縁)を識別する事もできる。この段階は「縁摂受智」と言う。無明が生起すると、それに伴って、愛と取が必ず同時に生起する。行と業は同じ意味である。善と悪の業を造すその時、それを行と呼ぶ。そしてエネルギーが残留するが、それを業(業力)と呼ぶ。名色は5個の原因で生起する。「縁摂受智」も又、七清淨の中の度疑清淨(に属す

るもの)である。

5. 道非道智見清淨 (Maggāmaggañānadassanavisuddhi) :

三地における行法及びその諸々の縁を識別する時、それらを過去 (と現在と未来) の五蘊等のグループに分ける。その後、世、相続、刹那に依り、思惟智によって、それらの行法の三相を觀照する：壞滅するが故に無常、畏怖があるが故に苦、實質がないが故に無我。その後、縁と刹那に依り、生滅智でもって (それら行法の) 生滅を觀照する。

(1) 三地 :

欲界、色界、無色界を指す。諸々の行とは、諸々の行法の事であり、名色法を含む。皆、有為法である。世に依るとは、時間の長い事を言う。縁と刹那に依って、行法の生滅を觀照する。この様に修行する時、光明、喜、勝解、輕安、策励、樂、智、念、捨と欲などの10種の觀の染が生じる。道非道智見清淨は、光明等を識別する (働きの持つ) 觀の染を (修行の) 進展の障害とし、道と非道の區別を付けるという特徴を持つ。

(2) 諸々の行を、蘊等のグループに帰納する :

思惟智の育成の準備段階。即ち、名色法の三相を觀照して、觀を修する段階。まず、過去、未来、現在、内、外、粗い、微細、劣る、勝る、遠い、近いの色法を皆、色蘊として帰納する。同様に、一切の受、想、行と識をそれぞれの蘊に帰納する。即ち、受蘊、想蘊、行蘊と識蘊である。

(3) その後思惟智でもって觀照する :

これは、五蘊などに帰納した所の、行法の三相を真正に觀照する事を意味する。一切の行法は、以下の三相を持つ :

- ① 「壞滅して無常」 生起する場所において壞滅に遭う。その他の法に変化する事はなく、遺留する事もない。
- ② 「畏有り故に苦」 一切の無常の法は信賴できないし、畏怖すべきものである。
- ③ 「實質がない故に無我」 我はない、又は實質はない、又は生滅の過程全体をコントロールしている主宰者はいない。

(4) 「世」とは時間が長い事を言う。先に、1つ1つの世の内の、行法を無常、苦、無我と觀照する。次に1世毎を3個の段階に分け、10年を1個の段階、1年毎を1個の段階、1ヶ月を1個の段階、半月を1個の段階、1日を1個の段階等々に分ける。歩く時の1歩1歩の中の行法が、皆無常、苦、無我である事を知るまで觀照する。「相続」に依るとは、同じ1個の「名」相続流又は「色」相続流を指す。「刹那」に依るとは、刹那の名法と色法 (を觀照する事) を言う。

(5) 生滅智 (Udayabbayañāna未成熟の段階) :

諸々の行法の生滅を觀照する智。「生」とは生起する時を指す。「滅」は変化、壞滅、消滅する時を指す。「縁に依り」生滅智を修習するとは、諸々の行法が、如何にして、それぞれの縁に依って、生起するのかを觀照する事を言う (例えば、諸々の行法は如何にして、無明、愛、取と業を縁にして生起するか) 及びそれらの諸々の縁が滅尽するが故に滅尽するのを觀照する (例えば、無明、愛、取、行と業が滅すると行法も又同じく滅する事) 。

「刹那に依る」とは、生滅智を修習するのは、諸々の行法の刹那生滅を觀照するのであるのを指す (例えば、心路過程、五門心路過程の生起、その滅、眼識の生起、その滅、領受の生起、その滅、推度の生起、その滅。これを「刹那生、刹那滅」と言う) 。

この様に修する時、生滅智には、2つの段階がある。「未成熟」な生滅智の段階において、観照する力が増すと、10種「観の染」が禅修行者の中に生じる可能性がある。彼は己自身が極めて明るい光を発するのを見るか、又は以前に経験した事のない（極めて強い）喜、軽安、楽を体験する。彼の理解力と策励は増加し、智慧は成熟に向かう。念は安定し、捨は動揺のないものとなる。彼はこれらの体系に対して微細な欲を生起する、即ち、これらの体験に対して享受と執着を起す（可能性がある）。禅修行者が、上に述べた前9種の殊勝な体験をする時、もし、分別の能力に欠けるならば、己はすでに出世間道果に到達したのだと思ってしまう可能性がある。彼はその為に進歩を止めて、ただ、それらの体験を享受するだけになってしまい、己がそれに執着している事に気が付かない、かも知れない。ひとたび、彼に分別する能力が備わったならば、これらの体験は、ただ成熟した観智の副産物に過ぎない事が分かる。彼はそれらの無常、苦、無我を観照して、引き継ぎ観禅の修習に励み、それらに執着しなくなる。10種の観の染を非道であると分別し、観禅をば（進むべき）道であると判断する能力を「道非道智見清浄」と言う。

6. 行道智見清浄（Patipadāñānadassanavisuddhi）：

彼はこれら進展の妨害から抜け出して、引き継ぎ修行する時、三相に関する一連の観智、即ち、生滅智から随順智までを証得する。この9種の観智は、名を行道智見清浄と言う。それはそれぞれ

(1) 生滅智（Udayabbayañāna成熟の段階）：

これは、観の汚染が始まる前の観智と同じ智である。しかし、観の汚染を克服した後である為、それは更に成熟して、強化され、鋭敏になる。

(2) 壊滅智（Bhangañāna）：

禅修行者の観智が非常に鋭敏になった時、彼は諸々の行法の生時と住時に作意しなくなり、ただそれらの壊滅を観察するのみとなる。これが即ち、壊滅智である。

(3) 畏怖智（Bhayañāna）：

禅修行者が三世の行法の壊滅を観照する時、これら一切の生存地において不断に壊滅する行法は、恐ろしいものであると覚知する。

(4) 過患智（Ādīnavañāna）：

一切の行法への畏怖を感じ、それらは実質がない事、不円満であること、採用すべきではない、過患しかない事を照見する。また、無生無滅の無為のみが安全である事も知る。

(5) 厭離智（Nibbidāñāna）：

一切の行法の過患を知った後、それらに対して厭離を感じ、一切の生存地における、如何なる行法にも楽しまない。

(6) 欲解脱智（Muñcitukamyatāñāna）：

これは、観照している時に生起する所の、一切の行法から脱離したいと願う智である。

(7) 審査智（Paṭisaṅkhāñāna）：

諸々の行法から脱離する為に、禅修行者は、各種の方法でもってそれら三相の行法を観照する。彼が、諸々の行法の三相を明晰に審査したならば、それを審査智と言う。

(8) 行捨智（Saṅkārupekkhāñāna）：

審査の後、禅修行者は、諸々の行法の中には、何1つ「我」「我のもの」として執取するべ

きものはないと、照見する。結果、畏怖と楽への執取、この2者を捨てる。一切の行法に対して中捨を感じる。これを行捨智と言う。

(9) 随順智 (Anulomañāna) :

これは出世間道心路過程の中の、種姓心以前に生起する所の欲界心である。この智慧が随順と呼ばれるのは、その前の8種の観智の作用に随順する事と、その後の道智に随順するからである。

7. 智見清浄 (Ñānadassanavisuddhi) :

禪修行者がこの様に観照する時、その智がすでに熟しているが故に、道安止心路過程が生起する。有分断の後、意門転向が起き、それに伴って生起するのは、2個又は3個の目標を縁に取る所の無常等の、どれか1つの相への観智心である。それは遍作、近行と随順と呼ばれる。その後、涅槃を目標とする種姓心 (Gotrabhuñāna) が生起する。この時、凡夫の種姓を超越し、聖者の種姓になる。この時、即刻、ソータパナ道が生起する。

ソータパナ道心は、徹底的に苦諦を知り、集諦を断じ除き、滅諦を証悟して、道諦を展開する。出世間安止心路過程に入る。この後、2個、又は3個の果心が生滅し、その後有分に沈潜する。有分が止まった後、省察智 (Paccavekkhanañāna) が生起する。智者は、道 (Magga)、果 (Phāla)、涅槃 (Nibbāna) を省察し、又、彼がすでに断じたか、又は未だ断じていない所の煩惱について、省察する。六清浄の修習を通して、順次証得する必要があるこの四道の名は、智見清浄と呼ばれる。

別表

表A-1: 89心分類総覧表

表A-2も併せて参照の事

	12 不善心 *1	21 善心 *1	56 無記心			
			36 果報心 *2		20 唯作心	
			21 有因心	15 無因心	17 有因心 *3	3 無因心
54 欲界心	12 不善心			7 無因 不善果報心		3 無因唯作心
		8 大善心	8 有因 善果報心	8 無因 善果報心	8 大唯作心	
15 色界心		5 廣大善心	5 有因廣大 善果報心		5 廣大唯作心	
12 無色界心		4 廣大善心	4 有因廣大 善果報心		4 廣大唯作心	
8 出世間心		4 出世間 善心	4 有因出世間 善果報心			

*1 業を造る善心と不善心

*2 相応する果報心の誘引

*3 有因唯作心は全てアラハンに特有のものである

表A-2: 89心分類総覧表

12 不善心： 悦具邪見相応無行心 悦具邪見相応有行心 悦具邪見不相応無行心 悦具邪見不相応有行心 捨具邪見相応無行心 捨具邪見相応有行心 捨具邪見不相応無行心 捨具邪見不相応有行心 憂具瞋恚相応無行心 憂具瞋恚相応有行心 捨具疑相応心 捨具掉挙相応心	7 無因不善果報心： 眼識（捨具） 耳識（捨具） 鼻識（捨具） 舌識（捨具） 身識（苦） 捨具領受心 捨具推度心	3 無因唯作心： 五門轉向心 意門轉向心 生笑心（アラハン特有）	
--	---	---	--

8 大善心： 悦具智相応無行心 悦具智相応有行心 悦具智不相応無行心 悦具智不相応有行心 捨具智相応無行心 捨具智相応有行心 捨具智不相応無行心 捨具智不相応有行心	8 有因善果報心： 悦具智相応無行心 悦具智相応有行心 悦具智不相応無行心 悦具智不相応有行心 捨具智相応無行心 捨具智相応有行心 捨具智不相応無行心 捨具智不相応有行心	8 無因善果報心： 眼識（捨具） 耳識（捨具） 鼻識（捨具） 舌識（捨具） 身識（楽） 捨具領受心 捨具推度心 悦具推度心	8 大唯作心： 悦具智相応無行心 悦具智相応有行心 悦具智不相応無行心 悦具智不相応有行心 捨具智相応無行心 捨具智相応有行心 捨具智不相応無行心 捨具智不相応有行心
5 廣大善心、 5 有因廣大善果報心、 5 廣大唯作心： 初禪心 第二禪定心 第三禪定心 第四禪定心 第五禪定心	4 廣大善心、 4 有因廣大善果報心、 4 廣大唯作心： 空無辺処 識無辺処 無所有処 非想非非想処	4 出世間善心、 4 有因出世間善果報心： ソータパナ道心、果心 サカダーガミ道心、果心 アナーガミ道心、果心 アラハン道心、果心	

表B: 31界

1	非想非非想処	4	無色界地
1	無所有処		
1	識無辺処		
1	空無辺処		
7	四禪梵天界	16	色界地
3	三禪梵天界		
3	二禪梵天界		
3	初禪梵天界		
6	天界	11	欲界地
1	人類		
1	阿修羅		
1	餓鬼		
1	畜生		
1	地獄		

表C-1: 52心所と89心の関係: 54欲界心

「★」は生起しないか、又はその内一個のみ生起する。

		89 心		54 欲界心									
				12 不善心									
				8 貪根								2 瞋根	
		悦具邪見相応無行心	悦具邪見相応有行心	悦具邪見不相応無行心	悦具邪見不相応有行心	捨具邪見相応無行心	捨具邪見相応有行心	捨具邪見不相応無行心	捨具邪見不相応有行心	憂具瞋恚相応無行心	憂具瞋恚相応有行心	捨具疑相応心	捨具掉拳相応心
52 心所													
13 通一切心所	7 遍一切心所	触	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
		受	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
		想	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
		思	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
		一境性	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
		命根	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
		作意	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
	6 雑心所	尋	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
		伺	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
		勝解	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
		精進	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
		喜	●	●	●	●							
		欲	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	
14 不善心所	遍一切不善心所	痴	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
		無慚	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
		無愧	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
		掉拳	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
	貪心所	貪	●	●	●	●	●	●	●	●			
		邪見	●	●			●	●					
		慢			★	★			★	★			

	瞋心所	瞋								●	●			
		嫉								★	★			
		慳								★	★			
		惡作								★	★			
	有行	昏沈		●		●		●		●		●		
		睡眠		●		●		●		●		●		
	痴	疑										●		
25美 心所	遍一切 美心心所													
	離 心 所	正語												
		正業												
		正命												
	無 量	悲												
喜														
慧	慧													
實際の生起数			19	21	18-19	20-21	18	20	17-18	19-20	17-18	19-20	15	15
総数			19	21	19	21	18	20	18	20	20	22	15	15

表C-2: 52心所と89心の関係: 54欲界心

「★」は生起しないか、又はその内一個のみ生起する。

89 心		54 欲界心																		
		18 無因心																		
		7 不善果報心							8 善果報心							3 唯作心				
		捨具眼識	捨具耳識	捨具鼻識	捨具舌識	捨具身識	捨具領受	捨具推度	捨具眼識	捨具耳識	捨具鼻識	捨具舌識	樂具身識	捨具領受	悦具推度	捨具推度	五門轉向	意門轉向	アラハン笑	
							意界	意識界						意界	意識界	意識界	意識界	意識界	意識界	
52 心所	13 通一切心所	7 遍一切心所	觸	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
		受	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
		想	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
		思	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
		一境性	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
		命根	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
		作意	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
	6 雑心所	尋													●	●	●	●	●	●
		伺													●	●	●	●	●	●
		勝解													●	●	●	●	●	●
		精進																	●	●
		喜														●				●
		欲																		
14 不善心所	遍一切不善心所	痴																		
		無慚																		
		無愧																		
		掉挙																		
	貪心所	貪																		
		邪見																		
	慢																			

	瞋心所	瞋																	
		嫉																	
		慳																	
		惡作																	
	有行	昏沈																	
		睡眠																	
痴	疑																		
25 美 心 所	遍一切																		
	離心所	正語																	
		正業																	
		正命																	
	無量	悲																	
		喜																	
慧	慧																		
實際の生起数			7	7	7	7	7	10	10	7	7	7	7	10	11	10	10	11	12
総数			7	7	7	7	7	10	10	7	7	7	7	10	11	10	10	11	12

表C-3: 52心所と89心の関係: 54欲界心

「★」は生起しないか、又はその内一個のみ生起する。

89 心		54 欲界心																							
		8 大善心								8 大果報心								8 大唯作心							
		悦具智相応無行	悦具智相応有行	悦具智不相応無行	悦具智不相応有行	捨具智相応無行	捨具智相応有行	捨具智不相応無行	捨具智不相応有行	悦具智相応無行	悦具智相応有行	悦具智不相応無行	悦具智不相応有行	捨具智相応無行	捨具智相応有行	捨具智不相応無行	捨具智不相応有行	悦具智相応無行	悦具智相応有行	悦具智不相応無行	悦具智不相応有行	捨具智相応無行	捨具智相応有行	捨具智不相応無行	捨具智不相応有行
52 心所	13 通一切心所	觸	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
		受	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
		想	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
		思	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
		一境性	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
		命根	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
		作意	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
	6 雑心所	尋	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	
		伺	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	
		勝解	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	
		精進	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	
		喜	●	●	●	●					●	●	●	●					●	●	●	●			
		欲	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
14 不善心所	遍一切不善心所	痴																							
	無慚																								
	無愧																								
	掉挙																								

	貪心所	貪																						
		邪見																						
		慢																						
	瞋心所	瞋																						
		嫉																						
		慳																						
	有行	惡作																						
		昏沈																						
	痴疑	睡眠																						
		疑																						
	25美心所	遍一切美心所		●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
		離心所	正語	★	★	★	★	★	★	★														
正業			★	★	★	★	★	★	★															
正命			★	★	★	★	★	★	★															
無量		悲	★	★	★	★	★	★	★								★	★	★	★	★	★	★	★
		喜	★	★	★	★	★	★	★								★	★	★	★	★	★	★	★
慧		慧	●	●			●	●		●	●			●	●		●	●			●	●		
實際の生起数			33	33	32	32	32	32	31	31	33	33	32	32	32	32	31	31	33	33	32	32	32	32
			-	-	-	-	-	-	-	-									-	-	-	-	-	-
総数			34	34	33	33	33	33	32	32								34	34	33	33	33	33	33
		38	38	37	37	37	37	36	36	33	33	32	32	32	32	31	31	35	35	34	34	34	34	

表D: 摂の作用 (Kiccavagaha) 一覧表

離路心と路心				離路心			路心 (Vithicitta)									小計				
				1 結 生	2 有 分	3 死	4 轉 向	五識					10 領 受	11 推 度	12 確 定		13 速 行	14 彼 所 縁		
89心								5 見	6 聞	7 嗅	8 味	9 触								
54 欲 界 心	12 不 善 心	貪 根	悦具邪見相応無行心	1													●	1		
			悦具邪見相応有行心	1														●	1	
			悦具邪見不相応無行心	1															●	1
			悦具邪見不相応有行心	1															●	1
			捨具邪見相応無行心	1															●	1
			捨具邪見相応有行心	1															●	1
			捨具邪見不相応無行心	1															●	1
			捨具邪見不相応有行心	1															●	1
	瞋 根	憂具瞋恚相応無行心	1															●	1	
		憂具瞋恚相応有行心	1															●	1	
	痴 根	捨具疑相応心	1															●	1	
		捨具掉挙相応心	1															●	1	
	18 無 因 心		捨具五門轉向 眼界	1			●												1	
			捨具眼識	2				●											1	
			捨具耳識	2					●										1	
			捨具鼻識	2						●									1	
捨具舌識			2							●								1		
苦身識			1									●						1		
楽身識			1									●						1		
捨具領受 眼界			2										●					1		
捨具推度			2											●				●	5	
悦具推度			1																	
捨具意門轉向			1				●										●		2	
悦具アラハン生笑心			1															●	1	
8 善 心	悦具智相応無行有行	2															●	1		
	悦具智不相応無行有行	2															●	1		
	捨具智相応無行有行	2															●	1		
	捨具智不相応無行有行	2															●	1		
8 果 報 心	悦具智相応無行有行	2	●	●	●													●	4	
	悦具智不相応無行有行	2	●	●	●													●	4	
	捨具智相応無行有行	2	●	●	●													●	4	
	捨具智不相応無行有行	2	●	●	●													●	4	

8 唯 作 心	悦具智相応無行有行	2																●		1	
	悦具智不相応無行有行	2																	●		1
	捨具智相応無行有行	2																	●		1
	捨具智不相応無行有	2																	●		1
15 色 界	初禪-第五禪 善 唯作	10																	●		1
	初禪-第五禪 果報	5	●	●	●																3
12 無 色 界	空無辺ー非想非非想 善心	4																	●		1
	空無辺ー非想非非想 果報心	4	●	●	●																3
	空無辺ー非想非非想 唯作心	4																	●		1
8 出 世 間	ソータパナ道心、果心	2																	●		1
	サカダーガミ道心、果心	2																	●		1
	アナーガミ道心、果心	2																	●		1
	アラハン道心、果心	2																	●		1
総計	89	19	19	19	2	2	2	2	2	2	2	2	3	1	55						

表E:

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	
			← 心路過程 →														
過去 有分	有分 波動	有分 断	五門 轉向	眼 識	領 受	推 度	確 定	速 行	彼 所 縁	彼 所 縁	有分 流						

表F: 眼門心路過程

離心路過程 →			← 色所縁 →													
過去 有分	有分 波動	有分 断	五門 轉向	眼 識	領 受	推 度	確 定	速 行	彼 所 縁 1	彼 所 縁 2						

表G: 意門心路過程

離心路過程 →			← 意門心路過程 →											
過去 有分	有分 波動	有分 断	意 門 轉向	速 行	彼 所 縁 1	彼 所 縁 2	有分 流							
身・口・意による業および強化された業														

表H:

有分 波動	有分 断	意 門 轉向	速 行 1	速 行 2	速 行 3	速 行 4	速 行 5	速 行 6	速 行 7	彼 所 縁 1	彼 所 縁 2	有分 流
----------	---------	--------------	-------------	-------------	-------------	-------------	-------------	-------------	-------------	------------------	------------------	---------

表I:

		所縁: 似相								
有分波動	有分断	意門転向	遍作	近行	随順	種姓	禪那	有分心	有分心	有分心

表J:

		所縁: 行法の無常、苦または無我				所縁: 涅槃				
有分波動	有分断	意門転向	遍作	近行	随順	種姓	道心	果心	果心	有分心

表K: 4個4種の業の総覧

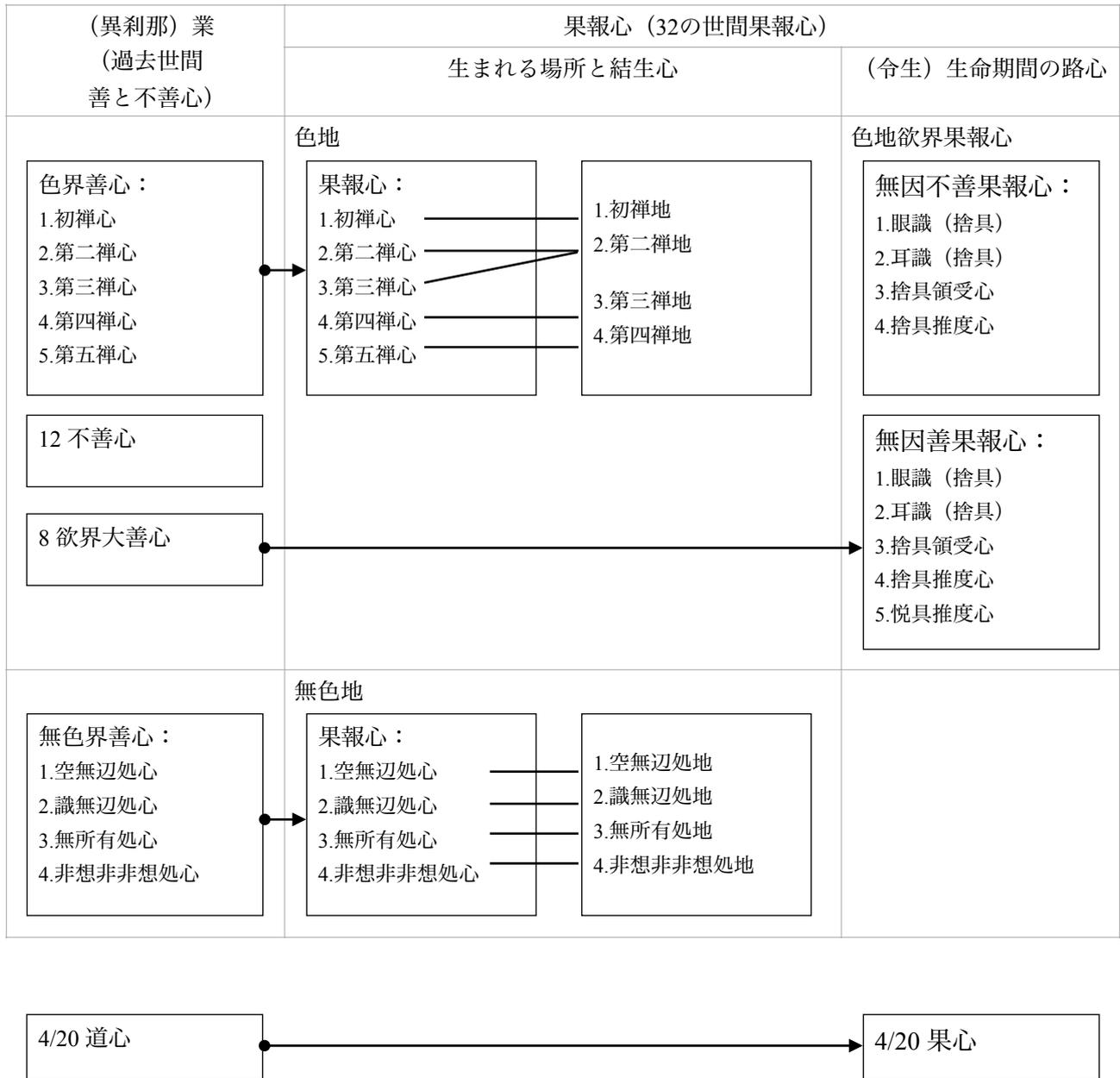
	作用	成熟の順序	成熟の時間	成熟の地
1	令生業	重業	現生受業	不善業
2	支助業	臨死業	次生受業	欲界善業
3	阻害業	慣行業	無尽業	色界善業
4	毀杯業	已作業	無効業	無色界善業

表L-1: 業と果の総覧表

(異刹那) 業 (29の過去世間 善と不善心)	果報心 (32の世間果報心)		
	生まれる場所と結生心	(令生) 生命期間の路心	
<p>欲界不善心：</p> <ol style="list-style-type: none"> 1.悦具邪見相応無行 2.悦具邪見相応有行心 3.悦具邪見不相応無行心 4.悦具邪見不相応有行心 5.捨具邪見相応無行心 6.捨具邪見相応有行心 7.捨具邪見不相応無行心 8.捨具邪見不相応有行心 9.憂具瞋恚相応無行心 10.憂具瞋恚相応有行心 11.捨具疑相応心 (12.捨具掉挙相応心) 	<p>欲地4悪道</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px;"> <p>無因捨具 不善果報推度心 (掉挙は結生心を 生じない)</p> </div>	<p>欲地欲界果報心</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px;"> <p>無因不善果報心：</p> <ol style="list-style-type: none"> 1.眼識 (捨具) 2.耳識 (捨具) 3.鼻識 (捨具) 4.舌識 (捨具) 5.身識 (苦具) 6.捨具領受心 7.捨具推度心 </div>	<p>彼所縁：</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px;"> <p>無因捨具 不善果報推度心</p> </div>
<p>欲界大善心：</p> <ol style="list-style-type: none"> 1.悦具智不相応無行心 2.悦具智不相応有行心 3.捨具智不相応無行心 4.捨具智不相応有行心 <p style="text-align: right;">低劣二因</p> <p>殊勝二因</p> <p>欲界大善心：</p> <ol style="list-style-type: none"> 1.悦具智相応無行心 2.悦具智相応有行心 3.捨具智相応無行心 4.捨具智相応有行心 <p style="text-align: right;">低劣三因</p> <p>殊勝三因</p>	<p>欲地人天</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px;"> <p>無因捨具 善果報推度心 (生まれつきの障害者、福 の少ない土地の神様、いつ 種かのアシユラ)</p> </div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px;"> <p>二因大果報：</p> <ol style="list-style-type: none"> 1.悦具智不相応無行心 2.悦具智不相応有行心* 3.捨具智不相応無行心 4.捨具智不相応有行心* </div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px;"> <p>三因大果報：</p> <ol style="list-style-type: none"> 1.悦具智相応無行心 2.悦具智相応有行心* 3.捨具智相応無行心 4.捨具智相応有行心* </div>	<p>欲地欲界果報心</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px;"> <p>無因善果報心：</p> <ol style="list-style-type: none"> 1.眼識 (捨具) 2.耳識 (捨具) 3.鼻識 (捨具) 4.舌識 (捨具) 5.身識 (楽具) 6.捨具領受心 7.捨具推度心 8.悦具推度心 </div>	<p>彼所縁：</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px;"> <p>無因捨具と悦具の 善果報推度心</p> </div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px;"> <p>大果報：</p> <ol style="list-style-type: none"> 1.悦具智不相応無行心 2.悦具智不相応有行心* 3.捨具智不相応無行心 4.捨具智不相応有行心* </div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px;"> <p>大果報：</p> <ol style="list-style-type: none"> 1.悦具智相応無行心 2.悦具智相応有行心* 3.捨具智相応無行心 4.捨具智相応有行心* 5.悦具智不相応無行心 6.悦具智不相応有行心* 7.捨具智不相応無行心 8.捨具智不相応有行心* </div>

* 「道心」は「道無間果心」に対しては、無間業縁である。
「道心」のその他の果心と定心に対しては、異刹那業縁となる。

表L-2: 業と果の総覧表



* 「道心」は「道無間果心」に対しては、無間業縁である。
「道心」のその他の果心と定心に対しては、異刹那業縁となる。

表Mと表N: 31界

地	界		寿元	
4 無色界地		31	非想非非想処	84,000大劫
		30	無所有処	60,000大劫
		29	識無辺処	40,000大劫
		28	空無辺処	20,000大劫
16 色界地	第四禪	27	色究竟天	16,000大劫
		26	善見天	8,000大劫
		25	善現天	4,000大劫
		24	無熱天	2,000大劫
		23	無煩天	1,000大劫
		22	無想有情天	500大劫
		21	広果天	500大劫
	第三禪	20	遍浄天	64大劫
		19	無量浄天	32大劫
		18	少浄天	16大劫
	第二禪	17	光音天	8大劫
		16	無量光天	4大劫
		15	少光天	2大劫
	初禪	14	大梵天	1中劫
		13	梵輔天	1/2中劫
		12	梵衆天	1/3中劫
11 欲界地	欲善趣地	11	他化自在天	16,000天年
		10	化樂天	8,000天年
		9	兜率天	4,000天年
		8	夜摩天	2,000天年
		7	三十三天	1,000天年
		6	四大王天	500天年
		5	人間	不定
	惡趣地	4	阿修羅	不定
		3	餓鬼	不定
		2	畜生	不定
		1	地獄	不定

表O: 臨終眼門心路過程（花の色彩を例にする）

この臨終眼門心路過程自体は業をなす能力に欠けており、故に、過去の業として、冷生業とのパイプ役を果たす。

過去 有分	有分 波動	有分 断	五門 転向	眼識	領受	推度	確定	速行	有分 心						
----------	----------	---------	----------	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	---------

死亡 心	結生 心*	有分 心1	有分 心2	有分 心3	有分 心4	有分 心16	意門 転向	速行	死亡 心						
---------	----------	----------	----------	----------	----------	-------	-----------	----------	----	----	----	----	----	----	----	-------	---------

↑
無間断

* 欲地：8大果報心の1つ

表P: 死亡と結生の過程（人類）

最後の心路過程 - 趣相（赤色）

過去世																			
結生 心	過去 有分	有分 波動	有分 断	五門 転向	眼識	領受	推度	確定	速行	有分 心	死亡 心						

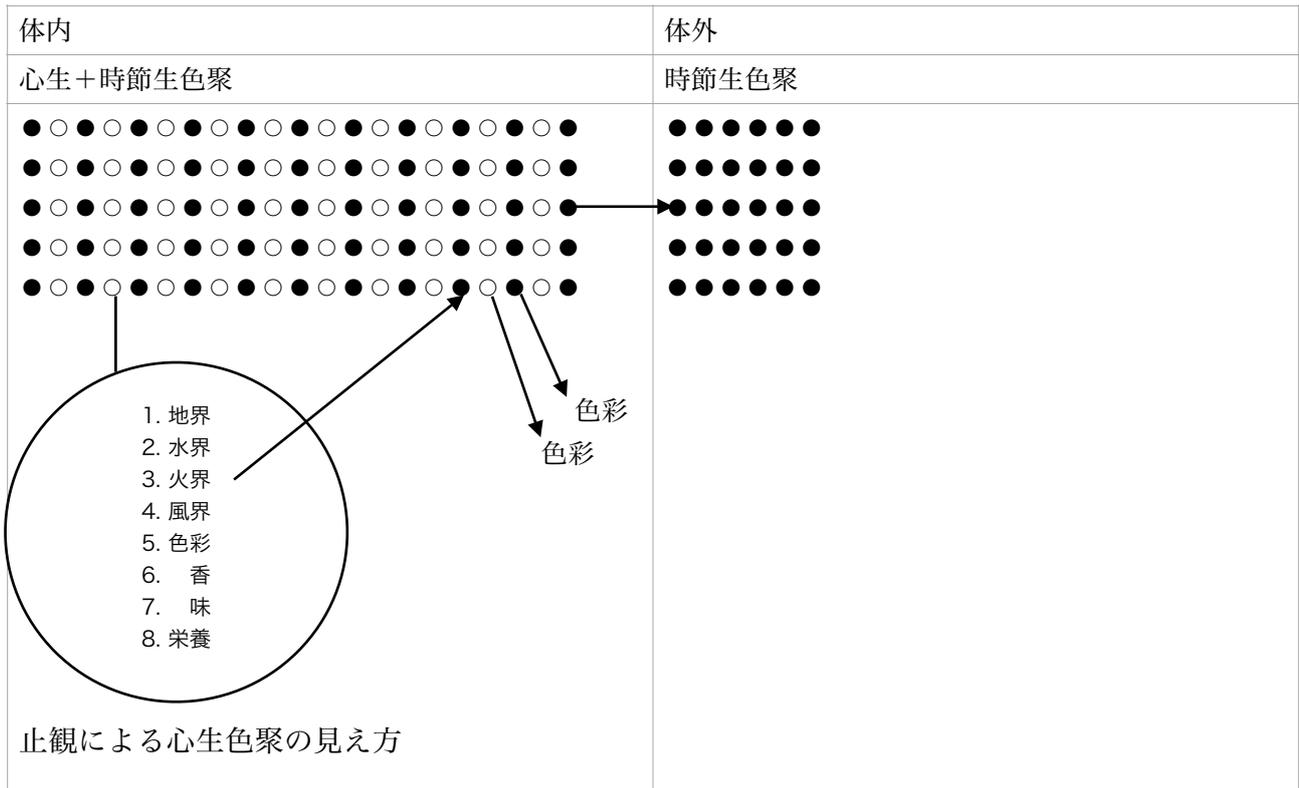
今世																			
結生 心*	有分 心1	有分 心2	有分 心3	有分 心4	有分 心5	有分 心6	有分 心7	有分 心8	有分 心9	有分 心10	有分 心11	有分 心12	有分 心13	有分 心14	有分 心15	有分 心16			

* 1心と33心所、30色法（性根10法聚、身10法聚、心10法聚）

表Q: 28種の色法

18種の完成色		10種の不完成色	
(1) 元素色	1. 地界	(8) 限制色	19. 空界
	2. 水界	(9) 表色	20. 身表
	3. 火界		21. 語表
	4. 風界	(10) 変化色	22. 色輕快性
(2) 浄色	5. 眼浄色		23. 色柔軟性
	6. 耳浄色		24. 色適業性 * 2種類の表色をプラスする
7. 鼻浄色	(11) 相色	25. 色積集	
		26. 色相続	
		27. 色老性	
(3) 境色	10. 色彩		28. 色無常性
	11. 音		
	12. 香		
	13. 味 * 触 = 地、火、風3界		
(4) 性根色	14. 女根色		
	15. 男根色		
(5) 心色	16. 心所依処		
(6) 命色	17. 命根色		
(7) 食色	18. 食素 / 栄養		

表R: 禅修行の時の光は如何にして生じるのか？

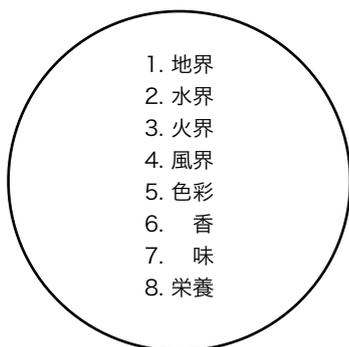


表S: 胃の中の未消化物

胃の中の未消化の食物は分解されて色聚になる。

↓

1個の時節生色聚は次の構成である。



↓

このうち栄養は消化の火の支援を受ける。

↓

栄養は新しい次の世代の色聚を（複数）製造する。これを食生色と言う。

↓

食生色は全身に偏満する。

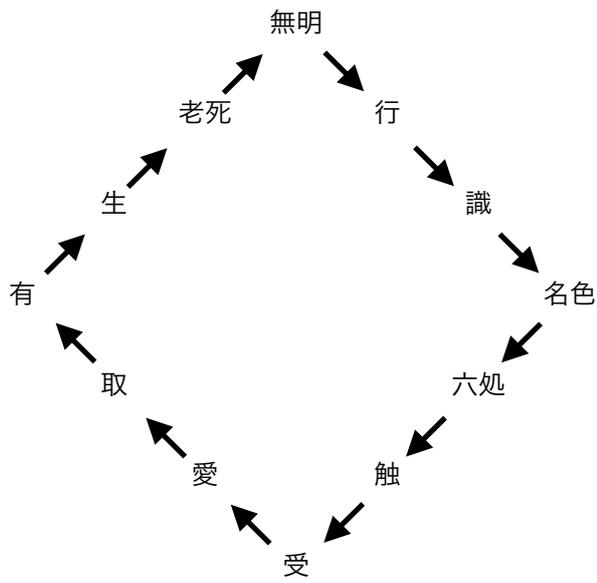
表T: 諸々の煩悩の属する心所

心所	漏	暴流	輓	繁	取	蓋	潜在 傾向	結	煩悩
1 貪	●	●	●	●	●	●	●	●	●
2 邪見	●	●	●	●	●		●	●	●
3 痴	●	●	●			●	●	●	●
4 瞋				●		●	●	●	●
5 疑						●	●	●	●
6 慢							●	●	●
7 掉挙						●		●	●
8 昏沈						●			●
9 悪作						●			
10 睡眠						●			
11 無慚									●
12 無愧									●
13 嫉								●	
14 慳								●	
心所の総数	3	3	3	3	2	8	6	9	10

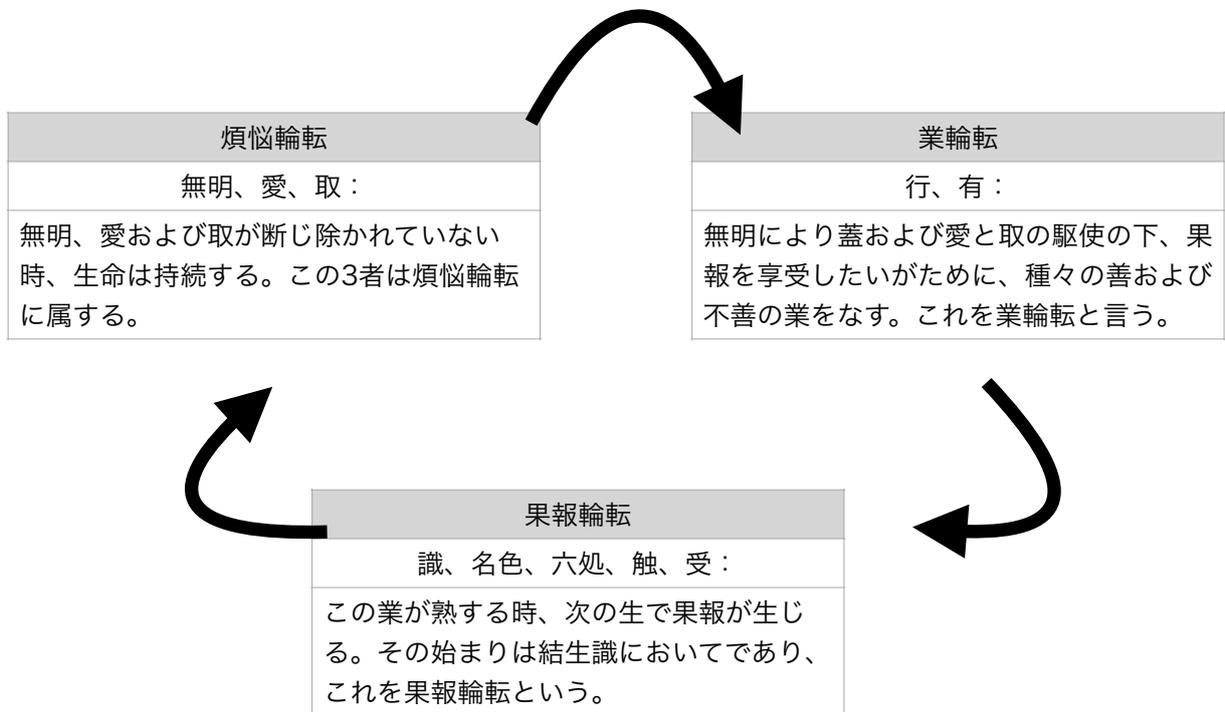
表U: 4つの究竟法と蘊、処および界の対照

四究竟法	五蘊	十二処	十八界
28色	色蘊	眼処	眼界
		耳処	耳界
		鼻処	鼻界
		舌処	舌界
		身処	身界
		色彩処	色彩界
		音処	音界
		香処	香界
		味処	味界
		触処	触界
52心所	受蘊	法処 (微細色+心所+涅槃)	法界 (微細色+心所+涅槃)
	想蘊		
	行蘊		
涅槃	(無)		
89心	識蘊	意処	眼識界
			耳識界
			鼻識界
			舌識界
			身識界
			意界
			意識界

表V: 12支による因と縁の法則



表W:



表X-1: 40業処の総覧表

分類		3種類修定の深浅の階段						禅相		性格	
		偏 作 定	近 行 定	安止定					所縁 (Arammanaの対象)		
40業処				初 禅	第 二 禅	第 三 禅	第 四 禅	第 五 禅	数 取 相	似 相	適 合 す る 行 者
10 遍	地遍 Pathavikasina	●	●	●	●	●	●	●	地 Pathavi	●	一切
	水遍 Apokasina	●	●	●	●	●	●	●	水 Apo	●	一切
	火遍 Tejokasina	●	●	●	●	●	●	●	火 Tejo	●	一切
	風遍 Vayokasina	●	●	●	●	●	●	●	風 Vayo	●	一切
	青遍 Nilakasina	●	●	●	●	●	●	●	青 Nila	●	瞋
	黄遍 Pitakasina	●	●	●	●	●	●	●	黄 Pita	●	瞋
	赤遍 Lohitakasina	●	●	●	●	●	●	●	赤 Lohita	●	瞋
	白遍 Odatakasina	●	●	●	●	●	●	●	白 Odata	●	瞋
	光明遍 Akasakasina	●	●	●	●	●	●	●	光明 Akasa	●	一切
	虚空遍 Alokakasina	●	●	●	●	●	●	●	虚空 Aloka	●	一切
10 不 浄	膨張相 Uddhumataka	●	●	●					膨張死体	●	貪
	青瘀相 Vinilaka	●	●	●					青瘀死体	●	貪
	膿爛相 Vipubbaka	●	●	●					膿爛死体	●	貪
	断壊相 Vicchiddaka	●	●	●					断壊死体	●	貪
	食残相 Vikkhatitaka	●	●	●					食残死体	●	貪
	散乱相 Vikkhittaka	●	●	●					散乱死体	●	貪
	斬細相 Hatavikkhittaka	●	●	●					斬細離散死体	●	貪
	血塗相 Lohitaka	●	●	●					血塗死体	●	貪
	虫聚相 Pulavaka	●	●	●					虫聚死体	●	貪
	骸骨 Atthika	●	●	●					骸骨	●	貪

表X-2: 40業処の総覧表

分類		3種類修定の深浅の階段					禅相		性格		
		偏 作 定	近 行 定	安止定						所縁 (Arammanaの対象)	
				初 禅	第 二 禅	第 三 禅	第 四 禅	第 五 禅	数 取 相	似 相	適 合 す る 行 者
10 念	仏随念 Buddhānussati	●	●						ブツダの徳を憶念する		信
	法随念 Dhammānussati	●	●						ダンマの徳を憶念する		信
	僧随念 Saṅghanussati	●	●						サンガの徳を憶念する		信
	戒随念 Silānussati	●	●						シーラの徳を憶念する		信
	捨随念 Cāganussati	●	●						ダーナの徳を憶念する		信
	天随念 Devānussati	●	●						天への信、戒、聞、捨、慧を念ずる		信
	死随念 Marāṇānussati	●	●						命根の断絶を念ずる		覚
	寂止念 Upasāmanussati	●	●						苦滅 (涅槃) の徳を念ずる		覚
	身至念 Kayāganussati	●	●	●					32種の身体部分を念ずる	●	貪
	アーナーパーナ念 Anāpānassati	●	●	●	●	●	●	●	呼吸を念ずる (観察する)	●	痴、尋
4 無 量 心	慈無量心 Metta	●	●	●	●	●	●		慈愛を念ずる		瞋
	悲無量心 Karuṇā	●	●	●	●	●	●		憐憫を念ずる		瞋
	喜無量心 Mudita	●	●	●	●	●	●		随喜功德を念ずる		瞋
	捨無量心 Upekkhā	●	●					●	平等を念ずる		瞋
4 無 色 定	空無辺処 Akāśānābhicayatana	●	●					●	(9遍禅から転じて) 空・空を念ずる		一切
	識無辺処 Viññānābhicayatana	●	●					●	空無辺の禅心に専注して「識無辺」を念ずる		一切
	無所有処 Ākāśānābhicayatana	●	●					●	「識無辺」が空になったのを念ずる		一切
	非想非非想処 Nevasārabhāvābhicayatana	●	●					●	「無所有」の寂静を念ずる		一切
食厭想 Ahārepatikulasabba	●	●						食物への嫌悪		覚	
四界分別 Catudhātuvavatthana	●	●						地水火風のそれぞれの特徴を区別する		覚	

<法施本・非売品>